
男の娘な女神様

トマト畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の娘な女神様

【Nコード】

N2592W

【作者名】

トマト畑

【あらすじ】

ノリで倒した相手は女神だった！？

俺が代わりに女神になるのかよー！！

何はともあれ女神様生活スタート。

俺は男だー！！

はいはい、男の娘ですね。

現在第二部スパッツネプテューヌ編をお送りしています。

ではじゃあゆっくりと。

人物紹介改（前書き）

9月24日変更。

人物紹介改

・ユウ

見た目・髪の毛の色は白、長さは腰まで届く位。目の色は青。男の娘である。

・料理や掃除などの家事が得意である。

・戦闘力は女神化する前でも元女神のマジェコンヌを圧倒するほどである。使う武器は双剣。双剣の名前は零刹那と菊ヶ紋字。

押しに弱く妹達に押され気味である。怒ると恐い。

・シルバーハート

・見た目 変身前から髪の毛は白から銀色に変わる。（髪の毛の色の変化にはなかなか気づいてもらえない。）

目の色は金色に変化している。

身長、体重の変化はない。

戦闘力は変身前より1.8倍上がっている。武器は双剣のままだが菊ヶ紋字と零刹那は黒から銀色に変化している。

変身後にはいくつかの能力がある。

ひとつは絶対領域。絶対領域の前ではどのようなスキル、能力、奇跡さえも操られてしまう。

二つ目にモードチェンジ。

- ・怒りの赤

全体的に能力がアップする。接近戦も得意だが主な戦闘距離は中距離→遠距離。戦闘に使用する武器はガンブレード・紅

- ・優しさの緑

スピードが上がるがその分防御力が下がる。主な戦闘距離は中距離→接近戦。

使う武器は通常形態と同じで零刹那、菊壺紋字。特殊能力として質量を持った分身を任意の数だけ作り出すことができる。そして通常の1000倍のスピードを出すことができる。（三分間のみ）

性格はネプテューヌの様に変化はない。

史書イストワール

- ・ユウの頼れるパートナー。ユウに女神としての知識等を教えた人物。

- ・性格は原作からけっこうずれている。ユウを溺愛しておりいつもくっついている。

- ・イストワール単体での戦闘力は0に近い。・本や書物等の物を体内に秘めておりそれを体内から文字通り吐き出す（うおええ〜。）

- ・謎の仮面の少女

身長はブランより少し高い。顔は仮面を被っているために不明。髪

の毛は腰まで届く位の長さ。色は薄紫色。

何故かユウの事をお兄ちゃんと呼んでいる。軽くヤンデレ持ち。彼女もまた重度のブラコンである。彼

戦闘力はネプテューヌ達四人を上回る。

仮面の幼女（プロセッサユニット装着時）

プロセッサユニットはユウと同じものだが色は白。

装備は

- ・ハードバスターライフル二つ
- ・ビームセイバー二つ

その他不明。

人物紹介改（後書き）

謎の仮面の少女追加

SSHのメンバー（前書き）

10月10日投稿。

SSHのメンバー

会員No.1 最強の5pb.

・SSH最強の存在その実力はネプテューヌ達四人の女神に匹敵する。

会員No.2 LEDアイエフ

・シルバーハートに憧れ光り続ける危険な少女。

会員No.3 ダイナマイトな日本一

特撮ものが大好きで身体中にダイナマイトを巻き付けた少女。理由は特撮ものでよくある爆発を実際にする為だそうだ。

会員No.4 弟子のガスト

自称シルバーハートの弟子。ユウに怪我をしているところを救われて以来彼を敬愛？している。たまに腹黒い一面も見られる。

会員No.5 布教活動のRED

ユウによって復活したロイヤルでエンペラーなドラゴン。ユウを自分の嫁としている。様々な布教活動を行なっている。主に動画サイトにユウの動画を投稿したり、シルバーハート様人形を売ったりしている。ちなみに現在の好感度は300。

会員No.6 デレデレリストワール

いわずと知れたユウの相棒。

会員N o . 7 機械いじりのシアン

ラストイションで小さな食堂を営む少女。ユウの試作型プロセッサユニットを作ったのも彼女で機械関係に関してはまじチート。

会員N o . 8 まさかのフィナンシェ

SSH唯一の？常識人。実は彼女には隠された力があるとかないとか？

会員N o . 9 お洋服屋さんねぶあゝ

五人で一人の会員という不思議なお洋服屋さん。SSHの特殊部隊で普段はお洋服屋を経営している。リーダーのナイフ店長カツミ、発火能力を持つレイカ、重火器を使用するケン、くねくねオカマのキョウスイ、マッチョメンのコウゾウの五人がメンバーである。

会員N o . 10 謎の天然美少女探偵シャルロック

通称シャル。彼女が行くところいつも事件が巻き起こる。（半分は彼女自身が巻き起こす。）彼女には四つの能力がありひとつは重力制御。二つ目に超怪力。3つ目に機械との意志疎通。四つ目に超頭脳。

SSHのメンバー（後書き）

こつと見ると彼らの力で世界征服とかできそう。
（ ・ ・ ・ ）

女神シルバーハート（前書き）

改訂版

まあ、駄文です。

女神シルバーハート

俺はなんとなく旅をしている旅人。たまに人を助けたりしながら旅をしている。不思議な力を手に入れたりした。その内なぜかヴアルキュリアとか戦乙女等と言われたりもした。それは女性に付けてあげてほしい。今は四英雄とか言われていた人達と一緒に天界とか言うところに来ているところ。よく分からないが「貴女をお送りします。」と言われて連れて来られてしまった。そう、それが間違いの始まりだった。

俺は天界に取り残された。四英雄の人達は俺を置いて何故か直ぐに帰ってしまった。「女神様ごたつしやで。」「また会える日まで！」「とかよくわからない事を言っていた。女神様つてだれ？

それから宛もなく天界をさまよった。途方もない年月を。そのせいか謎の変身能力までてにいられてしまった。特撮ものが好きな自分としては凄いい嬉しかった。露出が多いのは気になったが。

長い年月を過ごして気づいたが何故か歳をとらない。眠たくならない。お腹もすかない。けどご飯はしょっちゅう食べていた。

とある日いつもの様にモンスターを倒したりして過ごしていると不思議な場所にでた。何やら神秘的な場所に、何故だかそこが自分の為の場所と思っていた。そしてその中心には一人の魔女もどきと謎の小人サイズのミニマム少女が本に座って空中に漂っていた。何やら言い争っているようだ。

「マジエコン又貴女はいつたい何をしようとしているんですか！？」

今のままでは下界の住民達が……………」

「決まっているこの世界の全てを手に入れる。そして世界の全てに私が味わった苦しみを味合わせてくれる!!」

「そんな事が出来る訳ありません!!」

「出来るさ。イストワール貴様の力をつかえばな!!」

「貴女まさか!?!」

どうやら一触即発の空気というやつらしい。マジエコン……………めんどくさいから魔女もどきでいいか、やつの手がミニマム少女に魔の手が伸びようとしていた。

「あのミニマム少女を助けますか。まともに話が聞けそうだしね。あの魔女もどきはさっさと倒すしますか。」

「さてと行きますか!?!」

俺は腰にさしていた双剣零刹那と菊雫紋字を引き抜き魔女もどきとミニマム少女の間に転移する。

「そこまでだ魔女もどき。俺が相手だ。」

彼女達二人からしたら突如として現れた様に見えるのだろう。転移非常に便利。

「貴方は？」

啞然としているミニマム少女。

「俺か俺は……………」

ミニマム少女の疑問に答えようとするが魔女もどきが簾らしきものから光弾を放つ。俺は即座に光弾を菊薔紋字の腹で受け止める。

「目障りだ消えろ！！」

「さてどうだろうか？」

続けて放たれる光弾を菊薔紋字と零刹那で切り裂く。

「危険です！！逃げて下さい。」

ミニマム少女たしかイストワールだっけ？

「大丈夫、大丈夫。俺は強いから。まあ、安心して見ててミニマム少女。」

「み、ミニマム！？む、無理です。彼女は女神です。彼女には誰も勝てません。」

俺はミニマム少女イストワールの頭をひとなでして魔女もどきの前に立つ。

「まあ見てて。変身!!」

その言葉と共に俺の姿が変化する。髪は白から銀色に。瞳は金色に。そして身体に銀色の装甲プロセスサユニットが装着される。

『SETUP』

そして降臨する銀色。

「貴様はなんだ!!」

「貴方はいつたい？まさかその姿は伝承の……………」

二人の問いに俺は答える。

「シルバーハート。それがこの姿での名前。詳しくは俺も分からない。だがかなり強いよ。」

「見かけ倒しが消え去るがいい!!」

「消え去るのはそっちじゃないか。」

「くっ、なめるなあ!!」

魔女もどきがまた光弾を放つ。数は先ほどに比べると数が圧倒的に多い。そして光弾が放たれる。

「またたくさんあるなあ。だけど……………」

光弾が放たれる。そしてそれは俺に向かう。本来なら直撃していったかんのおわりだろう。

「だが甘い！！光波よ敵を穿て。」

俺は両手に持っている黒から銀色に変わった双剣に光を集める。そして向かってくる光弾に向かってそれを放つ。その瞬間全ての音が消えた。

「外したか。」

「な、なんだと!?!」

魔女もどきの驚きの声も分かるかな。だって自分の真横の物が消し飛んでいるのだからね。

「これが伝承の女神の力!?!」

ミニマム少女が驚きの声をあげる。何やら女神とか言っていたが……………。俺の事じゃないよね。まあ、いいやそろそろ飽きてきた事だしね。

「くつ、なるほど、大した力を持っているようだな。だが私を本気にさせてしまった貴様はこれでおわりだ。」

魔女もどきが先ほどよりも質量の大きい光弾を作り出す。

「さあ、消え去るが「絶対領域発動。」何？ぐうおー！！」

魔女もどきが光弾を放つ寸前に俺の能力のひとつ『絶対領域』を発動する。光弾が消えて魔女もどきが地に伏せる。

「ば、馬鹿ないったい何をした！？力が使えないだ！？」

魔女もどきが声をあげる。

「いちいちそんなに驚かなくても良いのにね。」

驚きで顔を（。ー。）なイストワールに話しかけて見る。

「いったい何を！？」

「俺の能力のひとつの絶対領域を発動させたんだよ。絶対領域の前ではどのようなスキル、能力、奇跡さえも操ることができる。」

「す、凄い……。や、やっぱり貴女が私の女神さま……。」

今度は顔が赤くなっている。まるで恋する乙女のように。

「くっ、ぐうー！！」

魔女もどきが声をいやうめき声をあげる。『ぐうー！！』ってこれが噂のぐうの音か。

「まあいいや、これでおわりにしよう。」

俺は菊吉紋字と零刹那をひとつに組み合わせる。そして構える。

「こいつの威力はどうかなくぞインフィニット・ソード。」

目にも止まらない早さで魔女もどきを斬り裂く。

「俺の前に立つのならただ斬り伏せるのみ!!」

オーバーキルもはや魔女もどきはお前はもはや死にすぎている状態である。

「ステキです。うつとり。(、、)」

ミニマム少女はいや、イストワールだっけ？なんだかうつとりしている。

「これで終わり。」

最後の仕上げに一回指を鳴らす。パチン。それと共に魔女もどきが爆発する!!

「ぐ、ぐわあああああああああー!!」

「悪・即・爆発ー!!!」

これは俺のボスキャラ倒した時の決めセリフ。それは言いとして目の前でうつとりしているイストワールに話しかける。

「ちょっといいイストワールさん？」

「はい、何でしょうか女神様？」

「め、女神様？」

何やら嫌な予感……………。

「はい今日から貴女は女神様です。」

今日から魔王ならぬ今日から女神様。何かまた面倒事に巻き込まれたのか俺は。

女神シルバーハート（後書き）

あまり変わらないかな？

伝承の女神と勉強（前書き）

改訂版

伝承の女神と勉強

とりあえず俺は今人生の岐路に立たされているのだろう。ノリであんな魔女もどき倒すんじゃないかったよ。

「貴方は今日から女神様です。」

目の前の少女イストワールが恋する乙女のような顔で話しかけてくる。

「なんで？」

「貴方によって先代の女神マジエコンの野望は阻止されそのマジエコンヌ本人も貴方によって倒されましたし。故に貴方が次の女神様です。よくわかりませんが貴方には信仰シエアが寄せられてますから問題ありません。それにあの伝承の女神様ともなれば下界の住民達からの信仰もうなぎ登りですよ。」

「信仰ねえ。けど俺は女神が何をするのか知らないし。」

「大丈夫です。女神の何たるかは私がおしえますから。(^ _ ^)」

いやいやそれ以前に俺は。

「だいたい俺は男だよ。」

固まるイストワール。

「はい？め、女神様いくら何でもそんなことはないでしょう(;! !)。」

「いや、本当だから。」

「そこまでして女神になりたくないんですか？だいたい女神様みたいなかわいい娘が男なわけありません。
もし本当だというのなら証拠をみせて下さい。」

「証拠か……………」

「ほらないんじゃないですか。」

「いや、ちょっと待って。どうすれば？」

「じれったいですね。えいつ!？」

突如人のズボンを思いっきりずらすイストワール。

「わあああ!？」

まじまじとある物を見てくる。

「本当に男、いえ男の娘だったんですね。 (^ | ^)」

「早くズボン返して!？」

「俺が男だってわかっただろう?。」

「はい。まがいもない男の娘でした。」

「なら俺は女神にはなれない。わかっただろう?。」

「よろしく願いします女神様。」

「人の話し聞いてた?。」

「ではまずは女神のすべきことしなくてはならないことについて話していきましょう。」

「お願いだから人の話を聞いて。」

少女?説明中。

「わかりましたか(^ | ^)。」

「まあ、なんとか。」

「今はそれで良いです。今から学んでいけばいいのですから。」

「そんなもんか。」

「そんなもんです。」

「がんばりましょう。(^ . ^)」

「ああ、がんばってみるか。……………いつの間にやら女神する事になっっていたよ。」

「しつかり今の言葉録音しましたよ（ノ。〇。ノ）」

「抜け目ないな。」

「逃がしませんよ（＜―＞）」

「まあいいか。」

少しは楽しめるかもしれないしな。それに何となくしてみるのもいいのかもしれないと思っている自分もいたからね。

只今イストワールとの勉強中既かなりの時間がたっている。

「ねえ、もう九時間は経ったんだけど。いつまで勉強するの？」

「そうですねえ、後八時間くらいはかかりますよ。」

「はい！？ちよつと、長すぎない。」

「がんばりましょう（＾―＾）大丈夫ですよ。私の女神様ならこれぐらい楽勝ですよ。何たって伝承の女神様なんですから。」

「わ、私のつて俺は君と出会ってまだ浅いとおもうんだけど。」

「そんなことはないですよ。私と貴女は運命の赤い針がねでつながっているんですから。」

「針がねって……。ところで気になってたんだけどその伝承の女神ってなに？」

その質問を待ってましたとばかりにこんな（、、）をするイスト

ワール。

「この天界には伝承があるんです。ゲームギョウ界が暗雲に覆われた時何処からともなく銀色の女神が現れあつと言う間に救ってしまふというものです。」

「なんと言つか随分軽い伝承だね。」

「そんなことはないですよ。今の私は最高の伝承ですから。では長くなりましたが勉強の続きをしましょう私の女神様。」

女神になるの少し後悔してきていたけどこのイストワールの笑顔を見るとなんだかがんばれそうな気がしてきたよ。

「あと7時間かかりますよ。」

「……………」

頑張ろう。

伝承の女神と勉強（後書き）

余り変わってません。

ふらぐ？（前書き）

ちなみにまだネプテューヌ達は生まれてません。

ふらぐ？

とある一日のひとこま。

「おや、何をしようとしているんですか？」

「ああ、イストワールか。ちょっと暇つぶしに新たにプロセッサユニットを開発しようと思ってね。」

「プロセッサユニットというとあなたが女神化した時に纏っている鎧のことですね。」

「うん。そのとおり。」

「今のままでは駄目なんですか？」

「駄目な事はないけど戦いかたが限られてくるんだよ。」

「そうなんですか。」

「今のプロセッサの絶対領域なら負けはないだろうけど、いざというときはほかの戦いかたもあった方が良くからね。」

「絶対領域？（。！。）」

「魔女もどきの時のあれ。」

「マジエコンヌの女神の力が使えないようにしたのですか？」

「そうそう。絶対領域。その中ではどのようなスキルも魔法も奇跡も操ることが出来る。」

「やっぱり貴方は異常ですね。」

「はいはい。設計図はこんな感じでっ」と

「私にもみせて下さい。」

「はい、どうぞ。」

「……………これは何ですか？」

「それはプロセッサの名前だよ。」

「名前？」

「そう。それぞれネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールって言うんだ。」

後々この四つのプロセスがユニットがあんな事になるとは。

ふらぐ？（後書き）

フラグなのか？

四人の妹さん（前書き）

あの四人登場します。

四人の妹さん

イストワールとの出会いからかなりの年月が経ち今では女神の仕事が少しは板についてきたはず。

なんだかんだで今は休憩中暇つぶしに新しく作ったプロセッサユニットをみながら少しニヤニヤしていたところでもあったりする。

「遂に完成ましたね。全部で四つですか。黒に紫、白、緑。全部貴方の好きな色ですねユウ。」

ちなみにユウと言うの俺の通常時の名前。

「まあね。けどこれで戦闘の幅が更に広がるはずだ。」

「今のままでも充分強いと思います。」

「そうかな？」

「そうですよ。」

暫くたわいもない話をした。

「ちょっと喉が渴いたかな。イストワールお茶淹れるね。」

「でしたら私はお茶菓子を準備しますね。」

「ありがとう、イストワール。」

「気にしないで下さい。愛しの貴方の為なら構いませんよ。」

そう言ってお茶菓子を取りに行くイストワール。

その姿を見送りつつ今までの事を振り返る。

お腹は空かなくてもご飯は美味しいとか。夜は暗くならないけど眠るようにしていたりもする。きづくとイストワールがベッドに潜り込んで来ているときもあった。お風呂がなかったため自分で作ったりもした。何故かイストワールがニコニコしながら覗いていたりもした。理由を聞くと愛ゆえの行動だとの事だそうだ。そんなことを考えていると四つのプロセッサユニットの様子がおかしいことに気付く。

「発光している？」

プロセッサユニットが光に包まれている。その光は更に輝きを増して行く。

「これはいったい？」

「くっ！？眩しい。」

暫くすると光は止む。すると四つのプロセッサユニットがあったところ、そこに四人の少女がいた。

その内の一人の紫色の女の子が近づいてきた。

「お」

「お？」

「お姉様！」

「お姉様！？」

突如として抱きついてくる。そして更には押し倒される。

「ああ、お姉様！お姉様！」

「ちょっと何処触ってんの！？」

「お姉様良い匂い。ハアハアハア。」

何やら紫色の少女が危ない行動をしていると……………。

茶髪の白い服の少女が何処からともなくハンマーを取り出して紫色の少女ネプテューヌと言うらしい。あれ？その名前は……………。

「お姉様から離れるネプテューヌ！！」

「うわぁー！？」

間一髪でネプテューヌがそれを避けると白い服の少女に文句を言う。

「むう。いきなり何するのブラン危ないよー!!」

それを無視してブランは俺に上目遣いで心配そうに聞いてくる。

「お姉様大丈夫？ネプテューヌに何か変な事されなかった？」

今度はネプテューヌを睨み付けて。

「お姉様にベタベタしやがって嫌がってるだろうが!!」

何か俺とネプテューヌで態度が違う？

「何言ってるの？どう見たって仲の良い姉妹のスキンシップだったじゃん。」

「どう見てもめえが無理矢理押し倒してただろが!!」

「あーあー。聞こえない。」

「てめえいい加減にしやがれ!!」

ネプテューヌも剣を取り出してブランと戦い始めてしまった。

「お姉様危ないですわ。」

今度は金髪の緑色の服の少女が俺の手を引いてネプテューヌ達から遠ざける。

「お姉様こちらにあの二人は放って置いてお茶でもしませんか。」

「ああ！？ベールが抜け駆けしようとしてる！！。」

それをネプテューヌが見つける。

「あら、抜け駆けなんて失礼ですね。私はただお姉様とお茶しようとしていただけですね。」

「そういうのを抜け駆けって言うんだよ！！。」

「文句があるならかって来なさい！」

ベールまでもが槍を構えて戦闘に参加していった。みんな好戦的なあ。

くいくいつと俺の服の袖をを引っ張ってくる黒い服装の少女。あの三人の名前がそれぞれネプテューヌ、ベール、ブランということは彼女の名前は……………。

「ノワール？」

「はい。どうかしたお姉様？」

「君はいや君達はもしかして……………」

「待ってお姉様、言いたいことも分かるけど今はお茶を飲まない？
せっかくの淹れたてが冷めてしまうわ。」

俺が淹れていたお茶を指さしノワールが言う。

「そうだな。お茶は淹れたてが一番だしね。」

俺は今出来る最大の笑顔をノワールにむける。

「っ！？／／／／」

赤くなるノワール。

「三人も一緒にお茶飲まない？」

一応争っていた三人にも聞いてみる。

「「「喜んで!!」」」

よほど喉が渴いていたのだろうか？

現在五人でお茶を飲んでいる。

俺の右隣にはベールが左隣にはネプテューヌがブランは俺の膝の上に座っている。そして向かい側の席にはノワールが座っている。

「率直に聞くけど君達はやはり俺が作ったプロセスサユニットなのか？」

俺の問いにノワールがこたえる。

「そのとおりよ。私たちはお姉様が作り出したプロセスサユニットが基になって擬人化したものなの。」

「基？」

更にブラン付け足す。

「……………そうあくまでもプロセスサユニットは基。……………それにお姉様の優しさ、思いが。そして願いが私たちを生み出した。」

「俺の……………」

「難しい事はわかりませんがお姉様は自分の力を過小評価し過ぎですわ。今のお姉様はそれこそ願えば何でも叶う位の力はあるのですよ。」

「過小評価ねえ。」

ベールの言葉通りだろうか？

「あーもう！！そんな難しい事どうでもいいの、私はお姉様とイチヤイチヤできれば」

飛び付いてくるネプテューヌ。

「あらあらネプテューヌだけずるいですわ。」

更に反対側から抱きついてくるベール。

「
」

すでに膝に座っていたブランは真正面からそのまま抱きついてくる。

「べ、別にイチャイチャなんてしたくないんだからね！」

そっぽを向くノワール。

「……………うう。やっぱり私もイチャイチャする〜。」

ノワール陥落。後ろから抱きついてくる。

四人にもみくちゃにされる俺そんな時。

ドサッ。

紙袋が落ちたような音がした。その方向を見るとイストワールがいた。
ただしこんな顔で。

(。ー。)

無表情でじっとこっちを見ている。その無言の威圧に抱きついていた四人も固まる。

「飽きたんですか？」

「えっ……………」

「私にはもう飽きたんですか？私はもう過去の女なんですね！！」

「いやいやちょっとまってイストワール。」

「若い女の子が良いんですね。私はもうパートナーじゃないんですね。ぐすっ、うっつ。信じてたのに。うわぁーん！！（TOT）」

泣き出したイストワール。この誤解を解くのにかなりの時間が必要だったのは言うまでもないだろう。

四人の妹さん（後書き）

主人公女の子と勘違いされたまま終わってしまった。

驚愕の事実（前書き）

ユウがやっと自分の性別を話して酷い目に会います。

ひとつ主人公の性別は男でも男の子でもなく男の娘です。

二つキャラ崩壊いえ決壊は当たり前。

三つ駄文です。

驚愕の事実

「しかしながら擬人化とは我ながら驚きだ。」

あの後イストワールに何とか事情を説明して事なきを得た。まあ、そんなところ。

「アナタならもう何をして私に驚きませんよ。（＾―＾）」

何気に酷いぞイストワール。

今はイストワールを合わせた六人でお茶をしていた。

お茶菓子はイストワールが持って来たシュークリーム。それはいい。シュークリームは好きだしだが……………

「何この俺のシュークリームはペタンコ！」

そう俺のシュークリームだけペタンコ。イストワールが紙袋を落とした時に潰れた物みたいだ。

「自業自得です。（。―。）」

頬をハムスターの様に膨らませプイツとそっぽを向くイストワール。

可愛いじゃない。

ちなみにイストワールは俺の服の中に入って襟元から（。ー。）を出している。

「お姉様これ美味しいね。」

「ネプテューヌ美味しいのは良いがクリームが付いてるぞ。」

頬に付いていたクリームを指ですくいとるとすぐに口に運ぶ。

「うん、甘い。」

何故かその瞬間みんなの動きが止まった。そして口にクリームをつけ出した。

（。ー。）×四

何この期待した様な視線。

まあ、そんなことよりも……………。

「俺の願いが叶うと言うならばこのシュークリームを本来の姿に、できればもう少し大きくなれ。クリームたっぷりで！」

シュークリーム変化なし。

「何も起きないだど!？」

何かむなしいな。

「可愛らしいですわお姉様。よろしければ私のを半分どうぞ。」

「……………私のもあげる。」

「ありがとうブラン、ベール。」

二人からシュークリームを受けるとそれを食べる。

「もきゅもきゅ。ごっくん。」

何故か全員が微笑ましい物を見る様な目で見てくる。

「美味しかった。……やっぱりこの潰れたのも食べようかな。」

「お姉様私のも食べてもいいわよ。」

ノワールが顔を赤くしてそっぽを向きながらシュークリームを乗せて皿を出してくる。

可愛いじゃない。

思わず抱き締めてしまった俺は悪くないはずだ。

「お姉様だ、駄目よ。いくら女どうしだからって、私の理性が決壊するわ。っていうか決壊しても良いかも。むしろOK?」

顔がトマトよノワールさん。後目が怖いぞ。

「……………」

「あらあら。」

「私も抱き付くー!!」

再び全員が抱き合う形となる。何か良いねこっいの。
だがイストワールが……………。

「む、むぎゅー！？（＜＞）」

「イストワールが俺のシュークリームの様にぺたんこ！？みんな離れて離れてー！！更にはイストワールが食べていたシュークリームが潰れて服の中がベタベタにー！！」

「私は貴方の胸の中で死ねるなら私はほんもうでした。（―・―）」

漫画の様にぺたんこになっていたイストワールを引っ張り出して丸めたり引き延ばしたりしてなんとかしました。

「恐い事言わないでよ。それにしても中がベタベタだよ。」

服のボタンを外し胸をはだける。

「…………ぐわあ！？…………」

四人が意味不明な声をあげる。だが今はこのクリームをどうにかしない。

「舐めちゃえ、ぺろっ。甘い。」

指で少しすくって舐めてみる。

「「「「「ぶぎゃー!」「「「「「

こいつらは人が困っている時になんなんだ。

「これは誘っているのかしら。」

鼻を押さえて上を向いているノワール。

「……………落ち着け私、私はクールで無口系美少女ロリキャラ。ここで感情的になれば絶対後悔する。」

テーブルに顔を伏せて何やらブツブツ言い出したブラン。

「お姉様の白い肌に付いた白いクリームを私は舌で舐めとる。最初嫌がるお姉様、だけど段々とその快楽に耐えきれなくなりそして最後には私に全てを委ねてしまう。」

何やら危ない事を言い始めたベール。自分で言っただけで自分で興奮しないでくださいねー。

「お姉様わたしが舐めてあげようか？」

お前がある意味一番純粹だなネプテューヌ。

「いけませんよユウ。年ごろの男の娘が胸を露出したら。してもいいのは私と二人きりの時だけですよ。」

「ああ、ごめん。。年ごろの女の子の前でこれははしたなかったね。一応俺も男だしね。……………あれ何で皆固まっているの？」

「あ、あのお姉様私の聞き間違いかもしれませんがいまのお二人のお話を聞く限りお姉様は男性なのですか？」

ベールがおそろおそろ聞いてくる。

「うん。だからね最初からそう言っただけでしょう？」

「いえいえ聞いていませんわ。」

「あれ、そうだったっけ？」

「」「」「」「」「」

全員が一斉に頷く。そういえばお姉様を訂正するのを忘れていた。

「まあ、言ってなかったのは悪かったけどこれからはお姉様ではなくお兄様でよろしくお願いします。」

「あ、ありえないわ！！こんなに可愛い娘が女の子じゃないなんて証拠は証拠！！」

「イヤイヤ、どうみても男だろうノワール。胸もないし。」

更に服をはだけさせ胸をみせる。

「ぐふお！わ、わからないわ、もしかしたら胸がぺたんこなだけかもしれないし。」

「ええ。ブランはどうっ？」

「私はどっちでもいい。お姉様はお姉様だから。」

「ネプテューヌは？」

「私はちょっと驚いたけどありだと思う。いやむしろOK!」

「ベールは？」

「絵的にはありですね。」

絵的？

「なら証拠を見せれば良いじゃないですか。えい、えいっ!!」

「なっ、イストワールやめろまた脱がせるきかやーめーろー!!」

イストワールのズボンずらしから逃げる俺。

「良いじゃないですか。へる物ではないですし。」

「いろいろ減るんだよ。」

そんな感じを繰り返してはや三十分。

「あーもうじれったい!!」

ノワールが待ちくたびれたのかいきなり立ち上がる。

「おりゃ!! (ノ< >ノ)」

スポンを引きちぎった。無論どうなるかは言うまでもないだろう？

「ま、まさかほんとにお姉様はお兄様!？」

ノワール自分でやっといて何を言う。

「……………よし。」

「ブラン、なにがよしなんだ？何でガッツポーズ？」

「リアル男の娘。実在したなんて!？」

「違うぞベール。俺は男の子!!」

「我がよの春がきたー!!」

「ター Xだと!? ネプテューヌなぜそれを知っている。もういいからズボン返して!？」

「はい。」

ノワールが引きちぎったせいでズボンが

「ボドボドダー!」

「仕方ない。プロセッサユニット装着。プロセッサユニット装着完了。女神シルバーハート降臨! どうだこれなら服が破けても問題ないだろ。」

四人ともまたもや無反応。イストワールは変身と同時に機能一時停止させた。本の状態になって隅にでも転がっているだろう。少しは反省して下さい。

「ふつくしい。」

「社長!？」

「でも私たちもできるよ変身。」

胸をはるネプテューヌ。

「やっぱり出来るんだ。みせてみせて。」

「……………残念だけど私達の変身は好感度を一定の値まで上げないと見れない。でも私のは振り切れてるからいつでもみせてあげる。」

「ブラン、それ結局どっち？」

「さあ？」

知らないようだ。

「まあ、いいや。みんなこれからよろしくね。」

「無理矢理まとめたわね。」

「だって疲れたんだもん。」

「お兄様これからよろしくね。」

「……………よろしく。」

「お兄様いろいろご迷惑お掛けしますがよろしくお願いしますわ。」

「よろしくー!!」

これから忙しく、いや一応楽しくかな、そう楽しくなっていきそうだな。でも嬉しいかなだって『家族が欲しい』という願いが叶うのだから。

「私は放置ですか。（TOT）」

あ、忘れてた。

驚愕の事実（後書き）

このイストワールはもう取り返しがつかない。

ネプテューヌは欲望に純粹。

ノワールはツツコミツンデレ。

ブランは自称無口系クールロリ美少女。

ベールは妄想癖の廃人。

主人公は男の娘。

まあ、暖かく見守って下さい。

プランとの一日（前書き）

まあ、題名通りです？

ブランとの一日

今日はブランと一緒に天界の図書館で読書中である。この図書館は俺が女神となった後に立てられた物である。かといって俺がこつこつと作ったわけではなく、ただ単に『あつたらいいな』と思っていたらいつの間にか出来ていた。いやほんとに。ご都合主義？何それ美味しいの。イストワールは『私がいるから良いじゃないですか。』と言い図書館を度々消し去ろうとする。まあ、そんなことは忘れてしまおう。

「お兄様続き早く読んで。」

「ああ、ごめん。」

今はブランに膝枕をして本を読み聞かせている。

「白貫姫はふがない王子様の代わりに魔女をしばいてしまいました。そして王子様をお尻に敷いて幸せに暮らしましたとさおしまい、おしまい。」

「いつの世も女性は強いね。」

「白貫姫はきつと拳法かなにかを習っていたんだよ。」

そう思わないとやってられない。

「次はこれ。」

ブランに新たに本を渡される。題名は……………。

「ピーチボーイ・裏切りの始まり。欲望とメダル。」

ツッコミどころが多すぎる。

「まあ、良い読むよ。」

「うん」

足をバタバタさせるブラン。

「こらはしたないからやめなさい。パンツ見えるよ。」

「みせてるの。ちらっ。」

「……………皆さんが知っているピーチボーイ。それは桃から産まれたボーイがお祖父さんと死闘を繰り広げキング ブハ トの称号を得てお供のフェニックス、ワーウルフ、ラオシ ンロンの三匹と共にメダルの怪人グリードとグリードが人の欲望を基に生み出したヤミーと闘うハートフルラブコメディーであろう。」

「そうなの？後パンツ見えた？」

「いや、たぶん違うと思う。後白いパンツなんて見てないから。」

「そうなの？ニヤニヤ。」

「無表情でニヤニヤとか言わないで。後ごめん見ました。」

「興奮した？」

「べ、別に。」

「確かめてみよ。くる。」

身体の向きを変えて膝枕に顔を埋めるブラン。

「こ、こら何処触ってるの!？」

力づくで離そうとする。だが変身されてしまふ。純粹な力では俺はブランには負けてしまふ。さすがに絶対領域でも腕力はどうしようもない。

「止めないともう本は読まないよ。」

「それは嫌。」

くるつと向きを戻すブラン。

「変身は止めないの？」

「うん。生足で好感度をあげるの。」

俺は生足見せれば好感度があがるのか。

「とりあえずこの本は読まないでおこうか。この本一冊でまた別の物語が始まる予感がする。」

「否定できない。今日はもう本は良い。眠たくなってきた。」

まぶたを擦るブラン。

「ならお部屋行こうか？」

「うん。お姫様抱っこでお願い。」

「はいはいお姫様。」

ブラン＆ユウ移動中。

ブランの部屋に行く途中イストワールを見たようなきがしたがまあ気のせいだろう。

部屋に到着。

「ブラン着いたよ。」

そう言ってブランをベッドに横にする。そのまま立ち去ろうとするがブラン引っ張られベッドに引きづり込まれる。

「一緒に寝て。」

「はいはい。ブランは甘えん坊だなあ。」

「すうー。」

「寝るの早っ！？まあ、いいや。お休み、ブラン。んっ。」

ブランのおでこにキスすると俺もそのまま眠りにつくため目を閉じる。

「んっ、ちゅ。」

唇に柔らかく微かに湿っぱい感触がしたが気にせずそのままブランを抱き締め眠りにつく。

「おでこじゃ物足りないから。お休みお兄様。」

そしてブランとの一日が終わる。

プランとの一日（後書き）

天界の図書館はカオスのように見えるがちゃんとした本もあります。

大陸管理（前書き）

展開早いです！！
駄文です。

大陸管理

今はご都合主義もとい俺の純粋な願いによって作られた会議室にて全員を集めて話し合いをしている。ちなみに全員女神化している。

「これより、綺羅星じゅ、じゃなくて女神総会を始める。今日の議題は今俺が管理している四つの大陸についてだ。」

「はい、先生。」

質問及び意見する時は挙手をする事となっている。

「はい、ネプテューヌ君。」

「今日の下着の色は何ですか？」

「女神化している時はプロセスサユニットを直接着ているため下着は付けていません。」

俺の女神化した姿はほかの四人の様にレオタードではなくスパッツである。

「そうなんですか？私興奮してきました。お花摘みに行ってきたもよろしいでしょうか？」

「駄目です。お前は女神化して性格は変わっても欲望には忠実だね。」

「ありがとうございます。」

「ほめてません。」

「ユウ話がそれてますよ（＜＞）」

イストワールがいましめてくれる。だがその顔をはなに？

「では改めて、俺が管理している四つの大陸。プラネテューヌ、ラストイション、ルウィー、リーンボックスは知っていますね。簡単に言えば女神候補生である貴女達四人にその大陸を一人ひとつずつ管理してもらいます。」

「『ええ』。」「」

ある意味予想通り。

「反論はゆるしません。お前ら毎日ただ遊んでいるだけだろう。二
ート街道一直線だぞ。」

「今はコミケに向けての衣装作りで大変なのよね。あ、安心してお
兄様の衣装もちゃんと作ってるから。」

「それでも私は働きたくないですわ。」

「働いてもいいけど抱いて下さいお兄様。」

「…………小説の執筆が忙しい。」

「ニートな妹達とは口を聞かない。」

ぷいっとそっぽを向く。

「「「喜んで大陸管理をさせてもらいます。」「「「

ニヤッ、計画通り。

「しきり直してと。イストワール四大陸の地図だして。」

俺はイストワールに指示をだしてウインクをする。するとイストワールもウインクを返す。そして自らの口の中に手をつ込む。

「うおえええー。」

「『『吐いた!?!?!』』」

「いや、違う。イストワールは自らの体内にある書物を取り出しているだけであって嘔吐しているわけではない。」

俺も初めて見た時は引いた。

「はい、終了しました。どうぞユウ。」

「あ、ありがとう。うわっ、何かベタベタした液体が。」

俺は地図を受けとり開くなんかあちこちべたついてる。

「まあいい、これが四大大陸だ。お前達にはこの大陸をひとつずつ管理してもらう。誰がどの大陸を管理するかはすでにアミダで決めました。」

「そんなに簡単に決めていいものなの?」

ノワールが頼杖をついて呆れた様に言う。

「ノワールこれ作るのに三時間もかかったんだよ。」

「お兄様も大概暇そうよね。」

全員が同様に呆れた顔をして俺を見る。ヤバイヤバイ兄としての威厳が……………。

「ま、まあアミダはおいといて誰がどの大陸を管理するかを発表します。」

「」「」「逃げた。」「」「」

「まずはネプテューヌにはプラネテューヌを管理してもらいます。」

「任せてお兄様！あと結婚して下さい。」

「次はノワール。」

「スルー！？スルーなのね、興奮してきたー！！」

いちいち叫ばないでほしい。今ちよつとびつくりした。

「ノワールにはラステーションを管理してもらいます。」

「全力を尽くすわ。それでお兄様新しい衣装採寸したいから後で来てもらっていいかしら？」

「いいけど変なの着せないでよ。ミニスカート履いて下界のみんなに見られたのはかなり恥ずかしかったよ。次はベール。ベールにはリンボックスを管理してもらいます。」

「がんばりますわ。ところでお兄様ほしいゲームがあるのですけれど。」

「3日前に買ってあげたばかりだろう。お前はニートを通り越して廃人街道一直線だな。」

「まあ、ありがとうございますお兄様。後3日前に買ったゲームはもうクリアしましたわ。」

「ほめてないから。次はブラン。ブランにはルウィーを管理してもらいます。」

「……………わかった。後お兄様また小説書いたから読んで見て。」

「わ、わかった。暇があったら読んでおくよ。イストワール保管しておいて。」

俺はブランから渡された本をイストワールの口に突っ込む。あの小説はある意味トラウマものである。簡単に言えばブランの小説は酷い！！我が妹ながらこの酷さはやばい例えるならばエスカルゴをレストランで注文したら生きたかたつむりが出されるくらいに。

「やめてください。こんなに大きい物入りません！こんなものいれたらわたしこわれちゃいまげばらああ！？」

「お兄様イストワールが白目むいてるけど。」

「ノワール、こいつはこんな事じゃ壊れない。何故なら俺のパートナーなんだから。」

「ええ、私はこんなの慣れっこですよ。」

俺の言葉が聞こえたのかイストワールがブランの小説を飲み込んで生き返る。

「貴方達やっぱり異常です。」

「ごもつともだけどお前はその異常の妹だからねノワール。」

「ああ、そうだった。なら私も異常なのかしら。」

頭をかかえ本気で悩み始めたノワール。だが俺はそんなことを気にせず話を締めくくる。

「これにて女神総会を終了します。まあ、大陸管理については俺がサポートするから安心してあと何か聞きたいことがあったら聞きにきて。じゃあ、みんながんばって。」

「失礼しますね。」

俺とイストワールは女神総会が終わると別の部屋に転移する。

「『消えた!?!?!』」

四人はそれを見てたいそう驚いたそうな。

場所は変わってイストワールとユウが転移してきた部屋。そこは全体的に白で統一された色の部屋であった。

「よかったですか？」

イストワールいつになく真剣な表情でユウに聞く。

「ん、何の事？」

「とぼけないで下さい。大陸管理をあの娘達四人にさせる事です！」

ユウのとぼけた態度にイストワールが怒りを隠さずに言葉を紡ぐ。

「今はたださえ大変な時期なのにさらに厄介事を増やさなくてもいいではないですか！！このままでは貴方の身体に負担がかかります！！」

「そこまで負担がかからないとは思っただが。」

それを聞いてイストワールはさらに語気を強める。

「私が知らないとも思っているんですか？最近のモンスターの大量発生、異常気象、シェアの低下を防ぐため貴方が休む間もなく動いていることを――！」

「やっぱりばれていたか。」

「当たり前です――！私はこの世界その物なのですから。」

「なら分かるだろ。頭の良いお前ならあの四人に大陸管理を任せた理由を。」

その言葉にイストワール唇を噛みしめうつむく。

「シェアの分割。貴方へ向けられているシェアをあの娘達四人に……。」

「そうあの娘達に向けてあの四人に新たな女神となってもらう。あの娘達も素質は充分あるんだから大丈夫だよ。」

「それでいいんですか？貴方が今まで集めてきた信仰を全てをあの娘達に渡してしまっても。」

「別に構わないよ、それに大陸管理は大変な事ばかりだしね。あの娘達にも大陸管理が大変だという事を分かってほしいからね。大陸を一人ひとつだから大丈夫だよ。」

「わかりました。私はもう何も言いません。ですが……………」

イストワールがうつむく。

「ですが私の前からいなくならないでください。傷つかないでください。貴方がいなくなるのは傷つくのは見たくない。」

「イストワール……………。当たり前だろう。お前は俺のパートナーじゃないか。」

イストワールの頭を撫でつつ微笑む。

「そう言われるともう何も言えないんですね。私も甘いんです。でしたら今日は一緒に寝ても良いですよ。パートナーなんですから。」

「調子に乗るなと言いたところだけどまあ、今日だけだからね、変な事するなよ。別に嬉しくなんかいいんだからね。」

何故かそっぽを向いて言う。

「では、変身」

「えっ!？」

イストワールの掛け声と共にその身体が光に包まれる。

「眩しい!？」

イストワールを包んでいた光が消える。

「どうですか？」

「イヤイヤ何それ!？」

「俺聞いてない!?!なんでおっきくなっているー!?!」

そうイストワールが大きくなっていた。ブランより少し小さいくらい。

「あの娘達には負けられませんから。これじゃあおきに召しませんか？」

「いや、そんなことはないんだけどまあ、気にするだけ無駄か。寝ちゃお。」

気にせず部屋の備え付けのベッドに入る

「えへへ（o^v^o）」

イストワールが隣に入って来る。そして腕に抱きついてくる。

なんだか良い夢が見れそうな気がした。

「「お休み。」」

そして二人は眠りについた。

大陸管理（後書き）

まあ、こんな感じです。感想待っています。

ノワールと一日（前書き）

どうしよう一話一話がかなりの短さ。

ノワールと一日

今俺はノワールの部屋に訪れている。今では来たことに少し後悔している。

「さあ、お兄様これを着てみて下さい。」

メイド服らしき物を手渡される。

「ちょっと、ノワールこのメイド服スカート短すぎる。」

「ちがうわ！それはメイド服ではなくて今大人気アニメ『マジカルニャンコちゃん』のコスチュームよ！！」

凄い気迫だな、一瞬ひるんだぞ。

「さあ、お着替えしましょうお兄様。」

「ま、まて着替えぐらいは自分でできるから。」

「これを着るの大変なのよ、だから手伝ってあげる。さあ、さあ！」

何かまずいと直感が訴えてくる。ノワールの手が肩にかかる。

「わかった、わかったから。」

凄い良い笑顔である。

「うつつ。」

ただいまノワールにより着替えさせられ中。

「ここはこう付けてと、それにしてもお兄様の肌って白くてすべすべして羨ましいわ。」

指で背中を撫でられる。

「ひゃう!?!」

思わず声をあげてしまう。

「あらごめんなさい、感度も良いのね。ほんとに男にしておくのは

勿体ないわね。」

今は何を言われようとも我慢しなくては。下手に何かすると後が恐い。

「はい、ネコミミ付けて出来上がり さすが私良い仕事してるわね！。」

「うつつ、恥ずかしすぎるー!!」

考えてほしい年ごろの男がこの恰好だぞ。かなり精神的にきついら。

対象的にノワールはニコニコしている、カメラを構えながら。ん？

「カメラ!？」

「次は撮影会ね。その顔いただき。」

パシャッという音と共に撮られる。

「ちょっと待ていくら何でも撮影は止めて。」

「大丈夫よ。誰にも見せないから。それとも今までの写真下界にばら蒔いてもいいの？」

「わ、わかった。だからそれだけは止めてくれ。」

想像しただけで恐ろしい。

「じゃあ、まずは女神化してちょうだい。勿論服はそのままよ。」

「わ、わかった。変身。」

俺はシルバーハートへと姿を変える。

ノワールはシルバーハートになった俺の姿を見て二、三回頷く。

「やっぱりこっちの方がしっくりくるわね。じゃあ今から私のいつもの通りのポーズをとってくれるかしら？」

拒否権はないんだろうどうせ。

「もう開き直ったぞ、よしどんどこい!!」

心の準備はOKだー!!

「まずはそのミニスカートをたくしあげてみて。」

「いきなり予想を遥かに越えたー!!」

イヤイヤこの短いスカートをまくるとかもう下着が見えるだろうが。

「スパッツだから問題ないでしょう?それに主人公のニャンコちゃんのモットーはスパッツは見せないと恥ずかしいもん。」

え、何そのストライクなうっちーず的な考え方は。

「さあ、早くしてくれるかしらお兄様。時間は有限なのよ。」

「はいはい。」

仕方く俺はスカートをまくり上げる。

「素晴らしいわその恥ずかしそうな表情もいただきね。ナイススパ
ッツー！」

何度もカメラのフラッシュがたかれる。

「ねえ、ノワール。」

俺は前から思っていた疑問をノワールにぶつける。

「何？ああ、次は四つん這いになって。」

「よ、四つん這いね。自分ではコスプレしないのか？」

「するわよ。」

「その割にはあんまりそんな姿を見かけないけど。」

「みせてないから当たり前。もしかして見たいの？」

「ちょっと興味があるかな？」

カメラをいったんしまつとノワールは俺の四つん這いに合わせて座っていた椅子から立ち上がる。

「じゃあ、着替えるから待ってくれるかしら。」

「わ、わかった。」

俺はそう言つとノワールのコスプレした姿を想像する。コスプレするのは構わないんだけどこの服見たいに露出が多いのは何か嫌だな。理由はよく分からないんだけど。

「終わったわよ。」

早！？

コスプレしたノワールは何故か女神化した状態にフリルがふんだんにあしらわれたピンク色のゴスロリとか言う恰好だった。

「おおー。」

「何？やっぱり変かしら。だからいやだったのよね。」

何故か落ち込むノワール。

「そんなことないよ。凄く可愛いよ!」

その俺の言葉に何故か驚くノワール。

「か、可愛いってなんでそんなことをどうして簡単に言えるのかしら。その姿で言っても嫌味にしか聞こえないし。」

何やら言ったようだが小さくてよく聞こえなかった。

「ん?ごめんノワールよく聞こえなかった。もう一回聞いていい?」

今度は何故か怒っている。喜怒哀楽がゆたかな娘である。

「なんでもない。今日の撮影会はこれでおわり。」

おおー。何か知らないが終わったよ。そんなことを考えているとノワールに押し倒される。

「ノ、ノワール急にどうしたの!?!」

「馬鹿お兄様。今日は二人きりなんだから少しは気をきかせてよ。」

顔を赤くしてそっぽを向くノワール。

ああ、ようわあまえたいのか。

「今日は気をきかせて二人で遊ぶか？」

一瞬ノワールは笑顔になるがすぐに顔を引き締める。

「しょうがないからいつしよに遊んであげるわ。まったく寂しがりやのお兄様にも困ったものだわ。」

「はいはい。」

その日一日はノワールといろんな事をしてあそびました。

終わりだー！！

ノワールの部屋から出るときどこかで見かけた本が凄い勢いで浮遊し移動していた。

ノワールとの一日（後書き）

なかなか話が進まないー！！

怒りの赤、奪われたスパッツ！！（前書き）

感想が欲しいー！！ できればほめてくれれば作者はやる気を出します。

怒りの赤、奪われたスパッツ！！

四人に大陸管理を任せてかなりの年月がたった。今では俺が教える事もなく全員がその大陸の女神として信仰されている。そして俺の出番もなくなり女神の力もなくなると思っていた。だが俺の女神の力は失われなかった。以前として女神化も可能であり力は持続していた。イストワールでさえもその理由を説明することは出来なかった。ただまだどこかで俺の事を信仰してくれているのかもしれない。だがそれはあり得ないと俺は思っている。今では俺は下界の事には干渉はほとんどせずに過ごしている。時折妹達が手におえなくなつた際にこつそり手助けしていただけである。そんなことを考えているとイストワールより驚きの報告を受ける。

「ネプテューヌ達が戦闘を？」

「はい。何やら女神化して本気で争っているようだ。」

確かにここ最近あの娘達がギクシャクしたり互いの大陸の管理について争っているようなことはあったが女神化して戦闘を行うのは危険すぎる。怪我どころでは済まないかもしれない。仕方ない、様子を見て場合によってはお仕置きしないといけないか。

「イストワール場所は？」

「ここから少し離れたモンスターも現れないはずの場所になります。」

「ああ、あそこね。わかった、転移で直ぐに向かうぞ」

「了解しました。」

俺とイストワールは四人がいる場所に転移する。

「到着つと。さてあいつらは、いたいた。」

到着して四人を探すと以外と直ぐに見つける事ができた。

「やはり何かあるようですね。全員殺気だってますよ。」

イストワールの言葉通り四人の表情には相手を本気で叩き潰すという意思が明確に読み取れる。

「しばらく様子を見てみようか。」

「その方が賢明でしょうね。今出て行っても状況を悪化させるだけですしね。」

四女神 side

四人の女神達は斬り合いを続ける。四人の力は拮抗して決着が付かない現状である。

「埒が空かないわね。」

ノワールが忌々しげに他の女神を睨み付ける。

「確かにそうですわね。」

ノワールの言葉に同意しつつも槍を構えるベール。

「……………なら誰か一人を先に消す。」

自らの身体の大きさに合わない戦斧を構えて静かに発言するブラン。

「それもいいわね、一番邪魔な奴を消すと言う事で良いかしら？」

「構いませんわ。」

「…………別に構わない。」

ノワールの言葉に賛成するブランとベール。

「誰を倒すかだけど……………」。

その言葉と共に今まで語りあっていた三人の視線が一人に集まる。

「……………ふふふつ。ん？何かしら三人ともそんなにわたしを見つめて。」

今までひとつの発言もせず何故かニヤニヤしていたネプテューヌへと。

「貴女ね。」

「てめえだな。」

「貴女ですわね。」

「……………？何かかしら。」

三人の発言の意味がまったく分かっていないのか首を傾げるネプテューヌ。

「貴女人の話を聞いてなかったの？っていうかさつきから何ニヤニヤしてるのよ気持ち悪いのよ！」

ノワールの言葉に納得がいったのかうんうんと頷くネプテューヌ。

「ふふっ、驚かないでちょうだいね。これを見なさい。」

ネプテューヌが何処からともなくスパッツを取り出し上空に掲げる。

「……………スパッツ？」

今度はブランが首を傾げる。

「そうスパッツよ。言っておくけど私ではないわよ。」

黒いスパッツ。取り出したネプテューヌ本人の物ではないとするならと三人は互いを伺う。ふと三人の考えが一致する。

「……まさかお兄様の！？」「……」

「そのまさかよ。やつとの思いで手にいれたのよ。ああ、早く戦いを終わらせてくんかくんかしなくては。」

恍惚の表情でスパッツを懷にしまう。

「……」「……」

静かにそれぞれの武器を構える三人。

「あ、あら恐い顔をしてどうかしたのかしら三人とも。まあいいわめんどくさいからまとめてかかって来なさい。」

三対一戦いをすればどちらが勝かは一目瞭然。だが今は分からない何故ならば

「「「「スパッツー!!」「」「」

スパッツが出てきたのだから。

ユウside

「「「「スパッツー!!」「」「」

俺は今頭を抱えて妹達の戦いを見ていた。

「スパッツの力は凄いですね。」

イストワールが何かを言っているようだがまったくもって頭に入って来ない。

「あいつらの育て方いいたいどこで間違えてしまったのだろうか?」

「生まれた時からではないでしょうか？」

俺はあいつら四人が生まれた時から今までのことを思いかえす。正直甘えさせすぎたかな。調子に乗っている部分もあるのではないかとさえ思えてくる。そして俺が受けてきた理不尽な扱いを思い出す。すると驚くほど頭がすっきりしてプツンと何かが俺の中で切れる。

「そうだあいつらには少し反省してもらわねば、変身。」

俺の姿がシルバーハートへと変わる。だがひとつおかしいことがある。

「赤色？」

今イストワールが呟いた通りいつものシルバーハートのプロセッサと色が違い何故か赤かった。

「簡単に言えば俺のプロセッサユニットは感情に反応するんだ。今は怒りの感情ね。」

「なるほど……。それであの娘達をどうするんですか？」

「お仕置きそれと少し早いけど例の計画を実行する。」

そして俺は妹達に向かってゆっくりと歩き出す。

「あの娘達のご冥福を祈ります。」

イストワールはこっそり十字を切っていた。

四女神 side

四人は四人共にボロボロであった、スパッツのせいで。

「ネプテューヌいい加減にスパッツを渡しなさい。」

荒い息を整えながらノワールがネプテューヌに言う。

「お兄様の神聖なスパッツは私のもんだ!!」

普段兄の前では考えられないような発言をするブラン。

「ふふつ。お兄様のスパッツ、私はそれを隠しもっているのがお兄様にばれてしまう。そしてお兄様は私を無理矢理押し倒されてしまう。そしてそのまま……………」

最早取り返しが付かないベール。

全員が武器を構え直す。そして

「……………決着をつけ……………!?!?!」

ようとしたその瞬間女神四人に向かって圧倒的な闘気と怒気がぶつけられる。

四人がその方向を向くと自分達の愛する兄がいた。普段なら直ぐにでも飛びついて行くのだが今の兄には誰も近づけないでいる。兄は

とても良い笑顔なのだが今の兄は目が笑っていなかった。

「みんな こんなところでのうのうとひとのスパッツを巡って何を
しているの？」

「えっ、いや、あの。」

兄の言葉に反応しようとするが上手く反応出来ないノワール。

「……………」

まともに兄の顔すら見れないブランとベール。そんな三人の気を知
らずかネプテューヌが……………。

「お、お兄様のスパッツを見つけたから届けようとしてたのよ。」

「そうなの？それはお礼をしないといけないかなあ？」

すると兄の気が収まった、それに安心したネプテューヌは言葉を紡
ぐ。そして

「そんなお礼なんて気にしないでお兄さまぶへっー！！」

上空を無様に舞っていた。そこに兄、いや阿修羅さえも凌駕した何
かは追撃をする。

「穿て烈線！！」

「ちよっ、まっ！？」

「無限の剣星蒼窮を駆ける！」

「げぼっ！！ぐぼらっ！！？」

「ワンオフス・ディゾルヴァー!!」

「イヤー!!」

何があつたかは諸君らで想像してほしい。ただ結果ノワール、ベル、ブランの前には

「回復アイテムキボンヌ……………」

そう言つて倒れた紫色の何かがあつた。

「ひい!?!」

そして三人の女神達の前に立つ阿修羅さん。

「残念だけど気は収まったのではなく収束しただけなんだよね。さてねえノワール?」

あからさまに身体をビクツと震わせる。そんなことはお構いなしに阿修羅さんはノワールに向かって歩き出す。ノワールは蛇に睨まれた蛙のごとく動けないでいた。

「お前ならこんな馬鹿な事しないと思つていただけだなあー。まさかスパッツ、スパッツ連呼して闘いに参加するなんてねえ。」

「ち、違つのお兄様私はただお兄様のスパッツを履きたくて（ネプテューヌから取り返して届けたくて）。あ、本音と建前がぎゃくに!?!」

阿修羅さんは無言でノワールを羽交い締めにする。

「えっ……………!？」そのまま空中に飛翔する。もの凄いスピードで。さらに空中で物凄い早さで五回ほど回転する。

「うっ!？」

この時点で気絶するノワール。そんなことはお構いなしに物凄い勢いで地面にノワールは犬神家のごとく突き立てられる。(この一連の流れ仮面ライダー龍騎に登場する仮面ライダーベルデのファイナルベントを思いうかべてほしい。)

阿修羅さんは次の標的であるベールに目を向ける。

「お、お兄様私の話を聞いてくぶわぁー!!！」

そんな謝罪は無視してベールに蹴りと殴打の嵐を喰らわせる阿修羅さん。

ここからは音声のみでお楽しみ下さいね。

「奮えるぞ胸ー!!！」

「ちよっ、まっ!？」

「燃え尽きるほど熱い!!！」

「理不尽なー!!！」

「刻みます。流星のスピリアー!!！」

「ぐぼっ!？」

「君が泣くまで殴り飛ばす!!！」

「ひどっ!？」

「銀色流星拳――!!」

「も、もう無理ですわ……………」

「悪・即・爆発――!!」

最後に残されたブランの前には爆発した何かが落ちてくる。

「あ、ああ……………!？」

怯えきつたブランの前に阿修羅さんが舞い降りる。

「さてとブランお前は俺のスパッツをどうするつもりだったの？」

「……………」

最早ガタガタ震えだしてまともに口すら開けないブラン

それを見た阿修羅さんは小さくため息をつき、今まで赤くなっていた装甲を元に戻す。そして両手で拳を握りしめゆっくりとブランのこめかみに添える。

その瞬間ブランは自分が何をされるか悟り顔を真っ青にした。

『ぐりぐり』と物凄い音が聞こえた。そして高速で回転するユウの両手。そしてあまりの痛みで声すら出せないブラン。

「……………!？」

「俺は言ったはずだけどね。口調のどうすれば良かったかね。」

「……………！」

ブランの手からユウの手が離される。

「うめ…ぼし…はいや……………」

そう言って倒れるブラン。

そして四人の女神は目の前が真っ黒になった。

ユウ s i d e

今俺の前にはボロ雑巾のようになった妹達がいる。

「さてと仕上げと行きますか。」

妹達に転移に使う魔法陣を作り出す。

そこにイストワールから声をかけられる。

「本当にいいんですかこの娘達を下界に落として？」

それを手でせいする。

「それは言わない約束だよ、イストワール。俺は期待しているんだよね。この娘達が下界で成長することを。」

そう言って転移魔法陣を発動させ四人を転移させる。

「その為に今まで準備してきたんだからね。」

最後のつぶやきはイストワールには聞き取れなかった。

「……………あつ、スパッツ返してもらうの忘れてた。」

そして奪われたスパッツ。今スパッツはネプテューヌの手中に。

怒りの赤、奪われたスパッツ！！（後書き）

次回は下界に落ちたスパッツ視点でお送りします。

堕ちたスパッツ、突き刺さる紫（前書き）

落ちたスパッツ視点もとい突き刺さったネプテューヌ視点です。

墮ちたスパッツ、突き刺さる紫

ネプテューヌ side

どうしてこうなってしまったのか……。

私の愛するあの人が私の前に立ちはだかる鬨いたくない貴方とはお願い、私を傷つけないで私をそんな目で見ないで私はただ、欲しいだけ。欲しかったただけなの。私は貴方の……………。

ああああああ！！

「はっ！？」

私は夢から目を覚ます。何か嫌な夢を見ていたような気がする。ただそれが何かは思い出すことはできないのだが。

「私はいたい……。駄目だ思い出せないや。」

自分のことが思い出せない。思い出そうとしても頭に霞がかかったように思い出すことができない。

「……は。」

今の自分の現状を確認するために周りを見渡して見る。

レースのカーテン。ピンク色の壁紙など女の子の部屋なのは明らかである。だがやはり覚えがない。ただわすれているだけかもしれない。

いが。そんなことを考えていると、扉が開き女の子が入って来る。
「目覚めたですか？」

「うん。でもなんか嫌な夢見たせいで目覚めは最悪かな。えっと
……………」

「あつ、私の名前はコンパっています。」

「コンパだね。私はネプテューヌ。ねぶたん、ねぶちゃん、ねぶぴ
よん好きに呼んでね。」

目の前の少女コンパは少し考えるように頭を捻ると

「じゃあ、ねぶねぶついていきます。ところでねぶねぶはなんであ
んなところに突き刺さってたんですか？」

「ん？突き刺さってたの私。」

「覚えてないんですか！？頭から地面に突き刺さってましたよ。」

「ごめんコンパ。私名前以外は何も覚えてないの。」

記憶がないことをコンパに説明する。

「記憶喪失ですか。だとすると地面に突き刺さった時のショックで
……………」

コンパが思考の渦に入った為に手持ちぶさたになったネプテューヌ
はコンパを観察して見る。無論失礼などという気持ちなど一切なく
その内で最終的にネプテューヌの視線が辿りついたのはコンパの胸
だった。

そんな露骨な視線に女の子であるコンパが気づかないわけがない。

「ね、ねぶねぶどうしたんですか？」

自分の身体を抱きしめ胸を隠すコンパ。

「うーん、なんかコンパのおっぱいを見ると嫌な感じがするんだよねえ。コンパって妄想する？」

「も、妄想ですか？余りしないですよ。」

「うーん、なんか引つかかるんだよねえ。」

「何か記憶の手掛かりになるかもしれませんよ。ねぶねぶ他に何かありませんか？」

「そう言われても簡単にはねえ。ん？」

何かが懐の中にあるのに気づき引つ張り出すネプテューヌ。出てきたのは……………。

「「スパッツ？」」

そうネプテューヌの兄ユウのスパッツであった。だがネプテューヌはそんなことは知らない。

「んー私のかなあ。それにしても大きいなー。」

スパッツを掲げしてみるネプテューヌ。

「それ以前にそのスパッツ男ものですよ。ってねぶねぶ何してるんですか！？」

コンパが驚くのも頷ける。ネプテューヌはおもむろにそのスパッツに顔を埋めて匂いを嗅ぎ始めた。

「スーハー スーハー。」

コンパの声すら聞こえていないのかニヤニヤしながら嗅ぎ続けるネプテューヌ。痺れを切らしたコンパがスパッツを奪いとるまでそれは続いた。

「ねぶねぶ女の子があんなはしたないことしたらいけないですよ。」

「ううー。だってなんかあのスパッツ凄い良い匂いがしたんだもん。コンパも嗅いでみたら？」

「嗅ぎません！えへん、ところでなにか思い出しませんでしたか。」

「……………このスパッツで。」

「うーん、良い匂いがするのとなんだか懐かしい感じがするんだよね。」

ネプテューヌは何か大切な物を見るような目でスパッツを見る。

そしてそんなネプテューヌを見てドン引きするコンパ。

なんとも対照的な二人である。

おもむろにコンパの手からスパッツを奪いとるネプテューヌ。そのまま立ち上がりスパッツに足を通す。

コンパはただただ啞然としてネプテューヌの行動を見つめる。

「んー。やっぱり少し大きいかなっ！？おおー。」

何故かネプテューヌには大きはずのスパッツが何故かぴったりフィ

ットする。

「凄いよ、このスパッツ!! ねえねえコンパ見てよぴったりだよー。」

コンパにスパッツを見せつけるネプテューヌ。くるくる回ってみたいジャンプしてみたりと人の部屋だということを忘れてしまっている。

そんなネプテューヌを見てコンパは……………。

（私がしっかりしなきゃです。）

決意をしていたようです。

ところ変わって場所はダンジョン。コンパが事前に調べた初級者向けの物。

コンパはさっきのスパッツの件よりも混乱していた。

「ふっ、他愛もないわね。」

ネプテューヌの姿が変わりダンジョンのボスキャラを圧倒しているのである。

「ねぶねぶその姿は?」

「さあ、私にも分からないわ。ただ言える事があるとすれば……………」

「あるとすれば？」

「おっぱいが大きくなっているってことよー!!」

胸をはって自信満々に言うネプテューヌ。

それを見てコンパは（やっぱり私がしっかりしなきゃです。）

改めて決意をしていたようです。

その後ボスキャラを倒した後ボスキャラが落としたアイテム　それが彼女達の未来を変える。

『ネプテューヌさんはじめまして。私はイストワール。貴女にたのみたい事があります。私は今悪い奴に捕まっているので助けて下さい。四つの大陸のそれぞれに私を助ける事が出来るアイテムの欠片があります。欠片は強いモンスターが持っています。ですからなんとかして下さい。』

この声（何故か棒読み）を聞いたネプテューヌは大陸を越えた冒険をすることになる。

それを聞いたネプテューヌはコンパに説明する。

「といわけなのよコンパ。」

「幻聴じゃないですか？」

冒険はまだ始まったばかりである。

堕ちたスパッツ、突き刺さる紫（後書き）

ネプテューヌのせいでコンパがしつかりとした常識人になってしま
いそう。次回からはユウ視点に戻ります。それと感想をくれた方々
本当にありがとうございます。次が投稿早く出来るようにがんばり
ます。

邂逅のI・F・(前書き)

ユウがデレます。そしてあの娘と出会います。

主人公は男の娘であると言つことを前提に見てくださいね。

邂逅のI・F・

C o u n c i l

妹達を下界に落として数日。妹達の様子はいつでも確認できるよう
にしている。そんな時ひとつの問題が発生したネプテューヌの記
憶喪失である。

「記憶喪失か。衝撃与えすぎたかな。」

「いえ、もっと消え去るぐらいは殺るべきだったと私は思いますが
(。ー。)」

いつの間にか現れたイストワールが話しかけてくる。

「消え去るぐらいって……。お前なんか怖いぞ。」

一瞬ヒヤツとした。

「もー。女の子にそんなこと言ったらだめなんですよ。」

プリプリ怒りながら俺の頭の上に小さい状態で座るイストワール。

「ところでネプテューヌさんの件私に任せてくれませんか？」うつ
て変わって真面目な声で話しかけてるイストワール。

「ん？何をするつもりだ。」

少し心配でもある。こいつは俺を一番で考えて他の事をおろそかに

しがちなところがあるから。

「別に危ない事をさせるつもりはありません。ただ四つの大陸を冒険してもらっただけですよ。」

「な！？それは危険だろう！！」

「何を言ってるんですか？ネプテューヌさんならそこら辺のモンスター相手には負けませんよ。」

イストワールが落ち着いて下さいと促してくる。だがお前は大事な事を忘れてるぞ。

「確かにモンスター相手ならね。だけど女神どうしでぶつかるとしたら危険すぎるだろう。ああ、みんなが怪我したらどうしよう。やっぱり連れ戻すべきかな。」

イストワールはなぜか「たまりませんねえ。」とかいいながら頭から降りて身体を大きくして椅子に座っていた俺の膝の上に向かいあう様に座る。そして俺は抱き締められる。さらには頭を撫でられる。

「なんだかんだ言いながら貴方もブラコンなんですネ。」

「な！？そんなんじゃない。ただ俺はあいつらが下界の人達に迷惑をかけないかどうか心配なだけでだな！！」

イストワールは抱きしめる力を更に強くする。

「そんな泣きそうな顔してたら説得力ないですよ。」

泣きそうな顔してたのか。

「心配って言ったら心配だよ。あいつらにお仕置きしたのだって少し反省してるしね。乱暴だったてね。」

イストワールを抱きしめ返してそう話す

「はう。そうですか。でも後悔はしてないんですか？」

顔を赤くしながらも聞き返してくるイストワール。

「うん。だってあいつらのことを思ってたことだからね。」

「そうですね。だったら尚更ネプテューヌさんいえ下界に降りた四人のことは私に任せてくれませんか？」

「んー。少し心配だけどイストワールがそこまで言うなら頼むよ。無論報告は定期的にしてね。」

「はい、勿論です。でもなんか貴方らしくありませんね。そんなに弱々しいとおそっちゃいますよー（＾．＾）」

俺の背中をわさわたとさわりながらニヤニヤと耳元で話しかけるイストワール。

「良いよ。」

「え？（。―。）」

「イストワールになら。」

イストワール side

今この人はなんて言った！？私の間違えでなければ襲って良いとにやんにやんしても良いとそう言いましたよね！！

「い、いいんですか？」

ごくりと唾を飲み込み目の前の最高のご馳走を見つめる。

「良いよイストワールになら。でも……………」

「でも？」

ここにきてやっぱり生理的に無理なんて止めて下さいね。そんなことになったら私立ち直れませんから。だがそれは私の予想を遥かに上回ったでもだった。

「でもそついう事初めてだからどうすればいいかわかんないよ。」

なにこの可愛い生き物？

「大丈夫です！！私の持ち得る全ての知識を持って貴方を快樂のド
ン底に叩きおとしますから。」

「????」

はっ！？いけませんここで下手な事を言ったら取り返しの付かないことに！？」

「では目をつぶって下さいね。」

「う、うん。」

目をつぶるユウ僅かに赤らんでいる頬。私の理性が決壊するのは早かった。

「ではいただきます。」

私は一旦距離を取り助走を付けてユウに飛びかかりました。

そして私は頭を殴打して気を失いました。

ユウside

「では目をつぶって下さいね。」

「うん。」

イストワールの指示通りに目を瞑ると頭の中に誰かの声が響いてくる。

『助けて。』

その声に俺は立ち上がり転移魔法を発動させすぐさま声が聞こえてきた場所に向かう。途中ゴーンと音が聞こえた気がしたが気にしなかった。

アイエフside

私は今窮地にたたされていた。簡単なクエストのはずだったのだがクエスト情報にはなかった大型のモンスター。わたしの好きなRPGで言うならばキガントモンスターというのだろうか。今そのギガントモンスターが私の前にいるのである。

「いくら何でもこれはまずいわね。」

リーンボックス私が信仰している女神様グリーンハート様が守護する大陸。今回はそのリーンボックスのグリーンハート様からの依頼だった。無論グリーンハート様本人にあったわけではない。協会のうさんくさい教院長から頼まれたのである。

『グヴオー!!』

「考えている時間はないか。なんとか隙を見て逃げ出さないとね。」
だが逃げださず事など出来るのだろうか。そんなことにお構い無しにモンスターはその巨大な腕を振り降ろしてくる。

「くっ!? 冗談でしょう腕振り降ろしただけでクレーター出来てるわよ。」

などと驚いていたせいかもしれない、モンスターの剣状の尻尾からの不意打ちに気付く事に遅れてしまった。

「しまった!？」

こんなところで終わるなんて思いながらも、心の中で女神様に助けを求める。

（やっぱり女神様が私なんかの為に来てくれるわけないわよね。もう少しだけ色々して見たかったわね。）

諦めて私は目をつぶる。

おかしい。衝撃が痛みがいつまでたっても襲ってこない。不思議に思っただけ私は目を開ける。

そこにいたのは銀色に輝くとても綺麗な人いや、

「……………女神様。」

ユウ side

声が聞こえた場所に駆けつけると女の子が特大モンスターに襲われていた。名前をつけるとするならイアンコック。

すぐさま俺はモンスターの前に立ち攻撃を菊薔紋字で受け止める。

「……………女神様。」

ああ、またそれか。 そんなつぶやきを聞きつつモンスターに向けて菊雫紋字を一閃する。そして胴体を真つ二つにする。

「凄………」

その声に振り向くと先ほどの少女が呆然といった表情で俺を見ていた。

「大丈夫だった？」

今できる最大現の笑顔で話しかける。

「は、はい。女神様のおかげでなんともありません。」

顔を赤くして少し緊張しているようである。ふと彼女の服の袖に血が滲んでいるのを見つける。

「ちょっとみせて。」

「は、はい。」

見てみると少し手の甲が切れていた。
すぐさま癒しの魔法をかける。

「癒しよ。うん、これで大丈夫。後はこれをまいてっと。よし。」

癒しの魔法をかけた後状態異常をなくすスカーフをての甲にまく。

「傷が！？あ、ありがとうございます。ところでこれは？」

「それは守りのスカーフ。どんな毒も痺れもそれがあれば守ってくれるよ。」

それを聞いて驚く少女。

「そ、そんな凄いもの貰えませんよ。」

「気にしないで良いよ。俺ももう一枚持っているから。」

ヒラヒラとスカーフを見せる。と余り長くいるとベールに気付かれるからそろそろ退散するかな。

「というわけで俺はそろそろ帰るね。あとこの辺のモンスターは――掃してあるから帰りは安全だからね。」

俺は飛び立とうとする。そこに少女が声をかける。

「あの貴方の名前を教えてください。貴方を名前で呼びたいから。」

「シルバーハートそれが今の俺の名前。君の名前は？」

「あ、アイエフです。シルバーハート様。」

「アイエフさんだね。また会えるといいね。では失礼するよ。」

そう言っただけ俺は転移魔法を発動して天界に戻った。

アイエフ side

あのあと私はダンジョンを抜けてリーンボックスの町に戻った。

戻ってすぐにとまっていた宿屋に戻り携帯電話のインターネットでシルバーハート様についてくぐってみた。

それでわかったこと。

ひとつ、シルバーハート様は余り人前には出ないため余り知られて

いない。だが何度が目撃されている。

二つ、その割には根強い人気がある。

そして三つ、男の娘である。

「まあ、ネットで調べられるのはこんなことぐらいかしらね。」

私は携帯をしまつとひとつの決心をする。それは……………

「シルバーハート様を信仰する！！そうと決まったらまずは仲間を集めないとね。ふふっ、待っていてくださいねシルバーハート様。きつと貴方を最高の女神様にして見せます。」

少女は決意したようである。

そんな少女に信仰されたシルバーハートは……………。

「ご、ごめんイストワール。お願いだから泣き止んで。」

「私なんて私なんて死んだ方がいいんですー！！うわぁーん。」

慰めていたそうだ。

邂逅のI・F・（後書き）

トマト畑「ニヤニヤ。」

ユウ「なに感想みてニヤニヤしてんのトマト？」

トマト畑「いやあ感想もらえると嬉しくて。」

ユウ「まあ、ありがたいけどニヤニヤするのは気持ち悪い。」

トマト畑「うっ。でも今回のイストワールとお前のほどではないぞ。」

ユウ「……………／／／。次回はスパッツもといネプテューヌとアイエフの出会い。上手くいけば黒い妹との再会までいきたいと思います。では失礼します。次回また会いましょう。」

トマト畑「トマトのセリフがー！！」

新たな仲間LEDそして黒き妹。（前書き）

前回登場したアイエフが登場。やはりキャラ決壊ぎみです。
ちなみにネプテューヌいやもうスパッツでいいや。今回はスパッツ
視点です。

新たな仲間LEDそして黒き妹。

ネプテューヌside

プラネテューヌで鍵の欠片なるアイテムを手に入れたネプテューヌ。次なる大陸ラステーションを目指して大陸間をつなぐダンジョンを進んでいた。

「なーんだこのモンスター結構弱いね。これなら次の大陸なんてすぐについちゃうよ。」

「ダメですよね。ぶねぶ油断してたら足元すくわれるです。」

「大丈夫だつて。もうコンパは心配症なんだから。それに私にはこのスパッツがついてるから。」

スカートをまくりあげ履いているスパッツをまるでいとおしいもののように見つめるネプテューヌ。

そんなネプテューヌを見てコンパはやはりドン引きしていたようです。

そんな時

「？ねえコンパ。あそこからなんか近づいてくるよ。ほら光ってる。」

そう言われてネプテューヌが指差した方向を見るコンパ。

「ほんとですう！？何かが物凄い勢いで近づいて来ます。キヤー凄

「い光ってます!?!」

その光は物凄い勢いでネプテューヌとコンパ達のところに近づいてくる。

「ま、まさか宇宙人!?! 私たち食べられちゃうの!?! スパッツ助けて!?!」

なぜかスパッツに助けを求めるネプテューヌ。

「そんなの嫌です。食べるならねぶねぶにしてください。ねぶねぶは男物のスパッツはいて喜ぶような変態さんですから。」

泣き叫ぶコンパ。何気にキツイ。

そんなことはお構いなしに光はネプテューヌ達の目の前まで来て停止する。

「まぶしいー!?!」

光の光量は凄まじく容赦なくネプテューヌとコンパの目を焼き切るかのようだ。

「ギャー目がー!?!」

某大佐も驚く位の絶叫である。

その時……………。

「何よ失礼ね。ひとの顔を見た瞬間悲鳴をあげるなんて。」

謎の光が言葉を発した。

だが……………。

「「キヤー!？」」

二人はあまりの眩しさに声を聞き取れていなかった。

「ああ、LED消してなかったっけ。ごめんなさい今消すから。」

光が消えるそしてそこに現れたのは……………。

「うわっ、なんか変な女の子が現れたよコンパー!!」

「ねぶねぶいきなり何言って…………変な人がいますぅ。」

身体全体を隠すようなコートを羽織った少女アイエフだった。ただその恰好がおかしかった。なぜか服装が全て銀色で統一されていた。そこはまだ良い。更に彼女をおかしくしているのは身体全体に付いているLEDライトであった。

そんなLEDアイエフが二人に話しかける。

「ここは貴方達みたいなふざけた娘がくる場所じゃないわ。すぐに帰りなさい。」

アナタにだけは言われたくはない。そう思うコンパとネプテューヌ。

ネプテューヌとコンパ、アイエフに事情説明中。

「四つの大陸にある鍵の欠片というアイテムを集めてイースンなる人物を救うね。……………いいわ、わたしも手伝ってあげる。」

「「いえ、結構です。」」

二人の意見がまた一致する

「さてとついたわねラステーション。」

結局二人についてきたLEDアイエフ。

「私がしっかりしなきゃですしっかりしなきゃです。」

がんばれコンパ。負けるなコンパ！

「ねえアイちゃん。なんでアイちゃんは身体にライトをいっぱい付けてるの？」

みんなの疑問を代弁するネプテューヌ。

「ああ、これ？」

そう言いながらまたもやLEDをつけるアイエフ。

「「つけなくていいから（です）ー！！」」

やっぱりLEDは眩しかった。

「ごめんごめん。これはね私の憧れの人に近づく為なのよ。」

「その人もライト付けてたんですか？」

コンパの問いに苦笑しつつ首をふるアイエフ。

「違うわ。その人はね輝いてたのとても綺麗に。とても強く、とても優しくね。私はあの人みたいに輝きたい。そう思ってこのLED

を付けてみたんだけどまだまだみたいね。」

いや、もう十分輝いてるよ。ネプテューヌとコンパはまたもや意見が一致する。

「ねえコンパ今日の宿を探しに行こう。」

「そうですね。暗くなる前に探しておきましょうか。」

そして話しを続けるアイエフを置いて走り出す二人。

「私とあの人の出会いは、ってどこにいくのよあんた達こらー待ちなさい!!」

走り出した二人に気づき追いかけるアイエフ。LEDの重装備にもかかわらず凄いスピードである。

「コンパもっと早く走って!!」

「む、無茶言わないでほしいです。」

二人とも全力で走っているにもかかわらずじわじわとアイエフに距離を詰められる。

「逃げるなあー!!これでもくらいなさい。LEDフラッシュ!!」

「「ギャー!!」」

LEDの圧倒的な光量に悶絶する二人……………いやその他大勢。

「あ、やばっ!?!これって街中じゃご法度だった。」

この事はラスティションの七不思議のひとつとして語り継がれるのであった。

ノワール side

ところ変わってラステーションの協会。ここにはネプテューヌと同様にユウによって落とされた妹の一人ノワールがいた。

「謎の発光事件？」

「はい、原因はまだ分かっておらず現在調査中です。」

今ノワールは協会の教員から定時報告をうけていた。

「わかったわ。調査が終わり次第報告をちょうだいね。」

そう言ってノワールは立ち上がる。

「どちらに？」

「部屋に戻るわ。何か急ぎの様以外は呼びたさないでちょうだい。」

「わかりました。」

ノワールは部屋に戻る。

「ふう。この部屋は落ち着くわね。まるでお兄様に包まれているみたい。」

ノワールはベッドに横になり部屋を渡す。その部屋はまるで異質だった。壁一面にユウの写真がところ狭しと張り巡らされている。

「お兄様。」

つぶやきと共にノワールは抱き枕を抱きしめる。その抱き枕にはユウが印刷されている。裏には女神化したユウが印刷されているという丁寧さ。抱きしめるのに満足したのかベッドから立ち上がりまるで恋する乙女のような表情で部屋を見渡す。

だがとある写真が目にとまった瞬間ノワールの顔から表情が消える。その写真にはノワールの大好きなお兄様とノワール自身、そしてネプテューヌが写っていた。

「ネプテューヌ貴女のせいでお兄様と離ればなれに!!」

ノワールは自分の武器であるレイピアを壁の写真に向かって投げつける。レイピアは写真のネプテューヌを見事に突き刺していた。

「はあはあ。まあ、いいわ。いずれ他の娘達ともケリをつける。ネプテューヌともその時に……………」

呼吸を落ち着かせた後ノワールは依頼クエストの一覧に目を通す。

「こういう時は気分転換にクエストでも受けるとしようかしら。」

しばらく一覧に目を通すノワール。

「これなんか良いかしら?」

ノワールの目にとまったのはダンジョンに迷いこんだ子供の救出。

偶然いやもしかしたらイストワールの仕業かもしれないがちょうどその時……………。

「ねえねえコンパ、アイちゃんこれなんて良くない？迷子の子供の救出だつて。」

ネプテューヌ達もそのクエストを選んでいた。

新たな仲間LEDそして黒き妹。（後書き）

トマト畑「一応次回までネプテューヌ視点の予定です。」

ユウ「俺の出番がない……………」

トマト畑「次回が終わればユウ視点だからね。」

ユウ「がんばります。」

黒との対決 LEDの光（前書き）

LED無双！！女神二人がついに対決します。書き終わった後見直して見て思いました。

ひとつ、なんてカオス

ふたつ、雑。

そしてみつつ、短い。

黒との対決 LEDの光

ノワール side

クエストは比較的簡単にすんだ。女の子をモンスターから助け出して親のもとへと届けた。それで終わりのはずだった。助け出した女の子とその兄の心配し、慰め、喜び合う。その一連の行動を見た時自分の兄である愛しいあの人のことを思い出した。

「……………お兄様。」

少女を家族に預けた後先ほどのダンジョンに戻って来ていた。

「くっ、あれもこれも全てネプテューヌのせいよ！！本当だったら今ごろ天界でお兄様とコスプレ三昧だったのに！！」

ふとノワールの手がいや、身体全体が震えだす。

「まずっ！？こんなところで禁断症状が！？」

ノワールは懷に手を入れるとハンドタオルを取り出し、なぜか匂いを嗅ぎ始めた。

「スーハー、スーハー。」

禁断症状よく聞くのは麻薬、お酒なんかが有名であるがノワールは兄であるユウの禁断症状。定期的に兄であるユウより愛を補給しないと危険な状況に陥るのである。

「今は何とかコレクションのお兄様の下着やタオルなんかで持ちこたえているけどこのままじゃあ危ないわね。ああもうこれも全部ネプテューヌのせいよ!」

手近にあった岩を剣で叩き割る。

ドゴン。そんな音と共に岩は砕ける。そんな時だった……………。

ピカー!!

「「ギヤー!?!」」

謎の発光現象がダンジョン内で発生した。それと共に人の悲鳴が聞こえた。

ノワールの頭のなかで教員より報告があった発光事件が思い出される。

「新種の魔物っていう線もあるわね。それにさっきの悲鳴きになるわね。行ってみるしかないわね。たしか光ってた場所があっただったわね。」

ノワール移動中……………。

「確かここら辺だったわね。ってまぶしい!?!」

またもや起こる発光現象。

「イヤー!! アイちゃん待って、目がつぶれてしまっわ!」

「アイちゃんLEDはしばらく使用禁止って言ったばかりですう!?!」

「あれって街の中だけじゃないの？」

誰かの話し声が聞こえる。っていうかこの迷惑きわまりない光は人が起こしているものなの！？信じられないわ。ちよつと注意しなきゃ気がすまないわ。

「ちよつと貴女達いくらダンジョンだからって人の迷惑も考えなさい。」

私は光を発している三人に注意する。

「ごめんなさいです。すぐに止めるので待ってくださいですー！」

「アイちゃん早くLEDを止めて！！周りの迷惑よ！！」

「仕方ないわねえ。」

光が収まる。

「ごめんなさい。」

私の前には丁寧に頭を下げる女の子とネプテューヌ。そして発光現象のおおもとである目がチカチカしそうな恰好の可笑しな少女。ん？ネプテューヌ！？

「ネプテューヌ又貴女なんでここに！？」

するとネプテューヌは不思議そうに首を傾げる。

「私たちって知り合いだったかしら？」

その言葉に私は怒りを覚える。

「ふざけないで忘れたなんて言わせないわ！！貴女のせいで私は愛しのあの人と引き離されたんだから！！」

この時三人に電流が走る。

「ねぶねぶなんて酷い事を！？ねぶねぶはただの変態さんなだけじゃなくて悪人さんだったですねー！！」

「昼メロ的展開ね。ねぶ子あんたの立場は悪女ね！！」

「ちょ、ちょっと待ってコンパ、アイちゃん少しぐらい彼女の言葉を疑いなさい！！」

私の言葉に仲間割れしだす三人。団結力皆無である。

「ねぶねぶならあり得るです！！」

「あんた何か人の運命とか簡単に操れそうだもんね。」

俄然団結力を失っていくパーティー。

「コンパ私を信じて！！後アイちゃんはもう黙っていて。」
あんた達本当にパーティーなの？

必死に二人を説得するネプテユース。
それを見ながら私は小さく呟く。

「貴女が私の愛しいあの人のスパッツを奪ったからこんなことに……。」

小声で言ったはずなのに何故か、かなりの反応するネプテューヌ。

「私の事なんてどうでもいいわ。それより貴女スパッツのことを知
っているの!？」

「ねぶねぶ自分の罪と向き合ってくださいです。スパッツに逃げな
いください。」

「光が足りないわ……………。こんな事ではあの人には近づけないわ
……………」

あの銀色またライト付けそうよ。だがそんなことは気にしないでネ
プテューヌは剣を目の前に突き出して構えをとる。

「答えなさい!!このスパッツの事何を知っているの!!」
真剣な雰囲気なのだが……………。

そんななか私は先ほどからの疑問をネプテューヌにぶつける。

「疑問を疑問で返す様で悪いけど、そういえば貴女プロセスサユニ
ットがレオタードタイプからあの人と同じスパッツタイプに変わっ
ているけど。まさか履いたの!？」

「ええ。」

さも当然の様に胸をはって頷くネプテューヌ。
なんて……………なんて羨ましい!!

「肌触りは!!」

「最高よ!!」

「匂いは!!」

」

「嗅いだわ!! 良い匂いよ!!」

「サイズは!!」

「ジャストフィットよ!!」

もはや語ることはいわね……………。

「行くわよネプテューヌ!! 貴女を倒してスパッツは頂くわ!!」

「かかって来なさい。だけど私は負けないわ!!」

そして私たちは斬り結ぶ。

「「スパッツー!!」」

その時コンパ、アイエフは……………。

「また変態さんが増えたです」。

「やっぱり髪も銀色に染めるべきかしら。」

かたや絶望。かたや意味不明であった。

そんななか二人の闘いは決着を見せようとしていた。ネプテューヌの疲労が半端ないのである。主にLEDのせい……………。

「どうしたのネプテューヌ動きがダンチよ!!」

「くっ、このままじゃ確実に負ける!？」

苦々しい顔をするネプテューヌ。

「大人しくスパッツを渡せば見逃してあげるけど？」

「っ!？誰が!!」

剣でノワールを薙ぎ払おうとするがバックステップで避けられる。

「ねぶねぶ年貢の納めどきですうー!!」

「コンパ!？私達パーティーよね!？助けてちょうだい!？」

まさかの裏切りのコンパ。

それを見てたいそう笑うノワール。

「ついにはパーティーにすら見捨てられるなんてね不様ねネプテューヌ!!」

「くっ!？」

コンパにすら見捨てられたネプテューヌだが……………。

「やっぱりカラーコンタクトにするべきかしら、ん？何よねぶ子ピョンチじゃない。ここは私に任せなさい。」

「「「え？」」」

思考の渦に入っていたアイエフは今までの流れを知るわけもない。
故に……………」。

「LEDエネルギーチャージ！」

身体中のLEDに光が溜まりエネルギーが収束する。

「エネルギーチャージ80%！！よし行くわよー！！」

爆発的な量の光がLEDに充填される。

「カウント開始！！0、発射ー！！」

「「「それカウントの意味がギャー！？」」」

その瞬間爆発的な光がダンジョン内に放たれる。
そこで何があつたのかを知るものはいない。ただ……………」。

「女神が負けるなんて……………」。

「回復アイテムキボンヌ……………」。

「こんなの嫌です」。

誰かの戦闘不能の声と……………」。

「やった レベルが上がった。」

レベルアップの音が聞こえたそう。

ユウside

「ラステーションで謎の高エネルギー反応!？」

「今至急調べています。」

「ノワール何もなければいいが……………」

（私としては消滅してくれることを祈ります。）

LEDの光は天界でも観測されていたそう。

黒との対決 LEDの光（後書き）

何となくつくってみたレベル表。

ユウ レベル999

ある意味振りきっています。

イストワール レベル99

ただし戦闘には参加出来ない。

ネプテューヌ レベル25

ノワール レベル30

コンパ レベル22

アイエフ レベル74（LEDをところ構わず発光させる為）

優しさの緑 ギルドSSH登場（前書き）

・注意事項

小説内で出てくるMMBマークIIとはマルチプルメがビームランチャーマークIIの略称です。

今回は新キャラが二人です。 いったいだれがでるんです？

後この小説はやっぱりカオスなのです。

後今回はスパッツ視点ではないです。
ではどうぞです。

優しさの緑 ギルドSSH登場

ユウside

今俺の状況を一言で言うならば寒い。

現在俺はルウィーにて絶賛遭難中。今回はこっそりルウィーを視察だけしてすぐに帰るつもりだったのだが雪山の魅力に負けてしまった。結果スノーマンを68体もつくってしまった。

後にこのスノーマンがルウィー七不思議 になることをユウは知らない。

「しかしながら一面見渡す限り真っ白今日の夜はお鍋に決定します。

」

転移魔法使う気力も魔力もないや。

「さてとどうしたものか？かまくらでも作るかな。」

そんな事を考えていると……………。

『キヤー！？』

何処からともなく女性の悲鳴が聞こえてきた。

「かまくらは後まわしかな。」

俺は悲鳴が聞こえてきた方向に走り出す。

ユウ移動中……………。

「ここら辺かな？おっとこれはまたいつぱいいるな一気に決めるかな。」

女神化して一気に大量のモンスターを倒そうとするが魔物に囲まれている金髪の少女を発見する。

「下手に大技使えば彼女を巻き添えにしてしまう。まずは彼女を救うのが先決かな。」

俺は菊薔紋字と零刹那を鞘から引き抜き走り出す。

「はあああああ！！」

モンスターに視認出来ないスピードで走り出す。そしてすれ違い様にモンスターを連続で斬りつける。一気に金髪の少女のもとに辿り着く。少女はいきなり現れた俺に驚く。まあ、当たり前か。

「大丈夫？立てますか？」

彼女に手をかし、立ち上がらせる。

「は、はい。ってあなたはまさか！？」

何故か少女は俺を見て何故かまたもや驚く。

「ん？ってまだこれ程の数のモンスターが！？君絶対俺の後ろから出ないでね！」

モンスターの数が更に増加する。致し方ない。女神化するしかないか。

「変身!!」

『SETUP』

俺の身体にプロセッサユニットが装着され女神シルバーハートへと姿を変える。

「プロセッサユニット装着完了!女神シルバーハート爆誕!!」

決めゼリフを言って腰に装着しているプロセッサユニットからMMBマークIIを取り出し連射する。

「ああ、やっぱりシルバーハート様……。生で変身シーンを見れるなんて。」

ん?俺の事を知っているのか?って今は目の前の敵に集中しなくては。MMBマークIIを連射し続ける。

「射つべし、射つべし!!」

だがいくら射つても全然敵は減らない。

「くっ!!?何処から沸いてくるんだ子のままではじり貧だな。仕方ないあれ行ってみますか。」

「あれ?」

少女にも聞こえていたみたいである。

「君、俺今から少しおかしい事になるけどびっくりしないだね。」

「えっと……。は、はい。」

少女の返答を聞くと俺はMMBマークIIの連射をとめる。

「さてと行ってみますか!!変身!!」

俺の掛け声と共にプロセスサユニットが解除されていく。残ったのは足の部分とスパッツスーツのみ。だがそれだけで終わりではなく残ったプロセスサユニットの色が緑色に変わって行く。そしてまいいには瞳の色まで緑へと変わる。

「うおおおおおおおお!!」

俺は咆哮をあげる。

「優しさの緑、シルバーハート・グリーンモード。」

「凄い新しい変身グリーンモード!」

以前の怒りの赤と同様に感情の変化によってプロセスサユニットが変化する。

この優しさの緑はスピードに特化したタイプである。だがそれだけではないこの姿の真骨頂は……………。

「行くぞ!」

「えっ、うそ!?シルバーハート様がいつぱい!」

そう質量を持った分身を作り出すこと。一人で大多数を相手にする際なんかにしようする。説明もそこに俺は全てのモンスターを全滅させる。

「……一人ぐらいほしいなあ。」

そんな少女の独り言はさておき、俺は分身を消して女神化を解く。

フウ。と溜め息をつき金髪の少女に話しかける。

「大丈夫？怪我はない？」

「は、はい！シルバーハート様のおかげで傷ひとつありません。」

元気な娘だなあ。

「ところで悪いんだけど……………」

「はい、なんででしょうか？」

「街中までの道を教えてほしいんだけど大丈夫？」

「……………えっ？」

ユウと少女移動中。

金髪の少女名前をフィナンシェと言うそうなのだが、フィナンシェの道案内のおかげでルウィーの街に帰って来る事ができた。

「いや、本当にありがとうフィナンシェ一時はかまくらで一夜を過ごすところだったよ。」

「い、いえ礼には及びません。こちらは命を助けてもらっただけですから。」

「本当にありがとうフィナンシェでは俺は行くよ。あまりこの大陸にとどまっていると甘えん坊の妹に気づかれるから。」

俺は踵を返して帰ろうするだが……………。

「待ってください!!」

フィナンシェに腕を掴まれ引き留められる。

「ん?どうかした?」

「あの一緒に来てほしいところがあるんです。」

来てほしいところ? なにやらフィナンシェも真面目な顔をして真剣である。

「何処にいけばいいの?」

「よ、よろしいんですか!?」

一気にフィナンシェの顔が笑顔になる。

「構わないよ。可愛い女の子の頼みならね。」

などとおちゃらけて見る。

フィナンシェは顔を赤くしながらも俺に行ってほしい場所を言う。

「ルウィーに存在するギルドと一緒に来てほしいんです。」

・ギルド

その大陸に生まれながらもその大陸の女神様を信仰せず別大陸の女神様を信仰する人々が集まった集団それがギルド。このルウィー

ーにはそのギルドの拠点があると言われていたがまさかそのギルドに実際に来る事になるとはな。

ギルドは地下にあり、いまはそのギルドの拠点の扉の前にフィナンシエと一緒に立っていた。

「ここからギルドの内部へと入れます。まあただの扉なんですけどね。ちょっと待ってくださいね。」

フィナンシエは扉にノックを二回する。すると……………。

「合言葉を言うのです。」

中から声が聞こえてきた。合言葉？

「シルバーハート様は最高です！！」

「よろしいですの。入っていいですの。」

何その合言葉！？

俺はひきつった笑みを浮かべる。

「ちょっと待っていてください。」

フィナンシエは扉の中に入ると中にいる誰かと話す。

「フィナンシエ今日は定時報告の日じゃないですの。」

「ええ、ですけど素敵な方をここに招待したの。きっと貴女も気に入ってくれると思うわ。」

「いったい誰を連れて来たのです？」

「今呼びますからちよつと待ってください。どうぞお入りください。」

「フィナンシェより呼びがかかる。」

「わかつた、入るよ。」

俺はギルド内部へと入る。中を見ると啞然とした。まるでギルド内部はロボットなんかを開発している様な秘密基地だった。ギルドにこのような設備があるとはね……………。

等と考えているとガチャンという何かが落ちる音が聞こえ何かが足元に転がって来る。

「これは薬草？」

転がって来たすり鉢の中身には薬草を練っている途中のものだった。転がって来た方を見るとにつこりと良い笑顔のフィナンシェ。そして目に涙を溜めた特徴的な帽子を被った少女ガストがいた。

「グスン、今まで何処にいたのです。ガストは貴方に会いたくて会いたくて仕方がなかつたのです。」

「久しぶりだねガスト。」

「答えになってないですの。うぐつ。」

俺は今にも泣いてしまいそうなガストを優しく抱きしめる。

「うぐつ、また会えて、嬉しいですのシルバーハート様。うつつ、
うわあああああああん。」

「俺も会えて嬉しいよガスト。」

「へえ。ガストさんはシルバーハート様と一緒に旅をしていたんですか。」

「そうです。シルバーハート様はガストがついていないと危なかしくて大変でしたの。」

ガストとはフィナンシェ同様にモンスターから助け出したことがきっかけで知り合った。旅をしていたといっても二、三日だけであるが……。怪我をしていた為に近場にあつた薬草を調査して手当てをした。回復魔法をかけたらよかったのでは？と思うかもしれないがその時は薬草なんかを調査するのがマイブームだったもので……。その調査を見ていたガストに何故か『弟子にするのです。』と押しきられ一緒に旅をしていた。

膝の上に座っているガストの頭を撫でつつフィナンシェに質問する。

「ところでこのギルドは君たち二人だけなの？」

「いえ、本当は10人いるのですがみんなそれぞれの任務についているんです。」

「10人だけ？」

「その他の大陸にも支部があつて合計すると1000人近いかと。」

「1000人!？」

「ここは幹部会員N○・10までのみ人しかいないんですの。」
「会員？」

「フィナンシエ説明してないんですの？」

「ごめんなさい。忘れてました。」

おほん、と咳払いをしてフィナンシエは語りだす。それは耳を疑う話だった。

「このギルドの名前はSSH。正式名称は『シルバーハート様は私の嫁』というんです。」

「嘘だと言ってくれ。」

俺は頭を抱える。

「名前の通りシルバーハート様を愛し信仰するギルドです。因みに私ことフィナンシエは会員N○・8です。」

「ガストは会員N○・4ですの。」

フィナンシエが思い出したかのようにガストに尋ねる。

「ガストさんそういえば他の方々はいないんですか？いつもなら2、3人はいるはずですけど。」

ガストは首を捻ると……………。

「ガストにもあの変な人達の事は分からないわですの。会員N○・1はきつとそこら辺で歌っているんですの。」

「会員N o . 2のあの人はきつとまたどこかで光って迷惑をかけているんでしょうね。」

「あのピカピカ女はいない方が良いでしょう。会員N o . 3はきつとまた人助けでもしているのです。」

「会員N o . 5は嫁、嫁言つて布教活動でしょうか？」

「いったいこのギルドはなんなんだ!？」

しばらくフィナンシェとガストにギルドの事を聞いた(目眩がした後ギルドを後にして天界に戻った。ガストに泣きつかれたがまた来るといつておいた。逐一見に来ないとこのギルドは恐ろしい。

天界に戻るとイストワールがカードらしきものを見せて来たため見るとそこには……………。

『SSH会員N o . 6イストワール』

と書かれていた。何それ怖い。

優しさの緑 ギルドSSH登場（後書き）

またもや意味不明につくつてみたSSH会員表

会員No・1 不明

会員No・2 不明

会員No・3 不明

会員No・4 弟子のガスト

会員No・5 不明

会員No・6 デレデレイストワール

会員No・7 不明

会員No・8 まさかのフィナンシェ

会員No・9 不明

会員No・10 不明

プロトタイプとSSHの暗躍（前書き）

ここだけの話し最初ネプテューヌをプレイしたときシアンを男の子だと思っていた。ちなみに今回は短いです。ユウ視点です。

プロトタイプとSSHの暗躍

ユウside

俺は今ラステーションに謎の巨大エネルギーの調査できている。だが特に成果もなくて天界に戻ろうと思ったのだがお腹が空いたためとある食堂にお邪魔しているところである。

少し古風な感じのする食堂、その扉を開けて中に入る。

「シアンご飯食べに来たよ。」

声をかけると一人の少女が出てくる。

「シルバーハート様いつラステーションに来ていたんだよ？事前に連絡できれば迎えに行つたのに。」

そう言つて俺を見てくる赤毛の少女はシアン。以前まだノワールにラステーションの管理を任せてまもない頃に知り合った。以前このラステーションではアヴニールと言う大会社が産業の大幅を担っていた。だがアヴニールの社長であるサンジュは人間など信用出来ない、機械こそが一番など考える人間であつた。だがまだそれだけなら良いのだがこともあるうか展覧会の準備をしていたシアンを妨害しよとしてきたのだ。それを見かねた俺が身分を隠してシアンに協力して見事シアンを勝利に導いた。簡単に言えばこんなところである。後々ばれてノワールには説教をされ、シアンには驚かれた。

「ごめん、ごめん。今日はちょっとした野暮用で近くまで来てたんだ。ここにはお腹が空いたから来たわけ。」

それを聞くとシアンは溜め息をつく。

「……………それでいつもので良いのか？」

「うんうん。鯖の味噌煮定食大盛りひとつね。」

「はいはい。」

そう軽く言うシアンの顔はどことなく嬉しそうだった。

「はい。おまちとおさま。」

ユウの前に鯖の味噌煮定食が出される。

「いただきます。」

そう言っユウは食べ始める。

ユウ食事中……………。

食事も終わりお茶で一息つくユウ。

そこにシアンが話しかける。

「で今日の本当の目的は？」

お茶を飲みきりシアンの問いに答えるユウ。

「本当にサバ味噌食べに来ただけだな。」

ジト目でユウを見るシアン。

「ごめん、ごめん。だからそんな目で見ないでよ。シアンに頼んだ例のあれどうなってるのかと思ってね。」

その返答にシアンはやっぱりかという顔をする。

「一応プロトタイプは完成した。実践は可能だ。」

「さすがシアンだな。」

そのユウの言葉に顔を赤くするシアン

「……………馬鹿。でも本当に良かったのか俺にプロセッサユニットの情報を教えて。あれって女神の力の元になっているんだろ。」

「シアンだからこそだよ。一緒にがんばって来た仲だしシアンの事は信頼できるしな。」

更に顔を赤くしそっぽを向くシアン。

「ほらっ！！お前に言われ通りに作成した第二世代プロセッサユニットのプロトタイプだ。」

シアンはテーブルの上にベルト状の試作型プロセッサユニットを置く。

「デザインまで完璧に再現してあるな。早く試してみたいな。」

そう実はシアンにプロセッサユニットの作成を手伝ってもらっていたのだ。

「完成には後は実践データが必要だ。ここからはシルバーハート様の仕事だ。」

「ああ、任せてくれ。」

俺は試作型プロセッサユニットを手取る。

「さてと、プロセッサユニット渡したし、そろそろ仕事に戻るよ。」

そう言つて奥に入つて行くシアン。だがそのシアンの服のポケットからカード状の何かが落ちる。それをユウが拾いシアンに渡そうとするが、それに何故か見覚えがありついそれを見る。

それは

「SSH会員No.9シアン……………。シアンがあのギルドに!？」

俺のカードを読み上げた声にシアンはビクツと身体を震わせるといきなりユウに飛び掛かる。

「見るなー!!返せー!!」

「わ、わかった!?!わかったから首締めないで。」

シアンはユウから会員カードを取り返すとそのままユウを店の外に蹴りだす。

「でてけー!!乙女の純情をもてあそぶなー!!」

ボタン!!そんな音をたてて扉が閉められる。

「いったい俺が何をした!？」

鈍感なユウであつた。

シアン side

「まさかあのギルドに入っている事がばれるとはな。あーめちやくちや恥ずかしい!？」

シアンはひとり悶えているとポケットから音楽が流れだす。

「ん?ガストからか。はいもしもし。」

シアンはポケットから銀色の携帯電話を取り出し電話にでる。

『ガストですの。シアン例のものはどうなっているのですの?』

その言葉に今までの事がなかったかの如く真面目な顔をするシアン。

「ああ、完璧だ。今日シルバーハート様に渡した試作型プロセッサユニットにちゃんと仕込んでおいた。……………隠しカメラを。」

『そう計画通りなのですの。今から興奮してきたですの。』

「『これでシルバーハート様のあられもない姿を隠し撮り(ですの)』。』」

ギルドSSHそれは犯罪だ。

そしてそれを知らないユウは

「やばいベルトって何かいいな。一日中付けていようかな。お風呂の時も付けたら駄目だろうか?」

危険な状態であつた。

プロトタイプとSSHの暗躍（後書き）

次回はお待ちかねスパッツ視点のラステ이션編の終わりですよ。

まあ、こんな作品誰も期待してはいないかもしれませんが。

絶望のコンパ 痴漢容疑者の黒（前書き）

すいません。報告が遅れましたが以前投稿したのは間違いで 今回投稿したのがスパッツ視点の続きです。本当に申し訳ありませんでした。ではお楽しみ下さい。

絶望のコンパ 痴漢容疑者の黒

ネプテューヌside

現在ネプテューヌ一行は協会にいた。無論ノワールも一緒にいる。

「で、ネプテューヌあんた何しに人の大陸に来たの？まさかスパッツを自慢しに来わけじゃないでしょうね。」

ノワールは椅子に座りながらテーブルに突っ伏しながらネプテューヌに問う。

「いくら私でもそれはないよ。じつはね……………」

ネプテューヌ事情説明中。

「いーすん？聞いたことないわね。それにしても……………記憶喪失ねえ。ある意味ライバルが減ったと言うところかしら。」

「ん？どうしたの女神様ニヤニヤして？」

「っ！？なんでもないわよ！？」

ネプテューヌに指摘されて慌てるノワール。

「ブラックハート様は鍵の欠片なるアイテムに覚えはないですか？」

コンパが問う。

「残念だけでないわね。」

「そうですね、だったら強いモンスターがいるダンジョンを教えてくださいませんか？」

「それこそ山の様にあるわよ。ひとつひとつ回ってたら途方もない時間がかかるわ。」

「そうですね……………」

落ち込むコンパ。

「だったらさあやっぱり一個ずつ回って行くしかないよ。」
ネプテューヌが発言する。

「そうですね。この旅いつになったら終わるんですか……………」

溜め息をつくコンパ。

そこにノワールが声をかけようとするが……………。

「まあ、がんばりなさ、うっ……………!？」

急に顔を青くして痙攣しだした。どうやら禁断症状のようだ。だがそんなことを知らないコンパとネプテューヌは……………。

「ブラックハート様どうしたですか!？」

「えっ、何!?大丈夫、女神様？」

「な、なんでもないわ……。私は部屋に……。戻る……。から。こんな時に限って……。タオルが……。くつ。」

そう言っただけでふらつきながら部屋に帰ろうとするノワール。戦闘の時にタオルを無くしてしまったようだ。

「だ、駄目ですよ！ちゃんと病院にかからないと。」

「む……。無駄よ。治らないわ……。どんな……。医者でもね。」

その言葉にはつとめるコンパとネプテューヌ。

「……。まさか、不治の病にかかっているのですか！？」

「そ、そんな不治の病だなんて女神様まだ恋してない友達もいない灰色の青春しか送っていないのに……。」

『何故ネプテューヌがそんなことわかるのよ。あなた記憶喪失なんでしょう。』とツツコミすることも、動くことすらまもなくなくなってきたノワールは必死に禁断症状を押さえられるものを探す。

（何か、何かないの兄様の匂いがするものは……。っ！？あったじゃないのスパッツよ。ネプテューヌが履いているスパッツよ。あれさえあればよし！！）

残る力を振り絞ってノワールが立ち上がる。

「うわあよみがえったー！？」

ノワールはまだ死んじやいないぞネプテューヌ。

「ブラックハート様何か言ってるです？」

「……ッツよ」

「「？」」

「たりないのよー！！スパッツよー！！」

ネプテューヌに飛びかかりスカートの中のスパッツの匂いを嗅ぐ。

「ぶはあー！！生き返ったわあ。さすがスパツ」「キヤー！？」「えっ！？」

「変態が変態さんがいるですよー！！」

「痴漢だ！痴漢されたー！！」

ノワールからすればお兄様分の補給かもしれない。だが端からみればただの痴漢行為である。

「待ってちがうのコレは！？」

パシャリ。

そんなカメラのきられる様な音がする。その音が聞こえた方に三人が振り向く。そこには銀色の携帯電話を構えた今まで姿が見えなかったアイエフがいた。何故かLEDライトを増設した姿で。

「いやいや良いもの撮れたわね。これでブラックハート様の信仰はがた落ちね。」

顔を先ほどとは別の意味で真っ青にするノワール。三人から白い目で見られる。

「待つて誤解よ！？何よその目は、いやそんな目で私を見ないでイヤー！！」

そんなノワールの肩にネプテューヌの手が置かれる。

「ネプテューヌ？」

「女神様分かってるよ、女神様はただこのスパッツが欲しかったんだよね？」

「……………そうよ。」

「でもね。他の人たちがあの写真を見たらどんな顔をするんだろうね。」

ノワールの顔が真っ青になる。

「もしあの写真をばらまかれなくなったら鍵の欠片探しに協力して。」

ちよつと黒いよネプテューヌ。

「もう好きにして。」

膝をつき絶望するノワール。

常識人のコンパならこの行為を止めようとするはずなのだが姿が見当たらない。

よくよく見ると部屋の隅でアイエフと話している。

「アイちゃん何でLEDライト増えてるんですか？」

「だってコンパがお金くれたじゃない。それで買ったのよ。いやゝ。なかなか良いものがあつたはラステイション。プラネテューヌとはまた違った良さだわ。」

その言葉に顔を真つ青にするコンパ。

「アイちゃん何てことをあれは今日の宿屋に泊まる為のお金だったですよ！！私達今日野宿するしかないじゃないですか。」

「大丈夫よ。そんなの気合いと根性の大会体でなんとかなるわよ。」

「なるのはアイちゃんとねぶねぶぐらいですう。」

膝をつき絶望するコンパ。

そこに女神ブラックハートを引きずりながらネプテューヌが声をかける。

「二人とも鍵の欠片探しブラックハート様も協力してくれるって。」

「そうなの？さっすが女神様頼もしいわね。」

アイエフとネプテューヌはニコニコと笑い合っている。その反対ノワールとコンパはというと……………。

「お互いに苦勞するわね。」

「もうこんなの嫌です。」

「がんばりましょう。」

「……………はいです。」

なんか通じあっていた。

その後すぐさまダンジョンにむかったネプテューヌ一行。すると偶然なのかはたまた作者のトマトの怠慢なのか鍵の欠片を持っているモンスターを発見した。

ネプテューヌが変身する前にノワールがもの凄く早いスピードでモンスターを切り裂き殴りとばし、アイエフがLEDライトを発射する前にコンパがいつもなら考えられないほどの機敏さでモンスターの懐に入り注射器による射撃を零距离で打ち込みまくる。モンスターは力つきても止まることもない攻撃にさらされる。ガードブレイクがもう何度おこったことやら。

そんな二人の姿を見てネプテューヌとアイエフは

「一体二人とも何があっただんだろうか？」

そう呟いていた。

いやお前達のせいだからね。

そうしてネプテューヌ一行はラステーションの鍵の欠片を手に入れた。ノワールは写真を消去して解放された。モンスターを倒した時にでたお金でコンパ達も無事に宿屋に泊まることができたのであった。

そして別れの朝。

ノワールは、

「お願いだからもうこないで。」と言って目に涙を浮かべていた。そんなノワールにコンパが声をかける。

「ブラックハート様私なんか後二つの鍵の欠片を見つけるまであの二人と一緒になんですよ。」

「まあ、がんばりなさい。もし何かあったらコンパさん貴女だけでもラステイション協会で保護するから。」

「ありがとうございます。」

二人の間には友情が生まれた。

「では行ってきます。」

「ええ、また来なさいコンパさんだけ。」

そしてネプテューヌ一行は旅立つ次なる大地、リーンボックスに。そしてそこには……………。

「素晴らしいですわ！！このお兄様の同人誌。買って正解でしたわ。やっぱりお兄様は女の子に無理矢理されるのが絵的に合っていますわ。」

スパッツネプテューヌと互角かそれ以上に危険な女神がいた。

絶望のコンパ 痴漢容疑者の黒（後書き）

この作品のノワールは兄であるユウの事を抜けば普通なんですよたぶん。

さて次回はユウ視点の試作型プロセッサユニットの初戦闘です。

際どい試作型 赤の布教活動（前書き）

今回は凄いくだくだしてます。覚悟して見てください。
今回の注意事項。

一つ、小説内でイストワール（大）と表記していますがそれはイストワールが人の大きさになっていると言うことです。

二つ、主人公が男の娘と言う事を忘れないでください。

そして三つ、今回は今までにまして酷すぎるかもしれないので不快感を与えたらすいません。

際どい試作型 赤の布教活動

ユウside

現在俺は天界にてイストワールに呼び出されたところである。

「何か用イストワール？」

「実は貴方に渡したいものがありまして。これを……………」

イストワール（大）が銀色の携帯電話らしきものを手渡してくる。
ひっくり返して見ると大きくSの印がついていた。

「これは？携帯電話？」

「それはSギアです。まあ、携帯電話みたいなものですよ。これが
取り扱い説明書です。」

イストワールから更にA4サイズの紙を渡される。

「なるほどね。おおインターネットまでできるのか。」

「では次にこの紙にサインとはんこをおしてください。」

俺はSギアをいじりながらサインをしようとする。

「って何故にサインとはんこ？」

俺はその用紙をしてみる。

「……………イストワールこれ婚姻届って書いてあるんだけど。」

イストワールはそっぽを向いて口笛をふく。ちゃんと吹けていないが。

「お前なあ……………ってうわぁ!？」

イストワールに注意しようとするやと突然Sギアが『ビービー』と音が鳴り出す。

「どうやら下界にてモンスターが出現したようですよ。場所はルウィー既にSSHの会員No.5が戦闘に入っているようです。」

イストワールが俺と同じSギアを取りだしてその画面を見て俺に告げる。

「なるほど危険なモンスターの出現場所まですらわかるとはかなり高性能だな。まあいい俺も行くか。」

シアンに頼んだ試作型プロセッサユニットも試してみたいしね。

「がんばってくださいね。それとこれを着て行ってくれませんか。」

イストワールから声援と謎の宝箱を受けとって俺はルウィーに向けて転移する。宝箱の中身はメイド服状のプロセッサユニットでどこかに投げすてた。いつの間にこんなものを？

「……………そう言えば会員No.5って誰なんだろう。」

ユウ転移中

「到着したけどこの惨状はなに。ん？何か落ちてる。」

到着した場所は以前フィナンシエを助けた場所なのだが、そこには大量のモンスターの死骸とSギアがひとつ落ちていた。

「これはSギア？いたい誰が……………」

そんな時に『ズドン』と何かの音がする。

「今のは？考えていても仕方ない。いつてみるか。」

ユウ移動中

そこではまたもや女の子がモンスターに囲まれて襲われ、いや襲っていた。

「ナニコレ。」

それはもうモンスターがかわいそうなぐらいに滅多打ちにされていた。そしてそれを行っていた人物は……………。

「REDちゃん!？」

その声に反応して振り向くREDちゃん。

「お？おおおー!!アタシの嫁のユウちゃん!!今そっちいくね
ー!!」

もの凄く早いスピードでこちらに駆け寄ってくるREDちゃん。その勢いで周りのモンスターが吹き飛ばされる。

「ユウちゃん会いたかったよー!!」

真正面から抱きついてくるREDちゃんを受け止める。

「うおっと!?!相変わらず元気だね。」

REDちゃんはそのまま俺の胸に顔をぐりぐりと押しつける。

「うんうん。アタシは元気だよ。でもユウちゃんに会えてもっと元気になったよ。それにしても相変わらずユウちゃんは良い匂いがするな。アタシ発情してきたよ!!」

ハアハアと息を荒くするREDちゃんから俺は距離を取る。

「発情ってそこも相変わらずだね。」

REDちゃんは普段こそ普通の女の子? なのだがすぐに発情して襲いかかってくるのがたまに傷。

「ユウちゃんお願い!!チューさせて。」

「ちょっと、無理かな?」

「じゃあ、キスさせて!!」

「それ意味一緒にだからね。」

「じゃあマウストゥマウス!!」

「知ってた?息をしてる人に人工呼吸したら危険だつて。」

「じゃあいいや!!もうやらせて!!」

「何を!?!」

「何をつてそれはセ……。」

「ダメそれ以上いったら危険だよいろんな意味で!!」

REDちゃんは頬を膨らませるとポンポン起こりだす。

「ユウちゃんは相変わらず我が侂だね。でもね。そんなところも大好きだよ!!」

何かこの娘疲れる。そう言えば……………。

「REDちゃんこのSギアもしかしてREDちゃんのじゃない？」

俺が先ほど拾ったSギアをREDちゃんの前に差し出すとREDちゃんは目を真ん丸にして驚く。

「それはアタシのSギア!!ユウちゃんが見つ付けてくれたのか、ありがとうこれでユウちゃん大量の萌え萌え画像が救われたよ。モンスターに襲われた時に落としたみたいで。」

萌え萌え画像つて、もう気にしないでおこつかだって……………モンスターが待ちくたびれているみたいだし。

「さてと、REDちゃんはおいというて試作型プロセッサユニットを試すしますか。」

俺はベルト状のプロセッサユニットを腰に装着する。

「おおユウちゃんが闘うのか!？」

REDちゃんが大げさに反応する。

「REDちゃんは俺が守るから下がっていて。」

俺がそう言つとREDちゃんは顔を赤くする。

「まさかのプロポーズ！？わかったよユウちゃん。式場の予約は任せておいて。アタシ、ウェディングドレスが着たいから洋風がいいな！！」

俺はいつたいどこを間違えた？しばらくREDちゃんを説得する。その間モンスターさん達には待っていてもらう。

気を取り直して……………。

「新たなプロセッサユニットの力見せてやる。変身！！」俺は腰に巻き付いているベルトのレバーを回す。

『キター！！』と言うどこかで聞いたことのある声の電子音声と共に俺の身体にプロセッサユニットが装着されて行く。

「プロセッサユニット装着完了女神シルバーハートモードアサルト降臨……………って何だこれはー！！」

俺は絶叫した。何故ならば……………。

「これちよつと露出が多すぎだろ！？それに何故にスカート！？」

普段のプロセッサユニットもかなりきわどいがこれはその領域を遥かに凌駕してしまっている。

スパッツスーツはいつもより少しばかり短い膝の上3cm。しかも何故かミニスカート。上着はノースリーブ、スカートはピンクそれ以外の色は銀色なのは変わらない。シアンは何がしたかったんだ。それよりも、もう一つ文句を言うべきところがある。無論さっきの電子音声についてである。

「イストワールだよね？」

『……………！？』

「えっと、何やってるの？」

『チガイマス。ワタシハチヨウコウセイノウエーアイデス。』

もういったいどうすればいいんだろうか。ツツコミ所が多すぎるよ。

「ユウちゃん。」

そんな時REDちゃんが微笑みながら話しかけてくる。

「REDちゃんどうかした？」

「私もう我慢できぶへー！！！」

身の危険を感じてREDちゃんをお星さまにした俺は悪くないはずだ。

「アタシはユウちゃんが大好きだー！！！」

さよならREDちゃん……………。

『グオー！！！！』

ああ、あまりにもいろいろなことがありすぎてモンスターさん達のこと忘れていた。

「まあ、いいか。さあ闘いますか。」そう言って俺はベルトのレバーを回す。

『ドリルキター!!』

その電子音声と共に俺の右腕に大型ドリルが装備される。

「おおー!!ドリルは男の子ロマンだね。ではさっそく……」

俺の目の前に来ていた大型モンスターをドリルで貫くその結果……グロい。

「うっつ!!?気を取り直してレバーを回してつと。」

『センチチャイ!?!』

「……………?」

『……………センチシャキター!!』

噛んだんだね。

俺の足に戦車のキャタピラが装備される。

「意外に使いやすいなこれ。よつと!!」

キャタピラで一気にモンスターの中に入り蹴りあげる。

「これまたえげつない。さてと……………」

もう一度レバーを回す。

『ツインテールキター!!』

何故か髪型がツインテールになる。それ以外の変化なし。

「何かの間違いだきつと、うんもう一度レバーを回してつと。」

『トドメキター!!』

え?トドメ!?

俺の胸部に大型のバズーカが装備される。

「おおこれは分かりやすい。」

『カウントシマス。ゼロ、ハッシャ。』

なにっ!?!カウントの意味がない!?!あれこんなの前にもあったよ
うな?

『ドカーン』とそんな音と共にモンスターが消滅する。

「凄まじい威力だけど地面までえぐってるぞこれ。やばいな誰かが
来る前に逃げないと。」

俺はすぐさまプロセッサユニットを解除して天界に転移した。後に
ルウィーにできた大穴はやっぱり七不思議として数えられるようにな
ったとき。

場所は変わって天界。ユウはイストワールにSギアをREDちゃんが持っていたことについて聞きに行っていた。

「イストワールもしかしてREDちゃんもSSHなのか？」

「ソウデスヨ。カノジョハカイインナンバーゴデスヨ。」

「……………」

「ドウカシマシタカ？」

「イストワール電子音声のままだよ。」

そう言っただけはイストワールのもとを立ち去った。とりあえずがんばってイストワール。

その頃吹き飛ばされたREDちゃんは……………プラネテューヌにいた。しかも何故かネットカフェにいて布教活動を行っていた。何故にネットカフェかというと……………。

「よしよしあの際どい変身の動画を投稿。これでまたユウちゃんの人気がますぞ。」

彼女の行う布教活動とは某動画サイトにユウことシルバーハートの動画を投稿することである。

無論SSH公認である。他にもシルバーハート様フィギュアやマグカップ、うちわ等のグッズを売ったりもしている。だがユウ本人は知らない。

「おおー！！凄くまだ投稿して三十分もたっていないのにもう一万アクセスだよ！！これで私の嫁がさらに有名になるね。よしグッズ

売りに行くぞー!!」

彼女の布教活動はまだまだ続くのであった。

際どい試作型 赤の布教活動（後書き）

会員N O . 5はREDちゃんでした。彼女のキャラがなんかネプテューヌとかぶっている気がする。

それとあの試作型プロセスサユニットについては酷すぎるかもしれない。

名前は何にしよう？何か良い名前があったら教えてください。

メイドな紫 聖地リールボックス（前書き）

今回はやり過ぎました。ベールとリールボックスのファンの方は回れ右でお願いします。

メイドな紫 聖地リールボックス

ネプテューヌside

現在ネプテューヌ一行はリールボックスに繋がるダンジョンに来ていた。

「やっぱりこのモンスターもたいしたことないわね。もう出口よ。」

「ねぶねぶ油断大敵ですよ。前回の事を思い出してください。今回は……………」

コンパは黙って隣にいる危険人物を見る。

「そうだったわね。アイちゃんLEDライトは二度と使わないでってギヤー!？」

アイエフの方からネプテューヌの居る地点に向けて収束した光が集まる。その収束した光はネプテューヌの目を直撃した。

「ねぶねぶ!？アイちゃんLEDライトを止め……………あれっ？私そこまで眩しくないですよ。」

よくよく見ると光はアイエフのLEDライトからではなく掲げた右手から出ている。

「これはトレジャーサーチって言う私の能力なのダンジョンの隠れているレアな宝箱を見つけることができるの。」

「へえ」。アイちゃん宝箱は何処にあるんすか？

「ああ、ねぶ子の足元に「説明は良いからまずは止めて頂戴!!」
ああ、ごめん、ごめん。」

光がやみ膝をつくネプテューヌ。

「まさか本当にやられるなんて油断したわ、私の馬鹿!!まだ目を
開ける事が出来ないわ。良い子のみんなは光を人の目に当てちゃ駄
目よ。ああー!!!目が痛い!!!」

悶えるネプテューヌ。そんなネプテューヌをコンパは見なかったこ
とにして宝箱を探す。

「アイちゃん宝箱ないですよ。」

ネプテューヌのいたところを探すコンパだが見つけることができ
ない。

「ああ、ごめん。もう一回するわね、ってしばらくしないと使えな
いんだった。よし。LEDライト発光開始。」

「えっ?キヤー!?!」

その瞬間コンパは光に包まれた。

しばらくして光がやみそこにあつたのは悶えて地面をのたうち回っ
ているいるネプテューヌとふらつきながらも立っているコンパそし
て宝箱がひとつあつた。

「もう私は負けないんです。負けたくないんです!!」

「何の話よ。あ、コンパ足元危ないわよ。」

ただでさえLEDライトのダメージを受けてフラフラなコンパは足元にある宝箱に気づかず足を取られて空中を一回転して転ぶと言う妙技を見せる。顔面を打ち付けたが大丈夫だろうか？

「大丈夫じゃないですう〜。」

仰向けに倒れているコンパに地面をのたうち回っているネプテューヌが近づくと見事に……。

『ごっん。』

互いのあたまが衝突する。

「「ギャー!!」」

「たくつ、何やってるのよ先がおもいやられるわね。」

その言葉に悶えていた二人が立ち上がる。

「「いい加減してー（ですうー）!!」」

それはそれはとても見事なツツコミだったそうだ。

それでは気を取り直して……………。

「宝箱これね。開けて見るわね。」

「何かお金に替えられるものだったらいいんですけど。」

「案外モンスターがー！！ってことも。ねぶ子貴女のことは忘れな
いわ。」

現実的なコンパ、非道なアイエフ。

「こ、これは！？素晴らしいiiiiiiii！！！」

宝箱を開けたネプテューヌから驚嘆の声が上がる。

「何が入ってたですか？」

「何モンスターの死骸でも入ってたの？」

「なんで私がモンスターの死骸で喜ぶのよ！？ちがうわこれよ。」

ネプテューヌが手にしていたのは……………。

「何故にメイド服！？」

そうメイド服だった。それも古風な超純情ロングスカートのメイド
服だ！！（一応プロセツサユニット扱い）

「しかも私専用装備よ！！これはさっそく……………。」

ネプテューヌを着替え中……………。

「自分の才能が恐ろしいわ。どんなものでも着こなしてしまうんだ
から。まあ、いいわ。さあリーンボックスに向かいましょう。」

ネプテューヌが淡々と語る。

「まつですねぶねぶ。その恰好で行くつもりですか!？」

「ええ、何か問題があるのかしら？」

「大問題ですよ。アイちゃんだけでも白い目で見られてるのにねぶねぶまでそんな恰好したら私達危ない集団として見られてしまいますよ!!」

「あらコンパ私の美しさに嫉妬?女の嫉妬ほど醜いものわないわよ。」

ネプテューヌクスクスと笑う。そのネプテューヌの態度にコンパは頬を膨らませるて怒る。

「もういいです!!ねぶねぶなんて補導されればいいんです!!」

すたすたと歩き出すコンパ。負けるなコンパ。がんばれコンパ。

そしてネプテューヌ一行はダンジョンを出てリーンボックスに向かう。

みなさんはリーンボックスの事をご存知だろうか?雄大なる緑の大地と呼ばれ中世ヨーロッパを彷彿とさせ、自然も多く四大陸のなかでも比較的過ごし易い大陸と言われ、シルバーハートが管理していた。その後その妹グリーンハートによって管理されていた。それが間違いの始まりだった。

リーンボックスは変わってしまった。中世ヨーロッパを彷彿とさせたお城は打ち壊されゲームショップ、同人誌販売店等が立てられた。

さらには住んでいた人も老後の生活をする老人や新婚生活を送る夫婦は激減し、アニメやゲームをこよなく愛する通称オタク達が激増した。自然が多く残されていることが唯一の救いである。

今のこの大陸は雄大なる緑の大地などではなく言うならば……………。

萌えとオタクの聖地リーンボックス

そう呼ばれていた。

そしてネプテューヌ一行はそのリーンボックスの大地に立っていた。

「わ、私が聞いていたリーンボックスとは全然違いますう。」

困惑のコンパ。それに答えるアイエフ。

「コンパが知っているリーンボックスはシルバーハート様が管理していた当時のものね。今のリーンボックスは女神グリーンハート様管理しているんだけど……………」

アイエフは周りを見渡し溜め息をつく。

「ここも変わってしまったわね。どうして私あんな女神様信仰してたんだろ。」

そんなアイエフを見てコンパは関わるとめんどくさいと思いつつスルーした。

「アイちゃん協会にいつてみませんか？」

「そうね……………そう言えばねぷ子は？」

辺りを見渡して見るとゲームショップの店頭でゲームをプレイして

いた。だが何やら様子がおかしいゲーム画面に向かって何やら叫んでいる。

アイエフとコンパが近づき、何を言っているのか確認して見る。

「どうして！！どうして分かってくれないのお兄様、私はこんなにも貴方を愛してるのに!？」

「ねぶねぶがおかしくなっただすうー。」

コンパが涙目で呟く。

「違うわ。これは今大陸中で大人気のゲーム『お兄様は男の娘』って言うゲームよ超高性能AI搭載で実際に中にお兄様と会話できるのよ。ねぶ子は今バッドエンド一直線ね。」

アイエフがコンパに説明している間にもネプテューヌ又はゲームを続けていく。

「いや、お兄様捨てないでそれだけは嫌なの！！なんでも言う事を聞くからお願い！！待ってお兄様何処に行くの、待って行かないで！！イヤー！！」

画面に浮かぶGAME OVERの文字そして絶望するネプテューヌ又は膝をつき拳を地面に打ち付けるネプテューヌ。

「くっ！？何故、何故なの何故お兄様は!？」

「ねぶねぶ恥ずかしいですから早く行くですうー。所詮ゲームの中の話です。」

コンパが膝をついているネプテューヌを無理矢理引っ張って行き連れて行く。

「お兄様ー！！」

ネプテューヌの絶叫がリンボックスにひびいた。

しばらくしてネプテューヌも立ち直り協会についたのだがそこで問題が発生した。

「ああ、困りますお客様協会にその様な恰好で入られては。」

そう服装について注意された……………コンパが。

「どうして私が注意されるのですか！？」「ああ、言いわすれていただけこのリンボックスではコスプレこそが正装なのよ。そう言えばコンパ看護学校の制服があったじゃないあれを着れば良いんじゃない。」

「恥ずかしいですー！！」

嫌がるコンパ。

「お客様あまり騒ぐようだと警備員を呼ぶ事になりますか？」

そんなコンパに協会の教員が睨みをきかせる。

「コンパ……………確かに補導されそうね貴女がね。ふふつ。」

ネプテューヌがクスクスと笑う。

「……………こうなったらもうやけですー!!」

コンパ着替えもといコスプレ中。

「ではグリーンハート様が参られるまでこちらでお待ち下さい。」

現在ネプテューヌ一行は応接間にてグリーンハートを待っているところである。

話は変わるが今のネプテューヌ達の服装を確認しておこうか。

アイエフはいつも通り。

コンパは看護学校の制服。

ネプテューヌは女神化してメイドプロセスユニット装備。無論スパッツ装備済み。

「失礼しますわ。貴女達かしら私に会いたいとおっしゃっている…

……………ネプテューヌ!? 貴女なんでここに!?!」

グリーンハートことベールが応接間に入って来ると同時にネプテューヌの存在に驚く。

「でたわね乳お化け!!」

「ねぶねぶいきなり何を言っているんですか!?!」

いきなりの暴言のネプテューヌにコンパは驚愕する。

「相変わらずですわね貴女。まあ、いいですわ。ところでネプテューヌ又貴女スパッツ持っていますわねいますぐに渡しなさい。」

「やはり貴女の狙いもスパッツなのね。悪いけど渡すつもりはないわー!」

一触即発の空気

「まあ、いいですね。だったら勝負しませんこと?」

「勝負?面白そうね受けて立つわ。」

ネプテューヌは剣を取り出そうとする。

「お待ちなさい。誰も戦闘で決めようとは言っていないわ。」

「だったらどうするつもりよ?」

「そこでこれの出番なのですわ。」

ベールがその言葉と共に取り出したのは
『お兄様は男の娘で弟!?』

まさかのゲームソフトだった。

メイドな紫 聖地リールボックス（後書き）

今回はベールの恐ろしさをしつたね。

ユウ「いったい何があつたんだ？」

まあ、いろいろとね。そう言うユウは？

ユウ「俺は………まあ、ちよつと。」
教えてくれないの？

ユウ「いずれわかるよ。」

まあ、いいや。ところでみなさんは幼女が好きでしょうか？もし好きな方は感想にでも良いので好きか嫌いか書いてくれると嬉しいです。

ユウ「何をするつもりだ？」

ではみなさん失礼しました。

最強の青髪 語る銀と嘔吐（前書き）

今回はSSH最強のあの人が登場します。

駄文なので気をつけて見てください。

最強の青髪 語る銀と嘔吐

語り手イストワール side

話をしましょう。これはまだユウが女神になってまもない頃。ユウは一人の少女と出会います。

イストワールいきなりどうしたんだ食事中に語りだすのはマナー違反だぞ。

少女には夢がありました。でも少女は臆病で引つ込み思案さらには根暗で引きこもりと言う典型的な駄目人間でした。

誰の事かは知らないが言いすぎだろ……………。

でも少女は変わります。運命的な出会いを果たして……。これはそんな出会いの物語り。

こんなキャッチフレーズどこかで聞いたような？

では出会いの書を紐解きましょう……………。うわおえええ。

うわっ！？食事中に吐くなよ！！なんか本が出てきた。
さあ紐解きましょう……………っ！？

どうしたイストワールいや語り手さん？

久しぶりに出したら……………本当に……………でそう……………で。

まさか！？ちよつと待て責めてトイレで吐いて。ああ止めるなんてこっちに来るー！！

一緒に汚れましょう。うおええええー！！

止めるおー！！

5pb・side

ボクの名前は5pb・ストリートミュージシャンなんかをしているんだ。これでも少しは有名なんだ。けっして引きこもりでも根暗でもないよ。そんなボクにはもう一つの顔があるんだ。それはギルドSSHシルバーハート様は私の嫁の会員No.1しかも設立者で會長なんだ。どうしてそんな事をしているのかと聞かれるとあの人ユウ君……。じゃなくてシルバーハート様との出会いから話さないといけない。そうあれは雲ひとつない快晴の日だった。

その頃のボクは極度の恥ずかしがりやで人前で歌う事なんてできなかった。そんな時にどこからかとても綺麗な歌が聞こえた。

「いったい誰が……………」。

ボクは気付くと走り出していたその歌の聞こえたところに向かって。

「……………」。

魅了されてしまった。その唄を奏でる柔らかかそうな唇に艶やかでサラサラと銀色に輝くストレートの髪に金色に輝く瞳に。彼をシルバーハート様をみた瞬間にボクの全てが奪われてしまった。

気付くと彼は歌い終えたのかどこかに行こうとする。ボクは彼を何故か引き止めていた。

「あつ、あの……………」

彼が振り返るその目は何故か悲しみに満ちていた。

「……………なにかよう？」

「えっと、その、唄凄く綺麗だった……………」

心の中ではいっぱい言いたい事を考えていたはずなのに口から出てきた言葉はそんな言葉だった。

「そつ、ありがとう。」

その言葉と共に彼の顔が笑顔になる。

「……………っ!？」

その笑顔にボクは心臓を鷲掴みにされた。

「どうしたの顔が真っ赤だよ。」

首をコテンと傾ける彼、その仕草はとても可愛らしかったと言っておこつ。

「な、なななんでもないです。」

「そつ?ならいいんだけど。」

彼が穏やかな顔になったのを見てボクは彼に問う。

「あ、あのどうしてそんなに悲しそうなの？」

その瞬間彼の顔がきょとんとあつけにとられたかのような顔になる。その仕草もとても可愛らしかったと言っておこう。

「……………ああ。別に大したことじゃないよただ幸せになれなかっただけだから。」

そう語った彼の顔はまた悲しみにつつまれていた。

「幸せになれなかった？」

「みんなに唄をきいてもらえなかった。みんなを……………幸せにすることが……………」

彼の唄が人を幸せにすることが出来ないはずがない。少なくともボクは……………。

「ボクは君の唄で幸せになれたよ。ボクに君を幸せにする手伝いをさせてほしいんだ。」

「……………！？」

彼の顔がまたもや驚きに包まれた。

「あのね君の唄はとても綺麗なんだ。でもねこの通りは今の時間は人通りがとも少ないんだ。歌うんだとしたら向こうの通りのほうが良いんだ。」

ボクはそう言つてこことは反対の道を指差す。

「それにボクなんかのじゃ悪いかもしれないけど……………」。

そう言つて私は自分の相棒を取り出す。

「エレキギター？」

「そうだよ。これでも少しは変わつてくるはずだよ。」

ボクは彼にエレキギターを取り出して見せる。彼はそれはキラキラとした目で見える。くちゃくちゃ可愛いとだけ言っておくよ。

「それじゃあ行こう！！」

ボクは彼の手を引つ張り連れ出す。いつものボクならこんな事は出来ないと思うよ。でも彼と一緒にならなんでも出来るそう思えた。

「ま、待つて。」

彼から声をかけられる。

「どうかした？」

「君の名前を教えて。」

そう言えば言つてなかったつけ。

「ボクは5 p b . 君の名前は？」

「……………ユウ。」

「そう。じゃあ行こうかユウちゃん。」

彼の名前を呼ぶと彼は何故かむすっとした顔をする。何か気にさせることをしたのだろうか？今考えると明らかだったんだけど。

「ユウちゃんじゃなくてユウ君俺は男の子。」

え？

「……えー!!」

ボクの絶叫は人がほとんどいない通路によく響いた。

とりあえずユウ君がどこからか持ってきたビール瓶のケースの上に乗って歌う準備をする。ボクはそのままギターを準備してチューニングを行う。ふと周りを見回して見るとちらほら人が集まっていた。それも仕方ないと思う。ユウ君はみんなの目を惹く美しさだしね。本当に男の子なのかな……いや確かこんな言葉があったな『こんなに可愛い子が女の子なわけがないきつと男の娘だ』そうかユウ君の性別は男の娘なんだ。

「準備できた？」

そんな馬鹿な事を考えていたときユウ君より声が掛かる。

「うん。いつでも良いよ。」

ジャラーンと一度弦を弾いて見せる。

「じゃあいくよー!!」

その言葉と共にボクはギターを弾く。譜面を見る必要はない。ユウ君が歌う唄はどれもマイナーな曲ばかりなのですべて頭の中に入っている。ボクは前奏を弾きだす。やっぱりギターだけだといろいろ限られてくるね。だけどユウ君の唄はそんなボクの迷いさえも軽く打ち消していく。

奏でられるその旋律によって人々はまたひとりと立ち止まりユウ君にユウ君の唄に魅了されて行く。

「」

ボクのギターさえも呑み込んでいまいそうである。ボクはそんな中でも楽しんでいた。とても楽しかった。でもそんな楽しい時間は長く続かない。ユウ君の唄がとまる。

辺りが沈黙に支配される。ユウ君が不安そうな顔で周りを見回す。

でもそんな心配しなくても良いと思う。だって……………。

『良いぞお嬢ちゃん達ー!!』

『感動したー!!』

『私は君に心奪われたー!!』

『キヤー!!ステキー!!』

ユウ君の唄が心に響かないはずない。ほらこんなにも多くの人達を魅了してしまったのだから。

ユウ君は笑顔でボクの手を取りもう片方の手で人々に手をふる。その後観客のアンコールに答えて10曲近く歌った。

「今日はありがとうp.b.ちゃんおかげで楽しかったよ。」

「ボクは何もしてないよ。ユウ君唄がみんなに届いたんだよ。ボクは何もしてないよ。」

不意にユウ君の手が伸びてくる。

「えいつ!」

「ユウ君にやにするのー!」

頬をむにゅむにゅと引っ張られる。

「おお!ーやわらかい、よく伸びるー。」

「うにゅー。えいつ!」

ボクもユウ君の頬を負けじと掴んで引っ張る。

「「うゅー。……………ぷっ、あはは。」」

二人とも互いの可笑しな顔に耐えきれずに笑ってしまふ。

「なんだちゃんと笑えるんだ。可愛い笑顔だね。」

「っ!?!からかわないでよ。」

ボクなんか可愛いわけないよ。

「今ボクなんかがつて思わなかった?」

「……………!?!」

どうして……。

「その言葉は君の可能性を無駄にしまつ。」

「可能性？」

「そう可能性諦めてしまえば可能性もゼロになってしまつ。だから………！？」

ユウ君が話しの途中で急に顔色を変える。

「ユウ君？」

「ごめん俺いなくなちゃ。」

「また会える？」

ボクは悲しみを隠しきれない顔でユウ君に聞く。するとユウ君はボクの頭を軽く撫でる。

「5 p b . ちゃんのぞむならね。じゃ、またね。」

そう言つてユウ君は走り出していった。そしてボクの心を奪いさつていった。

それからしばらくして帰路に帰っていると一筋の光が天に向かって行く。そしてその光の中に彼がいた。

「ユウ君!？」

辺りが騒がしくなってくる。無論みんなあの光を見たせいだろう。

『おおー！！あれは伝承の女神さまじゃー！！』

『そうよあれが銀色の女神様なのよー！！』

女神さま。それがボクの中に響いてくる。まさかユウ君が！？でもなんでだろう不思議とあまり驚かないだって彼は男の娘なのだから。

「よし。ボクもユウ君に負けないようにがんばらないとー！！」

ボクはそれからいろんな事を体験し、学習した。そして今ボクは……。

「これより綺羅星じゅ、じやなかった。SSH総会を始めます。」

「今日こそ貴女を打倒してNo.1の座をいただくわ。喰らいなさいLEDライト100%フルチャージシユートー！！」

いつものNo.2のLEDライトを鏡で反射させる。そして鳩尾に一発いれておく。

「ギヤー目に直撃しつ、くぼらっ！？」

倒れふせるNo.2。

「相変わらずの手際の良さですの。」

「ありがとうガストでも貸したお金早く返してね。」

ちなみに5000クレジット。

「ぎゃふん。ギャー!？」

何故かガストの椅子が高速回転しだす。

「相変わらずの最強ぶりだんだけど嫁の事に関してはアタシは負けないぞー!！」

REDちゃんが立ち上がり5pb.ちゃんに指を刺す。

「ちなみにボクはシルバーハート様のサイン入りのバスタオル、使用済み歯ブラシ、マグカップ、さらには下着を持っているよ。」

どうやって手に入れたかは聞かないでね。

「これで勝ったと思うなよー!！」

「さておふざけはここまで真面目にやるよー!！」
ボクはがんばっています。ストリートミュージシャンとしてSSHの最強の存在として……………。

語り手side

少女は変わった出会いによって少女の変革によっていったい世界はどう変わるのかは誰も知らない。だけど彼女が諦めない限り道は続いて行くとそう俺は信じている。あの時の俺に幸せをくれたのだから。ちょうどあの時の俺は女神として成り立てで不安だったからな。

それにしても掃除が大変だった。あのゲロトワールよく俺にも被害をだして。

え、何故俺が語り手をしているのかって？簡単な話しだ……。
おっとその前に。「いい加減に語り手やるのはやめにしよう。疲れ
てきた。ちなみにイストワールは精神崩壊させてトイレに閉じこめ
た。」

トイレの扉をドンドンと叩くイストワール。

「すいませんだれかいませんか。出してくださいここなんか臭い
んです。あつ、臭いのは私か。あの本当にすいません出してください
いここ空気が薄くなって……………」

あれは無視しよう。

「それにしても5pb・ちゃんは今何してるんだろう。自分に自信
を持って歌っていてくれるといいな。」

その頃の5pb・ちゃんは……………。

「ガストよくもボクのシルバーハート様のハンカチを売り飛ばして
くれたね。歯を食いしばってねガスト思いつきりいくよ。音激斬雷
電激奏!!」

ガストにギターを突き刺してジャガジャガやっていた。

「ギャー!!?ガストが悪かったですのー!!だからやめてほしいで
すのー!!」

「悪・即・爆発!!」

ガスト爆発

「キャー!!」

「これがシルバーハート様のリスペクト。」

SSH最強の存在5pb.ちゃんその力は四女神を凌駕するかもしれない。

最強の青髪 語る銀と嘔吐（後書き）

5 p b ・ちゃん無双。どうしてそんなに強いのか？

5 p b ・「鍛えてますから。」

今回はまさかの主人公が語り手。

変なところがあったらご指摘お願いします！！

5 p b ・「全部じゃないかな？」

ぐさり。

対決の女神 降臨する最凶の薄紫（前書き）

さよならベール。今回はベールファンはやはり見ないでください。

対決の女神 降臨する最凶の薄紫

ネプテューヌ side

現在メイドでスパツツなネプテューヌは協会の応接間でリンボックスの女神グリーンハートことベールと対峙していた。

「それでどうやってそのゲームで勝負するつもりかしら妖怪乳お化け。それは恋愛ゲームでしょう。」

ネプテューヌはベールが持つ『お兄様は男の娘で弟!?』を指差し問う。

「よ、妖怪!? 相変わらず失礼な娘ですわね。まあ、いいですわ特別に許して差し上げますわ。私は寛大ですから。」

「いいから早く説明なさい乳お化け。」
間髪入れずに言うネプテューヌ。

「……………心理的に殺して差し上げますわ。」

案外短期なベールだった。

「このゲーム『お兄様は男の娘で弟!?』は『お兄様は男の娘』の続編で『お兄様が魔女スイトワールの呪いで幼児化してしまうのよ。それを解決するために姉としてプレイヤーが奮闘する』というストーリーよ。」なっ!?

何故かベールのセリフに被せてくるLEDなアイエフ。

そして説明を続けるアイエフ

「新しくなったのはストーリーだけではなくまあ、細かく説明をしていたらきりがいいから省略するけどたぶん今回説明が必要になるのは対戦モードですよねグリーンハート様。」
アイエフはベールを挑戦的な目で見つめる。

「貴女どうしてこのゲームの事を！？このゲームは発売前に抽選で5名のみをテストプレイヤーとして応募したのですわ。私だって大量に応募八ガキを送ってやっとの思いで手に入れたのに。」

ベールはアイエフを得体の知れないものを見るような目でみる。

ちなみにコンパはアイエフを危険な人を見るような目で見ていた。

「ああやっぱり名前変えて一万通送って来たのってグリーンハート様なのね。」

その言葉により一層警戒心を高めるベール。

その言葉にさほどの興味もないネプテューヌはお茶請けで出されていたお菓子を食べ尽くそうとしていた。

「貴女はいつたい何者なのなの！？」

「そう聞かれたら答えてあげなきゃかわいそうね。私は………………。」

そう言うとアイエフは懷から一枚のカードを取り出す。そうそのカードこそ……………。

「電気店のスタンプカード？」

電気店のスタンプカードだった。

「ああごめんなさい。今の間違いこつちが本物。」

再度アイエフがカードを取り出す。

「まさか貴女SSHでしたの!？」

アイエフが取り出したカードそれこそギルド、SSH『シルバーハート様は私の嫁』の会員カードであった。

「そう私こそがSSHのNo.2副団長のアイエフよ。」

そう言つてLEDライトをかなり強めに光らせるアイエフ。無論室内でそんなことをすれば……………。

「『キヤー!?!?!』」

こうなる。

三人が復活するまでアイエフにいろいろ説明をしてもらいましょう。

「構わないわ。まずはこのゲーム通称『お兄様シリーズ』は私達SSHが製作したものなの。無論ゲーム内に登場するお兄様のデザインの元になったのは我らがシルバーハート様よ。」

なるほどね。だからグリーンハートのハガキのことなんかを知っていたんだ。

「そう言う事。次にこの続編であるこのゲームに追加された対戦モードについて説明をするわね。」
恋愛ゲームなのに対戦するの？

「簡単に言えばどちらのプレイヤーが早くお兄様を攻略するのかって言ったところかしら。」

説明をありがとう。そろそろ三人が目覚めるみたいだしね。

「「「はっ!?!」」」

三人が目覚めます。アイエフは先ほどの説明を行う。

「……………」

警戒の目でアイエフを見るベール。

「まずいわね。何か興奮してきたわ。」

『お兄様は男の娘で弟!?!』のパッケージを見て何故か興奮していた。

「…………後三十四回です。」

よく分からないコンパ。

「ところで乳お化け様この勝負あまりフェアとは言えないわね。もし私達が勝ったら鍵の欠片と一緒に探してもらおうかしら。」

ネプテューヌはベールに条件を持ち出す。どうやら乳お化けは確定なようだ。

「鍵の欠片……。確かお城を打ち壊した時にそんなアイテムがありましたわね。いいですわもし私に勝てたのならその鍵の欠片を貴女に渡しませう。」

「手間が省けたわね。ではさっそく始めるわよ!!」

「望むところですわ!!」

ゲームスタート。

名前を設定する二人。

「ここは無難に自分の名前かしら。」

ベールは自分の名前にするみたいだ。
だが……………。

『1Pネームはんぺん。』

「どういことですの!?!」

そんなベールを見て嘲笑するネプテューヌ。

「あーはっはっは!!無様な乳お化け!!私は……………。やはり無難に名前ね。」

やはり無難に自分の名前にするようだ。
だが……………。

『2Pネームガンモドキ。』

「どうしてこうなるの!？」

「二人はきつとおでんの神様に愛されてるのね。」

淡々と語るアイエフ。

「お腹がすいたですうー。」

可愛いお腹の音を鳴らすコンパ。

とりあえずゲームを始める二人のおでん。

画面に攻略対象であるお兄様の弟（以降弟と記します。）が登場する。

『はんぺんお姉ちゃん。ガンモドキお姉ちゃんおはよう。』

（（これがおでんではなかったら死ぬほどよろこびますのに）ぶというのに。）

やはりおでんは駄目だったようだ。だがそんな猶予は二人にはない。弟への挨拶を返さなくてはいけない。

「ええ、おはようですわ。」

やはり無難に行くべール。

「結婚しましょう。」

そしてなぜかクライマックスなネプテューヌ。

「「「ちょ!?!」」」

「貴女どこか可笑しいんじゃないの!?!」

至極ごもつともである。

「ねぶねぶにはもう少し常識をもってほしいですうー。」

がんばれコンパ。もはや常識人は君だけだ?

「まさかね……………」。

何故か厳しい顔をしてSギアを取り出すアイエフ。

そして弟の反応。

『帰っていいですか?』

まさかの帰える宣言。

場面を切り替えて今は三人でデパートに買い物に来ていた。

『わあー!!お姉ちゃんボクあのパフェ食べたーい。』

どうやらデパートによくあるレストランにて弟がパフェをおねだりしているようである。

「しかたないわね。」

やはり無難に行くべール。

「いいけど私にも少しちょうだい。」

少し攻めるネプテューヌ。

『うんいいよガンモドキお姉ちゃん。一人で食べるより二人で食べるほうが美味しいもんね。』

どうやらネプテューヌの好感度があがったようだ。

「くっ！？やられましたわ。」

「はっ！！甘いわねはんぺん！！」

悔しがるはんぺんじゃなくてベールを鼻で笑うネプテューヌ。

『はむ、はむ。』

現在弟パフェを実食中。

「たまりませんわ。」

鼻を押さえながら微笑むベール。

「……………」

その時コントローラーを操作し始めるネプテューヌ。

「ネプテューヌいったい何を？」

ネプテューヌを警戒するベール。だがそのため選択肢を選び忘れるというベール。

『ひどいよー。はんぺんお姉ちゃん無視するなんて。』

「な！？違いますの今は……………」
慌てふためくベール。

『はむ、はむ。ねえガンモドキお姉ちゃん、はんぺんお姉ちゃんが
無視すうむー！？』

突如弟が声をあげる。

「なっ！？ネプテューヌ貴女正気ですの！？」

その変化を見て悲鳴のような声をあげるベール。

「まさかネプ子いや想像はついていたけどやってくれるわね、ふふ
ふ。」

不適な笑みをうかべるアイエフ。

「????アイちゃんいったい何がどうなってるんです?」

状況がいまいちつかめず困惑するコンパ。

「そうね初めてのコンパにはむずかしいわね。このゲームにはアイコンがあるの。ほらあの手の形してるやつ。例えばあのアイコンを手にもっていけば手を握る行動が取れるのよ。」

アイエフが画面に映っているアイコンを指差してコンパに説明する。

「あれですか。でもね、ぶねぶのは手の形ではなくて唇の形してるですう。」

「あれはキスしてるのよ。それも深いやつ。」

「ふえっ！？キスってあのキスですか？」

顔を赤くしてあわあわするコンパ。

「魚のキスではないわよ。別に自分の事でもないのにそんなにビクビクすることないでしょう。」

軽く溜め息をつきながら答えるアイエフ。

「でもデパートなんて人目の多いところなんかでキスなんてしたら弟さんの好感度が落ちちゃうですうー！！」

「そうでもないわ。よく画面を見てみなさい。」

いつものLEDの面影は何処にいったのか冷静にコンパに画面を見るように促すアイエフ。

そこには……………。

『お姉ちゃんいったい何するの！！』

明らかに怒っている弟。

「決まってるじゃないキスよ。既成事実の為のね。」

『既成事実？』

「そうよよく考えて見なさいこんなに人が多くいる中でキスしたのよ。これだけ人がいれば噂は必ず広まるわ。そうなればどうなるかくらい貴方には分かるでしょう。」

『そ、そんな！？でもキスくらいじゃ！？』

「甘いわねキスだけだと思う？これを見なさい。」

ネプテューヌはコントローラーを操作してアイテムを出す。

『写真？これって……………！？』

「そう写真よ。貴方のお着替えしているね。さてここで問題です。この写真が流出したらどうなるでしょう？」

顔を青くする弟。

「これから楽しくなりそうね。ふふふつ、あーはっははははー！」

ネプテューヌの笑い声と共にエンディングが流れ出す。

「……………。」

そして三人は啞然とする。

画面に大きく文字が表示される。

『勝者2Pガンモドキ』

「いったい何がどうなっていますの！？」

「アイちゃん説明をお願いするですー!!」

アイエフに説明を求めるコンパ。

「簡単に言えば恋愛ゲーム特有の特殊エンディングよこれは脅迫エ
ンドね。このゲームには他にも数多くのエンディングが存在してい
るわ。」

「まさかそのような手段があるなんて……………」

驚きを隠せないベール。そこに話しかけるネプテューヌ。

「とりあえず私の勝利ね。さあ鍵の欠片を渡しなさい。」

「納得できませんがまあいいでしょう。」

そう言つて教員に鍵の欠片を持つてこさせるベール。

「確かに鍵の欠片ね。いただいて行くわよ。」

鍵の欠片を受け取るネプテューヌ。

「これでこの大陸に用はないでしょう行くわよ二人とも。」

何故か二人を急かし協会を後にするアイエフ。

「アイちゃん待ってくださいーいですうー。」

コンパは駆け足でアイエフを追いかける。

「二人とも私が主役だつてこと忘れてるんじゃないのかしら？」

そう言つて二人を追いかけてよとするネプテューヌだがそこにベールより声が掛かる。

「お待ちなさいネプテューヌ。」

「何かしら乳お化け？スパッツは渡さないわよ。」

手でメイドプロセッサのスカートを抑えるネプテューヌ。

「違いますわ。あのアイエフさんでしたか彼女には気をつけなさい。彼女は危険ですわ。」

ベールの忠告に何いつてるんだこいつ的な顔をするネプテューヌ。

「アイちゃんは普段から危険よ。そんなの言われなくても分かつてるわ。」

何気に酷いネプテューヌ。いや別に酷くないか。

「なるほどやはり貴女も把握してましたか（SSH）の危険性は……………」

「あれはとても危険よあれは（LEDライト）ね。」

「分かっているならもう何も言いませんわ。さつさと私の大陸から出ていきなさい。貴女の顔を見るのはうんざりですわ。」

そう言つてネプテューヌに部屋を出るように促すベール。

「その前に少しだけ言わせてもらって良いかしら？」

「何ですか？私こう見えても忙しいのですけれど。」

嫌そうにネプテューヌを見つめるベール。

「乳お化け、いいえグリーンハート様貴女本当は寂しかったんじゃない？だから私にゲーム勝負なんかを挑んだんじゃないの？遊び相手が欲しくて。もしよければわたしが友達に……………」

そう言って手を伸ばし握手を求めるネプテューヌ。
たが……………」

「きもっ!？」

顔を青くして自分の身体を抱きすくめるベール。

「はあっ!？」

「貴女いったいどうしてしまったの!?ネプテューヌ下界に落ちたショックで記憶喪失にでもなったんじゃないの!？」
まさにその通りなのだが。

「もういいわ!!乳お化け貴女なんて新キャラに出番取られてしま
いなさい!!」

そう言っただけで走り出すネプテューヌ。

「さてお兄様の同人誌でも見るとしますわ。」

自分の欲望に忠実なベール。後に彼女にあんな悲劇がおきると誰が気付けたであろうか……………。

「まったくあの乳お化けには失礼しちゃうよ!!」

女神化を解きいつもの服装にもどったネプテューヌ。

「ねぶねぶも充分失礼だったですう。」

無論コンパもいつもの恰好に戻っていた。

「次はルウィーね。みんな元気がしら？」

アイエフはいつものLEDライトを装備済み。

三人は現在大陸間をつなぐダンジョンの入り口に立っていた。

「次の大陸の女神さまこそまともな人だという事を祈るばかりです。」

手を合わせて祈るコンパ。

「ルウィーは確か雪がいつぱいある国なんだよね。よしスノーマンを百体作るよー!!」

もし本当に作れば兄が作った七不思議を更新できるかもしれない。

「それにしてもこのダンジョンも薄暗いわねえ。よし心機一転して盛大に輝くわよー!!」

「コンパ!!」

「ねぶねぶこそ上手してくださいです!!」

二人は声を掛け合い……。

「やっぱり光っているのは落ち着くわねえ。ってあら一人ともそれってエージェントス スゴっこ?」

そう二人はサングラスをかけていた。とりあえず酷くシニールだといっておこう。

そして三人は次なる大陸ルウィーへと向かう。ルウィーの女神ホワイトハートは……。

[illegible]

白装束で藁人形をトンカチと釘で打ちつけていた。
 いったい彼女に何が……………！？

side

そこに彼女はいた。いたと言う表現も正しいのかすら正しいのか分からない。彼女は忽然とそこに……そうリーンボックスの上空に

現れた。

その姿はユウと全く同じプロセッサを装備していた。違うのは彼女のプロセッサはユウの銀色とは違い白一色だった。

その顔には死神を彷彿とさせる仮面をかぶっていた。

だがそんなことはどうでもいい。重要ではない。本当に重要なのは彼女が……そう幼女だと言うことだ！！

「……………分かっています。いちいちうるさいですよ合法ロリ。」

そう呟くと彼女は背中に装備されていた大型のライフルの標準をリンボックスの協会へと向けていた。

「ハードバスターライフル発射します。」

彼女は一部のためらいもなくその引き金をひく。その瞬間全ての音が消失した。そしてリンボックスの協会が消し飛んだ。

「やはりこの程度でしたかグリーンハート……………！？」

そう彼女いや幼女が呟くと幼女のもとへと砲撃がむかってくる。幼女の持つハードバスターライフルに比べればその威力は遥かに劣るが彼女の命を刈り取る程度には充分だった。幼女はそれを冷静に身体をそらす事で避ける。

「なるほどこの程度は倒れてくれませんか。やはり貴女も女神の端くれでしたか。」

そう言って幼女は腰の近くに装備されているビームセイバーを取り出す。

「こども！？貴女がこのような酷いことを！？」

ベールいや女神化したグリーンハートがランスを構えながら幼女を問い詰める。

「酷いこと？何か勘違いしているのではないですか？一人も殺してませんよ。人払いの結界を張ってもらっているのです。今ここにいるのは私と貴女の二人だけです。」

グリーンハートは下を見下ろすと人影がひとつもない事を確認する。

「だとしたら貴女の狙いは……………」

「そう貴女ですよグリーンハート。この大陸を汚した罪を持つ女神よ。」

そう呟くと彼女はさらにもう一本ビームセイバーを取り出す。

「大陸を汚した罪？」

グリーンハートは警戒を解かず幼女に問う。

「そう。あの人が大切にしていたこの大陸を汚した貴女を……………」

「

そう言うって幼女はグリーンハートへと斬りかかる。

女神グリーンハート。彼女はいつも部屋に引きこもってゲームやアニメを見たり漫画を読んだりと廃人街道まっしぐらの彼女であるが、その実力はそこら辺のモンスターに等も負けることもなく圧倒的で

ある。だがその彼女が今たった一人の少女に……………。

「くっ！？まさか一撃もいれる事が出来ないなんて……………」

少女に一撃もいれる事もできずに膝をついていた。

「脆い、脆すぎます。これが女神の力ですか？もういいです、これで終わりにしましょう。」

少女は二本のビームセイバーをクロスさせてグリーンハートを連続で斬り裂く。

「退いてなんてあげません。なのでここで終わってください……………ミラージュ・デスワルツ。」

まるでその剣撃はワルツを踊っているかのごとく。そう死のワルツを……………。

「キヤー！？」

グリーンハートは女神化が解けて倒れふせる。

「そんな…………この私がセンスのかけらもないお面を付けたシュークリームが大好きな神様のような声をしたチンチクリンに負けるなんて。」

ベールは拳を地面に打ちつける。

「ネタバレはやめてください。……………さて仕上げといきますか。」

少女は手のひらをベールに向ける。少女の手のひらに小さな魔法陣があらわれる。そしてそこから光がベールに降りそそぐ。

「いったい……何を!？」

「貴女に呪いをかけました。」

幼女は淡々と答えを告げる。

「呪いを!？」

「そうです……貴女は二度とマシユマロ以外は口にできなくなります。」

「な、なんなんですよその意味不明な呪いは!？」

ベールの問いに答えることなく幼女は忽然と消え去る。

「あと三人……。」

対決の女神 降臨する最凶の薄紫（後書き）

いやはやまさかの脅迫エンディングとは……………。

いーすん「つつこむべきところは別にあるような気がしますか?」

あれ?ユウは。

いーすん「今は忙しくてこれません。」

ふーん。まあ、いいや。今回は一度間違えて全ての文章を消してしまっただけにかなりの駄文なのですいません。

いーすん「気をつけなさい。」

はい、すいませんでした。

ヤンデレな薄紫 薄着の銀（前書き）

今回は謎の仮面の少女が主役です。だが正体はまだわからない……
……のか？

ユウ「もうみんな気づいているんじゃないのか？」

うつ！？では本編をどうぞ。

ヤンデレな薄紫 薄着の銀

??? side

現在仮面の少女はラステーションにて女神ブラックハートと対峙していた。

「なるほどあの廃人よりはある程度はましでしたがやはり脆すぎます。」

そう言って少女はバスターライフルを零距离でブラックハートに打ち込む。

「くっくっく!?!」

必死に耐えるブラックハートだがプロセスサユニットが限界をむかえて女神化が解かれる。

「冗談でしょう!?! なんなのよこの強さは!?!」

膝をつくノワールそこに仮面の少女が近づく。

「けっこうやりましたが貴女の負けです。ゆえに貴女にも呪いをかけましょう。」

だがそんなことは気にせずに立ち上がるとするノワールだがそのまま倒れてしまう。

「……まだよ、まだ負けていないわ!ぐっ!?!」

「貴方には使用する武器が何故か全てネギになる呪いをかけましよう。」

「なによ……それ？がくつ。」

ついには意識を失うノワール。

「あと二人。」

そう言つて仮面の少女はまたもや忽然と消え去る。

ユウside

今の俺の心境を言い表すなら『眠い！！』なんと三日三晩眠らずにモンスター退治しんどすぎる。俺は下界から天界の自分の部屋にもどり上着とズボンを脱ぎ肌着とスパッツだけになる。いわゆる薄着になりそのままベッドに飛び込み睡眠行動にはいる。

「お休みなさい。」

???side

私は女神ブラックハートに呪いを掛けたあとあの人がいる天界に戻つて来ていた。

「……………なんだ貴女ですか。」

そう言つて私をどうしてもよさそうに見るのは合法ロリ名前は……ゲロ？まあ、どうでもいい。それより早くあの人の所に行かなくては。私はあの人がいる部屋の前に転移する。転移する直前に『私の出

番これだけですか！？』等と聞こえた気がしたが無視をする。

「私だけだ入ってもいい？」

ノックをして声をかけるが中からの返事はない。不信に思い扉に耳をあてて中の音を聞こうと試みる。中から聞こえたのは『すうすう』。』と言う可愛い寝息。私はその瞬間IQ1200の頭をフルに働かせ自らの取るべき行動を選ぶ。

「寝てるのかな？よし！！し、失礼します。」

無論突入あるのみです。何故なら上手くいけばあの人の天使のような笑顔を上手くいけばあの人の雪の様に白い肌を見る事がいや、さらに上手くいけば堪能することができるかもしれないのだから。

「起きて……はわぁお！？なんて素晴らしいものを見せてくれたー！？」

私の目には理想郷が広がる。そう無防備にも肌をさらした天使が穏やかに眠っていた。

「もう我慢しなくても良いんだよね？レッツベッドイ……ん？」

私はすぐにでもベッドの中に入ろうと歩き出すが何かを踏んだ感触に足元を見る。すると乱雑に脱ぎ散らかされた衣類があった。

「なるほど。メインディッシュの前の前菜といったところですね。では遠慮なくいただきます。くんか、くんか。」

その香りは甘くてクリーミーでこんな素晴らしい事ができる私の理

性はすでに決壊寸前でした。

「近視相姦は犯罪じゃない。むしろ推奨するべきものです。今年の流行語大賞は近視相姦に私が情報操作して書き換えてあげましょう。」

私はその衣類を大切にしまふ事などせずに窓から外へと投げ捨てます。風に飛ばされて何処遠くへと飛ばされていきます。ですが私は気にしません。何故なら服がなければ着替えるものがなくて彼が肌を晒す時間が増えるからです。なんて策士なんでしょう私は。まあ、そんなことはいいです、今は……………。

「レッツベッドイン!!」

堪能しましょう。

「はあああ。あ、あれ意識が？ま、まずいこんなところで眠るわけには……………」

私は女神やモンスターとの連戦の疲れのせいか睡魔に襲われてしまいます。

「ならせめて、ひしっ。」

せめて絡み付いておきましょう。無論仮面は外してました。

「ああ、時がみえ……………ぐう。」

ユウside

何か寝苦しい。そう感じた俺は寝返りをうとうとするが身体がまったく動かない事に気づく。

「こ、これはま、まさか金縛り！？や、やばい初金縛りだよ。目を開けたら白装束の女の人！？怖すぎる。でも目を開ける！-」

そして目を開けた俺の目の前には薄紫色の髪 of 幼女がいた。

「キヤー！？イヤーまじでたー！？」

逃げようにも身体をがっちりプラズマホールドされていてまったく動けない。いやだ呪われたくないー！！

「もう……なにに？」

幼女が声をあげる。ん？どこかで聞いたことあるような？

「あ、お兄ちゃん起きたんだおはよう」

目の前の幼女が可愛い笑顔で朝の挨拶をしてくる。

「なんだお前かびつくりしたあゝ。ところでいつまで抱きついてるつもり？さすがに身体 of 節々がミシミシいつてきているんだけど。」

そう言う to 幼女はさらに抱きつく力を強くする。

「やだやだお兄ちゃんから離れないもん お兄ちゃんだーい好き。」

その言葉は嬉しいのだが……………。

「身体が！？身体がジー リーカーされてる。圧死する！？」

必死に幼女 of 背中を叩いて俺 of 生命 of 危機を訴える。

「やり過ぎちゃったかな？てへ ごめんねお兄ちゃん。」

「可愛いから許す。」

かわいいは正義だね。俺も甘いかな。ベッドから降りて俺は着替えようとするが服がないことに気づく。

「何故に服がない？まさか……………」。

俺はニコニコしながらベッドに顔を埋めている幼女を見る。

「ねえ、俺の服知らない？」

すると幼女はベッドから顔をあげてまたもや抱きついてくる。

「お洋服なんてなくても大丈夫だよ。私が抱きついてあげるから、ほら暖かいでしょう？」

確かに暖かいのだが……………。

「背骨がああああああー！！」

抱きつかれるたびに背骨が粉碎されかけるとはさてはこいつ……………
…わざとか？

「ごめんねお兄ちゃん。お詫びに私の髪の毛といて。お願い」

やっぱり可愛いから許す。

「はあはあ、これはたまらんばい。」

そう目の前の幼女から聞こえるのはきつと幻聴である。

そう現実逃避して俺は目の前の少女の腰まで届くである薄紫色の髪の毛をとかす。

「ところでノワールとベールはどうだった？」

と俺が聞いた瞬間少女の顔から表情が消え去る。

「どうという？」

「お前の目から見て二人は女神としてどうだったかと言う事を聞きたいんだけど……。どうした怖い顔をして。」

「別に……………」

そのわりには手を思いつき握り絞めて手が真っ白になってるけど。

「彼女達は大了たことありませんでした。そんなことよりもっと私を可愛がってくださいお兄ちゃん。」

身体の向きを変えて抱きついてくる少女。しかたなく俺も抱き返す。

「にゃーにゃー、はあはあ、にゃー。」

何故にゃーにゃー言いながらになりながら抱きついてくる少女。その少女に俺は話しかける。

「ところで話しは変わるんだけどお前にお願ひがあるんだけど。」

「なにになに！！お兄ちゃんのお願ひならどんなお願ひでもきいてあげるよ。さあかむひあゝ。」

何故か立ち上がり手を広げる少女。しかしこのお願ひを聞いた後のこの娘の事を考えると少しだけ恐ろしい。

「実はお前にプラネテューヌに降りてパールハートが戻ってくるまでパールハートの振りをしてほしいんだ。」

「え？それって……どういう……ことなの兄ちゃん。」

予想通り顔色が青くなり、あげていた手から力が抜けてだらんとさがる。

辛いがここは心を鬼にして説明する。

「現在プラネテューヌの信仰値がパールハート不在の為に他の大陸に比べてかなり低いのは知っているだろう？それを解消する為に
お前がパールハートの変わりに女神を代行してほしい。様姿なら問題ないお前は見た目はネプテ：パールハートに似ているからな
ほらこのカツラを被れば……………」

等と軽くわらいかけてカツラを少女に被せる。だが少女からの反応
まったくなし。少しだけ心配になって顔を覗き込むがすぐにバック
ステップで後ろにさがる。なぜなら……………」

「イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
と目に光が灯っていない状態でブツブツと呟いていたのだから。」

「ヒイイイイイイイイ！？」

あれはまじでヤバイよ。

「どうしたの兄ちゃん、そんなに怯えて？かわいいな」
とてもいい笑顔なのだが目が笑ってないよ。そしてゆっくりと俺に

むかつて歩いてくる。また一步、また一步と。

「ねえお兄ちゃん？私はプラネテューヌに降りて女神の代行をすれば良いんだよね？」

「あ、ああ。」

また一步。

「でもまだお仕置きする人が二人残っているからそれからでもいいよね？」

「あ、ああ。」

また一步。

「うん。じゃあさ2日に一回位は帰って来ても良いよね？」

「そ、それはちょっと駄目かな。プラネテューヌのシェアの低下はパープルハート不在の件が大きいからせめて一週間に一回くらいならいいんだけど……………」

その言葉に少女は足を止めて。

「嘘……………。嘘嘘嘘嘘嘘嘘ウソウソウソウソウソウソウソウそうそうそうそうそー！！お兄ちゃんがそんなこと言うはずがない、お兄ちゃんはそんなこと言わない！！」

や、ヤバイよヤンデレモードきてしまったー！！

「ちょっと俺の話しを!？」

だがすでに俺の言葉も届かないのか目に光が灯っていない状態でまたブツブツ呟く。

「そつかあ……。やつぱりあの駄目神の四人のせいなあ。ならあの四人殺そう。うふふふふ。」

もう取り返しのつかないところにー!? 仕方ないこうなればかつてネプテューヌ達四人が同時にヤンデレ化してしまった時にそのヤンデレ化を一瞬にして消しさった魔法の言葉を使うか。

「もしがんばってプラネテューヌの女神の代行ができたのなら……」

「……………??？」

俺の真剣な言葉に幼女は俺をじっと見つめる。

「その時は……………一緒に……………お風呂に入ろう?」

「な……ん……だ……と。キヤー!？」

何故か俺のお風呂宣言を聞くと幼女は悲鳴をあげながら悶え苦しむ。

「や、ヤバイよ。遂にお兄ちゃんがデレた。いつの間にか私はフラグを立てていたのでしょうか?ですが今更そんなことはどうでもいいのです!! 重要なのはお兄ちゃんとお風呂に簡潔に言ってしまうえばハ・ダ・力のお付き合いイヤーやったぞ私ー!!」

とりあえずめんどくさかったのでプラネテューヌに転移させました。それにしても変なところでネプテューヌに似ているなあいつは。まあ、同じネプだからかな。等とネプ考えてる俺だった。

「それにしてもヤンデレは怖いあれは一種のトラウマだな。ネプテューヌ又達四人の時は大変だったなあー。イストワールなんか八つ裂き（笑）にされてたし。」

イストワールの八つ裂き（笑）を思い出して笑いを堪えているとSギアに連絡が入る。見るとどうやら5pb・ちゃんのようなうだ。俺は先日存在に気付いたテレビ電話モードに切り替える。

「もしもしユウ君ってほう！？」

何故か顔を赤くして奇妙な声をあげる5pb・ちゃん。

「ん？どうかしたの？」

「う、ううん。なんでもないよ。ところで今大丈夫？」

「問題ないけど。」

「じゃあお願いがあるんだ。今ボクはラステーションにいるんだけど君の転移魔法で今すぐルウィーに連れて行ってほしいんだ。」

5pb・ちゃんの今までにない緊迫した感じに俺も不安を覚える。

「何があった？」

「ルウィーのSSHの本部と連絡が途絶えたんだ。」

「な！？ちよつとまてー！！」

俺はすぐさま部屋に備えつけられているパソコンにてルウィーにいるホワイトハート、ブランの状態をみようとするが……………。

「くっ、やられたー！！」

思わずパソコンの画面を殴りつける。

「どうしたの？」

「ルウィーのブラン、ホワイトハートの状態が確認できなくなっている。」

「それってまさか！？」

「ああ、ルウィーにホワイトハートに何か……………！！？」

これはまさかルウィーのシェアが……………。

「何か……………あつたの？」

「ルウィーのシェアが信仰が大幅に低くなっている。いくらなんでもホワイトハートがこのような自体を引き起こすことはないはずだが。」

あの娘は人一倍がんばり屋だからな。

「一刻の猶予もないってことかな？」

「ああ、だろうな。」

くっ！？あいつをプラネテューヌに送ったのが裏目に出たか。

「どうするの？」

「今すぐルウィーに向かう。無論5pb・ちゃんを拾ってから行くから。一度ラステーションに向かうから。」

「わかったでも……………」

「ん？どうかした？」

「またもや顔を赤らめてこっちを見てくる5pb・ちゃん。」

「ちゃんと服は着てきてね。ユウ君。」

「あっ！？」

薄着のままだった。

「着替えたらずくにそっちに向かうから！！」

電話を切ってすぐさま服を用意して着替え始める。

「プラン無事でいてくれよ。」

ヤンデレな薄紫 薄着の銀（後書き）

次回男の娘の女神様

「ルウィーはもう終わりです。」

「いったい何があったのよ!？」

「SSHは壊滅状態にメンバーもちりじりに。」

「よりもよつてNo.1がいないときを狙うなんて!？」

「何も罪のない住民達まで!？」

「いったい何が起こっているのですか!？」

「貴女がこの大陸の女神ホワイトハート?」

「そう我こそがこの大陸の支配者ホワイトハートだ!!キエー!!」

「貴女を倒すわ。」

「不可能だ貴様にはなネプテューヌ!!女神の身体を手に入れた我の前にはなあー!!行くがいいモンスター達。」

「「はあー!!」」

白の女神の異変。

「ホワイトハート貴女を殺す。」

あらわれる仮面の幼女。

全ての鍵を握るのは……………。

「俺はしめさねばならない。来るべき対話を!!」

次回『白の異変、滅びの予兆』

大正桜にマロングラッセのあらし……………。

なんちゃって

ユウ「ふざけるなあー!!」

白の異変 邂逅するSSH（前書き）

二度も間違えて消してしまった為に少ししかないですが勘弁してください。

白の異変 邂逅するSSH

ネプテューヌ一行side

現在ネプテューヌ一行は大陸を抜けてルウィーに来たところである。

「ここがルウィーかあ、一面真っ白だね。」

「さ〜む〜いです〜。」

ガタガタと震えるコンパ。

「まあコンパの恰好じゃあ寒いわよね。待ってなさい。LEDライト3%発光開始。」

「ヒイイ!? あれ眩しくないですよ? それになんとか暖かいですよ。」

「LEDライトは万能なのよ!!」

どうやらLEDライトから発せられる。熱によって暖を取れるようだ。

「おお、たまには役に立つんだねアイちゃんも。おお暖かい。」

「たまにはって失礼ね。」

「ぬくぬくですうー。」

LEDライトにて暖を取る少女達シニールである。

「でもなんかもうちょい暖かくならないの？」

「私はこれぐらいでちょうどいいですう。」

「そうねよしLEDライト50%発光開始!!」

LEDライトの光が辺りを包む。

「スミース!!」

だがLEDライトの対応にも慣れたのかサングラスをかけて目を防御するコンパとネプテューヌ。

「なに？またエージェントって？」

君のせいなんだけどね。

「なれると大したことないね。」

「サングラス様々ですうー。」

『ぐうおおおおおー!!』

「何叫んでるのよあんた達？」

「え？」

覚えのない叫び声に三人が振り向くとそこには大型のモンスターが三体いた。目を押さえてのたうちまわりながら。

「デカツ!? 何このモンスター食べすぎでメタボになっちゃたの?」

「ねぶねぶ馬鹿言っでないで早く変身してくださいですう!!」

「敵は怯んでるわ今がチャンスよ!!」

戦闘体制入る三人。

「よし行くよ変身!!」

ネプテューヌの身体に紫色のプロセッサユニットが装着される……
…ことはなくメイド服状のプロセッサユニットが装着される。

「ってねぶねぶなんでメイド服のままなんですか!？」

「リーンボックスの時から変更するの忘れていたわ。」

「まあいいじゃない戦闘はできるんでしょう?」

「ええ、いつものよりいい位だわ。」

「もうなんでもいいですう。いくですよ二人とも。」

三人がそれぞれの武器を構える。

「これでもくらいなさい。」

ネプテューヌが敵モンスターの肩口を切り裂く。

「行くですよー!!」

コンパが敵に一気に接近してネプテューヌが斬り裂いた肩口の傷口に注射器をぶっさしてそのまま注射器に注入してある溶解液を打ち込む。そしてその攻撃に耐えきれなかった大型モンスターは倒れる。

「コンパもやるようになったわねえ、私も負けてられないわね。LEDライト収束発射!!」

アイエフのLEDライトが残りの2体のモンスターを焼き払う。そしてその余波がコンパとネプテューヌを襲う。だが……………。

「甘いわ(ですうー)ね。」

それを難なく避ける二人。二人も成長しているようだ。

「何とか片付け『ぐうおおおおー!!』てはいなかったみたいね。」

ネプテューヌの言葉と共にどこからともなく先ほどと同じ大型のモンスターが6匹現れる。

「また出たですうー!?!」

「めんどくさいわね、アイちゃん焼き払ってやりなさい。」
「ごめん、無理。今で電池がきれたわ。」

「「はあ!?!」」

「肝心なところで使えないわね。」

「どうしていつもこんな目に合うんですかー!!」

絶対絶命の三人、だが彼女達を救うためにゲームギョウ界は正義の化身をつかわした。

「まてええええい!!」

その委員長的な声にモンスター達とネプテューヌ達は上を見上げる。

そこにいたのは……………。

「私こそギルドSSH所属No.3ゲームギョウ界の正義の味方日本一よ!!」

ゲームギョウ界の正義の味方日本一だった。

その姿を見たコンパは……………。

「キヤー!?!何なんですかあのテロでも起こす気なんですかー!」

日本一を見たネプテューヌは……………。

「早まってはいけないわ。まだ貴女は若いのだから人生楽しい事はいっぱいあるはずよ!!」

日本一を見たアイエフ。

「相変わらずの危険な存在ね日本一!!私もLEDライトが使えれば……………くっ!?!」

彼女達の反応に疑問を持つ人達も多いかもしれないだが彼女の姿をみれば一目瞭然である。

その大胆な恰好、ぺたんこな胸など最早どうでもよく見せてしまう。重要なのは彼女が身体全体に巻き付けている爆発物ダイナマイトであつた。

「もう安心して私が来たからには大丈夫よ!!」

さらに危険な状態になったよ!!とは口が裂けても言えない一同。爆発物を所持している人物を刺激するのは危険な事を熟知しているコンパとネプテュヌ。そんな時だつた。

特徴的な帽子を被つたギルドSSHのNo.4ガスト

「そこの人達逃げるですよー!!ここは危険ですよー!!」
同じくNo.8フィナンシエ。

「逃げてくださーい!!」

そして初登場で派手にすつ転んだピンク色の髪をしてどこか探偵を彷彿とさせる少女会員No.10シャルロック、通称シャルであつた。

「喧嘩はやめてえー!!あぶしつ!?!」

その三人を見て何やら嬉しそうに話しかけるアイエフ。

「何よあんだ達久しぶりねえ。」

「へっ?.....イヤアアアアアアア!!」
そして絶望の叫びをあげる。三人

「このルウィーは終わりです。」

膝について絶望するフィナンシエ。

「ダイナマイトとLEDライトが揃ってしまったのです。よりにもよってNo.1がいないときに、シルバーハート様先立つガストをお許しくださいですの。」

涙を浮かべながら天にむかって祈りを捧げるようなポーズを取るガスト。

「ふえーんいたいよ。」

こけた痛みに泣きわめくシャル。

「何よあんだ達人をみてそんな恐怖の大王が二人現れたみたいないな叫び声を上げて。こっちはLEDライトの電池が切れてただでさえデーション下がつてると言うのに。」

事実現れたも同然である。

「電池がですの!!」

「まだルウィーには希望が!!」

「いたいよ!!」

ちなみにコンパとネプテューヌはというと...

「コンパとりあえず今の内に逃げるわよ。」

「わかったですう。」

ルウィーの町に逃げようとする二人だが……。足元にうずくまっていたシャルに気づくことなくつまずき転んでしまう。

「「あうち!?!」」

「ふえーん!!」

もはやカオスである。

「正義はかあーっ!!」

いつの間にやら日本一もモンスターを片付けていたようだ。

「ええーい、いったんしずまるですのー!!」

ガストが大声をあげて全員を静めて集合させる。

「まずは初対面の人もいるから自己紹介するんですのー!!」
全員自己紹介中……………。

自己紹介もお互いに済んで現在ルウィーの町に移動中である。

「つまりアイちゃんはSSHっていうギルドに入っているのね。そして貴女達もそのギルドに入っているのね。」

「そのとおりですの。」

「気苦労がたえなさそうなギルドですう。」

「まともな人がいてくれてガストは嬉しいですよ。」

「これ私が使っている胃薬と頭痛薬です。」

「かたじけないですよ。」

どこか通じあっているコンパとガストであった。

そしてルウィーの町に着いた一行であつたが……………。

「ルウィーの町って昼間なのに静かなのね。人っ子一人いないわ。」

ネプテューヌが辺りを見渡しながら言う。

「おかしいわね。私が他の大陸に行く前はもっと活気があつたはずだけど……………」

首をかしげるアイエフ。

「ねえガストさんここにいたら不味いんじゃないんですか？」

シャルが慌てた様子でガストに話しかける。

「そうですね、早くギルド本部に避難したほうがいいかもしれません。」

それに賛同するフィナンシエ。

「わかったですよ。一旦ギルド本部に行くですよ。」

「急がないとアイツが来るかもしれないしね。」

ギルド本部に向かう事に同意するガスト、アイツという存在を提唱して急ごうと急かす日本一。

「アイツってなんのことですか？」

「何をそこまで慌てているのかしら？」

「さあ？ねえみんなさっきから何を慌てているの？それにアイツってなによ？」

アイエフの質問に四人が答えようとする。

「……それは……………」

その時……………。

『それは……………我の事か？』

「……！？」

辺りを闇が包む。

「いったい何が！？」

ネプテューヌが辺りを見回そうとするが何も見えない。

「まずいのですのアイツが来たのですの……！」

ガストが今までにないくらいの驚きの声、いや焦りの声を出す。

「みんな絶対に離れないで!!」

冷静にだが声に若干の怯えを含んでいる日本一。

「イヤー!!」

純粹に怯えきっているシャル。

「まさかこれほど早く気づかれるなんて……………」

呆然と闇を見つめるフィナンシエ。

そして闇が晴れるとそこに立っていた……………一人の少女が。

「まさかホワイトハート様!？」

その姿をみてアイエフが驚きの声をあげる。

「貴女がこの大陸の女神……………」

『そう我こそがホワイトハートだネプテューヌ。』

そうそこに立っていたのは女神ホワイトハート。だが普段の彼女と違い今の彼女を包む衣類は黒一色。そして髪は真っ白へと変わりと
ころどころに赤のメッシュが入っていた。そしてネプテューヌを映
し出す瞳は血を思わせるような赤へと変わっていた。

さらにはその身体には漆黒の闇の羽。闇の奔流が身体を取り巻いて

いた。

白の異変 邂逅するSSH（後書き）

ホワイトハート様にいたい何が!?

一応次回もスパッツ視点です。

密室のE 恐るべきD&a m p・D（前書き）

ブランのおかしくなった原因が明らかに！？今回はさらに短くなっています。

密室のE 恐るべきD & amp; D

ネプテューヌside

正直今私は今までにないほどの恐怖（笑）を目の前の少女に抱く。

「貴女がホワイトハート？それにしても真っ黒だけど……………」

彼女のその姿はかつてラステーションにて出会った女神ブラックハートよりも黒いと言えたわ。

『ふっ、今日は挨拶に來ただけだネプテューヌいずれ貴様の力も頂こう覚悟しておけ。』

その言葉と共にホワイトハートは再び闇へと消えた。

「あれがこの大陸の女神ホワイトハート……………」

私は自然と握りしめてた手の平を開く。

「いったい全体何が起きているのよ！？ホワイトハート様何か黒くなってたわよ。」

アイちゃんがガストにむかって怒鳴り散らしている。まったく駄目駄目ね私を見なさいどんな時でも冷静なネプテューヌよ。

「そうねスパッツ貴方がいれば怖くないわね。」

私はスパッツに語りかける。それを何故か皆がおかしな物を見る目で見ていたけど私はきにしないわ。

私達はあの後ギルドSSHの本部に来ていた。
そしてフィナンシェが語りだす。

「あれは今から800年………すいません真面目にやります。一週間位前の事でした。ホワイトハート様は比較的眞面目な女神様でした。たまに自分の駄目小説を大陸の予算で無理矢理出版してまったく売れなくてまたもや大陸の予算で無理矢理買い戻して経済を破綻させる位の事しかしていませんでした。」

それは大したことしているんじゃない？

そんな私の疑問に答える事なく話しは続いて行く。

「さらに言えばホワイトハート様は影響されやすい人でした。」

「影響されやすい？」

「ほらよくいませんか釣りの漫画を読んだら釣りがたくなる人、グルメ漫画を見たら料理を作ろうとする人。ホワイトハート様は典型的なそれでした。」

「一種の駄目人間ね。」

「ねぶねぶとはまた違ったベクトルの人です。」

コンパまるでそれでは私が駄目人間見たいね。

「コンパ私は普通の可愛い女の子よ、駄目人間やおかしな人達なら

あそこにいるわ。」

私は駄目人間達を指差す。

「やっぱりルウィーじゃあソーラーは駄目ねエヴォルタにしないとね。」

アイちゃん貴女が一番聞きたがっていなかったかしら。ルウィーの危機とLEDライトの電池交換どっちが大事なのよ!!

「アイちゃんルウィーの危機とLEDライトの電池交換どっち大切か分かってますか!?!」

「LEDライトの電池交換。」

コンパ泣いちゃ駄目よ。

「シルバーハート様が犬になっちゃったー!!」

そしてあのシャルと言ったかしら何やってるのかしら。

「……って何ですか。(トヤ顔)」

何でそこで私を見るのかしら……………。

「飴でよければどうぞですう。」

コンパが慈悲深いわね。

「わぁーい。ありがとございます。」

可愛らしいじゃない。

「そこはガストのポジションでしたのに。妬ましいですよ。」

女の嫉妬は醜いわよガスト

「あの私の話し聞いてますか？」

「ごめんなさい正直聞いてなかったわ。」

「ごめんなさいですうー。」

「ぐすん。」

「とりあえず続けてちょうだい。」

「はい。では回想シーンどうぞ」

誰に向かって言っているのかしら？

回想（会話文のみ）

「フィナンシエ私、退魔師になるわ。」

「また微妙なところに来ましたね。」

「ええ、ちなみに既に着替え終わったわ。」

「……………それ何か違います。」

「白装束しかなかったのよ。ちゃんと五寸釘と藁人形も用意したわ。」

「貴女最低です!!」

「良いパンチねフィナンシエさすが我が協会の……うつ」

「またですかもう騙されませんよ。」

「待つて今度は何か……黒歴史? 子安 人? ーンX? 貴方はいつたい……!!?」

「なんですかこの書類の量どれだけ溜め込んでいたんですかホワイトハート様……。」

「……………」

「聞いてますかホワイトハート様?」

『ホワイトハートそうかやはり我はやはり女神の身体を手に入れたのか。』

「はい?」

『これで本能の赴くまま闘うことが出来る!! 絶好調である!!』

「キヤー!?!」

回想シーン終わり

「つまり漫画に影響されたホワイトハート様が自ら呼び出した悪霊にとりつかれたのね。」

「そのとおりです。」

「はた迷惑な話ですう。フィナンシェさん貴女もやはり苦労して
いたですね。」

「はい、それから協会と協会の回りにはモンスターがはびこってし
まいました。」

「迂闊に近づけな『ボオー』熱!？」

私はかつこよく決めようとするが何処からか飛んできた火花で台無
しにされる。

「日本一さん駄目ですよ密室で花火は危険ですうー!？」

コンパの言葉から私は火花の火元日本一を見る。

「えゝ。いいじゃん特撮に火花は付き物でしょう?」

「ダイナマイトに引火したらどうするつもりですのー!」
ガストとコンパのダブルツッコミね。だけど相手は強敵よ頑張りな
さい。

「大丈夫だよ、戦闘の時だけしかダイナマイトは使わないから。あ
つ、シャルも花火する?」

「ありがとうございます。わぁ綺麗ですゝ。」

私は部屋のすみに置かれたダイナマイトを発見する。そしてその大
量な量に度肝を抜かれたわ。明らかに日本一の背丈よりも高く積み

上げられていたのだから。

「えへへ綺麗ですー。」

シャルが何故かダイナマイトの置かれたすみの方へとフラフラと近づく。その瞬間私は出口に向けて走り出す。何故なら次に起こることが予想できたから。ヒント、シャルはドジッ娘よ。

コンパとガストは日本一を注意するのに気を取られて気付いていない。貴女達の犠牲は無駄にはしないわ。

「悪いけど私はまだ死ぬわけにはいかな」「さあエヴォルタLEDライトの試運転よ発光開始!!」「ギャー!!」

一人で逃げようとした罰が当たったのかもしれない。私はアイちゃんのエヴォルタLEDライトの直撃を受けてしまった。あまりの凄い光量に私は倒れふせる。

被害はそれだけでは終わりそうにないようね。

「きゃうん!？」

見事にドジッ娘属性を発動させたシャルは花火でダイナマイトに引火させたようね。

「「ギャー!？」」「」

ガストとコンパは事態に気付いて逃げ出そうとするけれども反対側にはエヴォルタLEDライトが存在しているのよ。

「「ギャー!!」」「」

倒れふせる二人。

前門のダイナマイト。後門のLEDライトまさに地獄ね。

「火遊びをする時は水を必ず用意しましょうね。」

フィナンシェ貴方はダイナマイトは火遊びに値すると言っの？

「さてと鎮火しますね。」

ダイナマイトを消火器で消火するフィナンシェ。一言言わせてもらうのなら……………。

「けむっ！？ごほっ！？」

今日の格言『室内で火遊び、LEDライト使用するべからず』

??? side

「もしも俺だけどオーバー。」

「あれ？お兄ちゃん何かよう？オーバー。」

「悪いんだけど今からルウィーに向かってくれないか？オーバー。」

「構わないけどルウィーにはコードネーム堀江 衣がいるんじゃないの？オーバー。」

「あいつだけだと暴走しないか心配だからねオーバー。」

「わかったわ任せておいてオーバー。」

「済まないが頼んだぞオーバー。」

「うん。任せておいてお兄ちゃんまた後でねバイバイ、オーバー。」

「……………フレンドリーファイヤって素敵よね。」

黒い弾丸はルウィーへと向かう。

密室のE 恐るべきD&a m p・D（後書き）

最近何か上手く書けないんだよね。

ユウ「もともとへたくそだろうが？」

否定出来ない。

集結する女神 圧倒的な紅銀（前書き）

泣き声がよくわからない為にへんなことになっています。

ルウィー編もそろそろ終幕いっただいどうなることやら？

集結する女神 圧倒的な紅銀

ネプテューヌside

「今までの情報を整理するですの。」

今現在ネプテューヌ達はSSHの本部にて作戦会議中……………。

「現在ホワイトハート様は何故か自分が呼び出した悪霊にとりつかれておかしくなっています。」

ガストの言葉に答えるフィナンシェ。

「次に協会と協会の回りにはモンスターが大量発生しているですうー。」

続けて答えるコンパ。

「それだけモンスターが出ているのなら町の市民達は大丈夫なのかしら?」

コンパの答えにネプテューヌが疑問を呈する。

「既に地下ギルドに避難してもらっているですの。」

「地下まであるの!?」

「はいですのこれで町の市民には被害はでないですの。」

「となると残る問題はモンスター達ね。ホワイトハート様の元に辿り着く為にはその大量のモンスターを相手にしなければいけないわけでしょう？」

E・LEDアイエフが首を捻る。

「まともに闘えばかなりの消耗ですうー。」

コンパもあわあわしている。

(アイちゃんのLEDライトと日本一のダイナマイトなら速攻で片付くのではないかしら?)

スバツ・メイド

S・Mネプテューヌはだれもが抱く疑問を口にしようとするが目の前でウキウキしながら発言したいオーラを発しているシャルロック、通称シャルの為に黙って心に秘めておく事にしたようだ。

「はいはい!! 私実は協会内部に直接繋がる道知っています!!」

元氣よく発言するシャル。

「あそこは駄目ですの既にモンスターが大量蔓延っているのですの。」

呆気なく打ち砕くガスト。なぜかニヤリと笑う。

「うつつ……………」

シャル撃沈。

「打つ手なしと言ったところかしら?」

「やっぱり地道に倒すしかないんじゃないでしょうか？」

全員が頭を悩ませていたその時……………。

『ドゴオン!!』

外よりなにかの爆発音が聞こえてくる。

「何が起こったの!？」

直ぐ様立ち上がるアイエフ。

「外には日本一がいるのです!!」

「大変です、行ってみましょう。」

「まつですのフィナンシェとシャルは残るですの。闘うことの出来ない二人は危険ですの。」

「わかりました。気を付けてくださいね。」

「必ず生きて帰って来てくださいね……………」

「待ちなさいシャルそれは死亡フラグよ!!」

そしてフィナンシェとシャル以外が外にでる。

そんな時コンパは……………

（これってただ単に日本一さんが爆発したんじゃないんですか？）

と考えていた。

外に移動中……………。

そこには真っ黒焦げになった日本一と、真っ黒（笑）なホワイトハート（黒歴史）がいた。

『ふん来たかSSHそしてネプテューヌ。』

「ホワイトハートまさか貴女から来るなんてね。」

『正直待ちくたびれたのでこちらから来た。』

「ボスキャラも大変なのね。」

『まっただ。』

きつとボスキャラも協会で一人にいるのは暇だったであろう。

「ねぶねぶ何ボスキャラさんとわかり合ってるですか!？」

「ごめんなさい、とりあえず行くわよ、ホワイトハート様。」

『かかってこい捻りつぶしてやろう。』

「『はあー!!』」

刹那二人の武器がぶつかり合い拮抗する。

「ぐうつ!？」

たが力ではホワイトハート（黒歴史）に圧倒的に分がある為にネプテューヌはすぐに弾き飛ばされる。

すぐに追撃に入ろうとするホワイトハートだが……………。

「ねぶ子があんなにも簡単に！？コンパ、ガスト私がつっ込むから援護よろしく！！」

「わかったですうー。行くですよ。」

「お任せですの。ガスト君総出撃ですの！！」

アイエフ達の攻撃を対処することを選んだようだ。

「喰らいなさい、セイヤー！！」

アイエフがホワイトハートに圧倒的なスピードで近づきE・LEDライトを目眩ましに発光させてその勢いで斬りかかる。

『面白い、だが甘い・・・ぐうお！？』

その攻撃を難なく受け止めるホワイトハート、だがその背中にコンパの注射器から物凄い勢いで放たれる溶解液が直撃する。

『やってくれたなあ小娘えええええー！！』

「まだですのー！！」

激昂したホワイトハートの身体に大量のガスト君がまとわりつきその動きを阻害する。

『ちよこざいなー！！』

「日本ー今ですの!!」

「任せてヒーローの一撃!!」

真っ黒焦げになっていたはずの日本ーがいつの間にか復活してホワイトハートに強烈なキックをお見舞いする。足の裏にダイナマイトを仕込んでいたためにさすがのホワイトハートも吹き飛ばされる。

『ぐうおおおおー!!』

「これで終わりよ!! 全力で行くから覚悟しなさい!!」

止めのネプテューヌの一撃いや連撃がホワイトハートに打ち込まれる。ネプテューンブレイクが……………。

「まだよもう一撃イー!!」

さらに止めの一撃が叩きつけられる。

『ぐうおおおおー!!』

辺りを紫色の奔流が視界を支配する。

「やったですか？」

「待ちなさいコンパそれはやっぱりフラグよ。」

視界を支配していたネプテューンブレイクの奔流が消えていく。そしてそこに立っていたのはネプテューヌ……………の剣を片手で受け

止める灰色のプロセツサユニットを装備したホワイトハートだった。

『これが貴様らの力と言うものか。』

「キヤー!？」

片手で剣を受け止めたままホワイトハートはネプテューヌを投げ飛ばす。

「ねぶ子!？」

間一髪アイエフがネプテューヌを受け止める。

『このホワイトハート凄いよ!! 受ければ受ける程力が沸き上がる。さあもつと撃つてこいよ!!』

「あれってねぶねぶと同じ変身ですうー。」

「まさかまだ三回変身できるとか言わないわよね?」

「アイちゃん縁起でもないこと言わないでくださいですう!!」

「なによコンパだつてフラグ立てたじゃない!!」

罪の擦り合いをするコンパとアイエフ。

「喧嘩している場合じゃないですよ!!」

怒るガスト。

「そつだそろそろフーゼの時間だ。でも大丈夫予約録画は完璧よ
！！」

やはりずれている日本一。

「少しぐらい私の心配もしてくれないかしら？」

結構いっぱいっぱいのネプテユヌ。

『ふはははははは！！』

笑いまくっているホワイトハート（黒歴史）。

いったいこいつら何やってんだ？

そんな時……………。

「ホワイトハート貴女を殺す。」

静かにだが凜とよく響く声と共に圧倒的な質量の砲撃が襲う。

ホワイトハートはそれを片手で受け止めようとするがその圧倒的な質量の前に押されてしまう。

『まあだあだー！！』

だか両手を前に突きだして砲撃を少しずつだが押し返し始める。

「何！？これを防ぐの？なら！！」

砲撃を放った仮面の少女はハードバスターライフルを片手で放ちつ

つさらにもう片方の手から新たにハードバスターライフルを取り出し二つのハードバスターライフルを連結させる。

「ハードツインバスター、マキシマシユート!!」

今まで圧倒的だった砲撃がさらに勢いを威力を増す。

『まだ隠し玉があつたとわああー!!』

その勢いの前に押され、圧倒されるホワイトハート。

「よく分からないけれども今がチャンスね。アイちゃん、コンパ、ガスト行くわよ!!」

「了解(ですう!!)(ですの!!)」

「私は!?!」

ネプテューヌ達も今圧倒されているホワイトハートに攻撃を加える。

「E・LEDライト300%オーバーチャージシユート!!」

アイエフのE・LEDライトから今までにないほどの光量が放たれる。

「とっておきですー!!」

コンパの注射器から極太レーザーが放たれる。

「以下省略。ガスト君特攻ですのー!!」

ガストの描くガスト君が物凄い勢いでホワイトハートに特攻する。

「日本ーダイナマイト!!」

日本一のダイナマイトに全て火が灯る。そしてそのまま飛び上がり蹴りを入れる。

「私だけ何かシヨボーわね。」

通常射撃にて攻撃をするネプテューヌ。ほんとにいっぱい。全ての攻撃が命中して大爆発するホワイトハート。そして攻撃の余波で変動するルウイーの地形。

「変身は残り二回ね。」

「アイちゃんだからやめるですう!!」

「待つですの。何か様子が変ですの。」

爆発がやみ辺りを立ち込めていた煙が消え去る。そしてアイエフの予想通り……………。

『そうだこれで良い、このみなぎる力溢れだすパワー。我が世の春がきたー!!』

身体に黒い光を纏うホワイトハートがいた。

「まさかツインバスターが!?まだです!!」

仮面の少女もそのホワイトハートの姿を見て驚くが直ぐ様ビームセイバーを両手に持ちホワイトハートに斬りかかる。だが……………。

『馬鹿が！！』

それを軽く戦斧で切り払われる。

「そ、そんな。キャー！？」

地面に激突させられる仮面の少女。

「はぁー！！」

『ふんっ！！』

爆発からまたもやいつの間にか復活した日本一が回し蹴りを放つが逆に殴り飛ばされる。

『楽しいなー！！ふはははははー！！』

「これでも喰らいなさい！！」

アイエフがLEDライトの収束発射の連射を撃つ。

『喰うわけがないだろうが！！』

それを軽く避けるホワイトハート。

「いくらなんでもありえないわ。」

そんなホワイトハートを見て啞然とするネプテューヌ。

そしてそんなネプテューヌの前に立つホワイトハート。

「くっ!？」

『ネプテューヌこれで終わりだ。貴様の力も頂こう。』

ネプテューヌにゆっくりと歩みよるホワイトハート。
だが……………。

『何!？』

ホワイトハートの前に一本のネギが突き刺さる。

「なによ苦戦しているじゃないのネプテューヌ。」

ネギが飛んで来た方向を見るとそこにはラストিশヨンの女神、ブラックハートことノワールが立っていた。なぜか両手にネギを持っている。

「なぜ貴女がここに？」

疑問を抱くネプテューヌ。

「ちょっとセンスのない仮面つけたやつを追いかけてきてね。まあ、今はそんなことよりもあれをどうするかのほうが重要みたいね。」

ノワールの瞳は地面に突き刺さったネギを見て驚くホワイトハートを捉える。

そんなホワイトハートに蛸も殺せるかどうかも怪しいぐらいの勢いの砲撃が当たる。本人は気付いていないが。

「私も……います……わ」

「うわ、何よあんだ！？つてもしかしてベール？」

「前にあつた時より凄いやつれてるわね。」

「貴女……達もマシユマロシ……か食べれなくな……ればわかります……わ。」

「ああ、貴方もあの意味不明な呪いを受けたのね。」

「ええ。マシユマロシか食べられなくなる呪いを……かけられて。栄養失調で……立っているのも精一杯……ですわ。」

「呪い？ブラックハート様が持っているネギに突っ込みを入れるベきか迷っていたのだけれども……。」

「私のも呪いよ。持つ武器全てがネギになる呪いよ。ネプテューヌ貴女のそのメイド服も呪いなんでしょう？」

「これは自前よ。」

「何よあんだコスプレにでも目覚めたの？ところでコンパさんはいないの？」

「コンパならあそこで伸びてるわ。」

ネプテューヌが指で指し示した方向にはコンパ、ガスト、アイエフが倒れていた。ちなみに日本一は何故か無傷で新しくダイナマイトを装備しているところであつた。

『ふはははははは！！女神が勢ぞろいかこれは探す手間が省けたと
いうものだ！！』

戦斧をネプテューヌ達に向けるホワイトハート。

「いろいろ積もる話もあるけれど今は。」

剣を構えるネプテューヌ。

「あれを倒すほうが先決ね。」

ネギを構えるノワール。

「そ、そう……ですわ……ね。」

ぶるぶると身体全体が震え、槍を持つ手も危なっかしいベール。

「……とりあえず貴女は下がりなさい。」

「そう……させ……てもらいますわ。」

ネプテューヌとノワールの言葉にベールはコンパ達が倒れているところまで下がりパタンと倒れる。

「そういうブラックハート様は大丈夫かしら？そのネギで闘えるの？」

ネプテューヌはノワールの構えているネギを見つめる。

「問題ないわ、私無手でも闘えるもの。それにこうすれば結構行け

るはずよ変身！！」

『s e t u p』

ノワールの身体に黒いプロセッサユニットが装着される。

「その姿はあの時の新型まさかブラックハート様だったなんて!？」

「話しは後よ今はあいつを……………!？」

ノワールが言葉を紡ごうとするが轟音にかきけされる。そう仮面の幼女が放ったハードバスターライフルによって。

『ほう、まだ動けるとはな。だが貴様の力では私は倒せない。』

「私は負けない。」

再度ハードバスターライフルを打ち込む。その反動で仮面にひびがはいるのにも構わずに。

「私は負けられない。」

二つのハードバスターライフルを両手に持ち同時に放つ。仮面に直線状にヒビがはいる。

「私は……………負けたくないいいー!！」

二つのハードバスターライフルを連結させ放つ。それと同時に仮面が砕け散る。仮面の下から現れた顔はどことなくネプテューヌに似ていた。そしてその青い瞳はまるでネプテューヌが女神化した時と同じような青色をしていた。さらに仮面が割れると共に彼女の身体が急激に成長する。その姿は女神化したネプテューヌと同じ位か少し

小さい位にまでの大きさとなっていた。

「あの娘もしかして女神？いえ違うあんな女神見たことないもしかして女神候補生？お兄様が新たに造ったとも言っの……………」

そんなノワールの眩きも少女の悲痛な叫びにかきけされる。

「私はお兄ちゃんの為に頑張らないといけないのに！！お兄ちゃんの、お兄ちゃんの……………お兄ちゃんの為にiiiiiiii！！」

その叫びと共に突如少女の身体が光に包まれ、そして周りに広がって行く。

「何なのこの光！？」「くっ！？そんなプロセスサユニットが！？」

『ぐうおおおおー！？馬鹿な我の力がー！？』

その光に包まれたネプテューヌ、ノワール、そしてホワイトハートは強制的にプロセスサユニットが解除された。

「これこそが私、女神候補生ネプギアにお兄ちゃんより与えられた能力、絶対領域・劣化。お兄ちゃんの絶対領域には劣るけれど貴女達を無力化することぐらいは簡単にできる。」

『身体が動かないだと！？』

「とどめです……………」

少女がいや女神候補生ネプギアがそう静かに呟く共に彼女の手にしていたビームセイバーが絶対領域・劣化の力を受けてその大きさ、質量を増して行く。

「貴女には分からないでしょうね。この私を通して出ている力が！」

ネプギアの身体が紫色の光に包まれる。

『なんだというのだ貴様ー！？』

そんな言葉を気にも止めずネプギアはホワイトハートにむかって走り出す。

そして……………。

「ここからいなくぶぎゅ！？」

そして石につまづいて思いっきりこけた。

その瞬間時が止まった。いや凍りついた。

「だ、大丈夫かしらあの娘？顔面うちつけたわよ。」

呪いを受けたというのにネプギアの心配をするノワール。

「セリフ決めた後にあれはつらいよね。」

ネプテューヌも渋い顔をしながらネプギアを見つめる。

そしてネプギアが、がばつと身体を起こす。そして自分の状態を周りの状態を見て顔を真っ赤にする。

『ふはははははー！！無様だな小娘。』

ホワイトハートの笑い声が辺りに響く。そしてその笑い声を聞いたネプギアの目に涙が溜まる。

「うつ、ぐすつ、ふえ……………」

『ふふふ、あーはははははははははは！！』

とどめのホワイトハートの笑い声でネプギアの涙腺が決壊した。

「ふえーん！！うつつお兄ちゃん！！」

白い目でホワイトハートを見つめるネプテューヌとノワール。

だがやはり笑い続けるホワイトハート。

『我を笑い死にさせる気が小娘。』

「ふえーんお兄ちゃん助けて。うつつ、うわーん！！」

その瞬間ネプギアの横の空間に亀裂が現れる。よくよく見ると空間に赤い剣の刀身が生え出ている。

さらに全員の身体に言い様の知れない悪寒と恐怖が襲う。

「な、何なのよあれ！？」

自分の震える身体を抱き締めるノワール。

「いったい何が！？でもなんだろうこの感じ覚えがある？」
謎の感覚に懐かしさを覚えるネプテューヌ。

『この我が恐怖するだど！？』

謎の感覚に恐怖するホワイトハート。

そんなことにお構い無く、亀裂は広がって行く。

中から出て来たのは自らの髪と同じ顔色をして腰を抜かした5pb.

そして……………。

「さてと誰かな家の娘を苛めてくれた愚か者は？」

その身体に真紅のプロセッサユニットを装備し、紅いガンブレードを持った一人の男の子いや一人の男の娘。

そうユウことシルバーハート・レッドモード。怒りの赤が圧倒的な怒気を放ちながら立っていた。

「正直に答えれば9割殺しで許してあげるよ」

その時のシルバーハートの笑顔はその場にいた全員の一種のトラウマになったそうだ。

集結する女神 圧倒的な紅銀（後書き）

この後書きを読み飛ばしても本編になんら支障はありません。なのでまあ、お任せします。

黒い弾丸 side

「最高ね ネプギアったらホントにこけてるし。あははは。」

黒い弾丸ことブラックシスターユニは今最高にハッピーな状態であった。

なぜなら本文でネプギアがこけた原因はなんと彼女のせいなのだから。

彼女が石を狙撃してちょうどネプギアの足元、転けやすい場所に弾いたのだ。

「なによあの娘泣き出してるとし。あー日頃の鬱憤が晴れるわー。いつもいつも私とお兄ちゃんと一緒にいる時間邪魔するし。アハハハ、いい気味。」

だが彼女は知らなかったこの後自分自身に起こる悲劇に。

「え？」

大決戦白の大地 暴走する銀色（前書き）

ネプギアがつけていた仮面は鬼心の仮面といます。装備すると全能力がはねあがりますが身体が幼児化してしまいます。

今回のお話を見るうえでの注意点

ブラン、ブランに取り付いていた悪霊、ネプギア、怒りの赤は噛ませ犬。

シルバーハート様が暴走します。覚醒はしません。

ですがユニが覚醒します。

性転換

以上の点を気を付けてご覧くださいね。

大決戦白の大地 暴走する銀色

ユウside

そういえば何処かの誰かが言っていたっけ、怒りのスーパーモードはいけないと。でも俺のはレッドモードだから問題ないはずである。とりあえず俺は周りを見渡し状況を確認する。

ラストイションから連れてきた5pb.ちゃん。なぜかこちらを見てガタガタと震えている。そんな薄着だから寒いのだろう。

「お兄ちゃん!!」

そして今俺の胸に泣きながら飛び込んで来たネプギア。幼女形態ではなくなりいつもの姿に戻っていた。鬼心の仮面が破損したのかな?とりあえず頭を撫でておきましょう。

「ふへへ〜。」

まったく可愛らしい。誰かなこんな可愛らしい娘を泣かした馬鹿は胴体真つ二つにしてやるよ。

「あのねお兄ちゃんあの黒い奴が私を苛めるの。」

黒い奴その言葉に俺は自らの記憶の中で黒と言えばノワールしかないと思うノワールを見る。

「ま、待ってお兄様わ、私じゃないわ!!あいつよあいつ!!」

なぜかネギを持ったノワールが慌てた様子で別の方向を指差す。そ

れにしてもネギが友達のアイドルを思い出すな彼女もいつも両手にネギを持って歌って踊っていたな。

まあ、そんなことはどうでもよくてノワールが指差した方向を見ている。

そこには俺の妹の一人であるブランが居た、なぜか真っ黒なのだがあれは何かにとりつかれたのかな？ 禍々しいオーラが漂ってくるしね。

「なるほどね、ブランが変なの呼び出して身体を乗っ取られたって言ったところか。」

なら話しは簡単乗っ取った奴を完全消滅させればいいだけだ。

『そうだこの女神ホワイトハートの身体は私が私が頂いた。』

ブランの中にいるであろう奴がブランの身体でブランの口でブランの声で話し掛けてくる。

…………… 虫酸が走るな。

まあ、イストワールに任せきっていた俺の責任でもあるな。

『何か言ったらどうだ最強の女神シルバーハート。』

「あいつお兄様ことを知っているの？」

ブランの身体を使っているんだ記憶も知っていても当然だろうな。

「シルバーハート私はその名前に聞き覚えがある。」

ネプテューヌの記憶が戻りつつあるのかもしれない。それに関しては今は言いだろう。

そう今は……………。

「俺の罪は三つ。」

『何を言っている？』

「一つはイストワールに任せっきりで妹達の事を疎かにしてしまっ
た。」

とりあえず帰ったらイストワールは火炙りの刑の方向で。

「二つ目に妹達を傷つけ泣かせてしまった。」

「お兄ちゃん……。」

とりあえずネプギアそんなチワワみたいな目で俺を見るな。とき
めくだろうが。

「そして三つ目に今の俺は女神でありながら怒りで、私情で行動し
てしまっている。」

ルウィーを崩壊させたらごめんなさい。

「俺は自分の罪を数えた。」

怒りの感情を抑えながら俺は………告げる。

「さあ、お前の罪をかぞ『先手必勝だ喰らうがいい!!』……………」
「」

奴が何やら放ってくる俺はそれを右手を出して受け止め打ち返す。
大したことのない攻撃だしなああの程度では町ひとつ壊滅させること
が出来るぐらいだろうな。だがそんなことはどうでもいい。そう
だそんな………ことは………どうでも………どうでもいい。

「なんてことをするのよあの馬鹿ー!!お兄様の決めゼリフに被せ
るなんて!-!」

ナニヲゼツキヨウシテイルノダロウカノワールハ？

「このルウィーはもう終わりがもしれないね。ならボクはSSHの会長として住民の避難を！！」

アレコシヌケテナカッタノ？

「アアアアアアアア！？いやー！！思い出したこの怒気はお兄様ー！！」

ドウヤラキオクガモドツタヨウダナネプテユース。

「これで貴女達は終わりです！！アハハハハハ！！」

ソウワライナガラネプギアハテンイスル。ナンダイガイトゲンキダネ。

『な、なんなんだ貴様は！？』

「このガンブレード・紅は剣でありながら銃でもある。そしてリロードすることが出来るのは最大十二発。そしてその弾には二種類ある。ひとつはこの銀色の通常弾。これを十二発全てリロードしてもお前を三十二回殺せる程度。だけどこの赤い弾を十二発全てリロードすればゲームギョウ界を三十九回滅ぼす事が出来る。故に赤を十二発リロードすることにしよう。」

俺は赤い弾を、俺の魔力を込めた弾を十二発全てリロードする。そしてシリンダーを回転させる。

《アカ、アカ、アカ、アカ、アカ、アカ、アカ、アカ、アカ、アカ、アカフルスキャン!!!》

ガンブレードから電子音声が聞こえる。どうやら十二発全ての弾がリロードを終えたようだ。

「「「ちよつ、待つて!？」」」

みんなが何やら言っているがどうしたのやら？

「このガンブレード・紅には全てを吹き飛ばすバスターモードと全てを切り裂くタイタンモードがあるがどちらを使うかな？」

「「「どっちも駄目ー!!」」」

「では間をとってタイタンモードで。」

「どう間をとったー!!」

皆さん息びつたりですね。

.....おのね。

何やらブランの様子がおかしい？身体から黒い闇が吹き上げている？

『おのれ、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ、おのれええええー！！』

ブランから大量の闇が吹き上げる。それと同時にブランの中から悪霊の気配が消える。ブランの身体を捨てたのか。その証拠に闇は

膨れ上がりながら形を形成して行く。とてつもない大きさへと。

「これは特撮もののお約束の巨大化！？キター！！」

彼女日本一さんの言う通りに闇は形を……………あれはドラゴンかな？
黒いドラゴンへと姿を変える。かなりの大きさだな、あれは下手したら天界にとどくかもね。

『ぐうおおおおー！！これでこのゲームギョウ界は終わりだー！
！私の業火で全てを焼きつくしてやるわ！！』

「このままではゲームギョウ界が！？そうだ女神五人が力を合わせればアレを倒せるかもしれないわ。みんな力を合わせるのよ！！そして貴女達も巨大化するのよ！！」

日本一さんはいったい何を言い出したんだ？まあ彼女の事ははつきり言ってもいい。それよりも今は倒れているブランのところに俺は駆け寄る。そして膝ま付きブランの頭を膝の上におき軽く身体を揺すりつつ声を掛ける。

「ブラン大丈夫か？しっかりしろ！！」

「ううん、お兄様？……………うそ？お兄様なの本物の？」

「ああ、そうだお前の兄のユウだ。まあ、俺の偽者なんかいたら会って見たいけどね。」

「お兄様……………うぐつ、ぐすつ。」

ブランの瞳に涙が溜まっいく。まったく仕方がないな。

「ほらおいで今は泣きなさい。」

俺は両手を広げてブランを腕の中に導こうとする。

「お兄様ああー!!」

だがなぜか思いっきり膝に顔を埋めるブラン。そして一言も言葉を
はっさなくなる。

「ブラン何をやっているんだ?」

「ハアハア……………ふともも。」

「はい?」

「お兄様の生太もおおおおー!!」

そう叫び頭をぐりぐりと押し付けてくるブラン。

「お前は復活したとたんそれがー!!」

俺はブランを引き剥がそうとするがなぜかびくもしない。そして
そのせいか空中から飛翔してくる紫色に気付けなかった。

「私も混ぜてー!!」

「何っ!?ネプテューヌお前やはり記憶が!?!」

空中から飛翔してきたネプテューヌ。ただ単に飛び付いてきただけ
なんだけどね。

「お兄様ー！！ぐへへー。」

ネプテューヌは飛び付いてくると共に俺を押し倒す。

「頭打ったー！！」

地味に痛い……。だがネプテューヌは俺の叫びを気にする事なく俺の胸に顔をぐりぐりと押し付ける。

「お前ら状況を考えてろー！！」

「「考えない！！」」

「何故そこで息ぴつたりなんだー！！」

こうなれば最後の手段と思い俺はガンブレード・紅で二人を吹き飛ばそうとするがガンブレード・紅が手元にないことに気付く。

「これはボクが預かっておくね」

いつの間にやらspb・ちゃんが大事そうに腕に抱えていた。

「ちよつとそれ返してー！！」

「駄目だよ、久しぶりに兄弟水入らずなんだからね。ごゆっくりどうぞ」

「はかったなああー！！」

「ほらブラックハート様も恥ずかしがってないで久しぶりのお兄様を堪能してきたら？」

5pb.ちゃんに背中を押されてノワールがよたよたて近付いてくる。そしてそのまま俺の近くに膝をつく。

「……お兄様。」

「……ノワール。」

「本当ならここでお兄様を助けて好感度を大幅UPと行きたかったのだけれど……。」

「それをここで言ってしまうと何の意味もないと思うが。」
「だけど、ただどね……。」

その言葉と共にノワールの身体がガクガクと震えだす。まさかこの娘！？

「来ちゃったのよ禁断症状が、故に今は欲望のままに行動させてもらっわ。」

「やめろ落ち着け！！今助けてくれるならお前が言っていたリリカルなんとかの恰好でもスクール水着でも着るから………イヤー！！」

ノワールは俺の叫びを華麗に無視すると ネプテューヌとは反対側に抱き付きいや絡み付き頼ずりしてくる。

「やめろお前らー！！こんな事してただですむと思うなよー！！」

「お兄様そんな涙目で言っても迫力はありませんわ。むしろ逆に襲ってくれと言わんばかりの可愛らしさですわ。お兄様萌え萌えですわね。」

「お前ベールなのか？随分とやつれたな。」

「それは聞かないで下さいな。そんなことよりお兄様少し位喘ぎ声とか出してくれませんか？私の入る場所がない今は撮影に専念せざるを得ないのですね。故に少し位色っぽさが必要なのですわ。」

「意味が分からない……ってブラン何やってんだ！？」

「……私の全力を持ってもびくともしないなんてやはりこのスパッツもプロセッサユニットなのね。」

「や、やめろひ、引つ張るなー！！」

ブランが思いっきりスパッツを脱がせようとするが一応プロセッサユニットだから簡単には壊れたりもしないし脱げたりもしない………はず。

「ブランそのままでは駄目よ女神化して一気に行くわよ。ネプテューヌ又貴女は右から私は左から行くわ。ブランはそのまま。ベールは撮影続行よ！！」

「……了解！！」「」

貴様ら何故そんなに仲が良いの？って今はそんなことはどうでもいいか。このままではこの小説が18歳未満は閲覧不可能となってしまうー！だがまだ手はある。ネプテューヌがスパッツを脱がせるのに手一杯の為に右手があいた。今なら………。

「ユニー！！俺だ俺、狙撃でこいつら全員撃ち殺せー！！」

俺は右耳に付いている小型トランシーバーでユニに連絡を取る。

「お兄ちゃん私狙い撃つわね。」

「ああ、頼む。」

「お兄ちゃんのプロセッサユニットの弱点を……………」

「は？」

「狙い撃つぜー!!」

「このアホー!!」

ユニの放った狙撃が俺のプロセッサユニットの弱点簡単に言えば繋ぎ目に直撃する。故にプロセッサユニットがパージしかける。だが何とか気力と魔力で押し込める。

「これはなんてテラエロス。ぶはあ!？」

その声と共にユニとの通信が途絶える。あいつもただではすませない。

「……とりあえずいただきます。」「……」

何かこいつらもうクライマックス!？

「待てまだブランに取り付いていた悪霊が。」

「レッドフルバースト!!」

《レッドフルバースト》

『ギャー！！』

「ちよつと5pb・ちゃん何やってんの!？」

「悪は滅びたよさあみんな思う存分やつちゃって!!」

「」「」「よつしやあー!」「」「」

5pb・ちゃんまさかの人の武器でボスキャラ撃破とは経験値総取りだね。それにしても俺はこのまま妹達によつて公開『ピー』されてしまうのだろうか？嫌だそれだけは嫌だ!!何故だ今回のお話は怒りの感情に身を任せた殺戮劇だったはずだ。それなのに何故だ、何故こうなった……………。

「このままでいいのですか？」

ふと絶望に染まった俺の心に誰が囁き掛ける。そしてその瞬間時が止まる。

(誰だ俺の心に囁き掛ける者は。)

「私は神この世界の創造者。」

「ああ、この声トマ「違います!!」あつそう。」

「それで何の用？」

「貴方の力を解放しましょう。全てを破壊する力を。物がたりの筋

書きさえも破壊する力を!!」

「これ以上破壊してどうしろと?」

「この世界は何者かによって書き替えられています。貴方にはその書き替えられた筋書きを元に戻してほしいのです。」

「筋書きを……………」。

「破壊されたのなら逆に破壊すればいいのです。」

「……………!?なるほど破壊された筋書きをその力で破壊して元に戻せと言うことか!!」

「その通りです!!さあ行くのですユウ、この世界の最強の女神シルバーハートよ物語りを全てを破壊するのです!!」

「わかった俺は破壊の力を正義の心で使う!!ありがとうトマ」だから違います!!」はいはい。」

「そろそろ時間です。それでは行くのですシルバーハートよそして……………世界の筋書きを元に戻すのです!!」

そして時は再び回りだす。

「うおおおおおおおー!!」

俺の身体が光に包まれる。そして俺の身体にまとわりついていた三人を吹き飛ばす。

「お兄様が光ってる?」

「……………何が起きてるの？」

「まさかこれは変身シーン！！」

「そうですねこの光かたまさに変身シーン、なら今お兄様はこの中で変身中！！」

「……………つまりは、は・だ・か！！」

その時全員が光の中に突撃しようとする、だが全員がごとごとく弾きとばされる。そして徐々にひかりが晴れていく。

「不味いわ、このままではお兄様の白い肌が！！」

「……………見られなくなる」

「……………まだまだー！！」

最後に光がひととき輝きを増すと四人を弾きとばす。

そしてそこに立っていたのは……………。

「恥辱のピンク。シルバーハート・ピンクモード見参」

なぜか身体が明らかに縮んで十歳位になっていたユウだった。

そして時が止まる、今度は神のせいではない。ユウのリリカルな魔法少女の黒い方を彷彿とさせる姿を見て。ちなみに髪の毛と目の色はピンク。プロセッサユニットも無論ピンクである。

そして黙り込む四人にユウが話しかける。

「ねえお姉たん達どうして黙ってるの？」

「……ぐはあああ!?!」「」「」

突然のお姉たん宣言に全員が吐血しかける

「あははオモシロイ。」

クスクスとユウは笑う。その仕草に女神四人が息を荒くする。

「まさかのシヨタツ娘来たわね!!」

「あれはフェ トちゃんね素晴らしいわバリアジャケット完全再現
とはお兄様素晴らしいわ。あえて色をピンクにするとこも侮れな
いわね。」

「んゝ少し違うよこの姿の時は小さくなるだけじゃなくてからだも
女の子になるんだよ。ほらっ。」

ユウはプロセッサユニットのスカートを軽くめくって見せる。

「」「」「」……。「」「」

またもや全員の時が止まる。そして……………。

「あゝお姉たん達エッチな事考えたでしょう。」

女神である彼女達は邪な、エッチなことなんて考えるわけがあるは
ずが……………。

「女の子どうしなら問題ないわー!!」

……あつた。ネプテューヌがユウに向かって走り出す。そしてそのまま飛びかかる。

「はい一名様ご案内。ばあくねつう！しるばーピンクアイアンクロー。」

そして顔面をアイアンクローされる。

「あ、頭が割れるー！！」

「ひいーとえんど」

そしてネプテューヌの頭からなつてはいけない音がなり手が放される。ネプテューヌは力なく地面に倒れる。だが……………。

「まだ僕のターンは終わってないよ」

さらにユウはピンク色の杖を取り出してそれをネプテューヌの頭に突き付ける。

「あれはレイ　ングハート！？不味いわネプテューヌ！！

ノワールの絶叫が合図となり……………。

「全力全開シルバーピンクブレイカー！！×3」

ネプテューヌに危険なブレイカーが三発零距离で撃ち込まれる。

そこに残ったのは紫色の何かだった。

「……イヤー！？」「」

三人はそこでやっと事の重大さを思い知る。

「はい三名さまとめてご案内。」

その言葉と同時にユウが空に舞い上がる。

「それでは参りましょう。集え赤星全てを滅する焰とかせ!!我が女神としての恥辱を持って貴女達にやすらかな地獄をファイナルビツグバン!!」

ユウの持つピンク色の杖から圧倒的な質量の魔力がブラン、ベール、ノワールを吹き飛ばす。

「ふざけんな……………」

「この私が……………」

「ネギ……………」

三人が倒れているのを確認するとユウは通常のシルバーモードに戻る。

そして……………頭を地面に打ち付け始める。

「もうこんなのイヤー!!」

「ユウ君落ち着いていたいどうしたの!？」

「そうだよシルバーハート様頭が割れるよ!？」

そこに5pb.と日本一が止めに入る。

「離してくれ!!いくら暴走していたとはいえあれはないだろうが

「！！！」

「ユウ君とりあえず落ち着いてじゃないとユウ君の？エピソードここではらすよ！！」

「それは勘弁してください。」

ピタッと動きを止めるユウ。

「それほど？エピソードの力は強いんだね。」

日本一はうんうんと腕を組みうなずく。

「ならちゃんと説明しようか？」

「サー、イエッサー！！」

それはとても見事な敬礼だったそうなの。

「それにしても家の会長は女神様ですら黙らせてしまつとは恐るべし会長私も負けてられないわ！！」

5pb.の凄さは日本一にの心に火を灯したようだ。ちなみに彼女のダイナマイトは品切れだそうだ。

ユウ説明中……………。

「なるほどね、にわかには信じられないかな？」

「でも会長は信じるんだよね？」

「信じる信じないはどうでもいい。それでは俺は……………おいユ二そろそろこっちに来い。」

右耳のトランシーバーでユニに連絡をする。

「もう……来ているわ……」

音もなく俺の後ろから現れるユニ。何故かボロボロである。

「とりあえずお前おに仕置きをします!!」

「あんな素晴らしいものを見せてくれたうえにお仕置きまでしてくれるの!？お兄ちゃん今日は太っ腹ね!!」

「何でお前嬉しそうなんだ？はあ、めんどくさいから放置してと……とりあえずs p b . ちゃん俺は行くね。」

「行くってどこに?」

「それは「何だろう私お兄ちゃん無視されているはずなのにこんなに嬉しいの?何でこんなに気持ちいいの!!」お前いい加減にしろ……!!」

俺は苛ついてユニの右肩の関節を外す。

「ああー!!」

何故か笑顔のユニであった。

「さてと俺はそろそろ行くよ。」

首以外の関節を全て外すしたユニを抱えてs p b . ちゃんに話しかける。

「悪いけど5pb.ちゃんもしこの娘達が目覚めてそれでも俺の元にくるといふのならプラネテューヌに來いと伝えてくれ。それとこの鍵の欠片を渡しておいてくれない？」

「構わないけど……………」。

「どうかした？」

「さっきのピンクモードだっけあれREDちゃんに動画送っておいだからね」

「……………え？」

その言葉を聞いた瞬間俺直ぐ様転移してREDちゃんを探しに旅に出る事になるのはまた別の話である。それにしても……………。

「どうしてだろうか勝手に涙が溢れてくる。」

ついにはあんな恥ずかしい恰好までしかも性別まで変わるとは……………。あの自称創造者はいずれ抹殺だな。

大決戦白の大地 暴走する銀色（後書き）

ユウどつたの？

ユウ「……………」。

ユニ「お兄ちゃんどうしたのそんな隠し芸があまりにも面白くなくて忘年会でドン引きされた平社員みたいな顔して？」
随分具体的だねユニ。

ユウ「いいねお前達は楽しそうで俺なんか……俺なんか！ぐすん……………」。

ど、どうしたの？

ユウ「間に合わなかった。動画が上がるのを止める事が……………」。

ユニ「本当だバッチリあがってるわ。再生回数999999回、アクセス数測定不能……………。凄まじいわね。」

ユウ「鬱だ……………」。

とりあえずドンマイ。

ユニ「と、ところで私気になった事があるんだけど。」

ん？急な話題転換だね、どうしたの？

ユニ「お兄ちゃんが使っていたガンブレード・紅のフルバースト、どうして5pb.さんはブランさんに入っていた悪霊しか倒す事が

出来なかったのよ？フルバーストはゲームギョウ界を崩壊させてしまう程の威力なんでしょう？」

あれは簡単ユウ以外の人物が使うと威力が1%に大幅に下がってしまっんだ。

ユ二「1%であの威力は危険ね。」

そうだね。とりあえず説明不足ですいません。次回はもう少し気を付けるのでご容赦ください。

ユウ「青酸カリ……………」。

大惨事女神戦争 銀の惨劇序（前書き）

今回のお話までルウィー。次回からプラネテュー又編。

大惨事女神戦争 銀の惨劇序

ネプテューヌside

ユウが泣きながら消え去って行った後5pb.ちゃんと日本一ちゃんはい倒されたボロ雑巾の様になった女神四人とコンパ、ガスト、アイエフを回収してSSHの本部に戻っていた。

「皆さんがボロ雑巾になっちゃったー！！ってなんですか。」
「黙りなさい。」あうちー！！」

シャルのボケに5pb.ちゃんの容赦ない突っ込みが入る。

「会長戻って来たんですかー！！」

「うん。ただいまフィナンシェ。とりあえずみんなを起こすの手伝ってくれるかな？」

「わかりました。皆さん起きてください。」

「駄目だよフィナンシェそんな軽く揺すった程度じゃ起きないよ。ほら皆起きて、はっ！！せい！！とりやー！！」

5pb.ちゃんの鉄拳が全員の鳩尾に決まる。とりあえずかなり痛そうである。

「痛いすうー。」

コンパが鳩尾を抑えながら目を覚ます。

「なんか身体がミシミシ言ってるんだけど。」

ノワールが身体を油切れのロボットの様にして動かして立ち上がる。

「何か食べ物を……………」。

ベールが空腹で目を覚ます。

「はい。マシユマロでよければどうぞ」

そこにシャルがベールにマシユマロを手渡す。呪いはベールを逃さない。

「もう少し優しく起こして欲しかったです。」

ガストも鳩尾を抑えながら目を覚ます。

「……………私魔法少女になるわ。」

またもや危険発言のブラン、ユウに影響されたのだろうか？

「ここは誰？私はスパッツ……………」。

やはりスパッツなネプテューヌ。

「これで全員かな？」

5pb・ちゃんがいつの間にか装備していたメリケンサックを外しながらみんなを見る。

「まだ一人眠っている人がいるですよ。」

ガストは5pb・ちゃんの言葉にとある方向を指差す。そして全員

がその方向を見る。そこには……………。

「ぐおおおー！ー！ぐおっ、……………」
「ぐおおおー！ー！」

爆睡しているE・LEDアイエフがいた。乙女らしからぬ寝息である。無呼吸症候群は若い頃からだと危険だよ。

「相変わらずだねNo.2は……………」

「すみません直ぐに起こすです。アイちゃん早く起きるですうー！」
コンパが自分の武器である注射器でアイエフの頭を連打で叩き付ける。

だが……………。

「ぐうおおおおー！ー！」

アイエフはまったく目覚める気配がない。それどころか傷一つ付いていない。

「ふんっ！ー！」

5pb.ちゃんが足でアイエフの鳩尾を思いっきり踏みつけるがまったく反応なし。

「もしかしてLEDライトがパワーアップしたからアイちゃんの耐久力もあがってたりして。」

ネプテューヌの言葉に5pb.ちゃんはしばらく考える素振りを見

せる……………」。

「ホワイートハート様そのハンマー貸してくれないかな？」

「……………魔法少女となる私には不要な物よ、はいどうぞ。」

5pb・ちゃんはプランよりハンマーを借り受けるとそのハンマーを振り上げる。

「待ってくださいそんなことしたらいくらアイちゃんでも頭がスイカ割りになっちゃ「アイエフさんがスイカ割りになっちゃたー!!」……………です。」

シャル人のセリフに被せたらいけませんよ。ほら見なさいみんなの冷えきった視線を。

「ごめんなさい……………」。

「気を取り直してえいっ!!」

5pb・ちゃんはプランのハンマーでアイエフのLEDライトを粉砕する。

「マダガスカル!？」

LEDライトが一つ破砕されるとアイエフが顔を歪めて苦しそうに呻く。

「No・1いくらなんでもやり過ぎですの!!No・2はLEDライトが全でなくなると死んでしまうんですの!!」

「これぐらいやらないと彼女は目を覚まさないよ。二つ、みいいっ!!」

次々と割られていくLEDライト！！アイエフ危機一髪！！だがそれでも彼女は目を覚まさない！！

「アイちゃん、そうだたしか……………あつた。」

ネプテューヌが何やら懐から取り出し口に含ませる。

「アイちゃんこれを飲んで目を覚まして！！」

「ねぶねぶ、寝ている人の口の中に物をいれたら駄目ですよ。なに入れたんですか？」

「スライヌゼリー。」

ネプテューヌの言葉を聞いた瞬間全員が固まる。

「早く吐き出させるですの！！」

「駄目です。もう飲み込んだですうー！！」

「これはさすがのボクも予想外の展開だよ。四つ、五つ！！」

大慌てのコンパ、ガストに対してspbは冷静にLEDライトを割っていく。

「あばばばば。」

「アイちゃんが痙攣してきたですうー！！」

「駄目ですの手のほどこししょうがないですの！！」

「次はマシユマロでも入れてみませんか？」

「いやいや、ここはやっぱりこのゴキブリゼリーを！！」

「……………リリカルマジカルがんばります。」

最早手の施しようがないのはこの空間そのものであった。

「ばばばばばばー！！！」

一際大きな声を出して突如立ち上がるアイエフ。

「目が覚めたみたいだねNo.2 それでは本題に入ろうか？」

何事もなかったかのようにハンマーをプランに返して自らの席につく5pb.ちゃん。

「ア、アイちゃん大丈夫ですか？」

「大丈夫イヌよ。こんなのいつも通りイヌよ。」

「な、なんともないみたいです。」

「よ、良かったですうー。」

明らかに何か可笑しいのだが関わりを持たずとしないゲストとコンパであった。

「さてみんな起きたところでユウ君、じゃなかったシルバーハート様からボクが直接聞いた話をボロ雑巾の様になっていたみんなに仕方がなく話してあげるよ！！！」

5pb. ちゃんの言葉にグサグサと何かが突き刺さるみんな。

「ところでフィナンシェの姿が見えないイヌ？」

「……………それなら私が協会の事故処理に行ってもらったわマジカル。」

「彼女も苦勞するですの。」

「まったくですう。」

きつと今頃フィナンシェは事故処理でてんやわんやである事を想像して同情を禁じ得ないガストとコンパであった。

「では説明するよ。」

5pb. ちゃん説明中……………。

「なるほど。つまりお兄様とイチヤイチャヌチヨヌチヨする為にはプラネテューヌに行くしかないと言うわけだね。」

それを想像してニヤニヤするネプテューヌ。

「お兄様は再会の記念にと称して私に食事を振る舞ってくれる。だけれどその料理には睡眠薬が入っていて気付くと私はベッドに縛りつけられて……………駄目ですわお腹が減って頭が回りませんわ。」

「それだけ回れば充分だと思っただけれど?……………もしかしてお兄様

ならこのネギをどうにかできるのかしら？」

意外と真面目な事を考えていたノワール。

「その本音は？」

そこにネプテューヌが問いかける。

「ぜひお兄様にな　はちゃんのコスをしてもらうわ！！そして『ピー』さらには『ピー』上手くいけば『ピー』するのよー！！」

もはやこの小説には表記出来ないほどのノワールであった。

「…………甘いわねムツリハート。お兄様は貴女みたいなどっちつかずのボディより私みたいなロリボディの女の子が好きなのよ。小さい子は好きだって言っていたもの。」

「それはただ単に子供好きなだけじゃないのかしら？保育園や幼稚園の先生的な感じで。それと何よムツリハートって私はブラックハートよ！！」

「お兄様は私の事を見てネプテューヌは個性的だねって誉めてくれたんだからね。」

「それは遠回しに可笑しな娘と言われたのではなくて？それに私はお兄様に妄想も程々にね、と優しく頭を撫でられた事がありますわ。」

「馬鹿じゃねえのかそれはただ単に優しく注意されただけだろうが！！頭の中までマシユマロになってんじゃねえのか！！それとお兄様はロリコンだ！！」

白熱する女神バトル！！そしてロリコン容疑をかけられるシルバーハート様！！

「「「「変身！！」「」」」」

《set up》

四人の身体にプロセッサユニットが装備される。そして……………。

「「「「お兄様は私の嫁ー！！」「」」」」

まさかの嫁宣言と共に斬り合う三人。ベールは変身した直後に貧血で倒れた。

そして四人の嫁宣言を聞いて動き出す者がいたそう5pb・ちゃんである。

「違うー！！」

動きだした5pb・ちゃんは貧血で倒れているベールを踏み台にして斬り合いを続けるネプテューヌ達に自らの相棒であるエレキギターで斬りかかる。

すかさずネプテューヌ達はバックステップで後ろに飛び退く。

「どういつつもりかしら貴女これは私達女神の問題よー！！」

突如乱入してきた5pb・ちゃんにノワールが問いかける。

「君たちは間違っているんだー！！シルバーハート様は…………ユウ君はボクの嫁ー！！だから教えてあげるボクの想いをー！！音量最大ボクの歌をきけー！！」

5pb.ちゃんの歌それは人々をいや、ゲームギョウ界を魅了してやまない物である。

たがどんなに素晴らしい歌でも密室空間で、しかも爆音で演奏すれば……………こうなる。

「…………ギャー!?」

「耳が痛いですー!!」

「やめるイヌ!!LEDライト割れるイヌ!!」

「会長落ち着くですのー!!」

「壊れちゃうよー!!ってなんでですかー!!キヤー!?」

響くみんなの絶叫!!だが5pb.ちゃんの演奏は歌は止まらない!!

「ユウ君はボクのお嫁さんにするんだー!!そして結婚式は洋式でウェディングドレスを着てもらうんだー!!」

結構計画的な5pb.ちゃんであった。

そして演奏は止みネプテューヌ、ブラン、ベール(車椅子)、ノワールの女神四人とコンパ、アイエフの六人はプラネテューヌへと向かう。

紫の大地プラネテューヌそこには女神パープルハートは……………。

「聞きなさいプラネテューヌの住民達よ!!今こそグリーンハート、

ホワイトハート、ブラックハートの三人の女神を倒して最高神シルバーハート様と私パープルハートの名の元にゲームギョウ界を一つにするのですー!!」

彼女が何者であるかそれは定かではない。
ただ……………。

「パープルハート様ってどんな人なんですかブラックハート様？」

「何言ってるのよ貴女の目の前にいるじゃないのコンパさん。」

「私の目の前にはスパッツが大好きな変態さんしかいないですう。」

「だからその変態さんがパープルハートなのよ。」

「そんな……………。じよ、冗談ですよね？」

「…………残念ながら本当。」

「私こそプラネテューヌの女神パープルハートことネプテューヌ！
！改めてよろしくねコンパ。」

「そんな、ねぶねぶが女神さまだなんて私認めないですうー！！いやですー！！」

コンパの悲鳴に近い叫びがこだましていたとさ。

ユウ side

「最初に言っておく俺はロリコンではない。」

「ふーん。なら、お兄ちゃんはどうな女の子が好きなの？」

「おしとやかでいつも一歩引いて男を支えてくれる優しい性格の普通の女の子がいいかな？」

「それって私の事じゃない！！お兄ちゃん私でよければ出産を前提に結婚してあげても良いわよ！！か、勘違いしないでよね別にお兄ちゃんの事なんて好きなんかじゃないんだから！！……………そう愛してるわー！！」

「お前が普通の娘なら全大陸の女の子は何なんだよ。それと抱きつくな。うわっ！？耳を噛むな！！」

ユウの拳がユニの鳩尾に直撃する。

「あふん！！はぁ、はぁ！！最高ね。」

しかし何故か攻撃がまったく効いていない。それどころか喜んでいユニであった。やはり覚醒してしまったようだ。

「とりあえ私を無視しないでくれませんかユウ？」

「この声はイストワール！？声はするが姿が見えない！！」

「いったい何処にいるの？観念して出てきなさい合法ロリ！！」

「貴方達が吊るしたんじゃないですか！！」

そう今イストワールは天井から本の状態で縄で縛られて吊るされていた。

そしてその真下には大量の蠟燭が並べてあった。

「何言ってるのよ今のあんた最高の状態じゃない!!」

「私は貴女みたいな変態じゃありません!!.....あれ? すいません私は変態でした(。ー。;)」

イストワールが何を思ったかユウは知らない。いや気付かないふりをしていた。

「何故自分がそんな目に合うか分かるかイストワール?」

「貴方の性癖ですか? って熱い!!」

イストワールの言葉に無言で縄を下げるユウ。

「分かるまでずっとそうしている。ユニここは任せた。俺はしばらく部屋にこもるから。」

「一人でするのぶへっ!?!」

ユニに無言でビンタをして部屋に向かうユウであった。

「助けてください...! (。ー。;)」

「とりあえず縄を全部切るわね」

「え? イヤー!?!」

その後イストワールの姿を見たものは……数十人位いたそうだ。

部屋に戻ったユウside

「くっ！？ここで耐えきれれば……ぐうおおおおー！！」
現在ユウは部屋を完全防壁にしてピンクモードの制御を行っていた。

「だ、だめだ。呑み込まれる………てへっ、失敗失敗。」

だがなかなか上手くいかないようである。

「ほいとー！！」

掛け声と共に変身が解かれる。

「やはり駄目か………どうすればいいのやら？」

頭を捻るユウ。

そんな時であった。

「だいぶ苦戦しているようですねユウ。」

「この声はトマ」違うから！！」そうだったね。ところで何の用？」

「貴方にプレゼントを用意しました。これを着ればピンクモードの暴走を抑える事ができるのです……！！」

ユウの手の中に現れた物それは………。

「幼稚園の制服？」

「園児服とも言いますね。ピンクモードになってそれを着れば暴走する事もないはずです。」

「こ、これを着るのか……………」

「使いこなしたくないですかピンクモード？」

「毒を食らわば皿まで……！変身……！」

ユウお着替え中

「素晴らしい……！」

「まさか本当に暴走がおさまっている。」

青を基調とした園児服。黄色の帽子に黄色のスカーフ。とどめに黄色のてさげ。

「後はそれなしでも暴走を抑えなくてはならない。」

「そんなことが可能なのか……？」

「可能だ……！まずはその恰好で下界に降りてくるのだ……！」

「嫌だ……！」

「使いこなしたくないのか？」

「行つて来ます!！」

そして女神シルバーハートは園児服で下界に降りる。更なる惨劇を招くとも知らずに。

大惨事女神戦争 銀の惨劇序（後書き）

園児服でいいのだろうか？よくわからない。正しい名称があるのだろうか？

ユウ「いいんじゃない？」

そうかな？

とりあえず今回のお話もカオス！！

次回はちよつとした番外編を企画。あの双子がでぶらあ！？
ユウピンクモード「ネタバレき・ん・し」

番外編 白の双子 おかしな洋服屋さん（前書き）

ほのぼの話を書くつもりが何故こうなった。

ラムとロムファンは回れ右でお願いします。

番外編 白の双子 おかしな洋服屋さん

ラムside

突然だけどこんにちわ。それともおはよう？こんばんわ？そんなのどうでもいいよね！

私は守護女神シルバーハートの妹の女神候補生の一人ホワイトシスターのラムよ！！

私はお兄ちゃんがいとけに作ったぎじんかするプロセスサユニットなんだって。しかもひとつのプロセスサユニットがぶんりしたとかなんとか。私は馬鹿だから難しい事はよくわかんないけど。お兄ちゃんはやさしいしそれにとってもキレイでカッコイイんだからね！！たまにとっても可愛い時もあるの。この間女神候補生のみなんと一緒にショートケーキ食べた時お兄ちゃんが最後までとっていたイチゴをロムちゃんが食べちゃった時お兄ちゃん気にしてないって言うてたけど今にも泣きそうな顔をしてたんだよね、

かわいかったなあ。その後ロムちゃんとネプギアちゃん、ユニちゃんが口から血を吐きながら喧嘩を始めちゃって。三人が喧嘩してる時私は自分のイチゴをお兄ちゃんにあげたんだ。そしたらお兄ちゃんラムは優しいいい子だねって言うてくれて抱っこして頭を撫でてくれたんだ！！その後三人に斬られそうになっただけだね。

でも私はそんな事気にしないよ。だってみんなお兄ちゃんの事が大好きなだけだもんね。その事をみんなに言ったら何か眩しい物を見る様な目で見られちゃった。お兄ちゃんはそれを聞くと泣き始めちゃった。もつとイチゴが食べたかったのかな？

その次の日私はお兄ちゃんと一緒にルウィーに行かないって誘われたんだ。いつもいい子にしているから欲しい物を買ってくれるんだって！！でも私はお兄ちゃんが一緒にいてくれるだけで良いよ。それを言ったらお兄ちゃんまた泣きそうになっちゃったんだ。

気にしないでって言うってお兄ちゃんは部屋に入って行っちゃった。
私もお部屋に帰ってお出かけの準備をしないとね。

「こっちの服の方がいいかな？それともこっちな？」

私は現在鏡の前でお着替え中どんなお洋服を着ればいいのか悩んでるところなの。

「うん。決めたこれにしよう!!」

私はしばらく悩んだ後ひとつのお洋服を手取る。それは私のお姉ちゃんホワイトハウスじゃなかったホワイトハートさんの着ていたお洋服。お兄ちゃんの手縫いなんだって。

「よし、お兄ちゃんを驚かせよう!!」

私とロムちゃんはホワイトハートお姉ちゃんと似ているらしいから、この服でお姉ちゃんと間違えて驚くはずだね。

「お財布、ハンカチとティッシュも鞆に入れて準備完了!!」
後はお兄ちゃんとの待ち合わせ場所に行くだけだね。

私は急いで部屋から出ようとするが扉のところで何かとぶつかりその衝撃を受けておしりを打つ。

「い、たたあ。」

「……いたい。」

この声は!?!私はおそろおそろ前を見てみるとそこには私の双子の

姉妹であるロムちゃんが私と同じように倒れていた。

「だ、大丈夫ロムちゃん!？」

「……………」

私はすぐさま立ち上がりロムちゃんに手を貸すけどロムちゃんは私を一回だけ見ると気にせず立ち上がり棚から漫画本を取り出してベッドに座って読み始める。言い忘れてたけどこの部屋は私とロムちゃんの二人で使ってるんだよ。

「ろ、ロムちゃん私今からルウィーにお出かけしてくるからね。」

「……………そう。」

「そ、そうなの!！」

ロムちゃんは私の言葉を聞いても漫画を読んでいてまったくこつちをみてくれない。そう思ったけどやっぱり気になっちゃったのか漫画本を置いて立ち上がってポケットから何かを取り出しす。そしてその手を私の前に突きだす。

「……………ん。」

「これお金？」

ロムちゃんから受け取ったものはお金1300クレジットだった。どうしたんだろ？

「……………帰りにコンビニでお菓子和漫画買って来て。お釣りはあげるから。」

「なんだそれなら任せて買ってくるよ！！でもお釣りはちゃんと返すよ。」

「……………いないから。」

「ええ！！でも……………」

「……………口止め料。お兄ちゃんには内緒。……………もういいでしょうさっさと買ってきて。」

「わ、わかったからルウィーのコンビニで買ってくるね。」

「……………違う。」

「何が？」

「……………ルウィーじゃなくてリーンボックスのコンビニ。」

「え？ええええー！！無理だよだって私が行くのってルウィーだよ。用事が終わってからリーンボックスに行ったら日がくれちゃうよ！！」

「……………この間ラムちゃんがにんじんとピーマン残した事お兄ちゃんに言っちゃおうかな。」

「それはお願いだからやめて！！そんなことお兄ちゃんにばれたら怒られちゃうよ。」

なんでロムちゃん知ってるんだらうつお庭に埋めたのに……………。

「……………お願いね」

「うん。」

私はとぼとぼと部屋を後にしたよ。

ロムside

「……やっと思ったよ、あーあ。あの娘めんどくさい。」

私は今まで私の目の前にいた双子の姉妹のラムちゃんを思い出して
苛々と自らの親指の爪を噛む。

「まあ、いいや。とりあえずお兄ちゃんのお部屋に仕掛けたカメラ
の映像でも見てみよう。」

私は気分転換を兼ねてお兄ちゃんのお部屋に仕掛けた462個の力
メラの映像を見る。

「……………！？458個取られてる。トイレと簡易お風呂は全滅し
てる。残ってるのは寝室だけ。このアングルじゃあ寝顔もまともに
撮影出来ない。やっぱりラムちゃんにつけさせたんじゃあばれるの
は当たり前。仕方ない私自ら……………」

私はお兄ちゃんのお部屋へと向かおうとして部屋を出るがそこには
アホが立ち塞がっていた。

「やっぱり貴女だったのねあのカメラ。いい娘ぶってたけどやっ
と化けの皮を剥がしたわね。」

「……………何の事？私わからないよユニちゃん。（ウルウル）」

私の言葉を受けたアホはポケットよりテープレコーダーを取り出す。
……まさか!?

『とりあえずお兄ちゃんのお部屋に仕掛けたカメラの映像でも見てみよう。』

「…………ちっ。」

テープレコーダーより流れてきた音声を聞いて思わず舌打ちをする。

「これでアンタも終わりね!! お兄ちゃんに嫌われて路地裏にでも捨てられればいいわ!! おーほほほほ!!」

「ユニさん悪役みたいですよ——(・・)——」

「…………ゲロ!?!」

私はアホの懷から出てきたゲロを見て純粹に驚く。

「驚きましたかロムさん? でも考えてくださいね、あんなちやちな仕掛け方していたカメラがばれないわけがないでしょう? 私はユウを史書の力を使って四六時中監視しているんですよ(・・・)(・・・)」
しくじった。最近ゲロの出番が少なくて空気になってたせいでその存在を忘れていた。

「何か失礼な事を考えていませんか(＜＞)」

相変わらずウザい顔。でもこれは不味い、どうする私………………。仕方ないあの手札^{カード}をきるしかない。

「……………私は知ってる。」

「はあ？いきなり何を「お兄ちゃんを狙ってわざと狙撃。しかも弾の中身は媚薬。」なんで知ってるのよ！？」

「ユニさん媚薬を今すぐ私に渡してください！！私にかかればユウに気付かれることなく飲ませる事ができます。さあー早く！！（＜＞）」

「ごめん。ルウィーの時に全部使っちゃった。しかもぜんぜん効いてなかった。」

「なんて愚かな事を（TOT）」
「まだだよ。まだ私のターンは続いてるよ。」

「……………ゲロ貴女お兄ちゃんが入った後のお風呂のお湯でお茶を沸かして飲んでた。」

「さすがの私もそれは引くわ。……………ってまさかこの間珍しくお茶に誘われたけどまさかあれって！？」

「美味しかったでしょう？（・|・|）」

私は事前に知ってたから逃げた。勿論ラムちゃんには行かせた。美味しくて五杯も飲んだって言うてた。

「だからあんなに美味しかったのね。あの後3日くらいAPがいくら闘っても減らなかったのよね。やっぱりお兄ちゃんのエキスの力だったのね。」

そういえばラムちゃんも力が湧いてくるとか言ってたような。

「今でも私の所持しているアイテム一覧はユウのエキスで沸かしたお茶。通称ユウ茶でほとんどが埋まっています。見てみますか？（
・・・）」

「……ことわる。」

「……残念です。（
・・・）」

ちなみに最後のとどめにもう一押し。

「……その馬鹿二人これを見て。」

私は二人に一枚の写真を見せる。

「……私には刺激が強すぎるわ。ぶはっ!？」

「史書権限を使います。ロムさんそいつをこっちにわたせ!!（
>）」

吐血して膝をつくアホ。

職権乱用のゲロ。

二人に見せた写真それは簡単にいえばそれはお着替え中のお兄ちゃんの産まれままの姿を後ろから撮ったものこれだけ見ると本当に女の子。最後に私は二人に切り札を突き付け^{ジョーカー}ける。

「……もしテープレコーダーを渡してさっきの事を黙っていて

くればもつといい物を見せてあげる。」

「「お願いします!!」」

やっぱり人?の欲望は扱いやすいね。

ユウとラムがいない天界には奇妙な女性叫び声が聞こえたそう。

ラムside

私は今ルウィーにいるよ。それでねお兄ちゃんとの待ち合わせ場所に向かっているところ。でもその足取りは少し重い。「お兄ちゃんのお買い物早く切り上げないと駄目かなあ?ルウィーからリーンボックスまで飛んで行っても一時間くらいだね。往復二時間……はあ。転移魔法私も使えたらなあ。」

私は少し憂鬱な気持ちで待ち合わせ場所に向かっていた。けど……。

「……あ!!お兄ちゃんだ!!」

大好きなお兄ちゃんの姿を見た途端憂鬱な気持ちなんて何処かに消え去ってしまう。重い足取りもいつの間にか軽快になりお兄ちゃんの元へと全速力で駆け寄っていく。

「お兄ちゃん!!」

「ん?この声はラム……ってブラン!」

お兄ちゃんが私の恰好を見て驚いてる。私はお兄ちゃんに思いつき
り抱きつき計画通りに行ったと内心喜んでいた。

「違いまーす。私はラムだよお兄ちゃん。もう、自分の妹の顔位ち
やんと覚えないと駄目でしょー!」

「ご、ごめんごめん。何せその恰好だから間違えてしまうのは当然
だと思っただけ。」

お兄ちゃんが困ったような表情をして私の頭を撫でてくれる。えへ
へ、気持ちいいな。

「私とお姉ちゃんを間違えるなんて酷いよ。」

私はわざとお兄ちゃんが困るような事を言ってみる。好きな子をい
じめたくなる気持ち少しわかる気がするなあ。

「ラムの好きなお菓子買ってあげるから許してくれないかな?」

お菓子なんか買ってくれなくても最初から怒ってないんだけどね。

「しょうがないなあ。私はかんだいだから許してあげる。」

「それはありがたいな。最初は何処にいくんだ?」

「えつとねえ……。ああ!! あそこのお店可愛いお洋服があ
る!! あそこに行こうお兄ちゃん!!」

私はお兄ちゃんの手を引っ張って可愛いお洋服売っているお店に
入る。

「うわぁどれもこれも可愛いいのばかり!!」

「ラムあまり大きな声を出さないようにね。他のお客さんのご迷惑だよ。それにしてもここつてもしかして女性専門店?なんかいずらないな。」

お兄ちゃんが私を注意しながら店の中を見渡す。そう言われると女の人しかないね。

「ああー!!あれすごく可愛い!!」

お兄ちゃんが周りを気にしているなか私は一際可愛いお洋服を見つける。そんな時私の目の前に変な人が現れた。くねくねしながら

「それは今冬の最新作よ。くねくね!!」

身体全体をくねくねと動かしながら変なおじさんが現れた。気持ち悪いよ。

「お兄ちゃん変なおじさんがいるよー!!」

「おじさんじゃないわお姉さんよ!!」

女の方はそんなに体つき良くないと思うよ。お髭も生えてないよ。

「まあいいわお嬢ちゃん今日はお姉ちゃんとお買い物かしら。」

「お姉ちゃんじゃないよお」そ、そうなんですよ妹と一緒に買い物で、あはははは。」「???」

どうしたんだろっお兄ちゃん。いつもなら女の子に間違えられるの

嫌がるはずなのに？

「そう……やっぱり私の気のせいだったのかしら良い男の匂いがしたのだけれど。」

お兄ちゃんが顔色を真つ青にしてビクリとする。けど私の興味は可愛いお洋服に向かっていた。

「私このお洋服着てみたい！！」

「試着は可能よ！！さぁお姉ちゃんも一緒にレッツパールック！！」
変なおじさんは「お姉さん！！」……………お姉さんはお兄ちゃんにも同じお洋服を渡す。

「お、俺……………私もこれを着るのか？」

お兄ちゃんは渡された洋服を見てひきつった笑いを見せる。

「お兄、お姉ちゃんも一緒に着てくれたら私嬉しいな。」

私は以前ロムちゃんに教えてもらったなみだ目上目遣いをしてお兄ちゃんを見つめる。

「わかった。わかったからそんな目で私を見るな。」

「やったー！！お姉ちゃんとおそろいだー！！」

「パールックね嫌いじゃないわ！！」

何故か変なおじ、お姉さんも一緒になって喜んでるよ。でもお兄ちゃんとお揃いかー。

「くねくねくねくねくねくね!!」

変な踊りをまた始めるおじさん。やっぱり気持ち悪いよ!!

「ほあちゃあ!!」

「いやん!!」

また変な人が出てくねくねおじさんを棒で叩いたよ。このお店には普通の店員さんはいないのかな?

「OH! マツチヨメン。」

「お姉ちゃんマチヨめんで何?」

「さあ?」

お兄ちゃんが言ったんだよね?

「おい、ウキヨウ変な踊りをするな!! 客が逃げるだろうが!!」

「私はもっぱら紅茶です。って違うわ!! 私にはキョウスイよ!! あふん!!」

「だから変な声を出すな気持ち悪いんだよ!! おらあ!!」

「痛いわでも嫌いじゃないわ!!」

「ラムここから離れようか……………」

「そうだね……………」

私とお兄ちゃんは変なおじさん達から離れて試着室を探す。

「お兄ちゃんあそこに店員さんがいるよ!! 私聞いてみるね。」

「待つんだラム!! あれは明らかにおかしい普通の店員がマシंगा

ンを持っているわけがない。」

「店員さんちょっといい？」

「やめるんだー！！」お兄ちゃん女の子には逃げたらいけない時があるの。

「……………」

「ちょっと無視しないでよー！！」

私がマシンガン店員に話しかけるんだけど華麗に無視されてしまう。

「ねえちょっと聞ってるのー！！」

「……………ゲームスタート。」

「えっ？」

「いけないラム逃げろー！！」

お兄ちゃんの言葉に振り返った私はすぐにマシンガン店員の方を向く。そこには……………予想通りマシンガンを私に向かって構えるマシンガン店員がいた。

「きゃー！？」

私は恐怖のあまりしゃがみこんでしまう。

「お客様は神様だろうがー！！」

マシンガンをも今にも放とうとしたマシンガン店員にナイフを持ったナイフ店員がそのナイフの柄で頭を殴る。痛そうだね。

「君は……………」

お兄ちゃんがマシンガン店員を店の奥に投げ飛ばしたナイフ店員に話しかける。片手で人って投げれるんだ。

「俺はナイフ店長カツミだ。邪魔をしたな。さあ買い物を楽しみな
！！」

何故かお兄ちゃんに睨みをきかせながらナイフ店長は他のお客さんの接客に行く。どうやら他のお客さんにも睨み付けながら話しかけるみたい。

「ツツコミどころ満載だなこの店。」

「そうだね。試着室は何処にあるんだろうねお兄ちゃん。」

「……………試着室ならあっち。」

私とお兄ちゃんが黄昏ているところにスタイル抜群の女性店員さんが現れる。

あの脂肪のかたまり切り取ってやりたいな。

「試着室ならあっち。」

「せめて指くらいさしてあっちがどっちか教えてほしいんだけど。」

「あっちはあっち。」

「だからどっちだよ!!」

お兄ちゃんのツツコミの領域は広がり続けるんだね。

「めんどくさい着いてきて。」

「めんどくさいって何、お客様は神様って冷たい!!」

「言ったね人が気にしてるこ」でも手が冷たい人は心が暖かいって言うよね。」……………」

手を掴んだ女の店員さんの手の冷たさに驚いたお兄ちゃんが何やら名言らしき事を言つと女の店員さんの動きがとまる。どうしたんだろ?

「ん?どうかしたって痛い!!そして何故服を脱がせる!!止める!!」

「私が着替えさせてあげるよ。」

「他のお客さんの前で店員さんに馬乗りで着替えさせられるなんて私聞いてない!!」

「私同性愛主義者だから。」

「意味がわからないから!!ラムもキラキラした目で見てないで助けて!!」

「お、お姉ちゃんが女の人と絡まってる。こんな時は……………そうだユニちゃんに電話しよう。」

「それは不味い！！店員さんも本気で服脱がせようとししないで！！俺は男だから！！」

「男ですって！！嫌いじゃないわ！！」

「嘘です。女です。」

「ちなみに私は男も行けるよ。」

「両刀かよ！！」

「両刀？」

「両刀って言うのは男も女もイケル口ってわけだ。」

「そのナイフ店長人の妹に何教えてるんだよ！！」

「ゲームオーバー。」

「そしてそのマシンガン店員は何帰ろうとしてるんだよ！！こういう時こそマシンガンを射てよ。」

「定時だ。」

「普通に喋れるんかい！！」

「ほあちゃあ！！」

「マツチヨメンは……………もう突っ込まないぞ。」

「お兄ちゃん今助けるね！！ええい！！ジェノサイドグレイヴアー

「!!」

「ラムそんな技誰から教わったんだよ!! って俺も巻き添えかよー!!」

私の一撃にみんなが……………。

ユウside

俺の意識が覚醒する。目を開けて最初に飛び込んできたのは俺の妹達の一人であるホワイトシスターのラムであった。どうやら膝枕をしてくれていたみたいだ。

「お兄ちゃん目が覚めた?」

「まあ、うん。いったい何があったかは聞かないよ。」

「それは私も賛成かな?」

「ところで見た感じ日が落ちてきてるみたいだけど。」

「もう夕方くらいかな?」

「……………」ごめん。」

「ん? 私は気にしてないよ。お洋服も無料で貰えたよ。」

ラムが紙袋を持ち上げるそこには『洋服屋さんねぶあ〜』と印刷さ

れていた。

とりあえず二度と行きたくない店候補のひとつだな。

「そ、それにお兄ちゃんの寝顔もじっくり見れたから。」

顔を赤くしてもじもじとするラム。そして膝枕の状態で俺の髪の毛を掬う。

謎の洋服屋のせいでさんざんな一日だったけどこんなのもいいかもしれない。俺は頭をあげてラムの隣に座る。

しばらく二人でボーっとしていただろうか？辺りの様子が騒がしくなっている事に気付く。

「騒がしいな何かあったのか？」

「えへへ。」

ラムに話しかけるが何やらポヤポヤした雰囲気で蕩けていた。

「しばらくそつとしておくかな。すいません何かあったんですか？」

俺は近くにいた人に話を聞いてみる。

「ん？ああなんでも町の近くにモンスターが出たんだって話だあんたらも早く協会に逃げた方がいいぞ。かなりやばいらしいからな。」

「そうですか。ありがとうございます。だそうだ聞いてたかラム。」

「う、うん。モンスターが出たんだね。」

「行けるか？」

「勿論任せてよ!!」

俺はラムを連れて町の近くモンスターが出たであろう場所に転移する。

「すごく大きなスライヌだねお兄ちゃん。」

「全長50メートルかな？油断は禁物だ!!行くぞラム!!」

「うん。プロセッサユニット装着!!プロセッサユニット装着完了!!」

ラムの身体に白いプロセッサユニットが装着される。

「さてと行きますか!!」

俺は腰に疑似プロセッサユニットバーストドライバーを巻き付ける。皆さんは覚えているだろうか？シアンが作った試作プロセッサユニットをあれを改良したものがこのバーストである。なんと普通の人間も変身が可能と言う代物である。何やらまだ危険性もあるのだが。俺の右腕に大型ドリル。左腕にクレーン車のクレーン。両足に戦車のキャタピラー。背中にはバーストの巨大を飛行可能とさせる大型ジェットエンジン。そして胸部には大型ビームバズーカが装備される。

「あれ？お兄ちゃん何時ものと違うね。」

「改良が済んだのを試ってみようと思ってね。援護は頼むぞ。」

「任せて!!」

俺はスライムに向かって飛翔する。そして左腕のクレーンを伸ばしてスライムにぶつける。

「凄いあんなに大きいのが吹き飛んだ!!」

だがダメージは少ないな。

「出来るだけ町から離さないといけない!!」

「うん!! 任せて行って光の子供達。」

ラムの背中に装着されているプロセッサユニットが複数に分離する。そしてスライムに襲いかかる。ラムのプロセッサユニットの特徴的な武器、ライトビットである。ラムの意思の基に動かすことができる物である。欠点として純粋な意思を持った者以外は使用不可能となっている。

スライムはライトビットにより攪乱されて目を回してしまう。

「よし!! 今なら行ける。」

俺はバーストドライバーのレバーを五回回す。そして電子音声が………ならない? イストワールの奴せつかくあのままにしてやったというのに………。

「仕方ないバーストフルバースト!!」

胸部の大型ビームバズーカから砲撃が放たれる。大型スライムは爆散する。それを確認した俺はバーストの武装を全て解除して地面に

降り立つ。ちなみに武装を解除するとその下はノースリーブの緑色の上着に膝上3cmのピンクのミニスカート。試作型とそこは一緒。何故か変更不能であった。

「意外と呆気なかったな。……………しまったまだこいつ生きて!？」

油断した。スライヌはどうやらまだ死んではいなかったようである。その証拠に両足をスライヌによって足を地面にとらえられてしまう。

「お兄ちゃん!？待って今助けるから!！ってまだこんなに大きなスライヌが!？」

助けに入ろうとしたラムの前に先ほどよりは小さいがそれでもかなりの大きさのスライヌ、10m位はある。それが立ちほだかる。

「ラム!？大丈夫か!！こいつら腕にまで。くっ!？」

俺はスライヌによって腕まで絡め取られて地面に引き倒される。情けない。女神でありながらスライヌなんかここまでやられるなんて。

身体が痺れて、まさかこいつらに麻痺させられたのか!？バーストドライバーは人間以外は使用不可能という欠点を持つ。身体を人間に近付ける必要があるため今は自らの身体にリミッターをかけて人間に近付けてしまっている。まさかここでバーストドライバーの欠点に足元すくわれるとは。……………くっ!？

「ちょ、までこいつら服の中にまで!？までまで俺はエロゲのヒロインでもあるまいし、くっ!？」

「くっ、このお!！お兄ちゃんに触らないで!！」

ラムが必死にライトビットとレーザーライフルで攻撃を仕掛けるが
いかんせんスライヌの量に苦戦している。

「なっ、くすぐつたい。や、やめ!？」

何か本当にいいことがないな、最近。このままスライヌにじわじわ
と溶かし殺されるのか……………。

「お兄ちゃん!！」

ラムの声が響くその時……………。

「…………ゲームスタート。」

何処かで聞いたことがある声が響く。

そしてラムが苦戦していたスライヌが謎の銃弾によりいとも簡単に
消滅する。

「ふえ?」

さらには俺の身体にまとわりついていたスライヌまでもが発火して
消滅した。

「大丈夫?」

俺の身体を誰かが支えてくれる。麻痺している身体を必死に動かし
その人物を見る。

「洋服屋さんの店員さん?」

「私もいるわ!！」

「ほあちゃあー!！」

さらにはくねくね店員とマッチョメンまで現れてスライヌをドンドン倒していく。

「大丈夫か女神シルバーハート様？」

「ナイフ店長カツミ！？」

「レイカ、シルバーハート様を頼む。」

「言われなくても。」

「ふん。おい！妹様下がってシルバーハート様に付いてやりな。」

「う、うん。」

ナイフ店長カツミはラムと店員さんのレイカに俺を預けるとスライヌの前に立つ。

「さあ地獄を楽しみな！！」

自らの親指を下に向ける。そして現在闘っている三人に混じりナイフを構えてスライヌに斬りかかる。

「す、凄い。」

「みんなバラバラだけどまとまっている？」

俺とラムの驚きを無視してスライヌはあっという間に駆逐されてしまふ。

「楽勝ねー!!」

「ゲームセット。」

「よっしゃー!!」

「やったねカツミ。」

「ああ。」

「君達は一体？」

俺の疑問にカツミが答える。

「いずれ分かる。今は傷を癒せ女神。」

そう言つとカツミ達は走りさつて行つた。

「お兄ちゃん!!」

彼らの事を考えようとする間もなく、ラムが泣きながら飛び付いてくる。

「ごめんね、お兄ちゃん。私が弱かったからお兄ちゃんが酷いめに。」

「別に、たいしたこと、はない。」

「お兄ちゃん？」

「痺れが結構気付くなつて……………すまないが天界まで運んで…………。」

「お兄ちゃん!?!お兄ちゃん!!お兄ちゃん!!」

ラムの声と共に俺の意識が遠のいていく。俺はそんなか自分の甘さを呪った。

番外編 白の双子 おかしな洋服屋さん（後書き）

この番外編はルウィー戦からユウがピンクモードの制御の為に下界に降りる話の間のお話です。

幼女神降誕 終結の園児（前書き）

しばらくはユウ視点です。といっても次のお話しまでだけど。

今回は別名幼女神の……………。

幼女神降誕 終結の園児

ユウ s i d e

「わかりますか！？今の貴女みんなに注目されていますよ！！幼女キターとか思われながら欲望まみれの視線に晒されているんですよ！！幼女！！幼女！！」

黙れ人の頭の中に話しかける変態創造者！！

「はぁ！！はぁ！！」
もう嫌だこいつ。

現在俺は創造者とかいう謎の声に従いプラネテューヌに来ていた。
幼女となり園児服を着て。

「凄い恥ずかしいんだけど。」

「恥じる貴女も素敵ですー！！」

こいつは無視する事にする。やっぱり天界に帰ろっかな？

「ピンクモード制御したくないんですか？」

したい！！

「なら頑張らしましょう！！幼女神シルバーハート様！！」

幼女言うな！！それにしても周りの視線が気になる。何だこの初めてのお使い中の子供を見守るような生暖かい視線は！！

「きつと今頃みんな貴女をどうやってお持ち帰りするか考えてるんですよ！！」

お願いだから黙ってください！！

俺は頭の中に響く大音量の変態ボイスにウンザリしながら歩みを進める。ここも昔からあまり変わらないな経済何かは変わったみたいだけど。ドンドン発展しているみたいだしね。

「こら！君こんなところで何してるの？」

俺が思考に浸っていると、何故かヒヨコのアプリケが付いたエプロンを付けた女の人が少し怒った感じで話し掛けてくる。

「えつと貴女は？」

「ほらもうみんな集まってるんだから急いで。」

俺の疑問を無視して女の人は腕を引っ張り俺を何処かに連れていく。これは何？という状況？

「ああ遂に幼女神シルバーハートが連れ去られてしまう！！そしてとても口には出来ないような酷い目に合わされてしまうんだー！！」

お前には聞いてない！！

「ほら着いたよ。早くお友達と一緒に並んで。」

「え？」

いつの間にか着いた場所はプラネテューヌで一番広い公園。あまりの大きさに公園広場とも言われている。そこには俺と同じように園

児服を着た子供達がいっぱい、30人くらいいた。

「ほら早く!!」

俺は女の人に急かされて子供達の一番後ろに並ぶ。

「まさかこれは!!」

何か知っているのか変態!?

「どうしよう。こんな展開になるなんてさすがの私も想定外ですわ!?!」

どうでもいいがさつきから口調変わりすぎだろうが変態。

「さあみんな今からここで自由時間よ。たくさん遊んでいいからね。でもこの公園から外にでたら駄目よ!!」

「~~~~はい!!」

「みんなプラネテュー又幼稚園の園児として恥ずかしくない行動をしようね。」

「~~~~はい。」

何!?!プラネテュー又幼稚園だと、まさかこれは.....!?

「リアル園児キター!!」

まさか本当に幼稚園に巻き込まれるとは。事情を説明して.....いや、無理だな子供の戯言として聞き流されるのがおちか。隙を見て

逃げ出すかな。

「駄目よそんなのお母さん認めません！！そんなことしたらこの場で園児服を消失させるわよ！！」

お前鬼だな！！

って何だ！？

俺は突然身体に衝撃を感じる。何かと思いつ見てみると。可愛らしい女の子が抱き付いていた。

「良い匂い」

「あぁずるいアタシもー！！」

「私も抱きつきたいですわー！！」

「私も！！」

「…………ボクも。」

何だこれは！？次々に身体に少女が抱きついてくる。

「ちょっと！？そんなに抱き付かれたら支えきれないから！！ねえ人の話しきいてる？ってうわ！？」

さすがの俺もこの身体では支えきれず倒されてしまう。

けど少女達は人のきも知らずに群がってくる。この間の大型スライ又並みにきついぞこれ。

「少女がいっぱい！！駄目だキャパシティが限界だ！！うわぁー！！」

断末魔の叫び声をあげて創造者の声が消え去る。役に立たないやつめ。俺は消え行く意識の中でそんな事を考えていた。

「ユウちゃん。はい、あーん。」

「あ、あーん。」

「おいしい？」

「う、うん。」

「ユウちゃんアタシのも食べてよ！！あーん！！」

「……………ボクのも。」

「私のも食べてね」

「少女になつてもリア充が羨ましいぞユウー！！」

黙れ変態！！

意識を取り戻した俺は今現在お弁当を食べていや、食べさせられていた。自由時間という事でみんなでお弁当を食べようという事になったわけだが。変態創造者によって天界から着の身着のままできた俺がお弁当なんて私が持っているわけがない。お弁当を持っていない事を話して現在に至るというわけである。

「観念しなさいな。そして少女達にお弁当を食べさせてもらうのです！！」

それは構わないんだけどね、この娘達のお弁当の量なんか可笑しいよ！あの娘なんて重箱三段重ねだよ！！

「あの娘は大きめのタッパ―八個すさまじい量だね。」

とてもじゃないけど幼稚園児が食べれる量ではないね。

まさかあれを半分個とかしてくるんじゃないよね？とてもじゃないけど俺は3分の1でも無理だよ。

「ガンバースト！！」

意味がわからない。そして……………。

「…………ユウちゃんあーん…………」

こんな素晴らしい笑顔で見つめられて食べられないと言えるほど俺は強くない。

「あ、あーん。」

そして俺は大量の食べ物を飲み込む。

「無論この幼女の身体では胃の大きさも普段の3分の1になる。故にそんな身体であれだけ食べれば……………」

「…………気持ち悪い。」

「…………こうなる。大丈夫か？」

自分でも良くやったとほめたいくらいだよ。

「でもこれで大食いキャラとしても定評がついたね。(ノ。O。ノ)」

嬉しくない。

ご飯も食べた事だしきつとお昼寝の時間のはずだ！！これでまだ遊ぶとかだつたら最悪だよ。

「おいおい、お前は大切な事を忘れているぞ。今はまだ自由時間だ。普通の子供が素直に寝るとでも思っているのか？」

「ユウちゃん一緒に滑り台しよう。」

……………だよ。でも滑り台なら大丈夫なはず。

「しかし幼女神シルバーハートの願いは脆くも打ち砕かれてしまう。」

何を言っている？普通の滑り台だろうが！！お願いだから変な事を言わないで。どうして俺は心の中でもツツコミを入れないといけないのだろう？みんなに手をひかれながら俺は滑り台に連れて行かれる。

「ユウちゃんが最初ね！！」

「う、うん。」

俺は促され滑り台を登り初めるのだが……………。

「今こそその園児服の呪いを！！ころろちゃん！！」

「ころろちゃん言っなー！ってなんだ口が勝手に！？」

「素晴らしいいいー！」

おい変態創造者いったい何をした！

「その園児服にはとある幼女警察の呪いがかかっているのだよー！」

何それ！？って今度は身体が勝手に！？

「うんしょ、うんしょ。わーい空気嫁？」

何をしているんだ俺はー！！

「まじでやったよこいつ。」

お前がやらせたんだろうがー！！

「子供と言つものは流行に敏感である。そして人の真似をしたがるものである。」

こいつ何を言っているんだ？

「ユウちゃん面白い。私もやるー！空気よめー！！」

「ほらまた一人……。」「

「アタシもよいしょ、よいしょわーい空気よめー！！」

「空気よめー！！」

「『『『『空気嫁ー!!』『』『』」

みんなまで滑り台を……………。

「さあーころろちゃんも続けるんだ!!」

「ころろちゃん言っな!!」

その言葉と同時に俺の身体は再び動き出す。

「よいしょ、よいしょ。」

滑り台の階段を登る。

「わーい空気嫁?」

そして滑る。

「これは元ネタ知らない人にとっては意味不明ですね」

ならさせるなよ!!

「気になる人はミルーホーズっていうアニメを見てね」

メタ発言はやめてください!!

「何サボってるの早く続けなさい!!ころろちゃん。」

「ころろちゃん言っな!!」

俺は園児服の呪いに逆らえずに延々と滑り台を滑り続ける。

「これで確か四十二回さすがに……わーい 空気嫁?…疲れてきた。

「

さすがの園児達も疲れたのか地面にすわり俺が滑り続ける様子をみつめる。

「ユウちゃんは滑り台が好きなんだね。」

いや、もうトラウマになりかけているのだけれど。

「ユウちゃん、ユウちゃん、ユウちゃん、ユウちゃん、ユウちゃん、ユウちゃんー!!」

なんか約一名可笑しな娘がいるんだけど。

「……………ここから見るとユウちゃんのズボンの中のパンツが少し見える。」

「本当だ!!……………白か。」

いやいや下着もお前が出したんだよね!?

「うそうそ私にも見せて本当だ!!」

「アタシ知ってるこれチラリズムだね。お父さんが教えてくれたんだ。」

純粹無垢な子供に何を教えているんだよ!!

「一度そのお父さんに会ってみたいな。きつと話があいそうで、むっ!?!この気配は奴か!!」

奴？誰の事だ？遂におかしくなったか？

「……………ちゃん！！」

『ニャー！！』

ん？女の子の声と猫の鳴き声？

「彼女が来たんだよ！！あの四つの力を持っている彼女が！！」
まさか！！

「ユウちゃん！！」

『ニャー！！』

俺は声のした方向を見て啞然とした。そこには……………大量の猫を引き連れた謎の探偵少女シャルロックが凄い勢いでこちらに向かっていた。

幼女神降誕 終結の園児（後書き）

きょうのゆにちゃん

そのいち、チヨココロネ

ユニ「私には出来ないわ。貴女を……………貴女を！！」

ネプギア「チヨココロネを見つめて何をしているのですか？食べないのですか？」

ユニ「なーんか、食べづらいのよね。同族嫌悪ってやつかしら？」

ネプギア「はい？」

ユニ「……………プロセッサユニット装着。」

ネプギア「ああー！！髪型の事ですか！！ってくだらな！！！」

ユニ「コロネちゃん！！！」

おわり

人々の想い集いし力 降臨する白（前書き）

シリアスがかけない……………。

シリアスを書いていたらいつの間にか可笑しな事になっていた。今回も幼女率高め。

人々の想い集いし力 降臨する白

C o u n c i l

シャルロック彼女との出会いは……………。

回想シーン（会話文多め）

それは俺がまだネプテューヌ達に大陸の管理を任せる前の話だ。

俺がプラネテューヌの協会に降りて来ていた時のことである。

「それで最近のモンスターの発生率はどうでしょうか？」

「シルバーハート様のおかげで減少傾向にあります。本当にありがとうございます。感謝してもしきれません。」

「いえ、私は女神として当然の事をしたまなので気にしないでください。」

「なんといいおかた！！ぜひとも今度の降誕祭はプラネテューヌで！！」

ちなみに降誕祭とは簡単に言うと一年に一度行われるシルバーハートによるシルバーハートの為のお祭りです。現在はネプテューヌ達に大陸管理を任せてしまっているために行われていない。

あの頃は楽しかったなあー。いったい俺はどこで間違えたのだろうか？

そんな時協会の扉が勢いよく開かれる。 その時入ってきた少女こ

そがシャルロックだった。

「なんだね君は今是一般人は立ち入り禁止だ！！出ていきたまえ！！」

「お願いします。この娘を助けてください女神様！！」

「……………猫？」

シャルロックの腕の中には衰弱しきった一匹の猫が抱かれていた。

「何を言っているそんな汚らしい猫！！動物病院にでも連れて行けばいいだろうが！！」

「駄目なんです、この娘原因不明の病気で、どこのお医者さんに見せても駄目なんです。でも女神様ならきつと！！」

「馬鹿をい「みせてくれるかな？」女神様なにを！？」

「は、はい！！」

俺の言葉にシャルロックは猫を渡してくる。

「なるほどね。これは確かに原因不明なわけですね。この娘たぶんモンスターにやられたんでしょうね。ウィルスに感染している。これなら……………癒しの光をリフレッシュ。はいもう大丈夫ですよ。」

俺は猫に癒しの魔法をかける。するとぐったりとしていた猫が俺の腕の中で顔をあげて鳴き声をあげる。可愛いな、俺も猫でも飼ってみようかな？

「はんぺん！！良かった元気になったんだね！！ありがとうござい
ます女神様。さあこっちにおいでって痛い！？」

猫、はんぺんを俺はシャルロックに渡そうとするがはんぺんはそれ
を嫌がりシャルロックの手に噛みつく。

「酷いよはんぺん。」

「あらあら、貴女の怪我の手当てもしなくてはいけませんね。私の
部屋でよければそこまで来てもらっていいでしょうか？」

「女神様何をおっしゃっているのですか！？そのような得体の知れ
ない小娘を！！」

いい加減にしろよそれでも教祖か貴様は！！怒鳴ってやりたいがそ
んなことしたらイストワールに叱られるしね。

「しばらく私はプラネテューヌに滞在しましょう。それと降誕祭も
プラネテューヌにて行うことを前向きに考えましょう。」

「おおそれはまことですか女神様！！」

「私は嘘をつきません。……………貴方と違って。それでは失礼します。
いきましようか？」

「は、はいー！！」

俺はシャルロックの手を取り協会の女神の為に用意された部屋に連
れていく。

「あ、あの良かったんですか女神様？」

「ん？ああ別に問題ないよ、あいつイラつくし。それにもともしばらくはプラネテューヌに滞在する予定だったから。降誕祭はあくまで考えるだけだしね。おーよしよし。やっぱり猫飼おうかな？」
すり寄ってくるはんぺんをなでながらシャルロックに返事する。

「め、女神様なんかさつきとキャラが違いますよ。」

「ユウでいいよ。女神様って言われるの堅苦しいから、ええと……。」

「あ、私シャルロックです。女神さ、ユウ様？」

「シャルロックねえ、ならシャルだね。後俺には様を付けなくていいよ。」

「ええ！？は、はい。わかりました！！ん？俺？」

「こんな見た目だけど俺は男だから。」

「ええええー！！」

その驚きは凄まじく大きな声だったと言っておこつ……………。

「ふしゃー！！」

はんぺんが怒るほどに大きな声だと。

「つて痛いよはんぺん！？」

「シャルは元気な娘だね。」

それから俺は全身傷だらけになったシャルを治療した。

そしてプラネテューヌで五日間過ごしたわけなのだがその間にいろいろあった。俺と話していた教祖が大量の猫に襲われ重症で病院に運ばれたり、シャルが自らの能力の超頭脳によって名推理でその教祖の悪行を暴いたり、シャルが大量の猫と共に協会を襲撃したりなどさまざまなことがあった。

天界に戻る際にシャルと猫達に捕縛されそうになったりもした……。

回想シーン終わり

そして現在……………。

『ニャー!!』

『ニャー!!』

『ニャー!!』

『ニャー!!』

「ちょっとみんなくすぐりたいよ。」

俺はシャルが連れてきた猫達に囲まれていた。

「みんなだけずるいよ!! 私もユウちゃんとニャーニャーしたいー!!」

ニャーニャーってなんだろうか？

「猫最高ニャーニャー!!」

お前って奴は……………。

ちなみに他の園児達も猫と遊んでいる。

『うにゃー!!』

一匹の猫が俺の頭の上に乗っかる。

「もしかしてはんぺんか？」

『んにゃー!!』

「ああずるいよはんぺん私もユウちゃんの頭に乗りたい。」
君は乗れないだろが!!

「猫と戯れる幼女素晴らしい!!」

こんな奴が創造者だなんて俺は……いやだね。

しばらく猫と遊んでいたがふと気づくと猫達の様子がおかしいのに気づく。

『フシャー!!』

『フシャー!!』

一匹だけではなく全ての猫達が警戒の声をあげる。

そして猫達が睨み付ける方向を見るとそこにはひよろ長い背丈にまるでピエロのような仮面を被った男がいた。

「なんて素晴らしい光景なのであろうか可愛らしい幼女達が戯れる姿は!!これはベロンベロンしなくては!!」

なんだこいつは？おい創造者貴様と同類がいるぞ！！

「まさかあのしゃべり方そしてあのベロンベロン！？そうか既に計画が……………」

何を驚いているんだ。

「そして我が輩の求めた完璧なる幼女シルバーハートちゃん！！」

「俺の事を知っているのか？」

「知っているとも我が輩はシーさんのピンクモードの動画を見た時から君のファンなのだ！！」

あれを見たのか。

「そしてシーさんには我が輩の変身を捧げよう。アンチプロセッサユニット装着うー！！」

「プロセッサユニットだと！？」

「間違えないあいつは……………」

ピエロ仮面が光に包まれる。

「いったい何が起こっている！？」

「我が輩の変身を見るのだー！！」

その言葉と共に光が晴れる。そしてそこには……………。

「なんだこのデカ物は!？」

「やはりそう言うことが……………」

俺の目の前には黄色い巨体の怪物がいた。

「さあシーたん我が輩とベロンベロンしようではないか!！」

「キヤー!！」

その姿を見た園児達と幼稚園の先生が逃げて行く。

「ああ幼女達が走って行く。だが今の我が輩の目には君しか映っていないのだシーたん。」

奴が一步一步とその巨体を近付けてくる。だが今の俺は奴から感じる感覚に驚いていた。そう奴から感じる感覚はまるでネプテューヌ達女神とまったく同じ物でいやぜんぜん違うもの……………似て非なる物とでも言ったところであろうか？

「おい!！くるぞ!！」

「ユウちゃんに嫌らしいことしないで!！」

やつの巨体に滑り台が投げ付けられる。シャルが能力の一つである超怪力にて地面に固定されていたものを投げ付けたようだ。「痛いああ!！おお!！まだ幼女がいたとは。だがシーたんとのベロンベロン邪魔をするなら容赦はしないぞ!！」

「うそ!？まったく効いてないよ!！」

あれをぶつけられてダメージがほとんどないとは………………。
おい！！変態創造者 何か武器はないのか！？それか早く元に戻せ
！！

「な、ないことはないんだけど……………怒らないでね。」

いいから早く！！

俺の手に光が集まる。そしてそこには……………。

「ってこれピコピコハンマーじゃん！！これでどうやって戦えばいいんだよ！！」

「がんば」

「がんば じゃないからねー！！」

「シーたんカワユス！！」

「おい！！しかも敵を喜ばせてるぞ！！」

「このままでは負けちゃうね。」

「だったら早くこの園児服を何とかしろよ！！」

「ユウちゃん逃げて！！ふん！！」

奴が振り降ろした手をシャルが受け止める。

「シャル大丈夫か！？」

「だ、大丈夫だよ、これくらい。いつ!?!」

「邪魔をするでない!?!」

シャルは大丈夫といったが徐々に身体が地面にのめりこんでいく。明らかに大丈夫とは思えない。

「ユウちゃんは汚させない!?!」

「いい加減にしつこいのだ。それ!?!」

奴の片手の圧迫を何とか支えているシャルに奴はもう片方の手でなぐり飛ばす。

「キヤー!?!」

なぐり飛ばされたシャルは地面に叩きつけられる。

「シャル!?!」

俺はシャルに駆け寄ろうとするが身体に巻き付いた光の帯状のものに身体が拘束されてしまう。

「何処にいくのだシーたん。さあ我が輩とベロンベロンしようではないか。」

奴の巨体の下に見たこともない魔法陣が展開されている。この拘束魔法は奴の仕業か…。

「ぐっ!?!」

徐々に身体が奴の方向に引きずられて行く。

「さあシーたん!!」

「じよ、冗談じゃない!？」

必死に抵抗するが筋力や腕力は子供、まったく意味をなさない。

「く!？他のモードにすらなれる事ができないのか!？おい創造者早くこの園児服をどうにかしろ!」

「……………駄目です。」

「ふざけるな!!状況を考えろ、シャルを早く助けないと!」

「助けてどうするんですか、もう死んでいるかもしれませんよ。それに貴方もあれの毒牙にかかって助かるとは思えません……………」

「ふざけるな!!助かる命があるにもかかわらずに見捨てられるか!!」

「シーたんさつきから何をブツブツ言ってるのだ?我が輩とのベロンベロンがしたくてたまらないのだな。安心するんだ。」

奴の巨体が目前に迫ってくる。だけど諦めてたまるか、シャルを助けないと。

「シーたん!はあはあ!!」

駄目なのか？さすがに俺も絶望仕掛けるが……………。

『『『『ニャー！！』『』『』』』』』

「なんであるかこいつらは！？いだだだ！？」

猫達が奴の身体に飛び付き爪で引つ掻き、歯で噛みつく。

「み、みんな！！」

『ニャー！！』』

他にも多くの猫達が俺を拘束している光の帯を必死に口で食いちぎろうとする。

「ええい！いい加減にするのだー！！」

「だがいくら数が集まろうともあれでは直ぐに……………」

奴は身体を振り回して身体の猫達を吹き飛ばす。

『ギニャー！？』

「や、やめろー！！お前らも早く逃げろー！！」

俺は拘束魔法を食いちぎろうとしている猫達に逃げるように促すが猫達は俺の言葉を無視してそこから動こうとしない。 somewhere か吹き飛ばされた猫達も再び飛びかかる。

「猫さん…………達がんばって…………るんだ…………から私もがんばらないと」

聞き覚えがある声に俺がその方向を見ると明らかにボロボロのシャルがフラフラの状態で立っていた。

「ええい!!」

そしてシャルは近くにあったシーソーを引き抜く。

「下にいる猫さん達退いて!」

シャルの言葉に魔法陣を引きちぎろうとしていた猫達は飛び退く。

「これでええええ!!」

そしてシャルはシーソーを思いっきり奴の身体の下にある魔法陣に向けて振り降ろす。

「な、なんだとー!?!」

奴の身体が衝撃でひっくり返り魔法陣が霧散する。

「身体が動く。」

俺は立ち上がり奴から距離をとる。

「やったー!!」

『ニヤー!!』

シャルと猫達は喜びの声をあげるだが……………。

「よくも我が輩の邪魔をー!!」

奴が一回転して元の態勢をとる。そして再度魔法陣を展開する。あ

れば魔法陣の構成はまさか……………。

「十中八九攻撃魔法ですね。」

「消えるがいいー!!」

奴の口から黄色の光弾が放たれる。シャル達に向かって。

俺は直ぐ様シャル達を助けようとするが光弾の光に動きを止めてしまふ。

そして光が晴れたところには、傷だらけのシャルと同じく傷だらけの猫達が倒れていた。猫達の中には足がきらかにおかしな方向に曲がっている子や出血している子達までいる。

「みんな!？」

「邪魔する奴らもいなくなつたよ、さあシーたんベロンベロンの時間がきたよ。ハアハア!!」

くっ!?!おい創造者早くこの園児服を解除しろ!聞いているのか!!

(残念ですが貴方には絶望を味わってもらいます。そして究極の黒に至ってもらいます。この世界の筋書きを元に戻す為に。ですから今は悲しみを力なき物の絶望を味わってください。)

くっ!?!あの変態はやはりこいつの味方だったのか!?

俺はこのまま終わるのか……………。なにも出来ずに、こんなところで……………。

(そうです。あなたが絶望を味わう必要があるのです。究極の黒に、最凶最悪の神、犯罪神になるために……………。)

「俺は諦め……………」

（貴方には酷ですがこれも運命です。）

「俺は諦めない！！俺はもうすでに選んでいるのだから！！あの時女神の力を受け入れた時から！！俺はシルバーハートは絶望しない！！そして俺が絶望しない限りゲームギョウ界絶えず俺の為に回り続ける。」

「何を馬鹿な事を言っている！？貴様には絶望以外は残されていない！！」

「それは違います！！」

「この声はまさか！？」

「ようやくか、ずいぶん待たせてくれたなパートナー！！」

「私もがんばって貴方の居場所をサーチしていたんですよ少しは労ってくださいよ」（・ー・）「おっと話がそれましたね、では呼んでくださいユウ。貴方の一番のパートナーの名を！！」
その言葉の通りに俺は信頼するパートナーの名を呼ぶ。

「顕現せよ史書イストワール！！」

だが何も起きない。

「何も起きないでわないかシーたん。」

「ちよ、ちよっと待って顕現せよイストワール！！」

それでも何も起きない。

「……………」

「お願いしますから来てくださいイストワール！！あいつは何を、ひやう！？」

「どうしたのだシーたんそんな可愛らしい声を出して？」

「な、何か服の中で動いて、んくっう！？」

確かに服の中で何かがうごめいている。

「この人本当に女の子になってますよ。普段も良い香りですけどこれはやばいですね！！ハアハア！！」

さらには声まで聞こえてくる。

「イストワールだろうこの声。くっつ、いい加減に出てこい！！久しぶりのシリアス展開なのになんでこうなるんだよ！はふう！？」

「仕方ありませんね、ばいちょ。」

おかしな掛け声と共に園児服の襟から顔を出すイストワール。

「おお幼女が増えたではないか！！」

しかも合法口リですよダンナ。

「よりもよってこのような時に現れるか史書イストワール！！」

「お久しぶりですね。破壊の書トオ・メイ・トオ。よくも人の男の娘に手を出してくれましたね。」

「いろいろツツコミたいところなんだけどそろそろ猫さん達がヤバそうだから何とかして。」

「もうせつかちなんですから。わかりました、では目を瞑ってくださいー（・ー・）ーそおね。」

謎の掛け声と共に人型サイズになるイストワール。そして目を瞑るように促す。

「わ、わかった。」

「では行きます！きいええええー！！」

その謎の奇声と共にイストワールは思いっきり園児服を素手で破る。無論そんな事をすれば……………。

「え？」

呆然とするユウ。

「ちっ！？」

何故か舌打ちをする破壊の書。

「可愛らしい白い下着たなシーたん。」

冷静にユウ（幼女）の下着姿をみる黄色のデカ物。

「ユウちゃんが下着姿になっちゃたー！！ってなんですかー！！」

何故か傷一つもなく復活しているシャルロック。

『『『『「ヤァー……」』』』』

猫達もいつの間にやら全員復活して雄叫びをあげる。

「おお！！アタシの嫁が幼女にしかも下着姿！！シャッターチャンスは逃さない。」

そして何故かいるREDちゃん。

「いやー！！！」

乙女のような声をあげて自らの身体を抱きしめてしゃがみこむ。

「まだまだー（＜＞）」

さらにイストワールはユウを押し倒して自らの唇でユウの唇を塞ぐ。

「ぷはあ！これで園児服の呪いは消え去りました。良かったでへぶ！？」

「このバカイストワール！！何勝手に人の初めて奪い取るんだよー！！！」

初めてを奪い取られたユウは直ぐ様シルバーハートに女神化してイストワールを地面になんども叩き付ける。だが何故か女神化しても幼女のままであった。

「シーたんが変身だとー！！！」

「ユウちゃんのはじめてが奪われちゃったー！！ってなんでですかー！？？」

「アタシの嫁が汚れてしまった……。うわあああん！！N
O・1に言い付けてやるー！！」

「ちなみにあの園児服は着ている本人は脱ぐ事はできないが他の人から脱がせてもらえば脱げるという代物である。」

やはりカオスからは逃れられない宿命。そして何処かに走り去るR
EDちゃん

「シーたんをいじめるとはいくら少女と言えど許さんぞ！！」

ボスキャラまで何故かユウの味方に付きかけていた。

「いろいろ聞かないと気がすまない事があるがまずはデカ物貴様を叩き潰す！！猫さんをいじめるなんて貴様の血は何色だー！！」

「おお我が輩と遊びたいのかシーたん！変身したシーたんをベロンベロンしてやろう！」

俺は零刹那を両手持ちで構える。重くて片手じゃ持てなくなっているから。

「あっはははは！！そんな事ではアンチハードには勝てないぞ！！」

アンチハード？何それ？

「イストワール何か知ってる？」

「いえ私にもわかりません。」

「貴様等を知る必要がない！！何故なら貴様等はここで死ぬのだからな！！」

「あの野郎最初の頃と性格変わりすぎだろうが。」

「あれが破壊の書トオ・メイ・トオです。その場ノリで行動する恐ろしい魔書です。」

「事情は後から聞くとしてもこのままだと確かに不味いかもな。仕方ない俺も進化するか。」

「進化ですか？」

「ああ、ゲームギョウ界は俺が望む限り回り続ける。そして俺自身も進化し続ける！！」

その言葉と共に俺の身体に空から白い光が降り注ぐ。

「おおもしやピンクモードになるのかシーたん！！」

「違う、俺は猫さん達とシャルの純粹なる思いを受けて新たな力を手に入れたその力を、想いの力を貴様に見せてやる！！」

「どうでもいいですけど猫さん達何事もなかったかの様に毛繕いしてますけど……………」

「想いの力を見せてやる！！」

「あら？シャルさん駄目ですよ超怪力で自動販売機を引き抜いて勝手にジュースを飲んだら。」

「……………想いの力を見せてやる!!」

「今まで俺が撮ったのシルバーハートのロリロリ動画いくらで買うんだトリック？」

「無論望むだけの報酬を出そう!」

「……………おまえら覚悟しろよ。」

ユウに降り注いだ光りは輝きを増していく。

「今回は久しぶりのシリアス展開だと聞いてやる気を出していたのに何だよこれは!？途中までは良かったよでもイストワールお前のあの登場の仕方は何だよ人をおちよくってんのか!？そして自称創造者の畑の書トマトお前何だよ初期設定と全然違うじゃないか!あれか作者がノリで書いたのはいいが処理がめんどくさくなってそんなところに落ち着いたのか!？しかもお前何気にあのデカ物の名前言ってしまったよね、ネタバレ禁止だろうがこのお馬鹿!!それに猫さん達。君達明らかに今にも死にそうだったのになんで元気に駆け回ってるの?怪我はどうしたのあれかギャグ補正か!？おいシャルいますぐ自販機を元に戻しなさい。なんか防犯ブザーみたいのがビービー鳴ってるし、それに遠くからサイレンらしき物が聞こえてきたよ、明らかにこちらに近付いてきてるよね!？そしてそのデカ物……君は自分の役をまっとうしていたから特に言うことはない。」

俺は久しぶりの長台詞に息を整える。

「生きていてごめんなさい。」

体育座りをして顔を伏せるイストワール。

「メタ発言はやめろよ！！それに俺は畑の書ではなく破壊の書。トマトではなくてトオ・メイ・トオ。」

やっぱり無理矢理すぎたかも知れない破壊の書。

「ごめんなさい。ほんの出来心だったんです。本当にすいませんでした。」

何処かに連行されるシャル。

『『『ンニヤー！！ニヤ、ニヤー！！』『』『訳（ユウちゃんかわいいよ！！ハア、ハアー！！）』

何か聞こえたが聞かなかったことにしましょう。

「こんな空気でも俺は一人シリアスを貫く事を誓おう！今こそゲイムギョウ界の人々の純粹なる想いよ我に新たなる力を！！」

ユウの身体を包んでいたプロセッサユニット『シルバー』が解除される。そしてそこに新たなるプロセッサユニットが装着される。

「今ゲイムギョウ界の純粹なる想いを受けて新たなる力をここに見せん。無垢なる白、シルバーハート・ホワイトモード降り…ってなんじゃこりゃー！！」

降臨したシルバーハート・ホワイトモードを見てこの場にいた全員が叫ぶ！！

「『『『ゴシッククロリータキター！！』『』『

シルバーハート・ホワイトモード

彼：いや今は幼女だから彼女いややっぱり幼女と呼ぼう。幼女に装着されたプロセスユニットそれは紛いもない白一色のゴシックロリータ。それこそこのゲームギョウ界の人々の想いが形となった物そして今シルバーハートは異形の敵に立ち向かう。人々の想いと共に。

「ゴスロリシーたんベロンベロンー!!」

「もうシリアスは無理なのかー!!」

人々の想い集いし力 降臨する白（後書き）

きょうのゆにちゃん

その2 たおすべきてき

ユニ「パールハート貴女だけはゆるさん。断じてゆるさん。貴女は私が倒す!!」

ネプギア「なぜパールハートのですか？ブラックハートならまだわかりますが。」

ユニ「私が女神化したらおっぱいが小さくなるのはアンタも知っているでしょう?」

ネプギア「……何となくオチが見えてきましたが。」

ユニ「私が小さくなるのにどうしてパールハートはおつきくなるのよー!!」

ネプギア「だと思いました。馬鹿馬鹿しい。」

ユニ「バストぷりいひいひいひいずっ!!」

激突の薄紫と黒 迷走の紫（前書き）

主人公のユウがまったく出ないという……………。

今回はスパッツネプテューヌ視点になります。

激突の薄紫と黒 迷走の紫

ネプテューヌside

現在ネプテューヌ一行はプラネテューヌ到着していた。そして協会に向けてその歩みを向けていた。

「それにしてもネプテューヌの大陸にしては普通ね。てっきり住民みんなが異常な性癖を持っていて露出狂なんかが普通に歩いてるかと思ったわ。」

ノワールが辺りを見回しながら呟く。

「そんなことないよー！！私だって大陸の管理位真面目にやってたよ。上手くやればお兄様が頭撫でてくれたし。えへへ。」

何かを思い出しながらネプテューヌがニヤニヤする。

「実際のところはどイヌよコンパ？」

コンパに問いかけるアイエフ。どうやらまだスライヌ口調は治らないようだ。

「パープルハート様の評判はとても良かったです。お姿こそ全く見せない方でしたが一部の隙のない政治的判断、住民の要望に則った裁定ができる方として信仰されていました。」

コンパがまるで自分の事かの様に嬉しそうに話す。

「……………信じられないわ。」

「あり…得ませ…………んわ。」

驚きに目を見開きネプテューヌを見るブランと車椅子を死にそうになりながらも懸命に進めるベール。

「いやー何か照れちゃうね。コンパもやっぱり私の事信仰してた？」

「ええ信仰していたですよ。けどねぶねぶじゃなくてパープルハート様をです。」

「え？コンパ、私がパープルハートだよ。」

「ねぶねぶ寝言は寝てから言ってくださいです。」

「ここに来る前にも話したよね！？私がこの大陸の守護女神パープルハートだって！！」

「ねぶねぶ嘘は泥棒の始まりですよ。」

「こ、コンパ本当だよ！！本当に私が「もうやめなさいネプテューヌ！！」な、なに？」

さすがにネプテューヌがあわれになったノワールはすかさず止めに入る。

「ネプテューヌよく聞きなさい。今の彼女に何を言ったところで無駄なのよ。産まれた時から何らかの障害を持った人はそれを受け入れる事も比較的簡単よ。でもね事故なんかによつて後天的に障害を持つことになった人にはそれを受け入れる事はとてつもなく困難な事なの。今のコンパさんはまさにそれなのよ。自分の信仰していた女神が実はこんなスパツスパツ連呼しているようなどうしようもない究極変態悪逆非道最狂最悪最低女神だという現実を突き付け

られて困惑しているのよ！だから今はそっとしておきましょう。ね？」

まるで女神の様に実際に女神だけどノワールは優しくネプテューヌに諭す。だがその内容は彼女を決心させるには充分だったようだ。

「私今からこの大陸にお兄様にも内緒でこっそり仕掛けた自爆装置を起動させて来るよ。」

だがノワールに抜かりはない。

「アイエフさん！！」

「まかせなさいヌ。LEDライト零距离バースト！！」

「ヒギヤー！！」

アイエフのLEDを零距离で受けて悶え苦しむネプテューヌ。

「さあみんな行くわよ。」

そしてネプテューヌを放置して歩き出す一行であった。

「ま、待つて置いていかないでよ。なんか目の前が真っ暗なんだけど、ごめんなさいもう爆破なんてしませんからー！！」

一行移動中

「それにしてもねぶ子放置してきて良かったイヌか？」

さすがに心配になったのかアイエフは呟く。

「ライバルは一人くらい少ない方が良いわ。」

現実的ですねノワールさん

「そうですね。ああ遂に周りの物までマシユマロに見えてきましたわ。」

結構重症なベール。

「……………馬鹿ばっか。」

ネタに走るブラン。

「ねぶねぶの事です。きっとお腹が空いたら帰って来ます。」

「それもそうね今の内に主役交代と行きましょう。協会が見えてきたわね。」

「本当イヌね。でも何か様子が変わイヌね。」

スライヌもといアイエフの言葉通り協会の様子がおかしい。

「本当ですう。人が入ったり出たりしてるですう。」

「何かあったのかしら？」

全員が近寄って行くと……………。

「行ってきたああす!!」

何処かで聞いた事のある少女の声と共に協会の扉が開かれ大量の猫

が飛び出して来る。

「……黒猫の使い魔は魔法少女には必要不可欠ね。何処かにいないかしら？」

大量の猫の中から黒猫を探すブラン。

「コンパさんプラネテューヌの協会ではこんな事が日常茶飯事なのかしら？」

ノワールが大量の猫を眺めながらコンパに尋ねる。

「教祖様が変わってから猫さん達がたくさん出入りしだしたですう。」

「教祖が？何があつたの？」

「確か前の教祖様が悪い事をしていてそれを今の教祖様にそれを暴かれたんですう。」

「なるほどね。それで教祖が変わつたのね。」

ノワールが納得したのか腕を組んでうんうんとうなずく。

「見つけた黒猫！！捕まえ……た！！大人しくしやがれ！！そして私の使い魔になりやがれ！！」

一匹の黒猫を両手で持ち上げる。だが猫も必死なのかジタバタと暴れる。ブランも必死にそれをおさえる。しばらくして猫も諦めたのか暴れるのをやめる。

「よし捕まえ」「やれやれ最近の子供は乱暴じゃのう。」「な!？」

ブランは猫が発した言葉に驚きおさえつける力を緩めてしまう。その際に黒猫はブランの腕の中から抜け出す。

「てめえ喋れるのか!？おもしれえやつぱり私の使い魔にしてやる。」

ブランは手をわきわきさせながら黒猫に近付く。それを見て黒猫は二本足で立ち上がり鼻で笑う。

「お主の使い魔等になるつもりは毛頭ない。わしは既に主と決めたお方がおる。」

「知った事か!！嫌だつて言うなら力づくでもしてやるよ!！」

ブランは自らの武器であるハンマーを取り出して構える。

「わからぬ小娘だ、よかろう。この拳あの方の為以外には振るわぬと決めたが……。貴様に世界の広さを教えてやろう。来るがいい小娘!」

「その構え中国拳法か面白い。やああつてやるぜ!！」

そして今ブランのハンマーと黒猫の拳がぶつかる。

「これは突っ込んだら負けね。」

「そうですね。」

コンパとノワールはツツコミを放棄しかけていた。

「マシユマローー!!」

ベールは猫の群れに飛び込みあつという間に見えなくなってしまう。

「私の負けだな。でも負けただけでなんかスッキリした。」

「これが世界の広さだ小娘。貴様程度ではまだその領域に片足を踏み入れた程度だ。」

「今は負けを認めてやるよ。だが次はぜってえ負けねえ!! 私はお兄様のシルバーハートの妹なのだから!!」

「シルバーハート様の妹!? そうかお前が……………」

「お前お兄様の事知ってるのか!？」

「ああ以前命を救われた。恩人だ。」

「そうかお前が言ってた主ってお兄様の事か。」

「………… アナスタシアだ。」

「え?」

「わしの名だ。ではまた会おうホワイトハート!!」

「ああまた会おうぜアナスタシア。その時は絶対お前を私の使い魔にしてやる。」

アナスタシアは走り去りブランは大の字で寝転がり青空を見上げる。
どうやら一見落着のようだ。

「なんか別の物語が始まりそうね。」

「収集がつかないですう。」

「マシユマロが……………」

「グリーンハート様大丈夫イヌか？」

「すいません何か食べ物はありますかアイエフさん。」

「マシユマロでよければあるイヌよ。」

「鬱ですわ。」

こちらもある意味決着が着いたようだ。
そんな時忽然と時間が止まったかのように物音が一切聞こえなくなる。そして人がさっきまで大量にいた猫達すらいなくなる。

「な、なんで誰もいないですか!？」

「物音ひとつしないイヌ。」

「まさか私の隠された魔法少女としての能力が発動してしまったというの!？」

「それは違いっわ(ますわ)!!」

「即座に否定しなくても……………」

「ブラックハート様、グリーンハート様何か知ってるですか？」

「ええよく知っているわ。人がいなくなったのは結界が張られたからよ。」

ノワールが辺りを警戒しながら答える。

「確か人払いの結界でしたわね。そしてこんな事を行うのは……………」

「

ボールがふらつきながらも自らの武器である槍で身体を支えつつ立ち上がる。

「よもやそちらから来てくれるとは好都合です。」

その声は協会の中から響いてくる。そして徐々に近付いてくる。

「パープルハートが見当たらないのは気になります但プラネテューヌにいたのは間違えないようですね。ホワイトハートを倒した後でゆっくりと探しだして倒してあげましょう。」

足音はやみ協会から一人の少女が顔を出す。

「ねぶ子！？」

「なんでねぶねぶが協会から出てくるのですか！？」

「失礼極まりないですね。あんなのと一緒にされるなんて。」

そう言うとネプテューヌにそっくりな少女はウィッグを外してその長い髪をたなびかせる。

「やはりあの時の呪い女でしたわね。」

「名前は確かネプギアだったかしら？」

「その名で呼ばないでいただけますか？その名で呼んでいいのはお兄ちゃんだけです。」

嫌そうな顔でノワールとベールを見つめる。

「気になる事は多いけど何故貴女がネプテューヌの姿で協会から出てきたのかしら？」

「誰が貴女なんかに教えるとも思っているんですか？と言いたいところですが特別に教えてあげましょう。女神の代行です。パールハートが不在の為にお兄ちゃんが私を派遣したのですよ。」

「お兄様が…………。」

「話はそれくらいいいでしょう。さてホワイトハート貴女を再起不能になるまで叩き潰してあげましょう。」

「……………どうして私？貴女とは初対面の筈だけど。」

ルウィーでの記憶のほとんどが抜け落ちている為にネプギアの言っている事が理解出来ないブラン。

「その余裕が命取りになりますよ。貴女なんてDモードを使えばただの子供同然です。」

「言ってくれるじゃねえか。このマジカルブランちゃんに勝てるのも思ってるのか!？」

「ま、マジカル？よくわかりませんがかかって来なさい！！」

「上等だやああって「待ちなさい」人のセリフを遮らないでくれな
いかしら？やる気がなくなるわ。」

一気にやる気をなくしたブランであつた。

「ネプテューヌもどき貴女の相手は私がするわ。」

そう言つてノワールはネプギアとブランの間に立つ。

「ふざけないでくれますか？ブラックハート貴女は一度私に負けた
身勝てるとても「怖いのか？わたしに負けるのか？」……………殺す。」

「今度は呪いなんて生易しいまねはしません。殺してあげます。覚

悟しなさいブラックハート！！」

「そうこなくちゃ。さあ振りきるわよ。」

「プロセスサユニット装着。」

ネプギアの身体にプロセスサユニット、プロトシルバが装着される。

「変身。」

そしてノワールの身体に黒のプロセスサユニット、ブラックが装着
される。

「まずは攻めさせてもらつわ。」

ブラックハートは武器はネギになる為使用せずに無手でパープルシ
スターに挑む。

「なめられたものですね。」

パープルシスターはビームセイバーを取り出してブラックハートに
応戦する。

「それでも喰らってください。スラッシュウェイブ!!」

パープルシスターはビームセイバーを振り降ろしそこから波状のエ
ネルギー波をブラックハートにぶつけようとする。

「なめているのはそちらのほうじゃない? はっ!!」

「何!? うぐっ!」

だがブラックハートはそれを身体をそらす事で避けてパープルシ
スターに回し蹴りを入れる。

「まだまだよ。」

さらにブラックハートはパープルシスターの首に手刀を決めてパー
プルシスターがその衝撃で取り落としたビームセイバーを掴むが無
論ネギにかわる。だがそれがブラックハートの狙いだった。

「次は背中のライフルも頂くわ。はあっ!!」

「まさか貴女の狙いは!?! かはっ!」

続け様にブラックハートの拳がパープルシスターに叩きこまれる。
そしてその拳が鳩尾にはいり、パープルシスターはハードバスター
ライフルを奪い取られネギに変えられてしまう。

「なるほど、ノワールは呪いを逆手に取ってあの呪い女の武器を全てネギに変えるつもりなのですね!!」

ベールが興奮して立ち上がる。

「私は以前ラステーションで貴女と闘って貴女の強さの矛盾に気づいたわ。そしてそれはルウィーでの闘いを見て確信に変わったわ。」

「何を言って!?!」

「貴女実はそこまで強くないわね。貴女の強さ異常だと思ったのよ。だけどそれは貴女自身の強さではないわね。貴女の闘いかたまるであってなかったものの超質量兵器による火力での力押し。あのミラージユなんとかやら、フォミュラーエッジとかあれってよく考えてみるとただやみくもに武器を振り回してるだけじゃないの。結局貴女は武装とプロセッサユニットにたよりきりなのよ。知識と装備が豊富でも技術が伴わなければいみはないわ。」

事実その通りであつた。ネプギアの戦闘経験は0に近かつた。まともには戦えば勝ち目などないくらいに。だがそれを可能としたのがネプギアが使用しているプロセッサユニット・プロトシルバであつた。その名の通りユウが使っていたプロセッサユニット・シルバのプロトタイプなのだがネプギアがそれを貰い受けて使用していた。さすがにユウが使用していたものでその能力は既存のプロセッサユニットを凌駕するのは容易かつた。そして二つ目に鬼心の仮面の効力によってその戦闘能力を飛躍的に上げていた。だが現在鬼心の仮面は使用不可能でその恩恵は受けられない。

「わかつた様な口を聞くな!!こうなったらDモードで絶対領域劣化を使って!!」

「そんな暇は与えないわ！！モードチェンジタイプソニック・トリアル。」

ノワールのその言葉と共にノワールのプロセッサユニットより光がほとばしり視界を覆う。

そしてその頃ノワールとネプギアの闘いが新たな境目を見せたころ。

放置されたネプテューヌside

「まさか皆私を放置して行っちゃうなんて私なしでこの二次小説成立するとも思ってるのかな？……………それにしてもここどこだろう？」

そう今ネプテューヌは迷っていた自分の大陸で。しかも明らかにダンジョンらしき場所にいた。どうやったらこんな場所に辿り着いたのであるのか？

「ち、違うよ迷ったわけじゃなくて。え、えーっとそう今の内にこのダンジョンらしき場所に封印された凄い武器を探していたんだよ……………ごめんなさい。目が見えなくなって闇雲に走ったらこんな場所にいました。」

こんな時に限ってインジェクトボタンも品切れという徹底ぶりである。

「あーあ。お兄様に会いたいなあ。そして一緒にお風呂に入ってお

兄様の作ったご飯を食べて、しまいにはお兄様と一緒に布団で寝て……。ああヤバイ想像したら鼻血が……………」

ネプテューヌがユウに想いを募らせている最中に異変が起きた。

『来て。私と同じ欲望を持つ女神。貴女に渡したいものが……………。』

「な、何！？頭の中に声が！？」

ネプテューヌの頭の中に声が響いてくる。

『驚かせてごめんなさい。でも時間がないの、私はもう少し先にいるわ。私の元に来て。』

「あ、貴女はいったい誰なの？もしかしてーすん？」

ネプテューヌの頭の中には旅をするきつかけとなった声の主が思い浮かぶ。

『違う。私は貴女と同じ欲望を持つ者。お兄様とにやんにやんしたいと思っていた者だけどそれがかかわなかった者。志しなかば果たしたもの。』

「お兄様の事知ってるの？」

『よく知っています。あんな可愛らしい素敵な人このゲームギョウ界のどこを探してもいないでしょうね。ああ今日の下着は何色でしょうか。ハアハア……！』

「案外履いてなかったりして。ハアハア！！」

『それ良いですね。私興奮して来ました。』

「何か貴女とは気が合うね。」

『そうですね。貴女には私の元に辿り着いてくれたら新たな力を与えるつもりでしたが、さらに上乘せしてお兄様の水浴び写真を差し上げましょう。無論全裸です。』

「素晴らしい！！お兄様の水浴び写真絶対手にいれなくては！！」

新たな力などはたから頭の中から入っていないネプテューヌであった。

『かむひあー。』

「お兄様の水浴び写真ー！！」

欲望の歴史は今再び回りだす。そして欲望の力は受け継がれる……。

次回 男の娘な女神様

「欲望剣 紫の覚醒」

神話が今再び。

激突の薄紫と黒 迷走の紫（後書き）

きょうのゆにちゃん

その3 うたはぜっきょう

ユニ「歌はいいわ。お兄様が生み出した文化の極みね。」

ラム「ユニちゃん何を聞いているの？」

ユニ「歌よ。ラムも聴いてみる？」

ラム「うん！………イヤアアアー！？何これ！？叫び声や悲鳴が聴こえるよ！！こんなの歌じゃないよ！！！」

ユニ「貴女にはまだ早かったわね。最高の歌じゃない。人の絶望、悲しみ、恐怖これこそが最高の音楽よ。さあもっと叫びなさい己の絶望を！！！」

ラム「ユニちゃんは何処がおかしいよ。」

ユニ「あめりあー！！！」

超番外編 第12回ゲームギョウ界大運動会（前書き）

ひとつ参加者は全員体操服にスパッツもしくはハーフパンツを着用しなくてはならない。（男の娘及びネプテューヌがいる団は全員スパッツ着用しなくてはならない。）

二つ自分の使用することが出来る能力は好きなだけ使ってかまわない。ただし競技中のみ。それ以外に使用した場合ポイントの減点とある四天王によりお仕置きが行われる。

その3カオスはほめことば。

超番外編 第12回ゲームギョウ界大運動会

ゲームギョウ界では年に一回季節が夏から秋に変わる位のころに一つの大イベントが行われる。

その名も……………。

いーすん「第12回ゲームギョウ界大運動会を開始します。それでは各団入場。」

その言葉に三色のはちまきを付けた団体が入ってくる。

いーすん「それでは各団の紹介を行なって行きましょう。まずは銀色団団長のこの人、この小説の主人公は俺だ！！男の娘な女神様ユウことシルバーハートです！！」

ユウ「ツツコミたい事は山程あるが今日は楽しもう無礼講だー！！みんな行くぞ準備はいいかー！！」うおおおおー！！

いーすん「今日は彼も何やら弾けてますね。さて続いては紫団団長のこの人スパッツで現在ダイブレイク中！！ネプテューヌことパールハートさん！！」

ネプ「みんな合い言葉は？」

スパッツ！！

ネプ「よし！！絶対勝つぞー！！スパッツ！！」

スパッツ！！スパッツ！！

いーすん「相変わらずのスパッツ精神ですね！！さて続きまして青団団長、最強の名をほしいままにしているストリートミュージシャン5pb.さん。」

5pb.「みんな乗ってるかい？」

イエーイ！！

5pb.「派手にかまそうよー！！」

おおー！！

5pb.「ちなみにボクの3rdアルバムが今月の30日に発売だよ。皆買ってね」

いーすん「何自分の宣伝しているんだよこの野郎　とまあ三つの団の団長の紹介も終わりましたので続けて選手宣誓を行います。団長は集まってください。」

三人「「「宣誓！！我々選手一同は。」」」

ユウ「日頃的能力を全力で使い。」

ネプ「非道と言われようとも。」

5pb.「全力で卑怯な手行使することを。」

三人「「「ここに誓います。」」」

いーすん「以上選手宣誓でした。それでは各団テントに戻ってください」

さい。」

各団移動中。

いーすん「各団が移動している間に各団の団員の紹介を行います。まずは銀色団副団長の本編では禁断症状持ちのツンデレネギ少女ノワールことブラックハートさん。」

ノワ「なによその紹介。まあお兄様の団だったのが唯一の救いかしら？とりあえず副団長として頑張るわ。」

いーすん「本音はどうなんですか？」

ノワ「お兄様の体操服& a m p ;スパッツ姿を生で見れて最高よ。」

いーすん「欲望まみれですね。続きまして団員No.3この作品の苦勞人コンパさん。」

コンパ「うつつ、ぐすつ。」

いーすん「ええ！？なんで泣いているんですか？」

コンパ「私うれいんですぅ。うつつ、いつも、うぐつ…ねぶねぶやアイちゃんのせいで苦勞していて。でも今回の番外編ではこの作品の中で常識のある人がほとんどの団に入れて嬉しくて、グスンうわあああん！！」

ユウ「コンパさんお互い頑張ろうね。」

コンパ「ユウさああああん！！私頑張るですぅー！！うわああああん！！」

いーすん「私も何だか泣けてきました。気を取り直して団員No.4 ホワイトシスターの片割れラムさんです。」

ラム「みんなの足を引っ張らないように頑張ります!」

いーすん「元気いっぱいですね。続きましてどうして貴女はそこにいるの?SSHの苦勞人フィナンシェさん。」

フィ「私もどうしてここにいるのか知りたいです。精一杯頑張ります!」

いーすん「はい、がんばってください。続きまして紫団の団員の皆さんの紹介入ります。切れるとだれにも手がつけられない紫団の副団長ブランさんことホワイトハートさん。」

ブラン「おいイストワール!てめえふざけんなよ!どうしてお兄様と違う団なんだよ!!話と違うじゃねえか!!金返せ!」

いーすん「ちょっと!?それは内緒でおねがいします。」

ユウ「後でお話ししようかイストワール」

いーすん「私に死亡フラグが立ちましたが気にしない方向で行きましょう。続きまして団員No.3 腹グロムことホワイトシスターさん。」

ロム「……私は知っている。お兄ちゃんがこの間そのナースとデートしていた。」

いーすん「お話しする必要があるのはどうやらそちらのようですね
ユウ。」

ユウ「コンパさん……………」。

コンパ「ユウさん……………」。

いーすん「そこなんでも赤くなって見つめあっているんですか!？」

ネプテ「まさかのコンパとはまさにですゲームね。」

いーすん「うまいこと言ったつもりですか? 気を取り直して紫団員
No.4 みんなの妹ネプギアことパープルシスターさん!！」

ギア「……………」。

いーすん「ね、ネプギアさん返事をしてください、どうしました?」

ネプギア「どうして私がよりもよってスパッツの団にいますか?
か?」

いーすん「ぜひともダブルパープルが見たいという要望が多かった
もので……………」。

ギア「そうですか。ツインハードバスターライフルマキシマムシユ
ーっていた!？」

ネプ「やめなさいネプギア!！」

ギア「なんの真似ですかパープルハート!？」

ネプ「違っわお姉ちゃんよ!!」

ギア「はあ!？」

ネプ「わかったならちゃんと挨拶し直さない。はいテイク2!!」

ギア「えっ?あの、はい。ネプギアです!!お兄ちゃんや5pb.さんには負けない様に頑張ります!!」

ネプ「それでいいのよ。」

ギア「なるほど、今日はこちらの仕様でやれという事ですか。人気取りは大事ですからね。………私がんばります」

いーすん「丸く収まったところで紫団員No.5ガストさんです。」

ガスト「今日は頑張るですの!!」

いーすん「はいがんばってシャルロックさんに取られた出番を取り返して下さいね。」

ガスト「黙れやこのくそ魔本が!!」

いーすん「では団員の紹介も終わった事ですし競技に移って行きましょうか。」

5pb.「待つて!?!まだボクの団員の紹介が終わっていないよ!!」

いーすん「正直貴女の団は紹介したくないですよ。でも仕方ないですね紹介してあげます。それでは青団の副団長最早誰も彼女を止められないLEDアイエフさん!!」

アイエフ「全力を尽くすわ。」

いーすん「ちなみにLEDライトは競技中以外で使用したら団のポイント50引きますからね。続きましてSSH危険度No.も3。団員No.も3。ダイナマイトな日本一さんです。」

日本一「ゲームギョウ界の正義の使者日本一！！タイマン張らせてもらうよー！！」

いーすん「無論ダイナマイトを使用しても50点引きますからね。では続きまして頭がおかしい少女シャルロックさんです。」

シャル「ってなんでですかー！？」

いーすん「はいありがとうございます。最後にご愁傷様です。妄想廃人ベールさんことグリーンハートさんです。」

ベール「嫌ですわ私まだ死にたくないですわ！！イヤアアー！！」

青団員「『一緒に堕ちよう？』『』『』」

ベール「イヤアアー！！」

いーすん「団員一覧はこうなっています。」

銀色団

・団長 ヌウ

・副団長 ノワール

・団員No.3 コンパ

・団員No.4 ラム

・団員No.5 フィナンシェ

紫団

団長 ネプテューヌ

副団長 ブラン

団員No.3 ロム

団員No.4 ネプギア

団員No.5 ガスト

青団

・団長 5pb.

・副団長 アイエフ

・団員No.3 日本一

・団員N o . 4 シャルロック

・団員N o . 5 ベール

いーすん「それでは競技の方に移りましょう。第一競技は団長及び副団長による100メートル徒競走です。各団の団長、副団長は入場門に集まって下さいね。」

今まさに開幕したゲームギョウ界大運動会。それは混沌を招く。力オスなものであった。

超番外編 第12回ゲームギョウ界大運動会（後書き）

いーすん「その他の役職を紹介します。」

・スタート合図及び競技のルール説明 ユニ

・グラウンド整備及び機会展備 シアン

・衣類提供 お洋服屋さんねぶあゝ

・罰ゲーム係り アンチハード四人

・実況アナウンス 史書イストワール

医療班 コンパ、ガスト

その他追加予定。

欲望戦剣 紫の覚醒 (前書き)

今回はとある理由により超短いです。次回からは気をつけます。ご容赦ください。

欲望戦剣 紫の覚醒

ネプテューヌside

私は今現在謎の声に従ってダンジョンを進み奥深くにある部屋にいた。そしてその部屋の中央には台座があり一本の古びた剣が突き刺さっていた。

だけど私はそんなことよりも……………。

「水浴び写真！！お兄様の全裸水浴び写真はどこなのだ！！」

『あげるけど少しくらい台座の剣に注目して。お願いだから。じゃないと話が進展しません。』

「仕方ないなあ。それでこのぼろっちい剣は何なの？」

『それは抜いてから説明します。』

「ええー。なんか抜いたら身体を乗っ取られるとかないよね？」

『大丈夫ですよ。貴女が私より強い欲望を持つのなら。』

「欲望？」

『話は後です。さあ抜いて下さい。そうすればユウお兄様の全裸水浴び写真が手に入りますよ。』

「まあいいや。お兄様の水浴び写真が手に入るなら。えいやっ！！」

私は剣に手をかける。するとその瞬間頭の中に何かが流れこんでくる。

「な、何これ？お兄様？でも何か少し小さい？若いのかな？」

私の頭の中に流れこんできたものはお兄様の映像だった。

『それは私の生前の記憶ユウお兄様と一緒に旅をしていた時の物。』

記憶。その通りなのかもしれない。私の頭の中には次々に映像が流れこんでくる。三人の少女と一人の少年がいてお兄様と楽しそうに話していた。他にもお兄様の料理している姿、お兄様の寝顔、お兄様の水着姿、たくさん映像が私の頭の中に入ってくる。

『ほらその中に可愛らしい金髪ツインテールの女の子がいるでしょう？』

確かにいた。お兄様の腕に抱きついている金髪ツインテールの少女が。私と同じくらいの背丈の少女が。

『あれは生前の私です。かわいいでしょう。』

「もう！！そんなことはいいからこれ何時まで続くの！？頭いたくなってきたんだけど！！もう抜いていい！？」

『そんなに怒らないでください。最終同調に入りますから。少し痺れますよ。』

「え？あばばばばばば！！」

少女の痺れるという言葉と共に私の身体に大量の電流が流れる。

「ギャー！！痺れるー！！何これー！？」

『今欲望剣が貴女を選定しています。もうしばらく耐えて下さい。ちなみに流れているのは電流ではなくて大量のエネルギーです。』

「な、なんでもいいから早くして！！このままだと髪の毛が爆発アフロになっちゃうよー！！」

『それ面白いですね。…………そろそろ選定が終わりますよ。』

「はあ、はあ。やっと終わった……。抜い……てい・い？」

痺れが終わり息絶え絶えの私は少女に問いかける。

『構いませんよ。ただし抜く際に貴女のありつただけの欲望を込めてください。』

欲望。私の欲望それは…………。

私は剣を引き抜こうとする手に力を込める。

『貴女の欲望。それは何ですか？』

「私の欲望それはひとつお兄様とにゃんにゃんしたいー！！」

私の全力の欲望を込めた力に剣はいとも簡単に引き抜かれる。
そして…………。

『素晴らしい欲望です。今その剣、欲望戦剣　ツリーベルは貴女の物になりました。』

「欲望戦剣……。とてつもない力ね。私の中に凄まじい程のエネルギー

ギーが流れてくるのを感じるわ。でもねそんなことどうでもいいわ。本当に重要なのは……………」

欲望戦剣 ツリーベルの力が私の中に流れ込む。そして私の身体は力の波動を受けて女神化を果たす。それだけではない。

私を包んでいるプロセッサユニットが変化していく。背中に付いている機械的な羽状のプロセッサユニットは砕けちる。そして紫色の光の翼が現れる。その他のプロセッサユニットには金色のラインが入っていく。

『欲望戦剣の力を受けて貴女のプロセッサユニットも新たな力を授かりました。その名もパープ』そんなことはいいから早くお兄様の水浴び全裸写真を見せない！！』そうですね説明なんて不要ですね。さあハッスルしましょう！！』

私の目の前に一冊の本らしきものが光に包まれて現れる。

「これはアルバム？」

『私の生前のコレクション。その名もユウお兄様の全てです。鼻血ブーしないでくださいね。かなりの破壊力ですから。無論その中に水浴び写真も入っています。そしてさらにはもっと危険な代物も』

「凄まじい程のエロスを感じるわ！！何なのこのアルバム危険すぎるわ！！この私が開くのを躊躇うなんて。」

『逃げるのですか？やはり貴女の欲望はその程度だったのですね。』

「馬鹿をいわないで！私は見るのよお兄様の全てを！！ハァー！！」

私は全ての力を結集してアルバムを開く。そしてその瞬間……………。

「ユニバアアアス!!」

その圧倒的なエロスの前に気を失った。

『ふふつ。貴女進む道に欲望の加護があることを祈りますネプテユーヌ。……………私の役目もここまでですね、残りの三人の力も得られるといいですが。』

ああユウお兄様のご活躍が見られなくなるのは残念ですが私は成仏しましょう。四英雄が一人ツリーベルはこれにて失礼致します。エロース!!」

そう言つて四英雄が一人ツリーベルの魂は天へと昇っていった。

欲望戦剣 紫の覚醒 (後書き)

きょうのゆにちゃん
その4 でばん

ユ二「すくないわ。」

ロム「……………」。

ユ二「出番がすくな……………」

ロム「黙りなさい。」

ユ二「ごめん。」

史書の方 誕生勇者王（混沌）（前書き）

俺は初めてブレイブ・ザ・ハードを見た時。まだ足りないと思った。そのせいか今回はさらにカオスにブレイブが主人公よりも目立っている。

ブレイブファンは回れ右でお願いします。

史書之力 誕生勇者王（混沌）

C o u n c i l

無垢なる白 ホワイトモードその見た目はゴシックロータとふざけた恰好極まりない。だか……………。

「これは驚いた……………。通常モードであるシルバーモードの10倍の力。」

その圧倒的な力に自然に手を開いたり閉じたりを繰り返す。

「その手の動き何かエロいですね」（・ー・）」

「黙りなさい。」

試しに軽くイストワールにデコピンを試してみる。

「きゃん。何ですかもう。何かこういうの恋人同士がいちゃつくか……ん……………ほあああああー！！」

「凄い。本当に五秒後にダメージが来ている。このホワイトモード時間操作まで可能とは驚きだ。」

「離してください。私は美少女名探偵のシャルロックちゃんですよ！！今までたくさんの難事件を解決してきたじゃないですか。器物損害罪ぐらい見逃してくださいよ！！えっ！？半分は私が起こした？ってなんですかー！？」

とりあえずあれは無視するとして、問題は……………。

「白いシーたんモエー!!」

あの黄色のデカ物だな。

「さてデカ物お前の罪を数えろ!」

決まった。久しぶりのキメ台詞が!!俺はその興奮が隠せぬままホワイトモードの固有武器をよびだす。

「切り裂けZ・Oサイズ!!」

俺の手の中に現れた大鎌はZ・Oサイズ、その刃全てを切り裂く死神の鎌。

「見た目とは正反対の武器ですね――(・。・)――」

俺の服の中に入ったイストワールはいつもの様に襟首より顔を出す。

「行くぞデカ物!!Z・Oサイズよ、悪しき魂を切り裂け!!」

俺は魔力を込めた一撃で奴の気色悪い長舌を切り裂く。

「うおおおー!!我輩の舌がー!?!」

痛みにジタバタと暴れるデカ物。

「Z・Oサイズの威力はどうだデカ物!」

「イタイ、イタイ!だが甘いぞシーたん!!」

「ユウ、奴の舌が!!」

俺の後ろから切り裂いたはずの奴の舌が蠢きその姿を変えてモンスター、フェンリルとなり飛びかってくる。
たが……………。

「甘いのはそちらだ！開翼せよ！」

「は、羽が生えた。」

俺は背中から機械翼を展開する。

「行け、ガン・スレイブ！！」

そして機械翼の羽、ガン・スレイブを起動させる。

ガン・スレイブそれは簡単に言うならファネル。悪くいうならファグ。とても思ってくれればいい。

そしてガン・スレイブはモンスターをあっという間に串刺してその命を奪い取る。

「痛いけど羽が生えたシーたんかわいいよー！！」

「ちっ！魔力よ形をなして敵を穿てクレイヴィ・ハーツ！」

俺は二つの機械翼から魔法陣を呼び出し魔法による砲撃を黄色のデカ物にぶつける。

「シーたんの魔力頂きます。」

「「魔力による質量砲撃を食べた！？」」

黄色のデカ物はこちらの魔力による質量砲撃をその巨大で醜悪な口で呑み込む。

「うーまーいぞー!!」

「ならば魔力の密度をあげるまでてええええー!!」

俺はさらに魔力の密度を上げて砲撃をぶつける。

「おお、おかわりか。頂こう。」

だがデカ物はそれをまたもやそれを呑み込む。

「ちっ、面倒な。最大火力をぶつけるか？」

「待つてくださいユウ！」

俺が奴に最大火力で奴に砲撃をぶつけようとするがそこにイストワールより止めが入る。

「イストワールこんな時になんだ？」

「久しぶりに私にも戦わせてくれませんか？」

「お前がか？それはまたどういった風のふきまわしだ。」

「そんなに驚くことはありません。ただあのデカ物は私のユウを汚そうとしただから……………」

「い、イストワール？」

「だから殺しますよー（*―*）」

「わ、わかった。だからその笑顔はやめろ。目が笑ってないぞ、こ
つちが怖い。」

「なら早くしてくださいね!!」

「仕方ないな。女神シルバーハートの名のもとに史書イストワール
よその力を我がもとに!!」

「了解しました（　　）ゞ」

その言葉と共にイストワールはその姿を本にかえる。（通称史書モ
ード）

「女神シルバーハートの権限により史書の力を紐解く。」

そして俺は史書モードになったイストワールのページを開こうとい
ストワールを手にとる。

「だ、だめ!そんなところ触れたら私おかしくなっちゃいます!
!」

「……………史書イストワールのその力それはこの世界そのもの。故に
世界の全てを見渡す事ができる。そして……………」

俺はさらにページをめくる。

「そ、そこはあだめえ!?!」

「開け天界禍雄蘇図書館!!」

「らめえええー!!」

俺の言葉と共に空間が歪みそこから大量の本が現れる。

「何事だシーたん本がたくさん現れたぞ。」

「イストワールの力により天界に存在する禍雄蘇図書館の総数5万3000冊の魔書や禁書、そして存在理由すら分からない謎の本達を呼び出しその力を使用する事が出来る。」

「カオス図書館？」

「違う!!禍雄蘇図書館!!とりあえずデカ物貴様を蒸発させてやる。行くぞイストワール。」

俺は自らの魔力をイストワールに流す。

「ユウが私の中に入ってくるうー!!?」

「いい加減にしてください。てりや!!」

「へうつ!?!」

さすがにいちいち如何わしい声を出されていたらこちらのツッコミが限界だよ。

「だって。――(・・)――」

「そんな顔をして駄目。魔力供給カットするよ。」

「ごめんなさい真面目にやります。だからそれだけはやめてください――(・・)――」

「なら行くよ。女神シルバーハートの名にて我が禍雄蘇図書館に眠

る禁書及び魔書そして……えーつと珍書、でいいのかな？とりあえずその5万3000冊の禁を解く。」

「シーたんが何をするつもりかは知らぬが我輩は空気を読んで邪魔はせん。」

よほどの自信があるのかただの馬鹿な変態ロリコン野郎なのか？たぶん後者だろうな

「ピブリネラアント・オムネース。」

俺が図書館の鍵となる詠唱を唱える。

「ウルティ・マネカット。」

イストワールが続けてその鍵を使う扉を呼び出す意味を持つ詠唱を唱える。

「カオス・パンマギカ
禍雄蘇図書館ー！！」

そして空を覆い尽くすかの如く中央に星が描かれた巨大な魔法陣が現れる。そしてそこから砲撃が放たれる。

「これがシーたんの本気なのかー！？」砲撃に呑み込まれる黄色のデカ物。

「本気馬鹿を言うなこれはまだ力的一端にすぎない。」

「中二くさいですけどこれは事実ですからね（・ー・）」

「一言多いよイストワール。」

俺はイストワールに注意しながら奴が砲撃に呑み込まれた方向を見る。

それにしても……………。

「妙だな。衝撃がこない？直撃の筈だが逃げたわけではないだろうけど……………」

「プロテクトウォール！！」

「何！？跳ね返されただ！？？」

煙りが立ち込めてデカ物が見えないなか砲撃が跳ね返され頭上に消えていくのを俺は驚きを隠せずに見る。

「たいした一撃だったシルバーハート。だが俺には通用しない！！」

煙りがはれたそこには長髪の仮面の男だった。
新手か？

「貴様は何者だ！？デカ物の仲間か？」

「俺は勇者だあああー！！」

「はあ？」

思わずこう言ってしまった俺は悪くないはずである。

「意味が分からないんだ」見せてやる俺達の友情を、俺達の力を――
！！」駄目だこいつ人の話を聴いてない。」

無駄に暑苦しいな。

「シーたんを無視するとはブレイブ貴様許すまじアンチハード四天王の風上にも置けない奴だな。」

アンチハードまた出てきた？

「聞いてみたらどうですか？（――）」

「あのデカ物にか？」

「ええ。」

致し方ないか。

「おい。黄色のデカ物アンチハードってなに？」

「おおシーたんからの質問！我輩はやさしいから教えてあげようアンチハードって言うのは「悪を倒す正義の味方だあああああ！！」……簡単に言うならシーたん達女神とは真逆の存在。シーたんが光なら我輩達は闇。我輩達は負の感情より生まれでた存在なのだ。故に「俺達は負けない！！勇気が有る限り俺達は幾度となく立ち上がる。それが俺達勇者だ！！」ごめんシーたん。」

「気にしないでいい。大々わかったから。」

「それなら良いのだ。ちなみに我輩の名前はトリック・ザ・ハード。そしてこの無駄に暑苦しいのは……。」

「行くぞ友よ！！」

「あれをシーたんの前でやるのか、仕方ないな。ならばシーたん先

に謝っおこつすまないと。」

謝るくらいならしないでほしい。いったい何をするつもりだ？

「ファイナ ルフュージョン承認!!」

突如トリックが何処から出しているのかは不明だがもの凄く低い声で著作権を心配させるような台詞を叫ぶ。

「よつしゃあ!!」

そしてそれに答える勇者（混沌）。

「了解! ファ ナルフュージョンプログラムドライブ!!」

さらにあの姿ではもう恐怖にしか感じないが何故かトリックが一人二役いや三役かどうか分からないけど明らかに女性の声でこれまた著作権は大丈夫なのか心配な台詞を口にする。

「ファ ナルフュージョン!!」

勇者（混沌）が光に包まれる。

…………… もう帰ったら駄目かな？

「貴女が帰ったら収集がつかなくなりますよ（・・）」

「だからこそ帰りたいんだよ。」

「シーたんそろそろ奴の変身が終わるぞ。」

「はい。今行きまーす。」

光が収まり勇者（混沌）が現れる。

そして俺はお家に帰りたくなった。

「ジェネシック・ブレイブ・ザ・ハード……これが俺達の切り札、無限を超えた絶対勝利の力だ……！」

光が収まると金色に輝く勇者（混沌）が現れる。もう嫌だよ。

「俺はいつたいどうすればいいんだ！？教えてくれよイストワール……！」

「ツツコミましょう？（――）」

「はい。」

俺の人生は渡る世間にツツコミばかりなんだろう。

「シーたんを見ていると我輩こんな生き方をしているのか疑問に思ってしまうのは何故だろうか？」

そしてその頃連行されたシャルロックは……………。

「すいません。私お腹空いたんですけどカツ丼はありませんか？」

「俺に質問をするな……！」

「ってなんですか……！」

取調中のシャルロックであった。

史書の力 誕生勇者王（混沌）（後書き）

きょうのゆにちゃん

その5 らくがき

ユニ「ちよつと誰よ私の顔に落書きしたのは!？」

ラム「私達の前でグースカ寝てるのが悪いのよ。」

ロム「ちよつ、おまつ!？その顔はキモすぎる。あははははは。」

ラム「ロムちゃん笑いすぎだよ。でもあはは、変な顔。」

ユニ「アンタ達……………」

ラム「何よ怒ったって怖くないんだからね。」

ロム「も、もう駄目。お腹が痛い。」

ユニ「ありがとう。」

ラムロム「え?」「」

ユニ「こついうのも何かいいー!」「」

超番外編 第一競技 100メートル徒競走（前書き）

ルールなんてあつてないようなもの。
なぜかジャッジがゲスト参戦。

超番外編 第一競技 100メートル徒競走

いーすん「それでは第一競技団長及び副団長による徒競走を開始します。まずは参加選手の紹介を行います。第1レーン、ユウ団長

ユウ「全力を尽くすのみだ!!」

いーすん「続きまして第2レーン、ノワール副団長。」

ノワ「全部振りきるだけよ。」

いーすん「第3レーン、ネプテューヌ団長。」

ネプ「スパッツ!!」

いーすん「第4レーン、ブラン副団長。」

ブラン「……リリカルマジカルがんばります。」

いーすん「第5レーン、5pb.団長。」

5pb.「いつくよー!!」

いーすん「第6レーン、アイエフ副団長。」

アイ「嘘!?あれってリアルシルバーハート様!？」

いーすん「全員が並びたつところで競技説明に入ります。競技説明はユニさんことブラックシスターさんに行なってもらいます。」

ユニ「この競技は簡単にいえばそのまんま徒競走よ。」

ロム「……引っ込めよブス。」

ネプギア「死ねば良いのに。てへっ。」

ユニ「ありがとう　1位に100点、2位に70点、3位に50点、4位に30点、それ以下は10点よ。」

アイ「きゃーシルバーハート様こっち向いてー！！私光ってますよー！！」

ユニ「あーあ。ライト使ったわね。」

タラッタタッタタラーン。

ユウ「何この不思議を発見する番組のひし君人形を取り上げられる音楽は。」

いーすん「これは罰ゲームが決まった時に流れる音楽です。青団はマイナス50ポイント。そしてアイエフさんには罰ゲームです。ユニさんお願いします。」

ユニ「ルーレットスタート。」

いーすん「罰ゲーム！罰ゲーム！」

ユウ「なんだこのまるでパエロが当たるダーツ的なノリは。」

ユニ「撃つべし。」

いーすん「うおおおお！ユニさんの撃った弾が当たったのはジャ

ツジ・ザ・ハード。という事なのでお願いしまーす。」

ジャツジ「アイテムなんぞ使ってるんじゃないやねええええー!!」

アイ「イヤアアー!!」

ギア「ライトがとてもグロテスクな状態に。お兄ちゃん私怖いよ。」

ユニ「……羨ましい。」いーすん「場も和んだところでユニさん続きをお願いします。」

ユニ「了解！これで最後になるけど競技中は自分の持つスキル、魔法はなんでも使用して構わないわ。それじゃあ行くわよ、位置に付いよーい、ドン！」

ネプ「ネプテューンブレイクの反動で行けば問題ないわ。ハァー！！」

ブラン「モードエクセリオン！！」

5pb「ボクの歌を聞けー!!」

アイ「LEDライトの光でせめて援護位は。」

ノワ「お、お兄様急にどうしたの！？私みんなに見られてる中で抱きしめられたら恥ずかしいわ。」

ユウ「今に分かるから。」

タラッタタタタライン

いーすん「ネプテューヌさん、ブランさん、5pb.さんアイエフさん罰ゲーム決定です。」

四人「……何故だー!?」「……」

ユニ「人の話しはちゃんと聞きなさい。私はね位置に付いてよい、ドン! って言ったらスタートよって言おうとしたのよ。それなのにその馬鹿四人は。あつははははは! !」

いーすん「ユニさんまるで悪役のようですよ。ということでレッツ罰ゲームタイム! !」

ベール「ヒヤッハー! ! 祭りの場所はここかあ! !」

ユウ「ベールいったいお前に何があったんだ?」

ノワ「堕ちたんじゃないの?」

ユニ「ルーレットスタート! !」

ロム「……罰ゲーム、罰ゲーム。クスクス。」

ユニ「デスペラード! ! 決まったわ。」

ユウ「確かに決まったなルーレットと罰ゲームを終えて今まさに帰ろうとしていたジャッジ・ザ・ハードに。」

ジャッジ「俺の本能が叫ぶんだよお前を殺せと! !」

ユニ「これが圧倒的な恐怖。そして圧倒的な快樂。バッチこーい!

「！」

ユウ「見なかった事にしよう。ところで罰ゲームは誰になったんだ？」

いーすん「今発表します。罰ゲームを行うのは……………ブレイブ・ザ・ハードさんです。」

ユウ「よりにもよって勇者（混沌）か。ところであいつは何処にいるんだ？姿が見えないが。」

いーすん「ちゃんといいますよ。衛星軌道上に。」

ユウ「宇宙キターー！！」

日本一「シルバーハート様それ私の台詞！！」

ノワ「なんで衛星軌道上にいるのよ。」

いーすん「勇者だからだそうです。」

ユウ「わかりたくないが何となくわかってしまう自分が憎い。」

ラム「……………お兄ちゃん、がんばって。」

いーすん「そろそろお願いします。」

ブレイブ「よっしゃー！！クラッシャーコネ トー！！」

ユウ「まさかあの馬鹿勇者、惑星一つを破壊する威力をもっている為に作者のトマトが本編に使用する事を断念したあれを使うつもり

なのか!？」

ブレイブ「ゴルディオン・ラッシャー!！」

ユウ「馬鹿野郎!！」

ノワ「お兄様あれ何なのここからでも何かピカピカ光ってるんだけど。」

コンパ「ゴ デイオン・クラッシャー。正式名称グラヴィティシヨックウエーブジェネレーティングディヴィジョン2。Zマスター級の敵を迎撃する為に開発された人類最後の切り札である。」

ノワ「どうして人類最後の切り札を罰ゲームで使うの?馬鹿なの死ぬの?」

ユウ「駄目だノワール今のあいつにその質問は!！」

ブレイブ「俺は一人じゃない!!俺達の一つだあああああ!！」

罰ゲームの四人「ギャー!？」

ユニ「軽く振るっただけで四人が蒸発するなんて!?!これが無限の快楽。まさか原物を拝むことになるなんて。」

ラム「やっぱりユニちゃんは何処かおかしいよ。」

ブレイブ「貴様ら全員光になあああええええええ!！」

四人「……………」

ユニ「こ、これがオーバーキル。無限を超えた絶対快楽……………」

ノワ「あれが私の妹。どうしてこうなった？」

ベール「イライラするんだよ。」

いーすん「皆さんの緊張もほぐれたところで競技に戻りましょう。」

ユニ「あんな罰ゲームを受けてこの世界、そしてネプテューヌ達は
大丈夫かと思うけどそこはギャグ補正という事で。では位置につ
いて、よいドン！」

ネプ「ハードネプテューヌ又起動！」

いーすん「ネプテューヌ又団長いきなりハードネプテューヌ切り札を
使用してきたー！！戦闘機形態になって爆走かぁ！？」

ユウ「甘いなネプテューヌ。俺は既に未来をこの手に掴んだ！モー
ドチェンジ。優しさの緑、グリーンモード降臨！！うわおおお！
！」

いーすん「あぁとユウ団長グリーンモードになったー！！しかも
分身して他の選手の妨害を開始したー！！」

ユウx5「……ノワール今の内に行け……」

ノワ「わ、わかったわ。凄いシニールね。お兄様5人がハモツてる
わ。」

いーすん「さて他の選手達はどう対抗するのかー！？おや？何か様

子がおかしいですね？現場のフィナンシェさん状況説明お願いします。」

フィ「こちら現場のフィナンシェです。現在大変な自体がまきおこっています。」

ネプ「お兄様まさかそちらから抱きついてきてくれるなんて私……もう我慢できないわ。ユニバアアアアアス！」

ユウ1「ハー・オードがあああ！！！」

ブラン「私が新たに習得した拘束魔法でお兄様の……。ハアハア！！！」

ユウ2「何これ！？触手？」

5pb「ボク初めてあつた時からユウ君の事、ええと、その。」

ユウ3「何がどうしてこんな甘い雰囲気？」

アイ「げばあらっ！？なんで私だけ本気で斬りかかってくるのシルバーハート様！？そもさん！？」

ユウ4「……障害は排除するのみ。」

フィ「まさに酒池肉林ですね。それではそちらにお返しします。」

いーすん「まったく意味がわかりませんでしたがりあえず酒池肉林ではなく混沌池混沌林ですね。」

ギア「待つてください！一人足りません。」

コン「そういえないです。」

ユニ「1位、2位同着ゴール!!」

ギア・コン「え?」

いーすん「様子を見て見ましょうか?ゴールに存在するユニさん?」

ユニ「こちらユニ。1位と2位は銀団の団長と副団長よ。」

ノワ「100メートル五秒それが私のいいえ私達のタイムよ。」

ユウ5「分身を回収するとするか。グリーンモード解除。」

ユニ「3位、4位、5位、6位も同着ゴール。」

ユウ「分身も入れて良いの?」

ユニ「私がルールだから。」

ユウ「みんなに袋叩きにされるよ。」

ユニ「望むところだと言わせてもらおう。」

ノワ「こんな妹イヤアアー!!」

いーすん「銀団の得点総取りという予想外の展開になりましたが気にはしません。それがこの大運動会の醍醐味ですから。それでは第二競技に移りましょう。第二競技は超障害物競争です。参加者は準備してください。」

アイ「E・LEDライトフルバースト!!」

5pb「絶望の月光蝶!!」

ブラ「闘いを楽しむものこそ!!」

ネプ「欲望戦剣ツリーベルの力を解放するわ!!欲望スラッシュ!!」

ユニ「激痛と快楽の融合それこそが女神候補生の在り方よ!!」

まだ大運動会は始まったばかりである。

超番外編 第一競技 100メートル徒競走（後書き）

いーすん「現在の各団の得点です。」

銀団 270

紫団 0

青団 -50

加速する黒 魔法少女19歳（前書き）

ノワールは助からない。さらには出落ち。

ノワールファンは回れ右でお願いします。

加速する黒 魔法少女19歳

ノワール side

「モードチェンジタイプソニック・トライアル。」

私の身体に装着されているプロセッサユニットが足に装備されている物とスーツ以外は解除される。そしてスーツには青いラインがはいる。

「ブラックハート貴女その姿は!？」

ネプテューヌ擬きネプギアが私の新たな変身を見て驚きを隠せない様子で私に問いかける。

「これが貴女に敗北してから私が修行に修行を重ねて会得したスピードにスピードを追求した新たな力。ブラックハート・ソニックトライアルよ。加速し続ける女神といったところかしらね。」

「ただでさえ薄いプロセッサユニットを極限まで薄くしたといったところですか。驚いて損をしました。それではスピードは上がっても防御力及び攻撃力は著しく下がりますよ。」

「確かにその通りよ。でもね……………はっ!！」

私はネプギアとの距離をつめ一気に懷まで入りその勢いで殴りつける。だがネプギアも反射的に腕をクロスさせ防御してバックステップで後ろに衝撃を流す。

「くっ!?!このスピードお兄ちゃんのグリーンモードと同じ、まさ

かそれ以上！？だけどDモード起動！！」

ネプギアの身体が紫色の光に包まれる。あれがDモード。ただこれの対象も完璧一気にけりをつけるわ。

「さらに絶対領域・劣化起「だから遅いつて言っているのよ！！」
Dモードでも捉えきれないな、くっ！！？」

ネプギアが絶対領域・劣化を起動させようとするけど無駄よ、そんな暇は与えないわ。私はネプギアを空中に蹴り上げる。そしてそこにさらなる追撃をかける。

「私の前に立ちはだかるのなら殴り倒すのみ、これで最後受けなさい！！」

「ま、まだ私はー！！」

ネプギアに私は最後の一撃をぶつけようとする。

「喰らいなさいインフィニット・ブレイ「狙い撃つぜええー！！」
なっ！！？」

ネプギアに止めの一撃を決めようとした瞬間私は何者かに左胸を狙撃され意識がブラックアウトした。

ノワール side out

「「よしっ！！」」

ノワールが狙撃された姿を見て何故かガッツポーズをするブランと

ベール。

「なんで喜ぶんですか!？」

怒るコンパ。

「今のはいったい何が?みんな気をつけるイヌよ!！」

真面目なのだが身体のライトと口調のせいで全てが台無しのアイエフ。

「……………」

そしてピクリとも動かない女神化が解けたノワール。

「今のはビームはハードスナイパーライフル。まさかユニ!!貴女なのでしょう!?!出てきなさい!!！」

どうやら狙撃を行なった人物に合点がいったネプギア。

ネプギアの言葉を見殺して狙撃はさらに続行される。

「マシユマローン!!！」

二人目の被害者ベール。射たれた衝撃で車椅子事横転する。

「よしっ!!これでこの小説の主人公は私ね。題名は何にしようかしら?」

魔法少女リリカルプランが始まりそうであった。

「きゃー！グリーンハート様まで!？」

「いったい何がどうなってイヌ？」

困惑のコンパとアイエフ。

「やはり間違いない。ユニー！ブラックシスターどういっつもりで
すか!？」

だが狙撃手はネプギアの言葉に反応をまったくせず次なる被害者
を出す。

「イヌー!？」

アイエフここに果てる。

「え?.....もしかして本当にやばいのこの状況？」

ようやく身の危険を悟ったブラン。

「イヤアアー!!私死にたくないですー!!」

「ユニ貴女関係のない民間人まで……。なんて酷いことを。」

顔色真っ青のネプギア。

だが異変はまだつづく。

「イヌ〜。」

突如狙撃されたアイエフの口から大量のスライヌがあふれでる。

「あ、アイちゃんの口から凄い量のスライヌらしきものが！！きやーなんかどんどん大きくなってきたですうー！！」

「…………この展開は魔法少女リリカルプラン第一話初めての敵はおつきなスライヌ！？つてきな感じね。遂に時代が私に追いついてきたのね。」

それはないので安心してほしい。

「くっ！？わけがわかりませんがこの大陸の害となるものは私が倒します！」「その必要はないわよ、シールドビット・アサルトモード！！」「っ！？」

ネプギアがスライヌを迎撃しようとビームセイバーを構えるがそこにラムのライトビットと酷似した緑色のビットが飛来してスライヌを攻撃する。

「ずいぶん無様な姿ねネプギア。あはははははは！！」

「やはり貴女でしたか。」

シールドビットを操りネプギアの前に現れたのはブラックシスター、ユニであった。ちなみに女神化はしていない。

「良く寝ましたわ。」

「頭打ったみたいズキズキするわ。」

そして狙撃されたはずのノワールとベールが目覚めます。

「いったい何がどうなってるですか!？」

「ごめん。少し待ってまずはその全身ライト女に寄生していたパラセクトスライヌを殲滅するから。」

あわあわと驚くコンパにその声を掛けるとユニは何処からかビームマシンガン2丁取り出して両手に持ちスライヌに向けてその引き金をひく。

「イヌー!？」

「死になさい。シールドビットフルバースト!! 痛みの中でのみ知ることのできる快楽味わいなさい!!」

スライヌに容赦なくシールドビットによる容赦ない全方向からの射撃とビームマシンガンの連射によってあっという間に蒸発するスライヌ。

「ミッシヨンコンプリートね。」

「それでこの状況の説明をお願いします。」

「まあまあ慌てないで偏差値23のネプギア。」

「ユ、ユニちゃんそれは内緒にしてっていったのに!？」

「それは私が本編での出番の少なさに憤りを感じてロムの監視カメラを頭突きで叩き割っている時の話よ。」

「無視しないでよ!! それとそんなことしたらロムちゃんに実はユニちゃんがIQ30000の天才だったことが全大陸にばら撒ちやうよ! アホキアラじゃなくなっちゃうんだよ!」

「私は無論ロムに天界から紐なしバンジーをさせられたわ。最高だったと言っておくわ。それと未だにかけ算の七の段がいえないネプギア口調が昔に戻ってるわよ。」

「それも内緒だよ!!……………それで偶然私を見つけ援護したといったところですか?」

「ばっかじゃないの!? そんなわけじゃない。私は電車の切符が一人で買えないネプギアが苦戦してたからさらに追い詰めてやろうとお姉ちゃんとグリーンハートに付いていた呪いを解呪弾を撃ち込んで解いただけよ。ちなみにライト女は何となく面白そうだったら狙撃してみたわ。麻酔弾だからそのうち目を覚ますわ。」

その色々ツツコミどころはあるのだが……………。

「呪いをといた!? まさかブランそのハンマー貸しなさい。」

「……………別に構わないわ。」

ブランからハンマーを借り受けるノワール。本当ならネギに変わるはずだが。

「ネギに変わらない。本当に呪いが……………私の修行の成果はなんだったの?」

力なく膝をつくノワール。

「呪いが! コンパさん何か食べ物を!!」「こんな時に持っているわけじゃないですよ!! 空気を読んでくださいです!!」

「ならブラン貴女は？」

「…………マジカルベリーならあるけど？」

「それは食べたらどうなりますの？」

「…………男の娘になる。」

「食べられませんわね。作品的な問題で。」

助かります。

「話しは終わった？グリーンハート、ホワイトハート、お姉じゃなくてブラックハート。呪いも解けてこれでフェアよね。貴女達の見せてもらっわ。」

「私達三人まとめて闘うつもりかしら？ずいぶんとなめられたものね。えーっと。」

「そっといえば自己紹介がまだだったわね。行くわよ変・身！！」

その言葉と共にユニの身体が赤い光に包まれる。

光が止みそこにたっていたのは……………。

「私はシルバーハートの妹。ブラックシスターユニRX！！」

重装甲で黒いプロセツサユニット、フルクロスに身を包みどこかぎりぎり昭和で平成な仮面のライダーをを彷彿とさせるポーズをとったブラックシスターユニがいた。

「「「.....」」」」

凍りつく空気。

「ハアハア最高ねこの冷えきった空気、あんた馬鹿じゃない？死ぬの？空気読め的な視線。私はこれを待ち望んでいたのよ。興奮するわ。」

「な、なんなの貴女！？」

「私はドMよ。私の基となったブラックハートお姉ちゃん！！」

「基？」

「そう私はブラックハートお姉ちゃん貴女を基にして造られた女神候補生。ちなみにドMよ！！」

「じ、「冗談でしょう！？なんで私を基にして造られたら貴女見たいな変態ができるのよ！？」

「.....なるほどそれなら頷けるわ。」

「そういうことなら納得できますわ。」

納得して腕を組みうんうんと頷くベールとブラン。

「この変態は確かに貴女の妹ですよブラックハート。彼女、ユニは確かにドMの変態ですが先にいった通りIQ30000の天才です。しかも超天才というよくわからないスキルも持っています。変態と天才は紙一重といったところですね。」

「それに私は知っているわブラックハート貴女がムツツリスケベであることを！！」

「な！？何を根拠にそんなデタラメを！？」

「貴女がお兄ちゃんから盗んだ下着の枚数64枚。」

「やっぱりブラックハート様もねぶねぶと同じだったんですね。」

「ま、待ってコンパさんでたらめよ！！」

「貴女がお兄ちゃんの着替えを盗撮した回数36回。」

「お兄様にさえばれてなかったのに……………」

「……………認めたわね。」

「そして貴女がお兄ちゃんのネコミミメイドのコスでハァ「ごめんなさい私はムツリスケベです！！」故に私達は姉妹。それは逃られない宿命。さあわかったなら私と闘いなさい。」

「……………そうね。これ以上私の株価が落ちないうちに貴女を倒すわ！！」

「最早無駄だと私は思いますが。それとユニさんでしたか、なぜ貴女はそこまでして私達三人と闘いたいのかしら？」

「味わいたいからよ。痛みの中でのみ味わえる快楽を！！」

「貴女もはや手遅れですわね。良いでしょう貴女はここで倒します。ブランとノワールが。」

「てめえも闘えよ！！」

「栄養失調でフラフラの私が闘えるとも思っていますの!？」

「闘い始める前から仲間割れしないでよ!程度がしれるでしょう!」

「ムツツリは黙りなさい!！」

「すいませんでした。」

「始める前からゾクゾクしてきたわ。しかないわね、グリーンハートこれを食べなさい。お兄ちゃんの手作りサンドイッチよ!！」

サンドイッチをベールに投げ渡すユニ。

「美味ですわ。ああ満たされますわー!！」

サンドイッチを食べてはみるみる内に回復するベール。
シルバーハート特性サンドイッチひとつ180クレジットで各大陸の協会で発売中。

「宣伝もいいけどいくわよ二人とも!！」

「黙れよムツツリ!！」

「こちらに近寄らないでもらえますか？」

「どうして私がこんなめに……。」「

「感じるでしょうお姉ちゃんこれがリビドーよ!！」

「」「変身!！」」「」

ノワール、ブラン、ベールのからだにプロセスサユニットが装備される。

「さあ始めましょう変態同士によるもの凄い聖戦を！！」

ユニの宣言と共によくわからない聖戦が開始されるそしてその頃我らが主人公は……………。

「プラズマホールド！！」

「シーたん我輩の愛を受けておくれー！！」

「くっ！？見た目も言動もふざけているがこいつら強い！！」

絶賛戦闘中であつた。しかも押されていた。

「受けるがいい勇者の一撃をブロウクン・マグナム！！」

ブレイブ・ザ・ハードのロケットパンチ擬きを避けるユウだがそこにトリックが追撃をかける。

「行くのだ我輩の分身達トリックビット！！」

トリックの口から小型の大量のトリックによく似たトリックビットが放たれユウを襲う。

「舐めるなガン・スレイブ！！」

それをガン・スレイブで迎撃する。

「ボルディングドライバー!!」

「ちっ!?! Z・Oサイズ!! 切り裂け! るわけがないだろう俺達は勇者だ!!」ぐっっ!?!」

Z・Oサイズでボルディングドライバーを切り裂こうとするが切り裂けずに拮抗状態に陥る。

「いまだ我が友トリック!!」

「ベロベローン!!」

拮抗状態に陥ったユウの背中にトリックの舌が叩きつけられる。

「ぐわあああ!!」

それをまともに受けたユウは地面に叩きつけられる。そして砂塵が舞う。

「勇者は負けない!!」

「ゴスロリシーたんをお持ち帰りだな。」

そして砂塵晴れる。そこには……………。

「……………うおおおおおおお!!」「……………」

「何だと!?!」

「シーたんがばあにしかも一杯!!」

優しさの緑グリーンモードになったユウが質量を持った分身を大量に作り出してトリックとブレイブに斬りかかる。

「『ユウハードブレイク!!』」

零刹那と菊吉紋字に魔力を流してその刀身が緑色に光る。そして分身全てがその動作を行うそして全てを叩き斬る一撃ユウハードブレイクを放つ。

「勇者が負ける……だと……。」

「ギャー!?!」

アンチプロセスサユニットが解除されて地面に倒れるトリックとブレイブ。

「分身解除、俺の勝ちだな。さてと話を聞かせてもらおうか?」

分身を解除して通常のシルバーモードになり零刹那をトリックの首に突き付ける。

「待つて!!」

だがそこに声がかけられる。

「女の人?」

そこには20歳前後位のサイドポニーテールの女性がたっていた。

「その人達は私の友達なのお願い傷つけないで!!」

「とりあえず友達を選んだ方がいいですよ、お姉さん。貴女もこいつらの仲間ですか？」

「違うよ仲間じゃない友達だよ！！」

「よくわからないけどまともに話せる人が来たかなお話し聞かせてもらおうか？」

「うん、いいよ。」

「まともな人がいて助かつ「だから始めよう最初で最後の本気の勝負を！」はい？」

「トマトさん力を貸して！」

「俺はトオ・メイ・トオだ！！」

女性が何処からか存在が消えていた破壊の書トオ・メイ・トオを取り出す。

「星は天に、月にはウサギがいて餅ペツタン。アンチプロセスユニットセーットアップ！！」

「オムライス。」

たぶんオールライトとでも言いたいのだろう。そんなことはどうでもよく女の人の服が光に包まれる。そして……………。

「ユウ貴方には早すぎます！！（＜―＞）」

イストワールが身体全体を使って目隠しをしてくる。

「やめろイストワール眼球を圧迫するな失明するだろうが!!」

眼球にかかる圧力を何とかするために俺はイストワールを必死に引き剥がそうとする。

「だーめーです!! (<|>)」

イストワールもそれを必死に逃れさらに眼球を圧迫してくる。

「あゝもう終わりましたから良いですよ。」

そこに謎の女性より声がかかる。

「ええーい!! やつと剥がせた。よくわからんが貴女の話聞かせて……ってアンタ良い歳してなんて格好してるんだよ!!」

「どうしたんですかユウ? って貴女その歳でその恰好は何ですか!」

俺もイストワールも女の人がアンチプロセスを装着した姿をみて啞然とする。

「私だっけ気にしてるんだよ! そんなことよりまずは自己紹介だね。私マジック・ザ・ハード19歳。職業魔法少女です」

この世界はやはりカオスだった。

加速する黒 魔法少女19歳（後書き）

きょうのゆにちゃん

ラム「ごめんなさい。きょうのゆにちゃんはユニちゃん本人が本編に出ている為にお休みです。次回、魔法のコロネマジカルゆにちゃんにご期待ください。」

ロム「ラムちゃん。」

ラム「どうしたのロムちゃん？」

ロム「下界に降りてきてプラネテューヌの公園広場に。お兄ちゃんのピンチ。」

ラム「了解!!」

超番外編 スペシャルゲスト紹介（前書き）

まさかの他作品からのスペシャルゲスト。

超番外編 スペシャルゲスト紹介

ブレイブ「俺達は勇者ー！！」

ジャッジ「ばーばばーばばーんー！！」

トリック「ビビデバビデトリックー！！」

ユニ「花火よ花火よー！！熱いけど気持ちいいー！！」

ベール「ここが祭りの場所だー！！」

いーすん「みなさん盛り上がってますね。」

ユウ「いや一言で済ませるなよなんだよあの異常なテンションは！
？それとユニロケット花火を人に向けるなよ！それはそういう使い方するものじゃないからね。」

いーすん「さて今回はスペシャルゲストが来ています。」

フィナ「待ってください。これ以上私の出番を削らないでください
！！」

いーすん「そんなこと知りません。スペシャルゲストの登場です。
超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess of lost memoriesよりフウさん、ステラさん、フウカさんの
三人です。」

トリック「幼女キターー！！」

フウ「イヤアア！！トリック死ねー！！」

ユウ「やめろトリック少女だからといってむやみに襲撃するな！！
彼女はスペシャルゲストだ！！」

ユニ「お兄ちゃんの方こそ待つてよそのスペシャルゲストの手によ
つて今まさにトリックが酷い目に！！」

フウ「イヤアア！！気持ち悪いー！！」

トリック「ギャー！」

ギア「うわ！トリックがなんか物凄い魔法で突き刺されて中身があ
ふれでてきた！これは……………」

フウ「気持ち悪いー！！」

トリック「フゴー！！」

ユウ「よし手伝うぞフウ！ユニそのロケット花火を貸しなさい。」

ユニ「イーヤー！！私の花火取らないでよ！！」

ユウ「後でビンタして上げるから。」

ユニ「はいどうぞ。」

ユウ「死ねやトリック本編でのうらみ！！」

トリック「あ、ぎゃ……………」

いーすん「トリックここに果てる。ですがそのうち復活しているでしょうね。だってギャグ補正がありますから。」

ユウ「身も蓋もないが、とりあえずスペシャルゲストの三人改めてどうぞ。」

フウ「みなさんはじめまして超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess of lost memoriesの主人公のフウです。嫌いなものはトリック、幼女叫びながら小さい女の子を襲う変態、トリック・ザ・ハードの三つです。」

ユウ「全部トリックじゃないか!!」

フウ「あ、ユウさんお久しぶり!」

ノワ「お兄様知り合いなの?」

ユウ「以前次元を超えて拉致された。」

ノワ「聞かなかったことにするわ。」

ユウ「そうしてくれるとありがたい。」

いーすん「フウさんにはその経緯もあって紫団に入ってもらいます。」

ネプ「よろしくねフウちゃん。貴女の働きに期待しているわスパッツ!」

フウ「よろしく願いしますネプテューヌさん。」

ネプ「スパッツ!」

フウ「え？」

ネプ「スパッツって言われたならスパッツって言い返す紫団の団員ならやりなさい。やらないとトリックのもげた腕を貴女の座席にするわよ！！」

フウ「スパッツ！！」

ユウ「スペシャルゲストに何をさせてるんだよ！？」

いーすん「続きまして私と何かキャラのかぶっているストラさんです。」

ユウ「おいっ！！イストワールお前何だそのやる気のなさはしかもスペシャルゲストの名前を間違えるな！！」

ステラ「ユウちゃん私は気にしていないからイストワールを怒らないであげて。」

ユウ「なんて良い子なんだステラさん！良い子にはシルバーハート様の特性不思議な飴をあげようレベルが1あがるよ。」

ステラ「ありがとうユウちゃん。」

いーすん「私だってユウと同じ団できやつきやうふふしたかったんです！！それなのに、それなのにー！！うわぁーん！！だいたい作者が私には実況と司会しかやらせてくれなくてー！！」

ユウ「司会がまじ泣きを始めたので俺が変わりましてステラさんには銀団に入ってもらいます。ステラさん家の史書さんが空気読めなくてごめんね。それと一緒にがんばろう。」

ステラ「気にしないでいいよ。この団の団員として私も頑張るよ！」

ユウ「続きましてその存在は未だ謎に包まれている少女。フウさんのもう一つの人格フウカさんです。今日は身体を手に入れての登場です。どうやって身体を手に入れたかを知りたいければ……………」

ステラ「3000年ほどかかりますよ」

いーすん「私の台詞がああ！！うわああん！！」

フウカ「よろしくねユウ。それで私は何処に入ればいいの？」

ユウ「申し訳ないんだけどフウカさんには青団に入ってもらいます。」

「

フウカ「青団、彼女がいる団ね。楽しめそう、ふふふ。」

ユウ「知り合いでもいるの？」

フウカ「さあ、どうかな？」

5pb「よろしくねフウカさん。」

フウカ「ええよろしくね女神殺し。」

5pb「…………！？何の事かなボクは5pbだよ？」

フウカ「様々な平行世界の女神、女神候補生を殺害している存在それが女神殺し。」

5pb.「……………」

フウカ「私の事覚えていない？」

5pb.「ボクはよくわからないよ。」

フウカ「そんなに警戒しなくてもいいよ。借りは必ず返すけど今は同じ団員。仲間なんだから一緒にがんばろう5pb.ちゃん。クス。」

ユウ「やばいツツコミたいけど突っ込んだら終わりみたいな感じがする。そしてそんな勇気俺にはない。」

ステラ「とりあえず競技に移ろうよユウちゃん。」

ユウ「そうだね。フウも準備はいい、っておい！」

ネプ「まだまだ声量が足りないわお腹の中から声を出してもう一度スパッツ！」

フウ「す、スパッツ。」

ギア「貴女なめてるんですか？もつと真面目にやってください。」

ガスト「真面目にやらないとこのトリックの眼球を貴女の世界のルウィーの協会に送りつけるですよ。」

フウ「それはイヤアア！！！」

ユウ「こらその馬鹿三人何やってんだよ！？それとガストそんなばつちいものどっかに捨てなさい！！！」

ガスト「ええー！！これを売ればきつと高く売れるですの。オリハルコン製ですの！」

ユウ「トリックの眼球オリハルコンかよー！！」

ロム「……………ねえフウちゃん。」

フウ「な、なにロムちゃん？」

ロム「……………そんなに警戒しないで。フウちゃん一晩ルウィーにある人っ子一人来ない洞穴で過ごすだけで50万クレジット稼げる美味しい仕事があるんだけどやってみない？」

ユウ「オランダエルボーー！！」

ロム「アムステルダムー！！」

ユウ「どいつもこいつも……………！？」

ブラン「フウ貴女には魔法少女としての素質があるわ。だからこのマジカルステッキ通称『ばくさつ君』をあげるわ。」

ユウ「訳のわからないものを渡すなよブランー！！」

フウ「ブランさんありがとう。」

ユウ「そしてフウも簡単に受け取らないでー！！名前からして危険だからー！！」

フウ「だってせっかくブランさんがくれた物だから。」

ユウ「違うの君の世界のブランとは違うの！！」

フウ「ブランさんの事を悪く言わないで！！」

ユウ「え？俺が悪いの……………？」

ブラン「ちなみに、ばくさつ君は貴女の使用可能としている魔法の全てを爆殺魔法へと変わるわ。」

フウ「……………」

ユウ「ね？わかっただろうフウ、このカオス世界のブランと君の世界のブランは違うんだよ。」

フウ「エキスプロード！！」

ユニ「ひゃっほーい！！」

フウ「本当に爆発したよブランさん！！凄いねこの杖。」

ユウ「ユニー！！」

ブラン「まだよそのぼろ雑巾に回復魔法を掛けてみて。」

フウ「ヒール！」

ユニ「びしいっ！！」

ユウ「ヒイイイイ！ユニがもう色んな意味で大変なことに！！いたいどうすればいいんだー！？」

タラッタントタラーン

ユウ「この音楽は罰ゲームか！確かにフウは能力使いまくりだった

からな。よしルーレットスタート!!」

ステラ「罰ゲーム！罰ゲーム！！ユウちゃん撃ち抜いて！」

ユウ「罰ゲームでフウを正気にしなくては。これ以上カオスの被害者を出さない為にもいっけー!!」

ステラ「撃ち抜いたのはブレイブ・ザ・ハード!!」

ユウ「頼んだぞ勇者（混沌）!!」

ブレイブ「行くぞ異世界の女神候補生！ハンマーコネクト!!ゴル
デオンハンマー!!光になあああええええ!!」

フウ「イヤアア!!」

ユニ「だめー!!」

ブラン「うふふ。」

ユウ「スペシャルゲストが光になってしまった。俺はいたいどう
すれば……。はあ、また胃が痛いよ。」

ステラ「大丈夫だよユウちゃん。場面以降すれば蘇ってるから。」

ユウ「それもそうだね。なら競技に移ろっか。」

超番外編 スペシャルゲスト紹介（後書き）

風音椿様フウ達の出演ありがとうございました。

しかも容赦なく罰ゲームを行なってしまうとは。本当に申し訳ありません。

次回は第二競技に移れるようにします。

番外編 決心の少女と忍び寄る悪鬼（前書き）

まずは綻びひとつ。

番外編 決心の少女と忍び寄る悪鬼

side

今私は旅をしている。別に好きでしているわけではない。私はとある組織に所属している。その組織の任務の為に仕方なくである。本来ならそんなことはしたくなかった。それに私は組織の中でもかなりの上層に食い込んでおり何故このような任務を行わなくてはいけないのか理由がわからなかった。だが組織のトップからの指示であった為に私は断る事は出来なかった。もし断ってしまったら私の命はいとも簡単に刈り取られただろう。故に断る事など出来なかった。

旅の理由、正確には任務の内容はとある人物達の監視、観察。場合によっては殺害。物騒な話であるがこの組織では別に珍しい事ではない。

そう、別に珍しい事ではないのだが……。

その筈だったのだが最近その任務に疑問を持つてきていた。監視対象である少女達を見ていると、この娘達が本当に世界の害となれるのか。彼女達に危害を加える事が本当にあの人の為になるのか私にはわからなかった。

いったい私はどうしてしまったのであるうか？確かに少女達の内の一には憎しみもあり殺意さえもあつた。だが今の私にはそんなもの欠片も持ち合わせていなかった。それどころか親しみさえ抱いていた。

本当に私はどうしてしまったのであろうか？

分らない。解らない。判らない。判らない分らない判らないワ
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ
カラナイワカラナイワカラナイ。

「ったく！いったいどうしたのよ私はぜんぜんらしくないじゃないの！？」

私は苛立ちを隠せずに手を握りしめる。

『それでもボクは男の娘　誰が何と言おうと男の娘　』
「ん？こんな時に誰かしら？」

私は自らのポケットに入れていた通信端末から流れてきた着うたに意識を引きもどされる。

そしてこんな時に誰からかと思い通信端末の画面を見る。

正直見ない方がよかったかもしれないと後悔した。だけど無視をすればやはり私の命は刈り取られてしまうのであるう。

「何かようかしら？必要な事はルウィーの時に全て話したはずだけど？」

「そんなに怒らないでよ。怒られるとボクは悲しくなってしまうよ。シクシク。」

「……………」

「相変わらず冗談が通じない娘だよね君は。」

「黙りなさい。」

「黙ったら用件が言えなくなっちゃうよ？」

「……………くっ！！」

「クスクス。まあ君をからかうのはこれくらいにして本題に入ろう

か。今日は君に警告と注意を促しておこうと思ってね。」

「どういうことよ？」

「最近ずいぶん君が弱々しくなったと思ってね。もしかして監視対象に感情移入でもしちゃった？」

「っ！？馬鹿言わないでくれる！？そんなことはあり得ないわ！！」

「そう。なら大丈夫だね。ボクは君に期待しているんだからあまり失望させないでね。」

「初めから期待なんてしていないくせに……………」

「ふふっ、今のは聞かなかったことにしておくね。君に対しての警告は終わり。それとそろそろ例の計画を実行に移すからね。」

「まさかいくらなんでも早すぎるわ！！」

「修正事項がいくつか出てきたからね。女神候補生君も遭遇したよね？」

「ええ。」

「現段階で三名目撃されているよ。まさかシルバーハート様が新たな女神を造り出すとは思わなかったよ。」

「それが計画修正の理由かしら？」

「それはひとつの理由でしかないよ。……………ラステーションの教祖

が疑似プロセツサユニットの作成、量産化に成功した。」

「……………!？」

「理由としてはこれで充分だよね？それとアンチハードを名乗る物達に出会ったら戦闘は起こさないでね。彼等は協力者だから。」

「アンチハード？新しい女神かしら？」

「ボクも詳しい事は知らないよ。ただ彼等は女神と正反対の物なんだって。」

「そんな不確定な奴等と手を結ぶなんて大丈夫なの？」

「それは君が気にする事ではないよ。それともしアンチハードが監視対象と戦闘になったらアンチハードに協力して監視対象をコ・ロ・シ・テ・ネ」

「……………な！？殺すって彼女達は捕獲するんじゃないの!？」

「もう捕獲の必要もないからね。既に疑似女神達の量産も終了している。捕獲の必要があるのは史書イストワールと我らがシルバーハート様のみ。他の女神は殺す。ま・さ・か出来ないなんていわないよね？」

「そ、それは。」

「もしかして君のシルバーハート様への信仰は簡単に揺らいでしまうような物なのかな？」

「馬鹿にしないで私はシルバーハート様を敬愛しているわ!!貴女

なんかみたいにシルバーハート様を厭らしい目で見たりしないわ！
」

「そうそう。君はそれがいいんだよ。その空元気とでもいうのかな？とにかく君の事は信頼しているんだよ。それではボクは君とは違つて忙しいから失礼するよ。全てはシルバーハート様の為に。」

その言葉を最後に通信は途絶えた。

「出きるのかしら私にねぶ子達を殺す事が……。でもやるしかない。全てはシルバーハート様の為に。」

そして私は決心した。

番外編決心の少女と忍び寄る悪鬼（後書き）

きょうのゆにちゃん

その6マジカルコロネ

ユニ「マジカルコロネー!!」

ギア「イヤアアー!!私の髪型がコロネにー!!」

ユニ「マジカルコロネー!!」

ラム「どうしたのユニちゃん!?っていうか何なのそのコロネ型のステッキは!?せつかくのシリアスが台無しだよ!!」

ユニ「マジカルコロネー!!」

ロム「私はチョココロネ。名前はまだない。」

ラム「助けてお兄ちゃん!!」

ユニ「マジカルコロネー!!」

男の娘はジャツジ様！？（前書き）

現在のコメディとシリアスの比は？

9：1

シリアス目指してがんばるぞー！！

男の娘はジャッジ様！？

三女神 side

「かかって来なさいよ！！このプロセッサユニット、フルクロスの絶対守護領域を突破できるならね！！」

勢いよく叫んだユニの周囲に緑色の結界が張られる。

「あれは何かしら？見た目からシールド的な物かしら？」

「おだまりなさいムツツリーニ。」

「……………見れば分かるでしょうムツツリーニ？。」

「誰よムツツリーニって！？私はノワールよ！！それに貴女達もお兄様に痴漢以上の行為を行なっているでしょうが！！」

結束力は皆無の三人であつた。

「絶対守護領域。通称ドＭド・エム。それはどのような強大な威力を持った武器でも通さない最強の盾。ですが絶対守護領域を使用するためには高難度の計算が長時間必要となるためにお兄様並の超頭脳が必要となるのです。」

何故か解説を始めるネプギア。

「それはどうやった結果の通称なの！？」

「すみません。これ以上はユニ本人に聞いてください。両手の甲に書ききれなくて。」

よく見るとネプギアの手の甲にはびっしりと文字が書き込まれていた。

「そんなことはどうでも良いでしょう!! 早く私を楽しませてよ、お姉ちゃん達!!」

「仕方ないわね。行くわよブラン、ノワール!!」

「だが断りますわ!!」

「………… 私としては鮭弁当が食べたいわ!!」

「この馬鹿野郎どもが!!」

やはり団結力は皆無であった。

「不毛な闘いです。私の信じる女神はやっぱりパープルハート様だけですよ!!」

「本当にそうなの？」

コンパが改めて決心していたところに目を覚ましたアイエフが質問を投げ掛ける。

「アイちゃん気が付いたですか!？」

「コンパは本当にパープルハートを信仰しているの?」

「アイちゃんいきなりどうしたんですか？女神様を呼び捨てにしたら駄目ですよ。」

「馬鹿馬鹿しいわね。所詮シルバーハート様の為だけに私は生きればよかっただけなのよ。」

「アイちゃん。」

きつとアイエフは何処かに頭をぶつけてスライヌがまだ身体の中
にいるに違いないと思うコンパであった。

「えーと、確かお兄ちゃんがくれた漢字ドリル・アームが四次元ポケットにあったよね。」

何やら危険極まりない発言のネプギア。

「だから私はあんた達みたいにお兄様にセクハラをしたことはあんまりないわよ!!」

「黙りなさいムツツリーニ。」

[illegible]

共闘なんて期待はしてはいなかったがもう少しなんとかならないのか女神達よ。

「無視しないでよ！！闘つてよ！！はっ！！そうかこれは放置プレイなのね。やばい興奮してきたー！！」

ユニはいつも通りだった。

「私はシルバーハート様以外の女神を……くっ!? どうしてよ。どうして身体が心が痛いんだよ。」

一人シリアスのアイエフだが逆に浮いてコンパから変な汚物を見るような目で見られていた。

「私はいったいどうすればいいんですか!？」

「あのー、すいません。少々お時間よろしいでしょうか?」
「はい?」

困惑のコンパの前に一人の少女が声を掛ける。

「あ! 私知ってるですー! その恰好巫女さんですよね。」

「あ、はい。ところで繰り返すようですがお話しよろしいでしょうか?」

コンパに話しかけてきたのは純和風な黒髪の巫女さんであった。何故か狐の仮面を付けていたが。

「構いませんですよ。どうしたんですか?」

「いきなりで失礼ですがあなた様は女神でしょうか?」

「違います! あんな人達と一緒にしないでください!」

「ヒィー! ごめんなさい! ごめんなさい! 生まれてきて! めんなさい! 今日朝に北京ダック食べてごめんなさい!」

女神達と一緒にされ怒り狂ったコンパのけんまくに驚く巫女さん。
ちなみに脇は見せていない。

「そ、そんなに謝らないでください。こちらこそいきなり怒鳴ったりしてごめんなさいです。」

「い、いいえ。ところで女神が何処にいるかご存知ありませんか？」

黒髪の巫女さんはまるで天使のような笑顔で微笑みコンパに尋ねる。

「女神様ならあそこで漫才をしている可笑しな人達です!!」

コンパは未だに喧嘩しているブラン、ノワール、ベールを指差す。

「そうですかあの人達が……。ありがとうございました。」

「そ、そっちは危ないですー!!」

何故かノワール達の方へと駆け寄る黒髪巫女。コンパが呼び止めるが時すでに遅く何やら会話が始まったようである。

「あ、貴女達が女神ですね!!」

「だったら何よ文句あるの!？」

「巫女さんですわね。しかも黒髪の!!まさかこんなところで本物に出会えるなんて私感激ですわ。」

「……………久しぶりにルウィーの川で鮭の生け捕りでもしようかし

ら。前はジャイアント月の輪熊と遭遇して死ぬかと思ったけど真・魔法少女になった私にもう敵はいないわ。」

「ごめんなさい！ライトノベルで家の本棚全て埋まっていたてごめんなさい！！！」

もはや会話にすらなっていなかった。

「で、何の用なの？」

「僕はあ、貴女達を倒します。それが僕のお仕事ですから。」

神聖なる職業である巫女さんにさえ倒す宣言をされてしまった女神三人。

「きつと悪霊か何かと間違えられたんですね。似たようなオーラを放ってますからね。ええと私は今何をしようとしたんだっけ？」

最近もの忘れが少し多くなってきたネプギア。

「い、いきます。僕の変身見ていてくださいね。あ、アンチプロセツサユニット装着。」

彼女の変身宣言と共に彼女の身体が青黒い光に包まれる。

そして光が止み中から出てきたのは……………。

「ぶうらああああー！！！」

「な、ななななによ！？」

突然の大声にびびりまくっているノワール

「……………く、熊が出たのね!？」

そろそろ熊から離れてほしいよブランさん。

「俺の本能が叫んでいるんだお前達を殺せとー!！」

出てきたのは黒い巨大の……………。

「俺の名はジャツジ・ザ・ハード!アンチハード四天王が一人だ
あああ!いいいやっほーい!！」

変身すると性格が変わるジャツジ・ザ・ハードだった。

変身前の可憐な姿は何処にいつてしまったのであろうか？

ちなみに変身前はとても可愛いらしくそこらへんの女性より女性らしい。

……………だが男だ!！」

これだけは言いたかった。四人目のアンチハード、ジャツジ・ザ・ハードはこの世界で二人目の男の娘である。変身前のみは。

「アンチハードですって!？まさかこいつらが……………!？」

そして何故かアンチハードという言葉に極度に反応するアイエフ。

「放置プレイ最高ね!！」

いろいろ満喫しているユニ。

「いったい何がどうなっているんですか？巫女さんが怪物になったですー！！」

困惑のコンパ。

そして世界は廻りだす。確実に綻びをはらんで。

「私は昨日何を食べたんだっけ？」

最後の最後にそれは止めてくださいネプギアさん。

男の娘はジャッジ様！？（後書き）

今回はきょうのゆにちゃんに臨時休業の為に特別番組を放送します。

『ぱーぱっぱ。ぱっぱっぱぱぱっぱ。』

ユウ「こんにちはみなさん。今日も始めましたシルバーハート様の部屋。本日は記念すべき第一回。ゲストを読んで楽しくいきましょう。司会を勤めますのは私シルバーハート。そして……………」
ロム「毒舌アシスタントのホワイトシスターロムです。よろしくお願ひします。」

ユウ「本日のゲストはこの方ジャッジ・ザ・ハードさんです。」

ジャッジ「あゝここですか？何かブレイブに無理矢理連れてこられたんですけど。」

ロム「死ねや屑鉄野郎！！」

ジャッジ「ヒイイ！？ごめんなさい！昨日筈狩りしてすいませんでした。」

ユウ「アシスタントは相変わらず毒舌ですねそれではジャッジ・ザ・ハードさんに普段聞けない話をじゃんじゃん聞いていきましょう。ではまずは軽くいきましようアンチハード給料はどれくらいなんですか？」

ジャッジ「日給3500クレジットです。あとシルバーハートさん

僕と有明の海でモーニングを食べてください。お願いします!」

ロム「……………」

ユウ「……………」

『ぱーぱっぱ。ぱっぱっぱぱっぱ。』

ユウ「おや、もう時間ですね。また機会があったらお会いしましょうね。司会はシルバーハートでおくりしました。アシスタントは。」

ロム「今日も毒舌が冴え渡ったロムでした。」

ジャッジ「ぶらああああ!」

この番組の提供は
いつも貴方にLEDらいとSSHの提供でおくりしました。

超番外編 第二競技 超障害物競争（前書き）

カオスはスペシャルゲストにも容赦なかった。

超番外編 第二競技 超障害物競争

ステラ「只今ブレイブによって光にされたグラウンドをシアンちゃんが生産したキラーマシンが整備中だよ。」

フウ「あれ作ったのシアンさんなの!？」

ユウ「何を驚いているんだフウ？」

フウ「あれは危険なの!!早くルウィーにゲームキャラの力を使って封印しないと!!」

ノワ「彼女の事はほおっておきましょう。この年頃の子は二次元と現実の区別ができなくなるのよ。それよりなんでステラさんが実況席にいるの?イストワールは？」

フウ「無視しないでよ!あつ、ほら見てユニさんがキラーマシンに襲われてるよ!」

ユニ「もっと撃ってー!!」

ノワ「それはいつものことでしょう。」

ユウ「イストワールはちょっとコンビニでチャ カマンとマッチを買ってくるので探さないでください、という置き手紙を残して消えてしまった。そのためにステラさんが変わってもらってる。」

フィナ「自ら出番を削るなんてお馬鹿な娘。」

ノワ「え？」

フウ「だから無視しないでよ！ええいサンダーブレード……..
…あつ。」

ユニ「ヒヤッハテラス！」

タラッタントタラーン。

ステラ「罰ゲーム！！罰ゲーム！！」

ユニ「狙い撃つぜええー！！」

ステラ「当たったのは………あれ？これはシャルロックちゃん？」

シャル「いきますよー！！みんな来てー！！」

フウ「え？何か黒い犬がいつぱいこっちに向かってくるよー！！」

シャル「最近お友達になった狂犬病のドーベルマン達です。みんな
フウさんが遊んでくれるって。」

フウ「イヤアアー！！」

ステラ「フウちゃん人気ものだね。」

ユニ「罰ゲームじゃなかったら私だって……………」

コンパ「ヒィー！！何かぐちゃぐちゃと聞こえてはいけない音が
聞こえるですー！！」

ステラ「キラーマシンによるグラウンドの整備と障害物の設置が終わったよ。出場選手のみんなは入場してね。それとユウちゃんは至急実況席まで来てね。」

ユウ「俺もか………嫌な予感しかないな。」

ステラ「来ないと罰ゲームだよ。」

ユウ「よしっ！！今すぐそっちに行かせてもらいます。」

ステラ「それでは選手一同入場！！」

フウ「わふううー！！」

ステラ「それでは選手の紹介に移ります。銀団からはラムちゃん、フィナンシエちゃん。」

ラム「お兄ちゃんがいないのは残念だけど銀団のみんなの為にも応援してくれるみんなの為にもがんばる！！」

フィナ「急に鰹節とバナナが食べなくなってきました。」

ステラ「青团からはベールちゃんとフウカ。」

ベール「もう廃人もマシユマロもないんだよ。」

フウカ「せいぜい楽しませてもらうよ。」

ステラ「そして紫団からはロムちゃんとフウちゃん。」

ロム「お兄ちゃんがいらないならこっちのもの。素でいかせてもらうよ。」

フウ「あはははははははははは！私を楽しませてよ！！」

ノワ「彼女何かおかしいわよ！！」

フウカ「私はここにいるから暴走ではないね。」

シャル「狂犬病がうつっちゃったー！！」

ユウ「女神にも狂犬病がうつるのか。」

ステラ「フウちゃんの事は無視して、ユニちゃん競技説明お願い。」

ユニ「任せて！この競技は簡単に言えば障害物競争よ。けどその名の通り超・障害物。かなり危険な障害物を準備しておいたわ。さあ皆の衆出陣よ！！」

ステラ「位置に付いて！！」

ユニ「よいドン！」

ステラ「さてみんながスタートしたところで第一障害物を解放します。」

ユニ「第一の障害物それは……………」

????「……………わしだ。」

ノワ「そんな事って。悪い夢だと言ってよ！！」

ブラン「まさかてめえが出てくるとはなあー!!どついつ事何だアナスタシアー!!」

ユニ「そう第一障害物は猫のアナスタシアよ!!」

フウ「なんでもいいよ!!さあ私を楽しませてよ!」

アナス「意気込みはよしだが相手がひよっこではな。」

フウ「え?きゃー!!」

ステラ「フウちゃんがあんなにも簡単に吹き飛ばされるなんて……。」

アナス「次は誰だ?誰であろうとわしにはかてぬがな。ふんっ。」

ベール「お前今私を笑ったな。」

ラム「ベールさん一人で攻めたら負けちゃうよ!!みんなで闘おう。」

ロム「悔しいけどあれは私達より強い。」

アナス「三人がかりか、だが……………脆い!」

三人「……………!?!」

ノワ「どれだけ強いのかあの黒猫。三人が何も出来ずに圧倒されているわよ。」

ブラン「あいつに勝てるのは真・魔法少女に覚醒したわたしだけだ……。」

コン「中二病乙。ってああ三人がやられちゃったですー!!」

ノワ「早すぎでしょう!?!さすがに会話文だけなのは厳しいわね。」

コン「メタ発言は駄目ですよブラックハート様。」

ノワ「いまさらでしょう。」

アナ「大運動会よ私は帰ってキター!!……む!？」

フウカ「お見事と言ったところかなアルティメットキャット。すべての猫の頂点にたつものさすがだね。」

アナス「……何を言っている我が名はアナスタシアただの黒猫だ。」

ノワ「女神を圧倒出来る段階で普通の黒猫ではないわよ。」

フウカ「女神殺しと言い貴方と言い面白い人達ばかりね。」

コン「フウカさん変んなフラグ連立させっぱなしですー!!いったい貴女は何者なんですか!？」

フウカ「アルティメット貴方には最初から守るべき力も守るべき意思もあった。」

アナス「関係ない昔の事など今はただ……。」

フウカ「……ダークスレイブ。そう今はただ……。」

二人「貴方という敵を叩きのめす。」

アナス「来るがいい顕現せよスピアザ・グングニル!!」

ネプ「何か出たー!!」

フウカ「その槍既にオリジナルのグングニルを凌駕しているわね。」

ノワ「ツツコミ疲れてきたわ。それにしてもお兄様は何処にいったのかしら?」

アナス「これで!!」

フウカ「決めるよ!!」

アナス「グング!!」

フウカ「ブレイクデッド!!」

アナス「ニール!!」

フウカ「エンド!!」

ステラ「二人の攻撃がぶつか、ってきゃー!!」

ユニ「いいわこの衝撃最高ー!!」

ノワ「イヤアアー!!」

フウ「きゃー!!」

……しばらくお待ち下さいね。

アナス「相討ちと言いたいがわしの負けだな。」

フウカ「……………後数秒遅かったら負けていたのは私のほうね。」

フィ「こんな運動会はあり得ない!!」

ユニ「さてと第一の障害物が突破されたから二つ目を解放するわ。二つ目は……………」

シアン「俺が製作したハードブレイカーだ。」

フウ「切り捨てごめええええん!!」

ユニ「弱いわ!!ハードブレイカー弱すぎるわよ!!」

ステラ「フウちゃん凄いねあんな大きいのを簡単に真つ二つにするなんて!!」

5pb「ようこそチートの世界へ。」

シアン「俺のハードブレイカーが!!」

ステラ「良いのかなあ、これ未来が変わるんじゃないのかな?」

ユニ「何よこれ尺の問題かしら?まあいいわ。最後の障害物にして第三の障害物それは……………」

ステラ「待ってユニちゃん!!今緊急ニュースが入ってきたよ。」

ユニ「緊急ニュース?」

ステラ「うん。今近くのコンビニで史書って名乗る幼女が店内にいた三人を人質にして立て籠りを行なってるんだって。」

ユニ「何よそれポリスメンの仕事じゃない。そんなことより競技を
続行するわよ。」

ステラ「それもそうだね第三障害物はこれ!!」

???「うんしょ!」

???2「うんしょ!」

???3「うんしょ!」

ノワ「ま、まさか!？」

コンパ「かわいいですー!!」

フウ「持って帰るけど良いよね!？答えはやっぱり聞いてないよ!
!」

フウカ「ふふつ。楽しめそうだね。」

ユウ×3「「わゝい空気嫁?」「」

ステラ「第三障害物それは園児服のミニマムユウちゃん!!」

ユウ×3「「どうして俺がこんな目に……。うんしょ、うん
しょ、うんしょ、わゝい空気嫁?」「」

ノワ「お兄様不憫ね。」

コンパ「ラムちゃんフィナンシェさん絶対持つて帰ってくるですー
！！」

フウカ「三人のユウ青い園児服のユウ、赤い園児服のユウ、そして
ピンク色の園児服のユウ。何故色が違うの？」

ステラ「それは秘密だよひとつの団、一人のユウちゃんと接触して
ね。」

ユニ「あの園児服には呪いはないからね。普通に戦闘が行う事が出
来るわ。」

フウ「ネガティブゲイト！！」

青ユウ「ちょ、またこれかよ！？イヤアアー！！」

ロム「ずいぶんアグレッシブな娘ね。」

フウ「よしっ！！お持ち帰りiiiiiiii！！」

青ユウ「イヤアア！！」

ステラ「フウちゃんあつという間にユウちゃんを捕獲したー！！」

コンパ「だめー！！」

ラム「やだよ！私お兄ちゃんと闘いたくなんてないよ。うつっ、ぐ
すっ。」

赤ユウ「ええ！！泣かないでよラム。ほら連れて行って良いからね。」

」

ラム「本当！？やったあじゃあお兄ちゃん手を繋いで行こうよ。」

フィナ「作戦成功ですね。」

ステラ「ユウちゃん将来絶対苦労するよねえ。」

フウカ「……………」

ピンクユウ（以降Pユウ）「……………言い残す事はあるか？」

フウカ「まさかそれはこちらの台詞だよ。」

Pユウ「ふんっ、是非もなし。」

ベール「お前今相棒を笑ったな？俺も笑ってもらおうか！？」

フウカ「私は一度あなたと闘って見たかったんだ。」

Pユウ「同感だ！！ここでなら地上を焼き払う憂いもない！！」

ノワ「ちよつと待ってあそこだけ何かおかしいわよ！！ガチバトルを始めたわよ！！いいのあればおっておいて！？」

ベール「笑うなあああああ！！」

コンパ「しかもグリーンハート様が二人の闘気に当てられて何処かに飛んでいっちゃいました！！」

Pユウ「我が魔力を糧に顕現せよエクスカリバー・ガラティーン！

！
」

ギア「なんですかあれ現れた瞬間周囲の地面が陥没しましたよ！！」

フウカ「ふふっ、楽しませてもらえそうだね。いくよダーインスレイブ！！」

フウ「ちよっとフウカ何か空間歪んでるよ！！」

Pユウ「エクスカリバー」

フウカ「ダーイン」

ノワ「みんな逃げてー！！巻き込まれるわー！！」

Pユウ「ガラティーン！！」

フウカ「スレイブ！！」

みんな「イヤアアー！！」

二人の一撃がぶつかった瞬間周囲の音は消え去り全ては因果地平の彼方へと消え去って……………。

ユウ「いかせない！！」

ノワ「危なかったわ。もう少しで色々な意味で消え去るところだったわ。」

ユニ「私の限界を超えるなんてまさかあの二人次元干渉まで引き起こすなんて油断ならないわね。」

フウカ「反省も後悔もしてないわ。しているのは未来への啓示だよ。」

ユウ「なんか身体の感じが変なんだよね。違和感があるんだけど分身解いたはずなんだけど身体が足りないというか。」

ノワ「お兄様お疲れさま……………！？どうしたのお兄様身体が中学一年生の平均身長位まで縮んでるわよ！！」

コンパ「本当ですー！！ユウさんどうしたんですか！？」

ネプ「多分原因はあれね。」

フウ「ほらほら高い高い。」

青ユウ「いーやー。離してー！！」

フウ「じゃあ低い低い。」

青ユウ「何それ！？それより早く話してよフウー！！」

フウ「お姉ちゃんって呼びなさいー！！」

青ユウ「はい？フウさん何言ってるんですか？」

フウ「だからお姉ちゃんって言いなさい。言わないとトリックのもげた右腕を貴方の抱き枕と入れ替えるよー！！」

ユウ「お姉ちゃん」

フウ「良い子良い子」

ギア「これは面白いからそのままにしておきましょう。」

コンパ「そんなの駄目ですー！！青いユウさんを返してくださいー！！」

フウ「アブソリュート・クロスエンドー！！」

コンパ「ホゲー！？」

フウ「…………ふふつ。」

フウカ「積んだね。お馬鹿な娘。」

フウ「コンパさんたら仕方がないなー。」

フウカ「違うよ。フウの事だよ。」

フウ「…………え？」

タラッタントタラーン

ステラ「フウちゃんもう競技は終わっているよ。」

ユニ「そしてトリックの修理も完了したわ。」

トリ「フウちゃんベロベロローンー！！」

ユニ「ルーレットスタートね。」

フウカ「罰ゲーム！！罰ゲーム！！クスクス。」

フウ「待ってそのルーレット可笑しいよ！！なんで全部トリックになってるの！？」

ユニ「これが私の闘いよー！！」

ステラ「罰ゲームはトリック・ザ・ハードによる幼女飴コロコロ！！」

トリ「頂きます。」

フウ「ヒイ！？」

ギア「うわぁトリックの舌に捕まり口の中で飴のようにコロコロされるなんて同情を禁じ得ないですね。」

ラム「お兄ちゃん見えないよー。」

ユウ「ラムは見たら駄目。トラウマをつくる訳にはいかないからね。」

トリ「ぶぺっ！！」

ノワ「吐き出されたわね。」

フウ「トリックー！！貴女だけは私の手でー！！ゴッドブレース！！」

トリ「我が輩が滅んでも第三、第四の我輩がー！！」

シアン「おい！！そのスペシャルゲストまたトリック修理しなくちゃならないだろが！！」

フウ「後悔はしてないよ。甘んじて罰ゲームをつけるよ。」
タラッタタタラーン

ステラ「罰ゲーム！！罰ゲーム！！」

ユニ「ルーレットスタートよ！！」

フウ「自ら行くよ。ていつ！」

ステラ「当たったのはユウちゃん＆フウ力だよ！！」

フウ「……………え！？」

ユウ「遠慮なく行かせてもらおう！！」

フウカ「行くよユウ。」

フウ「なんでそんなに息ぴったりなの！？」

ユウ「ゲームギョウカイのみんな俺に力を！！瞬け明星の光喰らう
がいい！天翔光翼剣！！」

フウ「イヤアアー！！」

ノワ「あれはお兄様が威力が強すぎる為に絶対に最終決戦でしか使
わないといていた奥義。」

ネプ「うわぁギャグ補正での復活が間に合っていないよあれ。」

フウ「な、何とか生きてるよ私。」

フウカ「次はわたしね。」

フウ「はい？」

フウカ「我に仇なす者、優しき棺にて永久の眠りを。霸王龍月槍！
！」

フウ「そんなー！！」

ギア「これもう見てられませんか。ただの苛めじゃないですか。」

ユニ「混ざりたいけど混ざれないこれが不完全燃焼なのね。」

フウ「こ、こんどこそ……………！？」

ユウ「フウカ！！」

フウカ「わかってる。行くよー！！」

ユニ「ま、まだ続くなんて。さすがの私も驚きね。」

フウ「来るなら来てよ私だってこのばくさつ君でー！！」

ユウ「永劫なる光よ。」

フウカ「断罪の闇よ。」

ユウ&フウカ「今ひとつにー！！」

フウ「あばばばばー!!」

ユウ「決める!!」

フウカ「見せてあげるよ!!」

ユウ&フウカ「武神双天波!!」

フウ「イヤアアー!!」

ノワ「……………」

ネプ「そ、そういえば結果はどうなったの？」

ギア「そうですよ。結果はどうなったんですか？」

ユニ「1位が紫団、2位が銀団、3位が青団よ。」

ステラ「そういう事なら1位の紫団に300点。2位の銀団には200点。そして3位の青団には100点だね。」

ネプ「よしっ!!かなりの高得点ね!!」

ノワ「下手したら逆転されかねないわね。」

5pb「そろそろ本気をだそうか。アイエフ、日本一次は貴女達が出て。」

二人「だが断る!!」

5pb「鮮血よ散れブラッディローズ!!」

二人「ヒイ！？」

青ユウ「いい加減に離してよ！！」

フウ「嫌。」

コンパ「青ユウさんを返してください！！」

ユウ「オレノカラダハボドボダー！！」

ステラ「とりあえず一段落かなそれでは次の競技に移ろうか。次の競技はちびっこだらけの50メートル徒競走だよ！！」

ユニ「競技にでる雌豚どもは準備しなさい！！」

超番外編 第二競技 超障害物競争（後書き）

現在の得点

銀団 470

紫団 300

青団 50

現在の罰ゲームを受けた回数。

ネプテューヌ 一回

ブラン 一回

5pb. 一回

アイエフ 二回

フウ 四回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2592w/>

男の娘な女神様

2011年10月23日19時29分発行